岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 125

伊福定国前遺跡

県立岡山工業高等学校産業教育施設
（実習棟）改築に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 125

伊福定国前遺跡

県立岡山工業高等学校産業教育施設
（実習棟）改築に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

1．井戸―2上層土器出土状況（東から）

2．出土玉類

3．弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

１．溝－２完掘状況（北から）

２．溝－２出土の国産中世土器

３．輸入陶磁器

序

本書は、平成６年度に県立岡山工業高等学校産業教育施設(実習棟)改築事業に伴って発掘調査を行った、伊福定国前遺跡の発掘調査報告書です。

岡山県のほぼ中央を南流する旭川は、その下流に肥沃な穀倉地帯である岡山平野を作りました。

この岡山平野には、本遺跡をはじめとして国指定史跡の津島遺跡や、上伊福西遺跡、上伊福遺跡、南方遺跡、百間川遺跡群といった弥生時代を中心とした集落遺跡があります。また、平野を取り囲む標高160ｍ前後の丘陵上にも墳墓・山城など数多くの遺跡が所在しており、古代吉備の国の中心的な地域のひとつであったことを物語っています。

同校は、明治34年にその前身である岡山県立工業学校が創設され、現在までに多くの卒業生を輩出しています。伊福町には昭和35年に統合移転されて現在に至っています。

近年、高度情報化、国際化等の多種にわたる社会の変化によって、専門的な社会人育成の必要性が高まってきました。高等学校でも専門教科の増設、履修科目の専門化を進めた結果、現在ある建物では対処できなくなっておりました。そのため、かねてより改築の要望が出されていた産業教育施設について今回改築工事を行うことになり、それに先立って発掘調査を実施した次第であります。

調査の結果、弥生時代から室町時代の遺構と遺物が確認され、竪穴住居や掘立柱建物といった集落に関連した遺構と土器を中心とした大量の遺物が検出されました。特に弥生時代から古墳時代初め頃の土器には吉備地方のものに混じって東海、近畿、山陰、瀬戸内沿岸といった各地との交流を示す遺物が見られました。また、室町時代の遺物の中にも国内各地で生産された陶器や中国・東南アジアといった海外の陶磁器も見られ、時代を通じて吉備地域の文化・交流の拠点であったことが窺い知れました。

これらの調査成果を収載した本報告書が、学術研究に寄与するだけでなく、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の水内昌康・近藤義郎の両先生から種々の御教示と御指導を賜りました。記して、厚くお礼申し上げます。

また、発掘調査にあたっては岡山県教育庁財務課ならびに、県立岡山工業高等学校の皆様に多大なご支援を戴きました。あわせてお礼申し上げる次第であります。

平成10年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　籔　本　克　之

例　言

1．本書は、県立岡山工業高等学校産業教育施設(実習棟)改築工事に伴い、岡山県教育庁財務課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成6年度に発掘調査を実施した伊福定国前(いふくさだくにまえ)遺跡(旧遺跡名：上伊福西遺跡)の発掘調査報告書である。

2．伊福定国前遺跡は岡山県岡山市伊福町4丁目3－92に所在する。

3．確認調査は、岡山県教育庁文化課職員柴田英樹が担当し、平成6年8月24日～30日に行った。

4．全面調査は、主に岡山県古代吉備文化財センター職員河本　清、松本和男、延堂　守、山本晋也、氏平昭則、杉山一雄が担当し、平成6年9月5日～11月9日まで実施した。その調査面積は800㎡である。

5．報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の水内昌康、近藤義郎の両氏から御指導、御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

6．本報告書の作成は、杉山が担当し、遺物の実測・浄書などについては文中に明記した方々の協力を得て平成8年度に行った。また、遺物写真については江尻泰幸氏に協力と援助を仰いだ。

7．特殊な遺物のうちその一部について鑑定・同定を下記の諸氏に依頼し、有益なご教示を得るとともに、そのうちのいくつかについて玉稿をいただき収載した。記して厚くお礼申し上げる。

骨角製品・動物遺存体の鑑定	松井　章（奈良国立文化財研究所）
木製品樹種の同定	能城修一（森林総合研究所）
種子の同定	沖　陽子（岡山大学）
陶磁器の鑑定	大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
	尾崎直人（福岡市立美術館）
	森本朝子
滓の鑑定	大澤正己
石材鑑定	妹尾　護（倉敷芸術科学大学教養部）

8．本報告書の執筆は、河本　清、高畑知功、松本和男、氏平昭則、杉山一雄が分担して行い、文責はそれぞれの文末に記した。

9．本報告書の編集は杉山が担当した。

10．本報告書に関係する出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に保管している。

11．本報告書を作成するにあたって下記の方々から有益な御教示・御助言をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

赤塚次郎、安間拓巳、梅木謙一、金子健一、川越哲志、佐野元、三枝健二、武田恭彰、古瀬清秀、松澤和人、村上恭通、山本悦世、吉本健一

凡　例

1．本報告書で使用した高度は海抜高であり、方位は磁北である。なお、遺跡付近の磁北は真北から西偏約６度40分を測る。

2．本報告書に掲載した遺構および遺物の実測図の縮尺についてはそれぞれ明記しているが、おもなものについては原則的に以下のように統一している。

遺構

竪穴住居・掘立柱建物（1/80）　井戸・土壙（1/40）

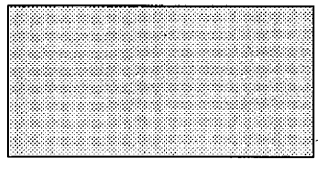
遺物

土器（1/2，1/4）　土製品・礫石器・骨製品（1/3）　剥片石器・金属製品（1/2）

木製品（1/4）　玉類（1/1，1/2）

3．本報告書で用いた土層名称は、各発掘調査担当者によって表記方法が異なっており、必ずしも統一できていない。

4．本報告書の遺構図面中においては、炭・焼土の分布範囲を下記のスクリーントーンで表記している。



5．本文の図面中では必要に応じて下記の通り遺構名を省略して、表記している。

竪穴住居：住　掘立柱建物：建　柱穴：柱　井戸：井　土壙：土

溝：溝　土器溜り：溜　性格不明遺構：性格不明

6．本報告書に掲載した石器実測図においては、敲打部分を▲、研磨部分は●の記号を付してその範囲を示している。

7．本報告書に掲載した遺物番号については、土器、土製品、石器・石製品、金属製品、木製品、角製品、玉類に分けて通し番号を付し、土器以外については下記のアルファベットを数字の前に冠している。

土製品：C（Cray）　石器・石製品：S（Stone）　金属製品：M（Metal）

木製品：W（Wood）　角製品：H（Horn）　玉類：B（Bead）

8．本報告書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は口径の不正確なものである。

9．本報告書の第３図に使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北」・「岡山南」を複製・加筆したものである。

10．本報告書にもちいた遺構・遺物の時期は、弥生時代から古墳時代については以下の編年対比表のように表記し、それ以降の時期については政治史区分、西暦を併用した。

また、時期決定については註に示した文献を参考にした。

編　年　対　比　表

時代	遺跡		伊福定国前	百間川[1]	雄町[2]	上東・川入[3]
弥生時代	前期	津島		百間川前期Ⅰ		
		門田		百間川前期Ⅱ	雄町 1	
				百間川前期Ⅲ	雄町 2	
					船山 3	
	中期	南方		百間川中期Ⅰ	高田	
					雄町 3	
		菰池		百間川中期Ⅱ	船山 5	
					菰池	
					雄町 4	
		前山Ⅱ		百間川中期Ⅲ	前山東	
					雄町 5	
		仁伍	伊福・弥・中Ⅲ		雄町 6	上東・鬼川市 0
	後期	上東	伊福・弥・後Ⅰ	百間川後期Ⅰ	雄町 7	上東・鬼川市Ⅰ
					雄町 8	
			伊福・弥・後Ⅱ	百間川後期Ⅱ	雄町 9	上東・鬼川市Ⅱ
					雄町 10	
		グランド上層	伊福・弥・後Ⅲ	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市Ⅲ
		酒津	伊福・弥・後Ⅳ	百間川後期Ⅳ	雄町 11	才の町Ⅰ
						才の町Ⅱ
古墳時代	前期	王泊六層	伊福・古・前Ⅰ	百間川古墳時代Ⅰ	雄町 12	下田所
			伊福・古・前Ⅱ	百間川古墳時代Ⅱ	雄町 13	亀川上層
					雄町 14	＋
			伊福・古・前Ⅲ	百間川古墳時代Ⅲ	雄町 15	川入・大溝上層

註1　江見正己「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39　岡山県教育委員会 1980

註2　正岡睦夫「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会 1972

註3　柳瀬昭彦「川入・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会 1977

註4　これ以外に以下の文献を参考にした。

高橋　護「上東式土器の細分編年基準」『研究報告7』岡山県立博物館 1986

高橋　護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告9』岡山県立博物館 1988

吉留秀敏・山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988

正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社 1992

高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社 1992

亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　岡山県教育委員会 1996

山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会 1992

鈴木康之「第Ⅲ章遺物　1土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島考古学研究会 1996

間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社 1991

森田　稔「須恵器系の中世陶器生産」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 1997

本　文　目　次

序
例言
凡例
本文目次
第１章　発掘調査および報告書作成の経緯と体制…… 1
　第１節　発掘調査の契機…… 1
　第２節　発掘調査の体制…… 2
　第３節　発掘調査の経過…… 3
　第４節　報告書作成の体制および方法…… 4
　　（１）報告書作成の体制…… 4
　　（２）報告書作成の方法…… 5
第２章　遺跡の位置と環境…… 7
第３章　発掘調査の概要…… 11
　第１節　発掘調査の概要…… 11
　第２節　弥生～古墳時代の遺構と遺物…… 13
　　（１）概要…… 13
　　（２）竪穴住居…… 14
　　（３）柱穴…… 27
　　（４）井戸…… 28
　　（５）土壙…… 33
　　（６）溝…… 54
　　（７）性格不明遺構…… 55
　　（８）土器溜り…… 57
　　（９）遺構に伴わない遺物…… 66
　第３節　古代・中世の遺構と遺物…… 68
　　（１）概要…… 68
　　（２）掘立柱建物…… 69
　　（３）柱穴…… 71
　　（４）井戸…… 72
　　（５）土壙…… 74
　　（６）溝…… 75
　　（７）遺構に伴わない遺物…… 78
第４章　結語…… 79
　第１節　まとめ…… 79

（1）遺構の変遷について…… 79
（2）出土遺物について……80
第２節　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器……82
第３節　中世の土器・陶磁器……85

附載１．伊福定国前遺跡から出土した鹿角製品および動物遺存体…… 87
附載２．伊福定国前遺跡から出土した木製品の樹種…… 89

挿　図　目　次

第１図　確認調査トレンチ配置と土層断面（1/400・1/100）……1
第２図　調査区位置とグリッド設定及び小字名切図（1/3,750）……5
第３図　調査区周辺の地形と周辺主要遺跡分布（1/25,000）……8
第４図　検出遺構配置と土層柱状図作成位置（1/250）…11
第５図　土層柱状図相関（1/40，幅は任意）……12
第６図　弥生～古墳時代の遺構配置（1/250）……13
第７図　竪穴住居－１～５平・断面と変遷（1/80・1/200）……14
第８図　竪穴住居－１～５出土遺物（1/3・1/4）……15
第９図　竪穴住居－１出土遺物（1/4）……15
第10図　竪穴住居－２出土遺物（1/3・1/4）……15
第11図　竪穴住居－３出土遺物（1/3・1/4）……16
第12図　竪穴住居－４出土遺物（1/2・1/3・1/4）……16
第13図　竪穴住居－５出土遺物（1/4）……17
第14図　竪穴住居－６平・断面（1/80）と出土遺物（1/4・1/6）……17
第15図　竪穴住居－７・８平・断面と変遷（1/80・1/200）……18
第16図　竪穴住居－７出土遺物（1/3・1/4）……19
第17図　竪穴住居－８出土遺物（1/2・1/4）……19
第18図　竪穴住居－９・10平・断面（1/80）……19
第19図　竪穴住居－９出土遺物（1/4）……20
第20図　竪穴住居－10出土遺物（1/4）……20
第21図　竪穴住居－11平・断面（1/40・1/80）と出土遺物（1/4）……20
第22図　竪穴住居－12～15平・断面と変遷（1/80・1/200）……21
第23図　竪穴住居－12出土遺物（1/1・1/2・1/3・1/4）……22
第24図　竪穴住居－13出土遺物（1/2・1/3・1/4）……22
第25図　竪穴住居－12～15下層ピット出土遺物（1/4）…22
第26図　竪穴住居－16平・断面と変遷（1/40・1/80・1/200）及び出土遺物（1/3・1/4）……23
第27図　竪穴住居－17～19平・断面と変遷（1/80・1/200）……24
第28図　竪穴住居－17出土遺物（1/3・1/4）……25
第29図　竪穴住居－18出土遺物（1/1・1/2・1/4）……25
第30図　竪穴住居－19出土遺物①（1/2・1/4）……25
第31図　竪穴住居－19出土遺物②（1/3・1/4）……26
第32図　竪穴住居－17～19内Ｐ15出土遺物（1/3・1/4）……26
第33図　竪穴住居－20・21平・断面（1/80）と出土遺物（1/4）……27
第34図　竪穴住居－22平・断面（1/80）と出土遺物（1/4）……27
第35図　柱穴－１平・断面（1/10）と出土遺物（1/3）…28
第36図　柱穴－２～９出土遺物（1/2・1/4）……28
第37図　井戸－１平・断面（1/40）と出土遺物①（1/4）……29
第38図　井戸－１出土遺物②（1/4）……30
第39図　井戸－２平・断面（1/40）と出土遺物①（1/4）

……31
第40図　井戸－2出土遺物②（1/4）……32
第41図　井戸－3平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…33
第42図　土壙－1平・断面（1/40）……33
第43図　土壙－2平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…34
第44図　土壙－3・4平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）
……35
第45図　土壙－5平・断面（1/40）……35
第46図　土壙－6平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…35
第47図　土壙－7平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…36
第48図　土壙－8平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…36
第49図　土壙－9平・断面（1/40）と出土遺物①（1/4）
……37
第50図　土壙－9出土遺物②（1/4）……38
第51図　土壙－9出土遺物③（1/4）……39
第52図　土壙－10平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…39
第53図　土壙－11平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…39
第54図　土壙－12平・断面（1/40）と出土遺物（1/2・1/4）
……40
第55図　土壙－13平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…41
第56図　土壙－14平・断面（1/40）と出土遺物（1/2・1/4）
……41
第57図　土壙－15平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…42
第58図　土壙－16平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…42
第59図　土壙－17平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…42
第60図　土壙－18平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…43
第61図　土壙－19平・断面（1/40）と出土遺物（1/3・1/4）
……43
第62図　土壙－20平・断面（1/40）と出土遺物（1/3・1/4）
……44
第63図　土壙－21平・断面（1/40）と出土遺物（1/2・1/4）
……44
第64図　土壙－22平・断面（1/40）と出土遺物①（1/4）…45
第65図　土壙－22出土遺物②（1/4）……46
第66図　土壙－23平・断面（1/40）と出土遺物（1/2・1/4）
……46
第67図　土壙－24平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…46
第68図　土壙－25平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…47
第69図　土壙－26平・断面（1/40）と出土遺物（1/2・1/3
・1/4）……47
第70図　土壙－27平・断面（1/40）と出土遺物①（1/4）…48
第71図　土壙－27出土遺物②（1/3）……49
第72図　土壙－28～30平・断面（1/40）……49
第73図　土壙－29出土遺物（1/4）……49
第74図　土壙－30出土遺物（1/4）……50
第75図　土壙－31平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…50
第76図　土壙－32平・断面（1/40）……50
第77図　土壙－32出土遺物（1/4）……51
第78図　土壙－33平・断面（1/40）と出土遺物（1/2・1/4）
……52
第79図　土壙－34平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…52
第80図　土壙－35・36平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）
……53
第81図　土壙－37平・断面（1/40）……53
第82図　土壙－37出土遺物（1/4）……54
第83図　溝－1断面と土器出土状況（1/40）
及び出土遺物（1/3・1/4）……54
第84図　性格不明遺構平・断面（1/80）……55
第85図　性格不明遺構出土遺物（1/2・1/4）……56
第86図　土器溜り－1出土遺物①（1/4）……57
第87図　土器溜り－1出土遺物②（1/4）……58
第88図　土器溜り－2出土遺物（1/2）……59
第89図　土器溜り－3出土遺物（1/4）……59
第90図　土器溜り－4断面（1/40）……60
第91図　土器溜り－4出土遺物①（1/4）……61
第92図　土器溜り－4出土遺物②（1/4）……62
第93図　土器溜り－4出土遺物③（1/4）……63
第94図　土器溜り－4出土遺物④（1/4）……64
第95図　土器溜り－4出土遺物⑤（1/4）……65
第96図　土器溜り－4出土遺物⑥（1/2・1/3・1/4）……66
第97図　遺構に伴わない遺物（1/1・1/2・1/3・1/4）……67
第98図　古代・中世の遺構配置（1/250）……68
第99図　掘立柱建物－1平・断面（1/80）と出土遺物（1/4）
……69
第100図　掘立柱建物－2平・断面（1/80）……70
第101図　掘立柱建物－3平・断面（1/80）と出土遺物

(1/2・1/4) ……70
第102図　掘立柱建物－4平・断面（1/80）……71
第103図　柱穴10～13出土遺物（1/2・1/4）……71
第104図　井戸－4平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…72
第105図　井戸－5平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…73
第106図　井戸－6平・断面（1/40）……73
第107図　井戸－6出土遺物（1/3・1/4）……74
第108図　土壙－38平・断面（1/40）と出土遺物（1/4）…74
第109図　溝－2断面（1/40）……75
第110図　溝－2上層出土遺物（1/4）……76
第111図　溝－2上・下層出土遺物（1/3・1/4）……77
第112図　溝－2下層出土遺物（1/4）……78
第113図　遺構に伴わない遺物（1/1・1/2・1/4）……78
第114図　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年案①…83
第115図　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年案②…84

表　目　次

第1表　竪穴住居一覧表……95
第2表　掘立柱建物一覧表……95
第3表　井戸一覧表……96
第4表　土壙一覧表……96
第5表　土製品観察表……97
第6表　石器・石製品観察表……97・98
第7表　金属器・金属製品観察表……98
第8表　木製品観察表……98
第9表　玉類観察表……98
第10表　角製品観察表……98

巻頭図版目次

巻頭図版1－1．井戸－2上層土器出土状況（東から）
2．出土玉類
3．弥生時代後期～古墳時代初頭の土器
巻頭図版2－1．溝－2完掘状況（北から）
2．溝－2出土の国産中世土器
3．輸入陶磁器

図　版　目　次

図版1－1．調査地区航空写真（北西から）
2．2区発掘調査状況（北から）
3．試掘トレンチ2土層断面〈土壙－5部分〉（北から）
図版2－1．2区遺構面下層トレンチ土層断面（南西から）
2．竪穴住居－1（西から）
3．竪穴住居－1中央穴周辺土器出土状況（東から）
図版3－1．竪穴住居－4（西から）
2．竪穴住居－4刻骨出土状況（北から）
3．竪穴住居－7・8（北から）
図版4－1．竪穴住居－16（西から）
2．竪穴住居－17～19（西から）
3．竪穴住居－17～19下層のP15底面礎板検出状況（南東から）
図版5－1．柱穴－1人形土製品出土状況（南から）
2．井戸－2上層土器出土状況（東から）
3．井戸－2下層土器出土状況（東から）
図版6－1．土壙－14土器出土状況（南西から）
2．土壙－22土器出土状況（北西から）
3．土壙－32土器出土状況（西から）

図版７－１．溝－１西肩部土器出土状況（西から）
２．性格不明遺構（西から）
３．土器溜り－４土器堆積状況（東から）
図版８－１．井戸－４（南東から）
２．井戸－５（北から）
３．井戸－５底面の岩据え付け状況（西から）
図版９－１．井戸－６（東から）
２．溝－２（北から）
３．溝－２土層断面（南から）
図版10　竪穴住居－１・３・17～19内Ｐ15，柱穴－４・６，井戸－１出土土器
図版11　井戸－２・３出土土器
図版12　土壙－２～４出土土器
図版13　土壙－９出土土器
図版14　土壙－12・13・15・22・24・27出土土器
図版15　土壙－31・32・34出土土器
図版16　溝－１，土器溜り－１・３出土土器
図版17　土器溜り－４，包含層出土土器
図版18　溝－２，包含層出土土器・陶磁器
図版19－１．ミニチュア土器
２．土製品
３．玉類，角製品
図版20－１．石器
２．金属製品
３．木器・木製品

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯と体制

第１節　発掘調査の契機

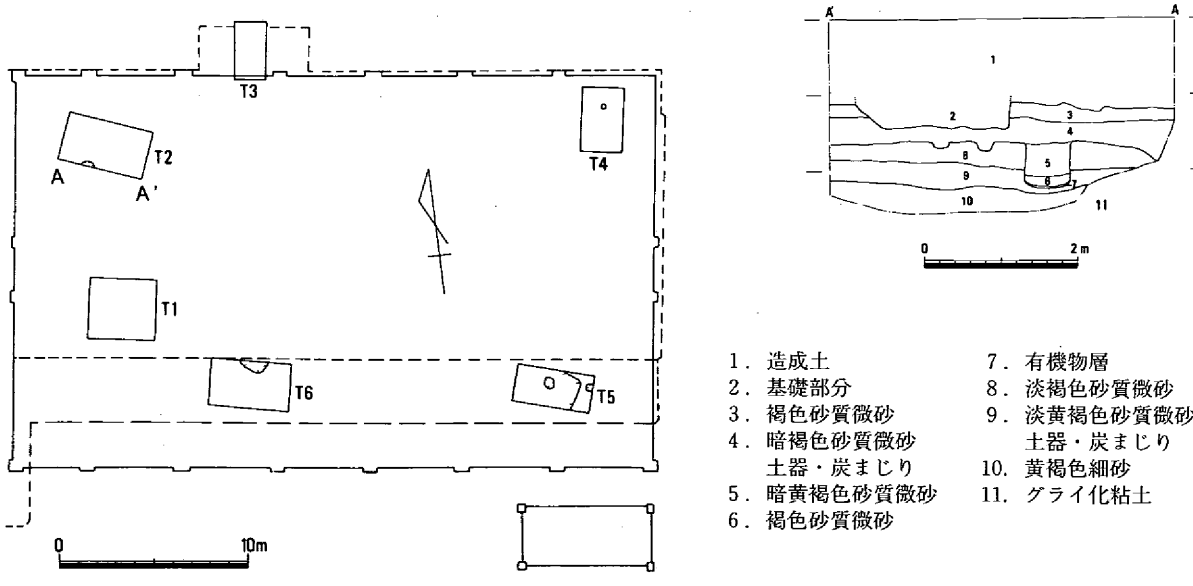
本遺跡の発掘調査は県立岡山工業高等学校産業教育施設(実習棟)改築事業に伴うものである。

改築は従来の電子科実習施設の老朽化(昭和34～36年)と学習指導要領の改正による男子の「家庭科」必修にあわせ、不足する情報技術科関係、家庭科関係の実習室10室の整備を目的とする国庫補助(産振)事業である。文化課は財務課施設係からの事業説明を受け、当該地が上伊福西遺跡の南端部に相当することと、昭和56年のプール予定地確認調査において奈良時代以降の田面、畦畔等の水田遺構が存在した事実を連絡する。そして、校舎取り壊し後の確認調査の必要から埋蔵文化財発掘の通知(第57条の３第１項)の指示を行う。平成６年８月８日、発掘通知を受け、８月16日に発掘調査の通知(第98条の２第１項)をし、８月24日から26日、30日の４日間で文化課、古代吉備文化財センターにより確認調査を実施した。改築用地内のＴ１～Ｔ６(第１図)のトレンチすべてより遺構が確認され、微高地がさらに東に広がることが判明する。約800㎡全面調査の必要性が急遽浮かび上がる結果となる。

(高畑)

第２節　発掘調査の体制

平成６年９月１日(木)、「青天の霹靂」とはこのような事態をさすのだろうか。県立岡山工業高等学校産業教育施設(実習棟)改築用地で遺跡が発見されたとの知らせを受けた時は、そんな驚きと衝撃であった。センターではただちに情報を集め調査体制をどうするか、９月１日午後から２日午前にかけ



第１図　確認調査トレンチ配置と土層断面（１/400・１/100）

て慌ただしく協議をかさねた。その結果、建築サイドは９月、10月しか待てない。11月には着工しなければ年度内完工とはならないとのことであった。しかし、こうした緊急対応を担当する文化財センターの調査第一課第一係は、「中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会」(以下、中国電力調査委員会と略称する。)の調査に岡山市と合同で調査中であり、しかも調査は大詰めをむかえている状況であった。いうまでもなく中国電力の調査は本来的に岡山市教育委員会文化課の専任事業である。

新たに発見された県立岡山工業高等学校の調査対象面積は800㎡である。沖積地の岡山平野での調査で、しかも限られた調査期間を考えれば、800㎡は大変重い数字となった。調査体制を組むことも急がれるが、調査地は従前から１ｍ近くの造成土をかぶっているので、それらを排土して一刻も早く全面調査に移行できる準備工が先行された。そこで９月５日(月)から９月８日(木)まで正岡調査第一課長と本庁文化課柴田主事が交代で立ち会って排土した。

９月９日(金)、岡山工業高校において文化財センター緊急幹部会を開き、排土した調査１区を視察して調査体制を協議した。その結果、次の確認にもとづいて文化財センターとしては以下の方向で取り組むこととした。10月末までに調査を終了させるには調査第一課だけでは無理である。文化財センターの組織を上げて措置する必要がある。そのためには、週休５日制であるが、週末土曜日には各課から交代要員を組んで応援する。また、「中国電力調査委員会」の調査が終了する９月一杯までは、所長が現場に立って進めることとする、以上である。

こうして、９月12日(月)から河本、延堂、杉山の３名の調査体制で発掘を開始したのである。そして、10月１日(土)からは「中国電力調査委員会」の調査を終了させた、松本、山本、氏平が新たに加わりながらも、週末調査の体制を継続する、まさに臨戦体制の調査であった。こうして建築工事との競合をきたす直前の11月７日(月)に最後の埋め戻しの立ち会いをしてすべての調査は終了したのである。

なお、発掘調査にあたっては難波泰朗校長ならびに田仲建治事務部長をはじめとして教職員の皆様から多大の援助を受けた。記して感謝の意を表したい。　(河本)

発掘調査（平成６年度）

岡山県教育委員会	
教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本　憲二
岡山県教育庁文化課	
課長	大場　淳
課長代理	松井　新一
課長補佐	
(埋蔵文化財係長事務取扱)	高畑　知功
主任	若林　一憲
文化財保護主事	柴田　英樹
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	河本　清
次長	葛原　克人
(総務課)	
課長	丸尾　洋幸
課長補佐	
(総務係長事務取扱)	杉田　卓美
主査	石井　善晴
主任	三宅　秀吉
(調査第一課)	
課長	正岡　睦夫
課長補佐	
(第一係長事務取扱)	松本　和男（発掘調査担当者）
文化財保護主事	延堂　守（　〃　）
文化財保護主事	山本　晋也（　〃　）
文化財保護主事	氏平　昭則（　〃　）
主事	杉山　一雄（　〃　）

第３節　発掘調査の経過

平成６年８月24日～30日に行った確認調査の結果、校舎の改築予定敷地内の全面に遺構が存在することが確認された。この結果を受けて、９月５日～９日の５日間で現地表面から調査面までの約１ｍの造成土を重機により除去し、その土砂を調査区外の高校敷地内へ移動した。

全面調査は９月12日から調査員３名が専従し、10月からはさらに３名が合流して発掘調査にあたった。それでもなお約１ケ月半という調査期間は、面積、遺構密度等を考慮すると非常に厳しい状況にあった。また、さらに調査中に出る排土の処理の問題がその厳しさを増していた。

調査区外では通常どおり授業が行われており、生徒、職員、車両等の往来があり、その通行に危険が予想されたため、排土を調査区外へ持ち出すことができなかった。このため、排土は調査区内で対処することを余儀なくされ、調査区内を便宜上グリッドのほぼ24ラインを境として西側を１区、東側を２区の２地区に分割し排土を移動しながら調査を行うこととした。

発掘作業は１区から行った。まず、調査面が現地表面から１ｍ以上低いことから周辺の水がすべて調査区内に流れ込んでくるため、調査区周囲に土層確認も兼ねて側溝を手掘りで掘削した。この際、南側で土器溜り－４、東・西側では竪穴住居の存在が土層の検討から確認され、予想以上に遺構密度が濃いことがわかった。遺構の平面的な検出では、人工層位によって２～３段階に分けて掘削、検出を行った。しかし、弥生時代から中世の遺構面に明確な層位的な関係は認められず、古墳時代以降の数回にわたる掘削によって遺構面が撹乱されていることが判明したため、２区の調査では排土を移動した後に海抜約160㎝の面まで重機によって掘削して遺構検出を行い調査を行った。

２区の遺構調査が終えた後、遺構面のさらに下層の状況を確認するために幅１ｍのトレンチを設定した。手掘りによって掘り下げたが遺構・遺物は確認されなかった。しかし、粘土層の水平堆積が観察され、土層断面には畦畔の痕跡は認められなかったものの水田層が存在する可能性は否定できない。11月３日には発掘作業を終え、11月４日から埋め戻しを行い11月９日にはすべての調査を終了した。

遺跡の記録に際しては、測量業者に委託して調査区内に国土座標に合わせてグリッドを設定し、このグリッド杭を基準にして記録に努めた。

発掘調査中は土曜日にも調査を実施したため、同校の教師の方や生徒達に授業が終わってから調査に多数参加していただいた。また、調査終了後も文化祭で発掘調査のパネルや出土遺物の展示をする機会を得ることができ、慌ただしい発掘調査ではあったが多くの方々に埋蔵文化財について知ってもらうことができたことは幸いであった。

発掘調査全般にわたって、県立岡山工業高等学校職員の方々の多大なご支援を賜った。ここで厚くお礼申し上げる。

（杉山）

調査日誌抄

平成６年８月24～30日　確認調査を実施。遺構・遺物を確認。

９月５日　重機による表土剝ぎ開始。

９月21日　１区調査開始。

９月17日　腰掛け形土製品出土。

９月27日	溝－２調査開始。
10月１日	墨書木製品出土。
10月５日	１区全景写真撮影。
10月８日	刻骨・骨製管玉出土。
10月12日	１区北半調査終了。１区排土移動。
10月13日	２区調査開始。
10月25日	人形土製品出土。
10月27日	１区南半調査終了。
11月１日	２区遺構調査終了。遺構面下層のトレンチ調査。
11月３日	発掘調査終了。発掘機材の撤収。
11月４～９日	調査区埋め戻し。

第４節　報告書作成の体制および方法

（１）報告書作成の体制

整理・報告書の作成は、平成８年度に、古代吉備文化財センターにおいて専従職員１名があたり、実際の整理作業に際してはその補助として補助員１名、作業員３名のほか多くの方の協力を得た。

報告書作成（平成８年度）

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	黒瀬　定生

岡山県教育庁文化課

課　長	大場　淳
課長代理	松井　英治
参　事	葛原　克人
課長補佐	
（埋蔵文化財係長事務取扱）	平井　勝
主　査	若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	河本　清
次　長	高塚　恵明
文化財保護参事	正岡　睦夫

（総務課）

総務課長	丸尾　洋幸
課長補佐	
（総務係長事務取扱）	井戸　丈二
総務主幹	守安　邦彦
主　査	木山　伸一

（調査第一課）

課　長	高畑　知功
課長補佐	
（第一係長事務取扱）	江見　正己
主　事	杉山　一雄

（報告書作成担当者）

報告書作成協力者

阿部典子　大山知子　峠田秀子　丸山啓子

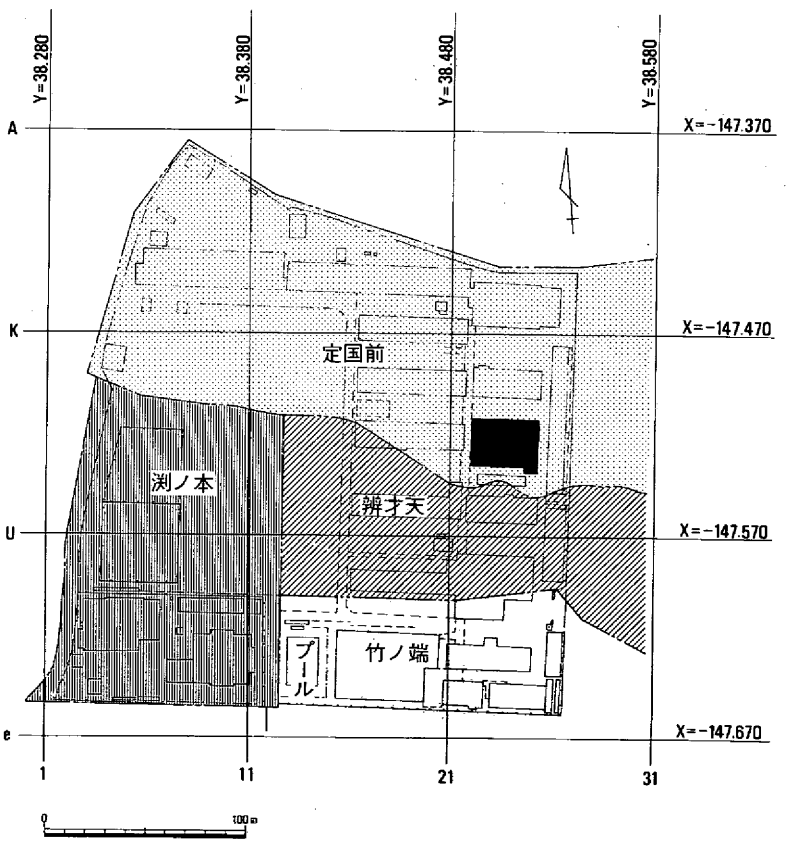
（２）報告書作成の方法

１．遺跡の名称と構内座標の設定

県立岡山工業高等学校の敷地内は上伊福西遺跡の東端に位置していることから、昭和56年のプール建築に先立つ確認調査及び今回報告する産業教育施設改築工事に伴う確認・発掘調査はいずれも上伊福西遺跡として文化庁に書類を提出し調査を行った。

しかしながら、従来から周知されている上伊福西遺跡の集落としての範囲は、高校敷地の西側を流れる用水辺りと推定されており、さらに東側の今回の報告地点との中間部分での遺跡の状況は明らかでない。昭和56年の確認調査においても水田を確認したのみであり、集落の広がりは確認できていない。これに対して高校の東約50ｍを南北に走る幹線道路の工事の際、大量に土器が出土していることが確認されており[(1)]、上伊福遺跡の集落が現在の推定範囲からさらに西に広がることが推定される。このため、報告地点が上伊福遺跡の集落の西端に含まれる可能性も考えられるが、高校のグラウンド部分の状況が不明確な現状においては、上伊福西遺跡として一括して呼称し従来の遺跡範囲を広げるよりも、むしろ独立した集落として扱った方がよいと判断した。そして、報告地点については新たに遺跡名を付けて今後の調査に結論を委ねることとし、報告書作成時に遺跡名を改めることとした。

遺跡の名称は、慣例的に調査地の小字名を取ってつけており、岡山市役所と法務局で地籍図を閲覧し当該地の小字名を調査した。その結果、高校近辺にはいくつかの小字名が存在することがわかったが、縮尺不明の切り図しかなく、厳密な小字の境界は明らかにできなかった。このため、現在法務局で使用されている境界線を利用することとし、第２図に示したような境界で、「定国前」「辨才天」「渕ノ本」「竹之端」の４つの小字が敷地内にあることがわかった。しかし、小字名の漢字は判明したもののその読み方が現在の読み方でよいのか疑問が残った[(2)]。このため、伊福町周辺の旧家や寺院で現在60歳前後の古老を中心に聞き取り調査を行ったが、小字が存在したことすら聞いたことがないということであった。しかし、地元の郷土史家を通じて現在90歳を過ぎた古老に話しを聞いてもらうことができ、報告地点のある「定国前」の読み方は「さだくにまえ」でよいということがわかった。ただし、そのほかの小字の読み方についてはわからないという



第２図　調査区位置とグリッド設定及び字名切図(1/3,750)

ことであった。今回の聞き取り調査を通じて、本遺跡だけでなく他の遺跡においても同様だが、既に小字を用いて暮らしていた人達が減っていく現在にあって、小字を用いて遺跡の名称をつけることは非常に困難であり、また、その有用性についても疑問といわざるをえない。

とにかく、今回の報告地点の遺跡名は旧村名は上伊福村ではあるが、現在の行政区分名の伊福町を小字名に冠して「伊福定国前（いふくさだくにまえ）」とすることとした。

また、今後も構内の校舎改築を含めて各種工事に伴って発掘調査を実施することが予想されたため、個々の調査地点が相対的な位置で示せるよう、構内全域を国土座標に添わせて、X＝－147,370、Y＝－38,280を基線として10m方眼で西から１～31、北からA～eのグリッド線を設定した。グリッド名で呼ぶときは北西優位とし、今回の報告地点は22～25O～Q区、昭和56年に確認調査を行ったプールの調査地点は12～14X～b区に位置している。

註

(1)　水内昌康氏のご教示による

(2)　岡山市地名研究会編『岡山市の地名』（岡山市　平成元年発行）には「辨才天」の読み方を「べざいてん」として、地元での独特の読み方をしている。その他の読み方は記載されていない。

２．遺構・遺物の取り扱い

遺構は、発掘調査中に竪穴住居25軒、建物２棟、柱穴列１列、土壙74基、柱穴457基、溝２条の合計561の遺構について調査順に個別に遺構番号を付して遺物の取り上げを行った。しかしながら、紙面の都合上すべてについて個別説明を加えることができず、大型の遺構は可能な限り掲載するよう努めたが、土壙の一部と柱穴の大半は全体図に掲載するのみで個別の説明等は割愛したものもある。また、発掘調査時は時間的制約と区割りにして調査を行ったため、遺構の平面的かつ層位的な相互関係が把握できていなかった。したがって、遺構の整理作業はまず遺構全体図を作成し、その中で遺構相互の関係を把握するよう努めた。特に、柱穴については建物としてのまとまりを調査中に検証することは不可能であったため、調査時には個々の柱穴埋土の色調と底面の海抜高を平面図と合わせて記録し、整理作業の過程でそれらの記録や柱穴出土の遺物を参考にして建物としてのまとまりを検討した。

出土遺物は、総数コンテナ200箱におよび調査面積800㎡に対して多量といえる。水洗・注記は調査終了後に文化財センター等において行い、その半数を終了し、残った半数について引き続き水洗・注記を行った。土器については、一部それに先行して土壙出土のものを接合・実測したが、基本的には調査地区別に遺構検出中に出土した土器を接合・分類し、その後に個別遺構出土の土器の接合作業の際にそれらとの接合関係を見た。そして、遺構の時期を代表するものを中心に実測するよう努めた。

整理作業の結果、遺物の実測点数は土器1096点、土製品69点、石器・石製品28点、金属製品16点、木製品９点、玉類６点、角製品１点である。このうち本書に掲載したものは、土器746点、土製品34点、石器・石製品19点、金属製品12点、木製品３点、玉類６点、角製品１点である。

編集作業においては、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構の連続性を重視し、古代・中世は柱穴が中心となるが分別が困難であったためにそれぞれ同一の節で説明を加えることとした。また、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土壙は一覧表を、土製品、石器・石製品、金属製品、木製品、玉類、角製品は観察表を巻末に付けた。土器観察表については紙面の関係で割愛した。　（杉山）

第２章　遺跡の位置と環境

伊福定国前遺跡は岡山市伊福町に所在する。岡山市は岡山県の中央南部に位置し、県下三大河川の一つである旭川の下流に位置する。中国山地を源流とする旭川が吉備高原を通って南流する際に運んだ多量の土砂は、その他の多くの小河川の土砂とともに「吉備の穴海」と呼ばれた浅海を徐々に埋めていき、肥沃な岡山平野を築いていった。遺跡の所在する伊福町は、この岡山平野の北端に位置し、現在の岡山市街地の北西部にあたる。このあたりは北側に標高150ｍ前後の半田山山塊、西側に標高70ｍほどの京山があり、南側に大きく開く地形となっている。古くは笹ケ瀬川の支流が北西から流れ込んでいたと推察され、東側を流れている旭川との間で三角州状を呈し、沖積世以降に土砂の堆積が進行し、この流域に微高地を形成していく[1]。

今回報告する伊福定国前遺跡周辺には丘陵上から平地に至るまで多くの遺跡が知られ、現在までに調査されている。そのうちの主要な遺跡について旭川西岸を中心に見ていく。

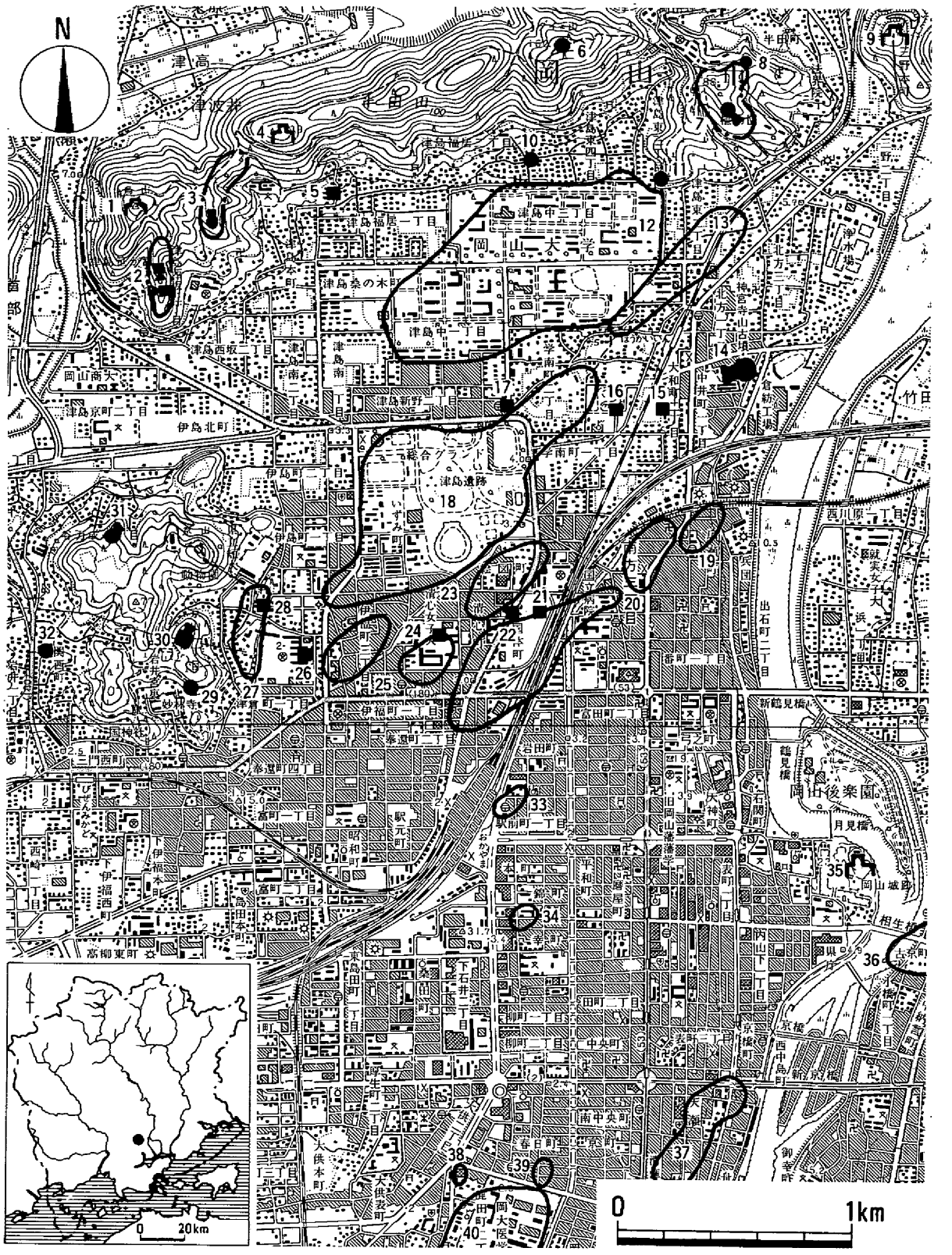
この流域で最も古い遺跡としては旧石器時代の遺跡で、東岸にある標高169ｍの操山山塊の尾根上に位置する旗振台古墳北部遺跡[2]や常住寺東南遺跡[3]で遺物が採集されている。

縄紋時代に入ると旭川流域では海進以前の遺跡はあまり知られていないが、やや内陸にはいった笹ケ瀬川下流に位置する田益田中遺跡では草創期の石槍や前期の土器が出土している[4]。また、半田山山塊から南に伸びる台地の裾に営まれた朝寝鼻貝塚[5]や東岸の百間川沢田遺跡[6]では中期の土器が出土しているが、本格的に定住生活が始まるのは後期以後になってからである。後期にはいると朝寝鼻貝塚[7]や津島岡大遺跡[8]といった丘陵の裾に近い場所で定住生活が始まるが、この状況は東岸の百間川原尾島遺跡[9]，百間川沢田遺跡[10]でも同様に確認されている。晩期になると後期以来の遺跡が発展・拡大し、遺物・遺構ともに増加していく。

弥生時代に入ると旭川の沖積作用によって築かれた自然堤防などの微高地上にさらに集落が展開していき、それとともに微高地縁辺の低湿地に水田が営まれていく。前期の津島遺跡では、微高地上に竪穴住居や井戸などの集落遺構と低湿地で矢板や杭列といった水田関連遺構が総合的に確認されたが[11]、津島岡大遺跡，津島江道遺跡[12]，北方下沼遺跡[13]，北方横田遺跡[14]などでも前期の水田遺構が確認されている。これ以降、前期後半から南方遺跡[15]、中期からは絵図遺跡[16]，上伊福遺跡，鹿田遺跡[17]といった集落が、旭川の支流によって分断された細い微高地単位に営まれていく。これらの集落は古墳時代初頭まで連綿と続き営まれていくものもあるが、その中の上伊福遺跡の一部である上伊福九坪遺跡では中期に属するガラス滓を含んだ遺構が確認されており[18]、東岸の百間川遺跡群と並んで吉備の先進地であったことがうかがえる。

また、平野を見下ろす半田山丘陵の尾根線上には、都月坂２号墓[19]，都月坂１号墳[20]，七つ坑１号墳[21]といった弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、旭川西岸域に展開した集落の首長系譜と考えられる墳墓が築かれている。

古墳時代前半には弥生時代終末期以来、平野を見下ろす丘陵部を中心に造墓活動が活発にみられる。半田山山塊の頂部のダイミ山には一辺20ｍの方墳のダイミ山古墳が、その東側の旭川にのびる尾根上には全長約65ｍの前方後円墳の一本松古墳[22]を中心とした一本松古墳群が、南側の山裾部にはお塚様古



1．烏山(笹ケ迫)城跡　2．七ツ坑古墳群　3．都月坂古墳群　4．半田山城跡　5．津島福居遺跡　6．ダイミ山古墳　7．一本松古墳群　8．不動堂古墳　9．妙見山城跡　10．お塚様古墳　11．朝寝鼻貝塚　12．津島岡大遺跡　13．津島江道遺跡　14．神宮寺山古墳　15．北方横田遺跡　16．北方下沼遺跡　17．津島新野遺跡　18．津島遺跡　19．広瀬遺跡　20．南方遺跡　21．南方(済生会)遺跡　22．南方(中電)遺跡　23．絵図町遺跡　24．上伊福九坪遺跡　25．上伊福遺跡　**26．伊福定国前遺跡**　27．上伊福西遺跡　28．尾針神社南遺跡　29．妙林寺古墳　30．津倉古墳　31．青陵古墳　32．石井廃寺　33．散布地　34．散布地　35．岡山城　36．散布地　37．天瀬遺跡　38．散布地　39．散布地　40．鹿田遺跡

第３図　調査区周辺の地形と周辺主要遺跡分布(1/25,000)

墳[23]が造られる。また、平野の西側にある京山山塊には全長45mの前方後方墳の津倉古墳や全長約45mの前方後円墳の青陵古墳が、旭川に近い平地には全長150mの神宮寺山古墳[24]が造られ、平野部での安定した生産基盤を背景にしてますます発展していった状況がうかがえる。

古墳時代後期になるとそれまでの状況と一変し、岡山平野での遺跡の中心は東岸に移る。平野部での集落や丘陵部での造墓活動は減り、わずかに尾針神社南遺跡で5世紀末頃の須恵器を伴う祭祀活動などがみられる[25]のみである。

古代には条里制が施行された状況が現在でも見られるが、発掘調査でも津島遺跡や津島岡大遺跡で条里に関連する大溝が検出され、津島江道遺跡では御野郡衙に関連すると考えられる建物群が検出されている[26]。また、摂関家の殿下渡領の「鹿田荘」に比定される鹿田遺跡[27]では建物や井戸といった遺構が確認されている。

古代以来平野部においては水田化が進んでいくが、西岸では中世になるとそれはさらに進む。遺跡の数はさらに減少し、鹿田遺跡で鎌倉時代前半の、室町時代には本遺跡でまとまって遺構・遺物がみられる程度である。戦国期には半田山山塊に烏山(笹ケ迫)城跡，半田山城跡[28]，明見山城跡[29]といった山城が築かれる。また、旭川岸には天正10(1582)年以降、宇喜多秀家によって岡山城[30]と城下町の造営が進められる。関ケ原合戦後、宇喜多氏の没落後も小早川氏、池田氏によってさらに推進され、現在の岡山市街地の基礎を築いていく。その中で、本遺跡のある一帯は岡山藩の穀倉地として水田化される。

近代になっても水田地であったこの一帯は、明治40年以後大きく風景を変える。日露戦争後の不安定な国内情勢をうけて、岡山でも津島・伊島一帯を京山丘陵の北端の日焼山(ひやけやま)を崩した土で造成し、第十七師団が設置されることになった。これによって水田のほとんどが姿を消し、その後も宅地化が進み現在に至っている。　(杉山)

註

(1) 斎藤伸英「V. 地形」『岡山県の地理』福武書店　1978
　谷口澄夫・石田　寛監修『岡山県風土記』旺文社　1996
(2) 鎌木義昌「第一編　無土器時代」『岡山市史　古代編』岡山市　1962
(3) 註2文献と同じ
(4) 伊藤　晃氏のご教示による。
　伊藤　晃ほか「笹ケ瀬川調節池建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』26　岡山県教育委員会　1996
(5) 鎌木義昌・亀田修一「朝寝鼻貝塚」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
　阿部芳郎「朝寝鼻貝塚」『中・四国縄文中期土器集成』中・四国縄文研究会　1993
(6) 中野雅美ほか「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　岡山県教育委員会　1985
(7) 註5文献と同じ
(8) 阿部芳郎編「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第7冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1994
　このほか、同センター発行の津島岡大遺跡関連の報告書に掲載されている。
(9) 柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 岡山県教育委員会　1996
(10) 平井　勝ほか「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　岡山県教育委員会　1993
(11) 近藤義郎「津島遺跡」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
　岡山県津島遺跡発掘調査団『津島遺跡発掘調査概報』岡山県教育委員会　1970
(12)「津島江道遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会実行委員会　1988

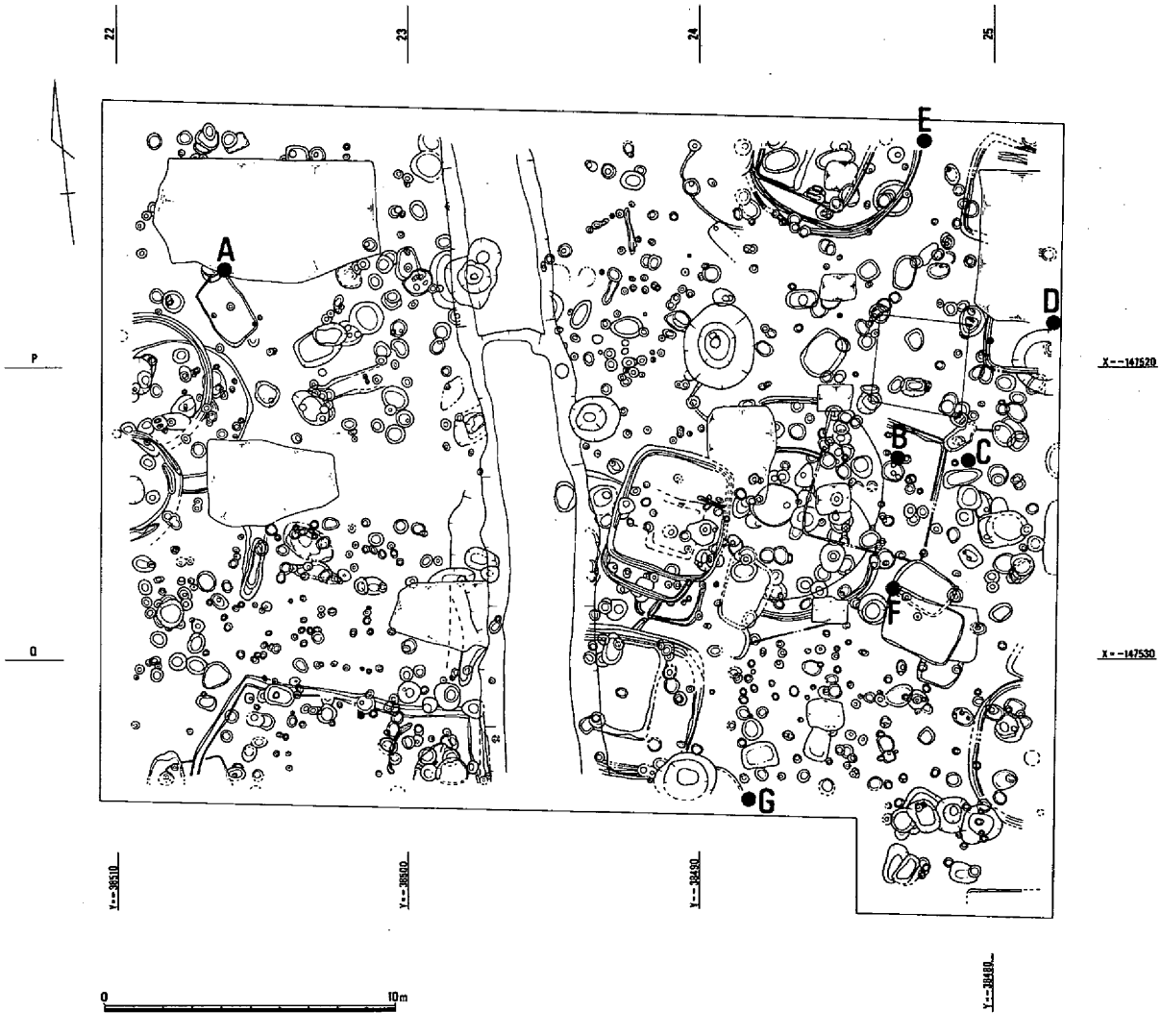
(13) 報告書近刊
(14) 報告書近刊
(15) 出宮徳尚・伊藤　晃『南方遺跡発掘調査概報』岡山市遺跡調査団　1971
出宮徳尚ほか『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　1981
柳瀬昭彦・岡本寛久「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40　岡山県教育委員会　1981
内藤善史「絵図・南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110 岡山県教育委員会　1996
扇崎　由・安川　満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）Ⅰ・Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994年度　岡山市教育委員会　1996
扇崎　由・安川　満「上伊福・南方（済生会）遺跡（上伊福立花調査区）Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994年度　岡山市教育委員会　1996
扇崎　由・安川　満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995年度　岡山市教育委員会　1997
神谷正義ほか「南方（中電）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995年度　岡山市教育委員会　1997
(16) 内藤善史「絵図・南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110 岡山県教育委員会　1996
(17) 山本悦世ほか編「鹿田遺跡Ⅰ・Ⅱ・３・４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３・４・６・11冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988・1990・1993・1997
(18) 中野雅美・根木　修「上伊福九坪遺跡」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
(19) 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
(20) 近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
(21) 近藤義郎・宇垣匡雅『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団　1987
(22) 近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
(23) 近藤義郎「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会　1988
(24) 鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山県史　考古資料編』岡山県　1986
(25)「尾針神社南遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995年度　岡山市教育委員会　1997
(26) 高畑知功「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』18　岡山県教育委員会　1988
(27) 吉留秀敏・山本悦世編「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988
(28)「半田山城」『日本城郭大系』第13巻　新人物往来社　1980
(29)「明見山城」『日本城郭大系』第13巻　新人物往来社　1980
(30) 乗岡　実「岡山城跡本丸中の段第Ⅲ次」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994年度　岡山市教育委員会　1996
乗岡　実「岡山城跡本丸中の段第Ⅳ次」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995年度　岡山市教育委員会　1997

第３章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の概要

今回報告する調査区周辺は、明治40年の第二海軍衣糧廠岡山支廠建設の際に厚さ約120～130cmの造成(第１層)が行われており、調査前の地表面の海抜高は約290cmであった。この造成土の下には、明治以前の水田層(第２層)が部分的に約15cmほど見られ、遺構面はこの水田層直下の海抜約160cm前後の高さに存在する。この遺構面は建物の基礎杭や近代の攪乱が著しく、地区によって遺構の残存状況はまちまちであるが、弥生時代から中世の遺構が第４図に示したように複雑に切り合って存在している。

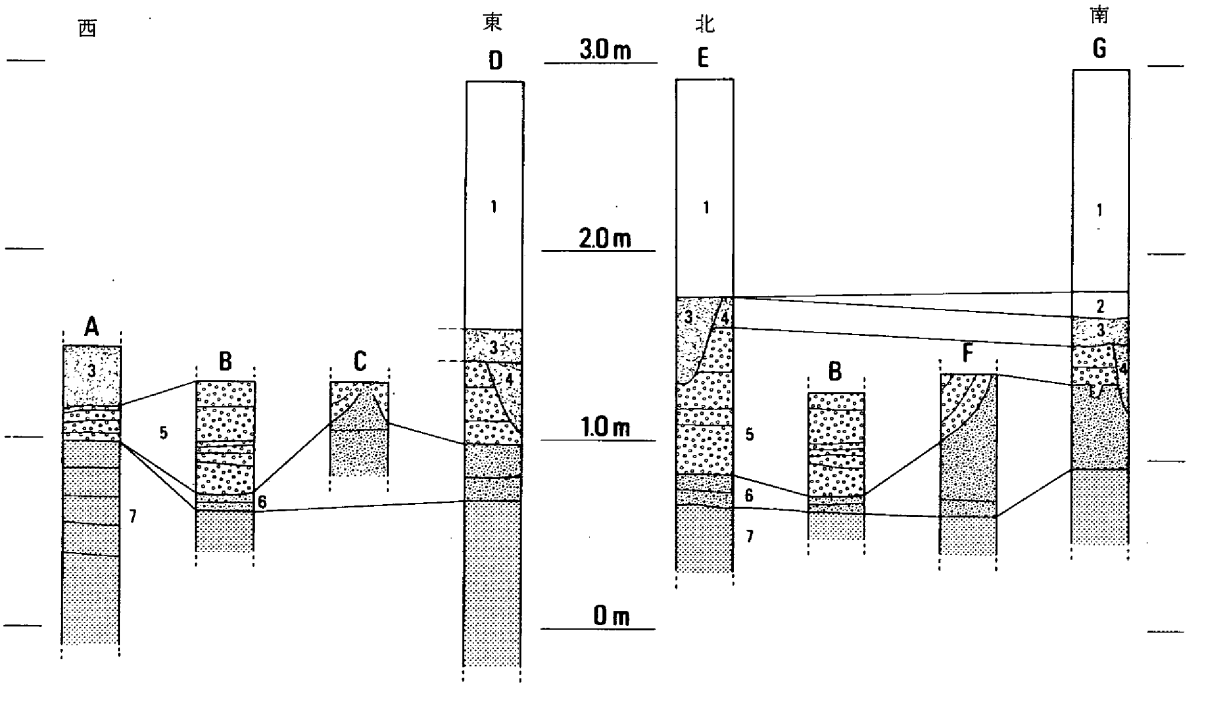
第５図に本調査区内のＡ～Ｇの７つの地点で作成した土層柱状図を示した。確認した最下層には厚



第４図　検出遺構配置と土層柱状図作成位置(1/250)

さ約110cm以上と厚く堆積した第８層が見られる。第８層は青灰色で粘性が非常に強く、木質を比較的多く含んだ層で、Ａ地点で海抜98cm、Ｄ地点で海抜68cmとやや東側が低くなっている。この層の上位に第７層が堆積する。この層はやや粘性のある砂質土で、Ａ地点では見られず、調査区東側のＦ地点では約70cmの厚さで水平に堆積しており、低位部に堆積した水性堆積層と判断される。この第７層の上面で、海抜約140cm前後の高さではピット状の落ち込みが見られる。人工的なものかどうかは明確でないが、一定期間安定した地表面であったことが推察される。第６層はこの第７層を抉るような状況で堆積している層で、微砂もしくは微砂質の層の堆積層である。平面的に検出すると砂溜まりのような状況だが、第７層上面にも同質の土砂の堆積が見られることから洪水による堆積物と判断される。Ｇ地点では第６層の上面で海抜150cmの高さで土壙が掘り込まれており、これ以後遺構が築かれていっている。

本調査区で最も古い遺物は弥生時代後期初頭頃のもので、これ以後遺構は増大して行く。第６層以下が水性堆積層と判断されることから、本調査区においては弥生時代後期以前は度々洪水にあうようなあまり生活に適していない環境であったことが窺える。しかし、弥生時代後期以降は比較的安定した状況になり、生活に適した環境になったため、これ以後14世紀まで断続的に集落が営まれ続ける。15世紀以降は出土遺物が皆無であることから、これに近い時期に水田化したと考えられる。　（杉山）



1．造成土　3．遺構埋土　5．微砂層　7．粘土層
2．水田層　4．〃　6．〃

第５図　土層柱状図相関模式図（深さ１/40，幅は任意）

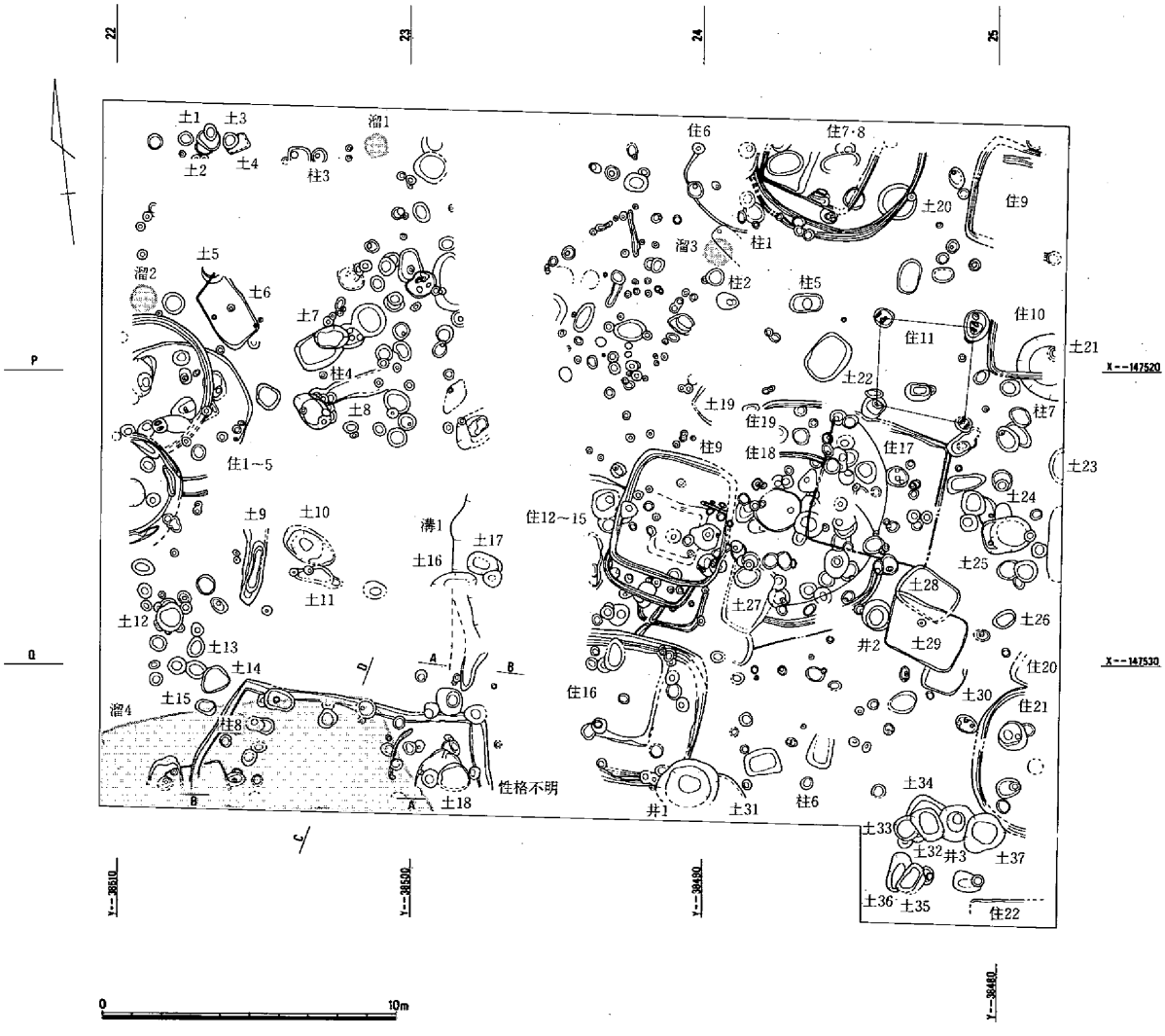
第２節　弥生～古墳時代の遺構と遺物

（１）概　要

ここでは、主に弥生時代後期から古墳時代前半と判断された竪穴住居22軒、柱穴９基、井戸３基、土壙37基、溝１条、性格不明遺構１基、土器溜り４基を報告する。

遺構は、近代以降の攪乱と新旧の遺構が複雑に重なりあって存在していた。検討の結果、調査区内においては伊・弥・後Ⅲ期には径７ｍほどの中型の竪穴住居－19を中心に該期の遺構が築かれているが、伊・弥・後Ⅳ期以降には径・一辺ともに５ｍ以下の小型の竪穴住居が散在し、中心となるような遺構は存在していない。しかし、遺物の中で圧倒的主体を占めている土器をみると伊・弥・後Ⅳ期以降には東海、近畿、山陰、備後、讃岐、西部瀬戸内といった他地域との交流を示す土器がみられる。

これらのことから、本遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代前半の時期においては、他地域との交流を通じて連綿と集落が営まれていたことが推測される。（杉山）



第６図　弥生～古墳時代の遺構配置（1/250）

（２）竪穴住居

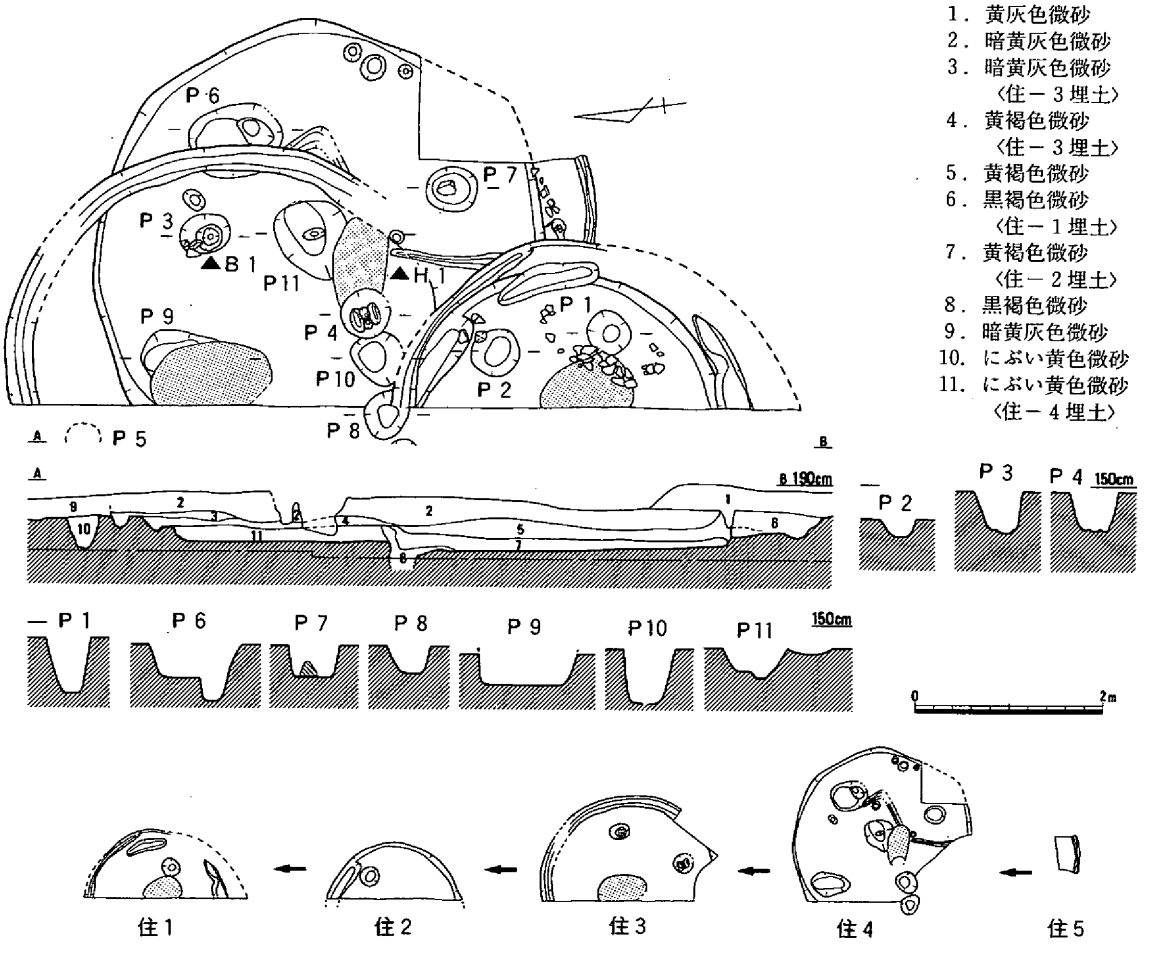
竪穴住居－１～５（第７～13図，図版２・３・10・19・20）

竪穴住居－１～５は調査区東端の22Ｏ・Ｐ区および調査区外に存在する。

竪穴住居－１は最も新しい住居である。溝のうち東側は深さ２cmと浅く広い。南側の溝は壁体溝になる可能性がある。中央穴（トーン部分）は、建て替えあるいは上層の住居に由来する貼り床層に埋もれていた。上層には炭層が見られる。この住居の床面は海抜1.32ｍあたりである。円形の住居として調査区外も含めて復元すると、直径4.6ｍ、面積約16.6㎡になる。中央穴南東縁には**７**の壺が破片になり帯状に並んでいた。**７**の口径は23.5cmで色調が灰黄～灰白色を呈する。**８**・**９**はP1から出土した甕で、**８**は口径19.6cm、煤が付着する。**９**は口径14.9cmを測る。**10**・**13**は床面上から出土した。**11**～**13**はいずれも胎土が精製粘土の高杯で、同一個体ではない。この遺構の時期は伊・古・前Ⅰ期である。

竪穴住居－２は竪穴住居－１の下層で、その床面から約17cmの深さがある。床面は海抜1.15ｍ程である。中央穴を住居１と共有する可能性がある。壁体溝は検出していない。遺物は床面には見られず、埋土中からである。**16**は壺の底部片、**17**は口径18.0cmを測る鉢、**18**は高杯、**19**は台付鉢である。

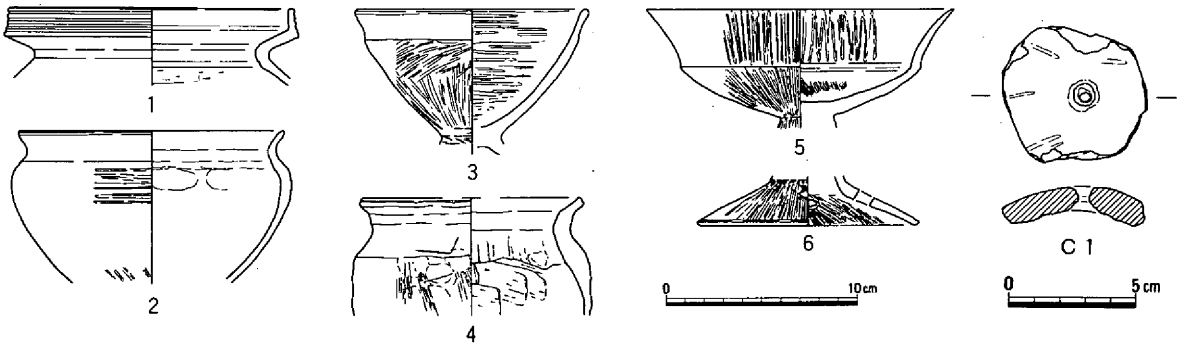
竪穴住居－３は竪穴住居－１・２より古い。南側は確認できなかった。貼り床は不明で、壁体溝と中央穴（トーン部分）、柱穴２本が残っている。床面は海抜高1.44ｍ程度であろう。P4をこの住居の柱穴と考えると、復元される柱穴の数は４本である。P3は底に礎板を据えた痕跡が残る。円形の住



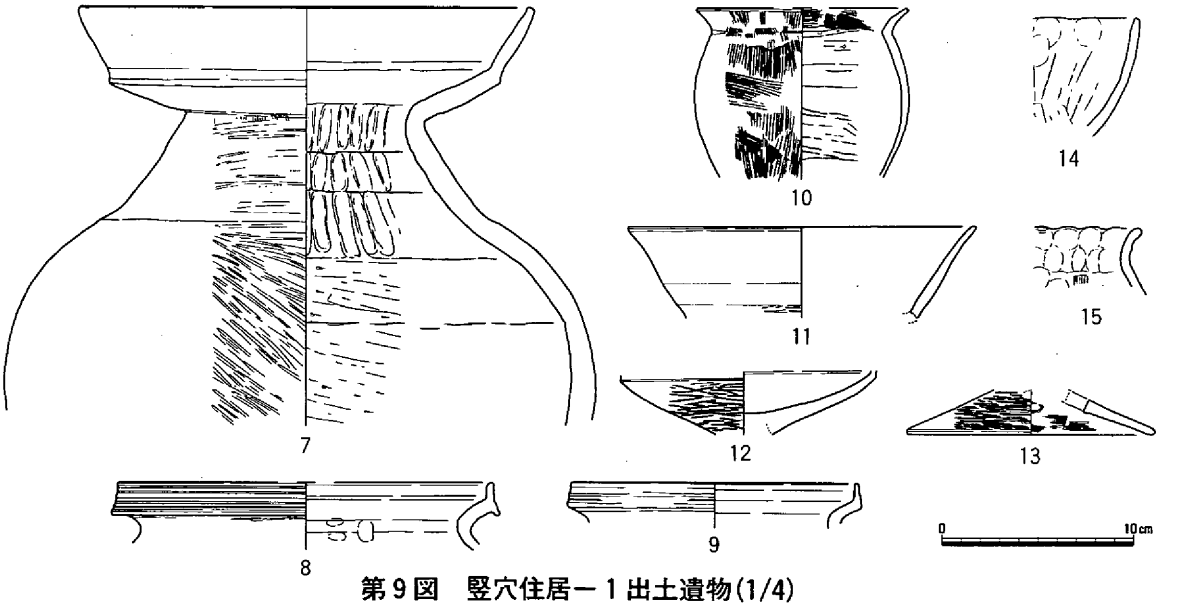
第７図　竪穴住居－１～５平・断面と変遷（1/80・1/200）

居として復元すると、直径5.1ｍ、面積約20.4㎡である。遺物は土器と土製円板がある。いずれも埋土中で、**20**は口径10.8㎝を測る壺、**21**～**23**は口縁外面に櫛描沈線を施す甕である。**21**の口径は14.9㎝、**22**は14.3㎝、**23**は12.5㎝を測る。**24**は鉢で、口径18.2㎝である。遺構の時期は伊・古・前Ⅰ期であろう。

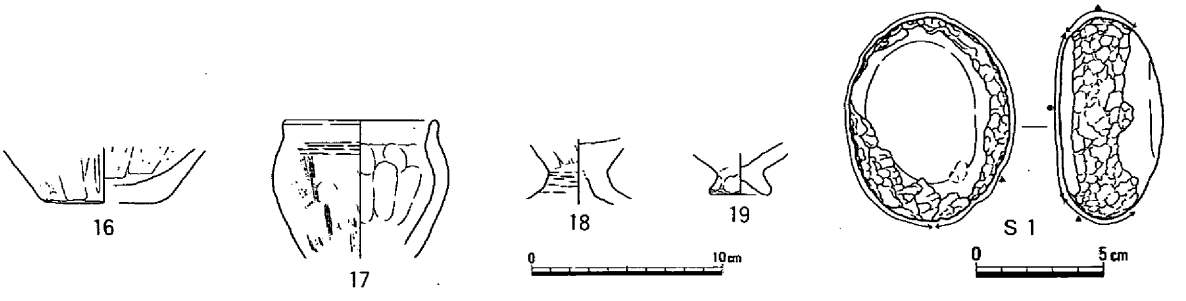
竪穴住居－４は緩い多角形の平面をとる。南側は攪乱と竪穴住居－１に切られ残りが悪い。床面の海抜高は1.25ｍ程度である。中央穴P11とその南側に深さ５㎝の灰穴（トーン部分）を持つ。中央穴は焼けた痕はなく、埋土は焼土・炭・土器を含む。灰穴も焼けた痕跡はなく、底面に沿って約１㎝の厚さの炭層があった。柱穴は４本（P6～Ｐ9）を想定している。中央穴付近に溝が見られるが、流路方向は不明である。東側が調査区外になるが、復元すると直径4.8ｍ、面積約18㎡程であろう。骨角製品はいずれも床面から出土した。刻骨Ｈ１は刻み部分は３条しか残っていない。最大幅39.5㎜、最大厚



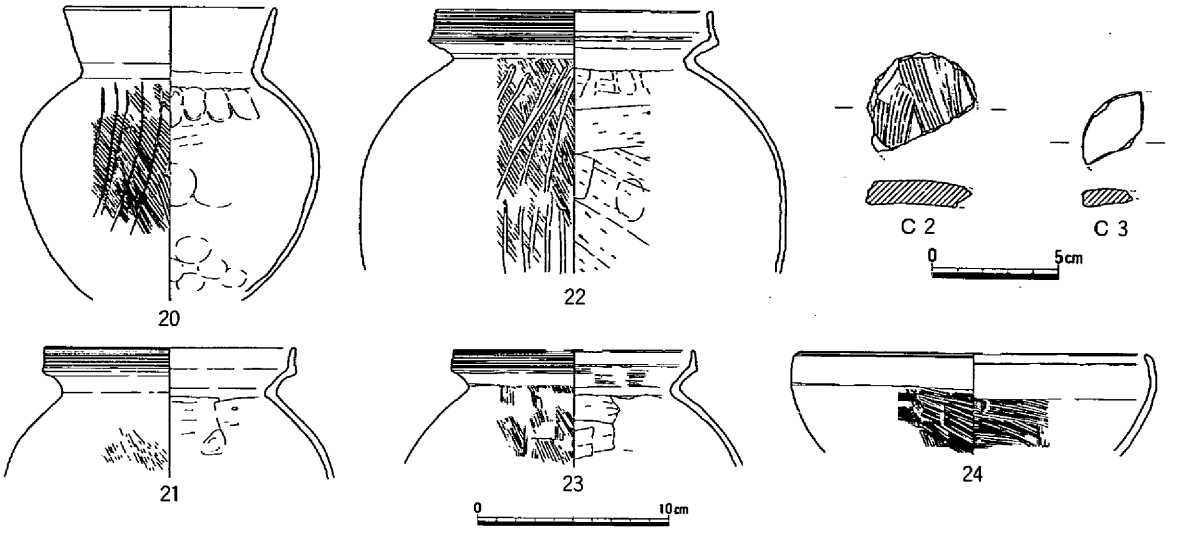
第８図　竪穴住居－１～５出土遺物（1/3・1/4）



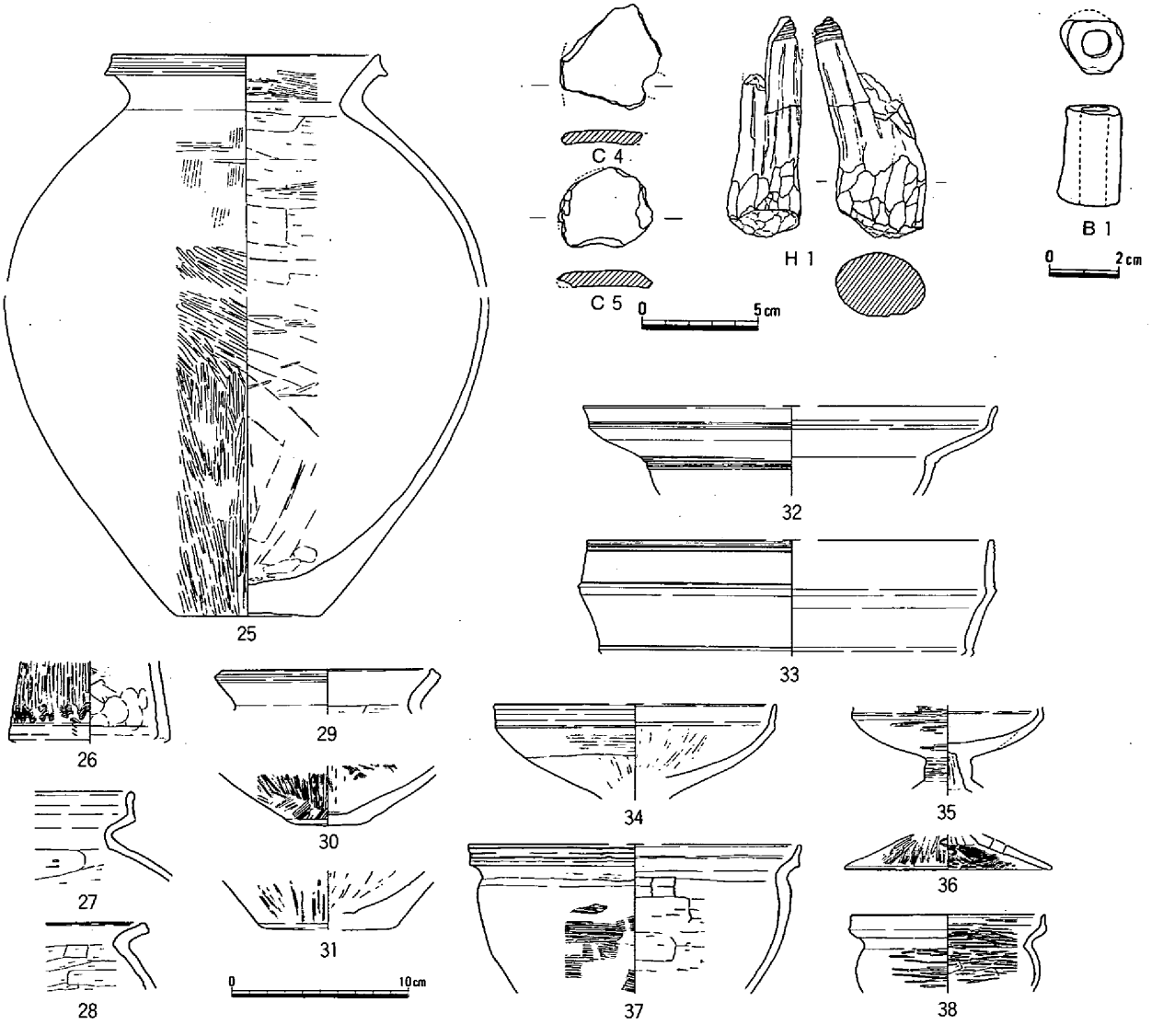
第９図　竪穴住居－１出土遺物（1/4）



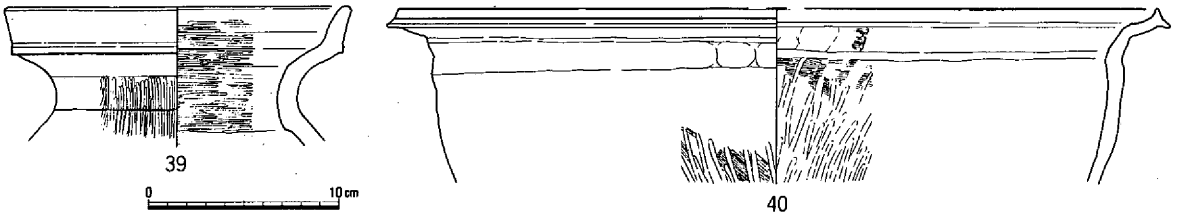
第10図　竪穴住居－２出土遺物（1/3・1/4）



第11図　竪穴住居ー３出土遺物(1/3・1/4)



第12図　竪穴住居ー４出土遺物(1/2・1/3・1/4)



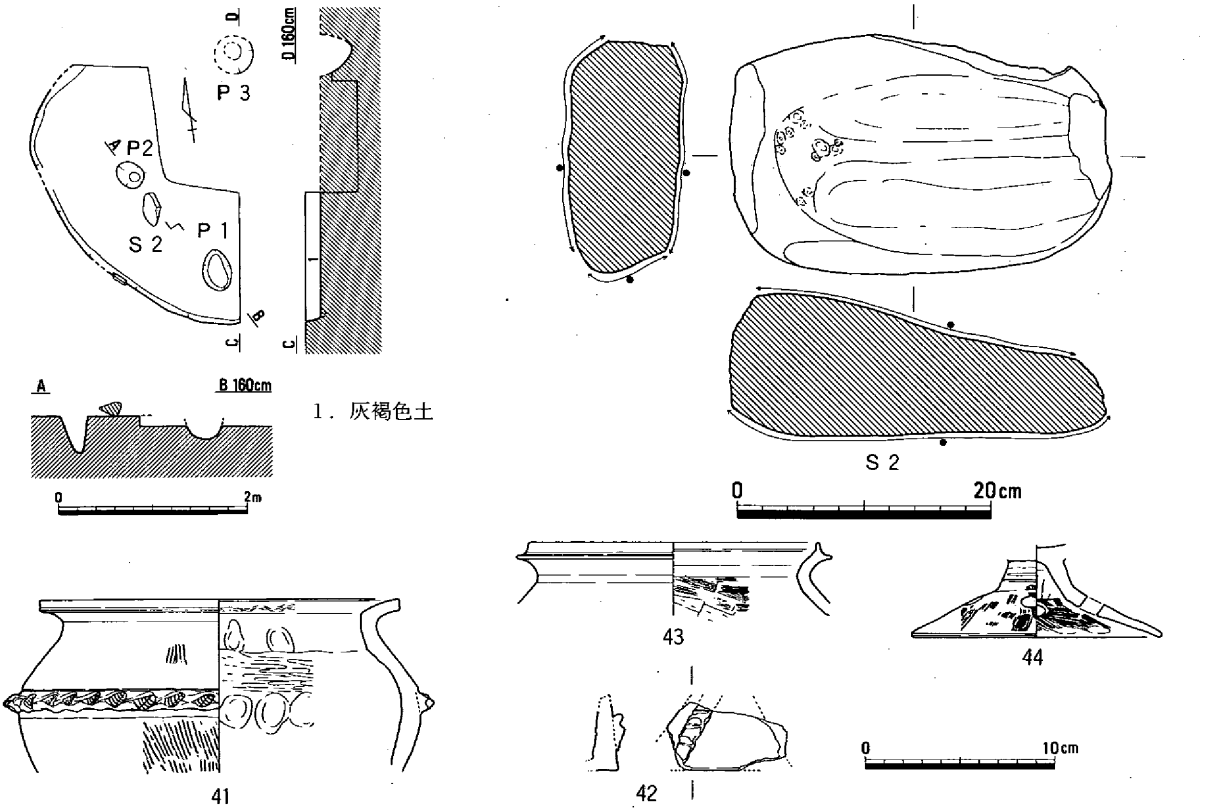
第13図　竪穴住居－５出土遺物(1/4)

31.5mmを測り、煤が付着している。管玉**Ｂ１**は現存長29.5mm、最大幅18.5mmで孔径７～８mmで、外面調整は不明瞭である。土器は中央穴・柱穴・埋土のもので、床面のものは確認できていない。**25**は口径15cm、器高推定32.3cmを測る短頸壺である。**27・34・37**が中央穴出土の土器である。**34**の高杯は口径16.1cm、**37**は口径18.9cmの鉢である。**30**はP6から出土した。底径3.9cmを測る。**32・33**はあまりみられない器形であるが最も妥当な復元を行った。**32**は鉢で口径23.8cmである。**33**は高杯であろう。口径23.3cmである。**32・33**の胎土は水漉粘土を使用する。この住居は伊・弥・後Ⅳ期に属する可能性が高い。

竪穴住居－５は検出面から５cm程度残っていた。床面の高さは海抜1.34ｍである。住居１～５のうち一番古い住居であり、住居１・４と攪乱に切られる。壁体溝と土器のみで規模はわからない。**39**は口径17.9cmを測る壺、**40**は同じく39.8cmの鉢である。伊・弥・後Ⅳ期にあたる住居であろう。（氏平）

竪穴住居－６（第14図，図版20）

24Ｐ区で調査区北端に位置する隅丸方形に復元される住居である。南西隅から南辺の検出のため規模は明確でないが、南辺約3.16ｍ、検出面からの深さ16cmで海抜134cmで床面となる。柱穴は３基検出できたが本来的には４本柱になると思われる。柱穴は平面楕円形で深さは約20～36cmである。壁体



第14図　竪穴住居－６平・断面(1/80) と出土遺物(1/4・1/6)

溝は平面では検出できなかったが、断面では幅10cm、深さ４cmの落ち込みがみられる。

出土遺物は、P1とP2の間で床面上から出土した砥石Ｓ２と壺41～43、高杯44がある。壺41・42は同一個体の可能性もあるが共に表面淡黄色を呈し、41は肩部に、42は台部の三角形と思われる透かし穴に沿ってそれぞれ凸帯を貼り付けてその上に刺突を施す。41の内面のヘラケズリがまだ口縁の屈曲部まで及んでおらず、口縁端部も拡張していないことから、住居よりも古い時期の混入品と思われる。

住居の時期は出土遺物から伊・弥・後Ⅳ期と判断される。　(杉山)

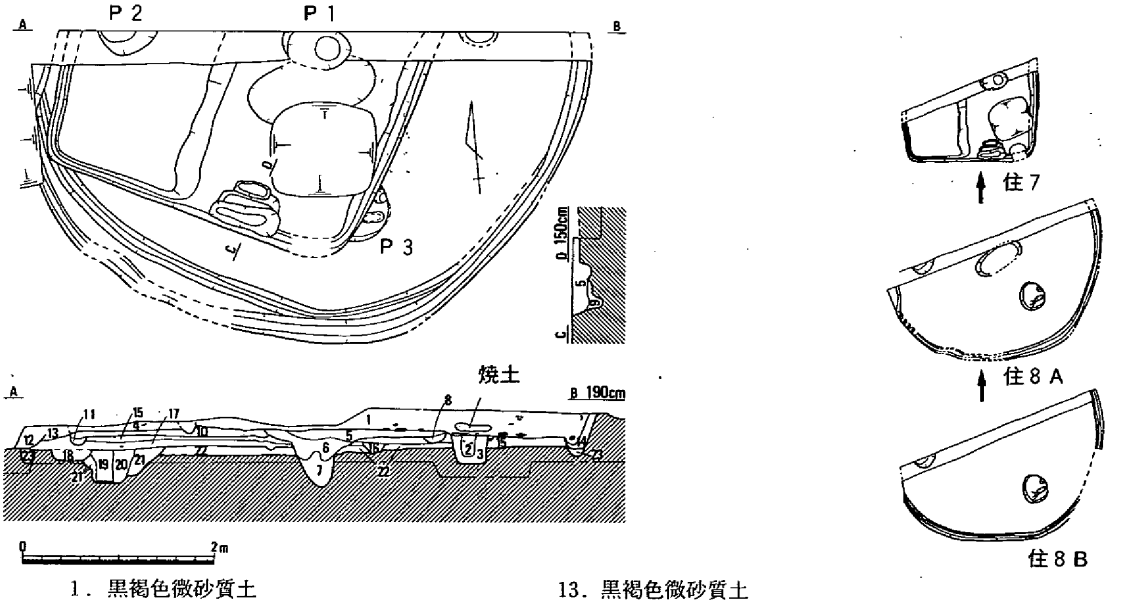
竪穴住居－７・８（第15～17図，図版３・19）

24Ｐ区で調査区北端に位置する住居群で、土層観察から他に数軒の住居が存在していたと思われる。

竪穴住居－７は検出した住居の中で最新のもので、ほぼ南半分を検出した。平面形は南辺長356cmの方形で壁の周囲には壁体溝が巡り、西側はベッド状に床面から約６cm高くなっている。調査区境に中央穴、南側の壁際には方形土壙をもつが柱穴はない。出土遺物は壺45・46・49、甕47・48、高杯50・51、鉢52～54、土錘Ｃ６があり、これらから伊・古・前Ⅰ期と考えられる。

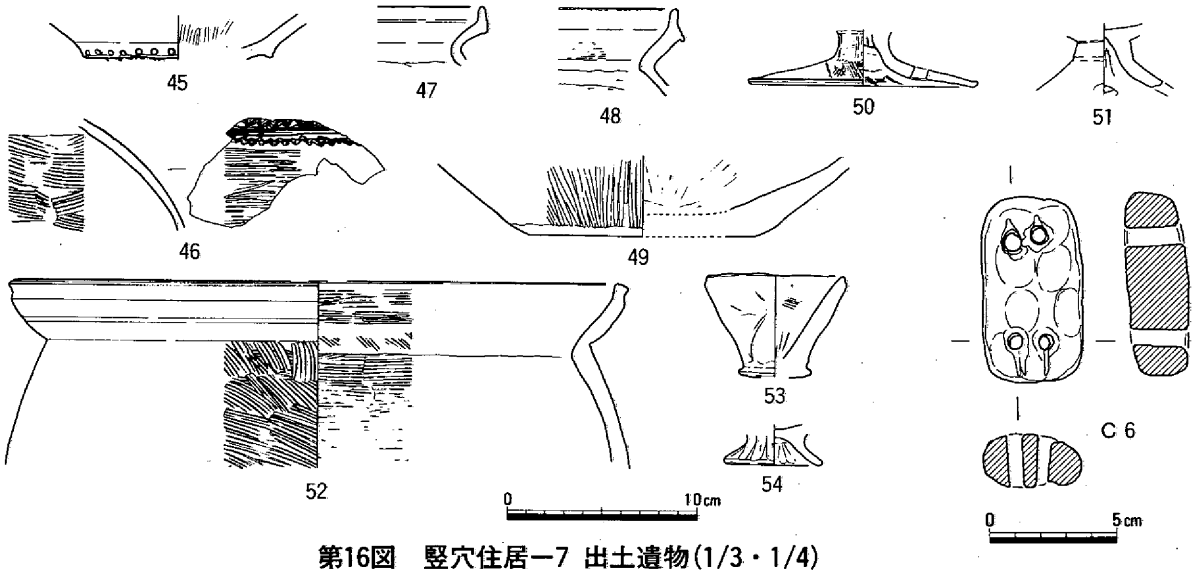
竪穴住居－８は１回の建て替えがあり、円形に近い隅丸方形を呈している。壁の周囲に幅12～24cmの壁体溝が巡る。柱穴は新旧の住居で共有しており、東西に２基確認したが本来的には４本柱と推定される。東側の柱穴の底面には南北に２条の溝状の窪みがみられることから礎板が敷かれていた可能性がある。また、新住居８Ａには床面のほぼ中央に中央穴が存在する。出土遺物は新旧で分離することはできなかったが、甕55～58、鉢59・60、高杯61・62、鉄製鉈Ｍ１がある。

住居の時期は出土遺物から伊・弥・後Ⅲ－Ⅳ期と判断される。　(杉山)

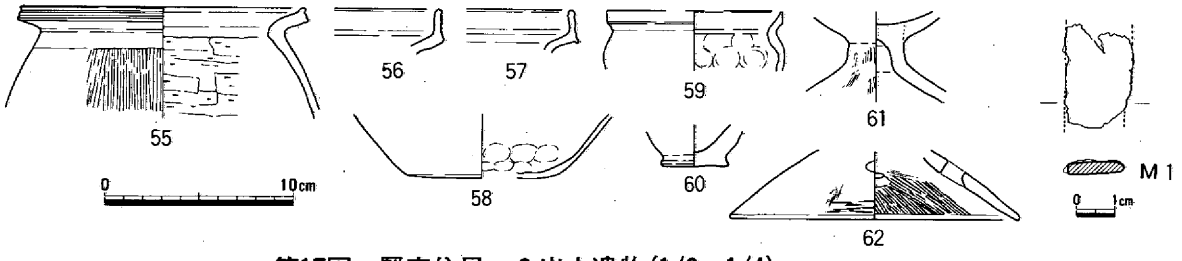


1．黒褐色微砂質土
2．暗灰黄色粘質土
3．暗灰黄色微砂質土
4．黒褐色微砂質土〈住－７埋土〉
5．暗灰黄色微砂質土〈住－７埋土〉
6．黒褐色微砂質土〈住－７中央穴埋土〉
7．暗褐灰色粘性微砂質土〈住－７中央穴埋土〉
8．暗灰褐色微砂質土〈住－７壁体溝埋土〉
9．明褐灰色粘性微砂〈住－７万形土壙〉
10．明黄褐色微砂質土〈住－７ベッド造成土〉
11．黒褐色微砂〈住－７壁体溝埋土〉
12．暗灰黄色微砂質土
13．黒褐色微砂質土
14．黄灰色微砂質土〈住－８Ａ壁体溝埋土〉
15．黄褐色微砂質土〈住－８Ａ埋土〉
16．暗灰褐色微砂質土
17．にぶい黄色微砂質土〈住－８Ｂ埋土〉
18．にぶい黄色微砂質土
19．にぶい黄色粘質土
20．にぶい黄色粘質土
21．にぶい黄色微砂
22．にぶい黄色微砂質土
23．黄灰色微砂質土〈住－８Ｂ壁体溝埋土〉

第15図　竪穴住居－７・８平・断面と変遷(1/80・1/200)



第16図　竪穴住居ー7 出土遺物(1/3・1/4)

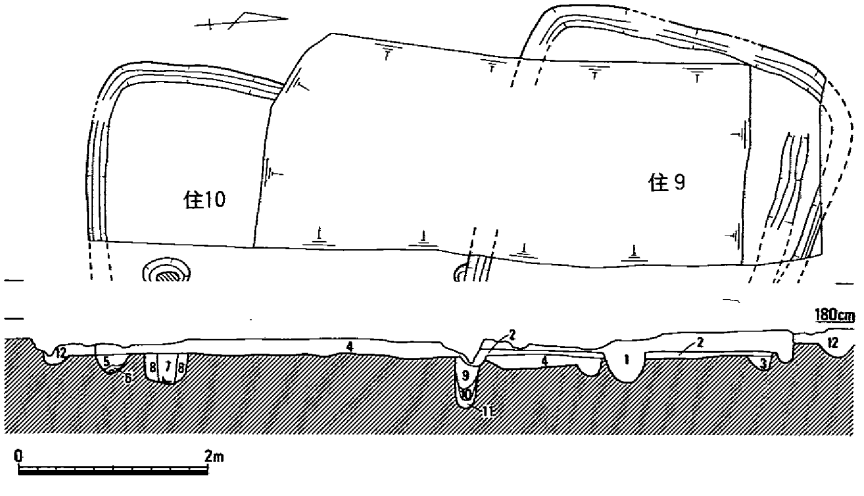


第17図　竪穴住居ー８出土遺物(1/2・1/4)

竪穴住居ー９・10（第18～20図）

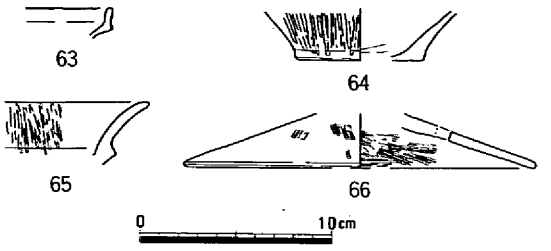
25Ｐ区で調査区北東隅に位置する方形の住居である。両者の中央を試掘トレンチで掘削されており、床面のほとんどが残っていない。

竪穴住居ー９は最新の住居で、１回の建て替えがあり、新旧の住居９Ａ・９Ｂ共に壁の周囲に幅20cmほどの壁体溝が巡る。これらの住居に伴う柱穴は確認できなかった。出土遺物は、甕**63**・**64**、高杯**65**・**66**がある。小片であり**64**～**66**は混入品の可能性が高く**63**の甕と竪穴住居ー10との関係から伊・

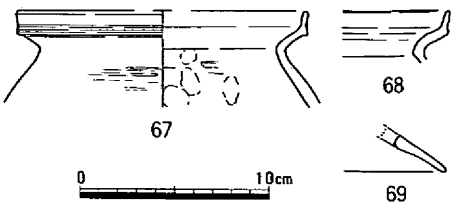


1．暗褐灰色砂質土
　〈住ー９Ａ埋土〉
2．暗褐灰色砂質土
　〈住ー９Ｂ埋土〉
3．褐灰色砂質土
　〈住ー９Ｂ壁体溝埋土〉
4．暗褐灰色砂質土
　〈住ー10埋土〉
5．灰褐色砂質土
　〈住ー10壁体溝埋土〉
6．黄褐色砂質土
　〈住ー10壁体溝埋土〉
7．灰褐色砂質土
　〈住ー10柱穴埋土〉
8．にぶい黄褐色砂質土
9．暗灰褐色砂質土
10．黄褐色砂質土
11．黄褐色砂
12．暗褐灰色砂質土

第18図　竪穴住居ー９・10・平・断面(1/80)



第19図　竪穴住居－９出土遺物(1/4)

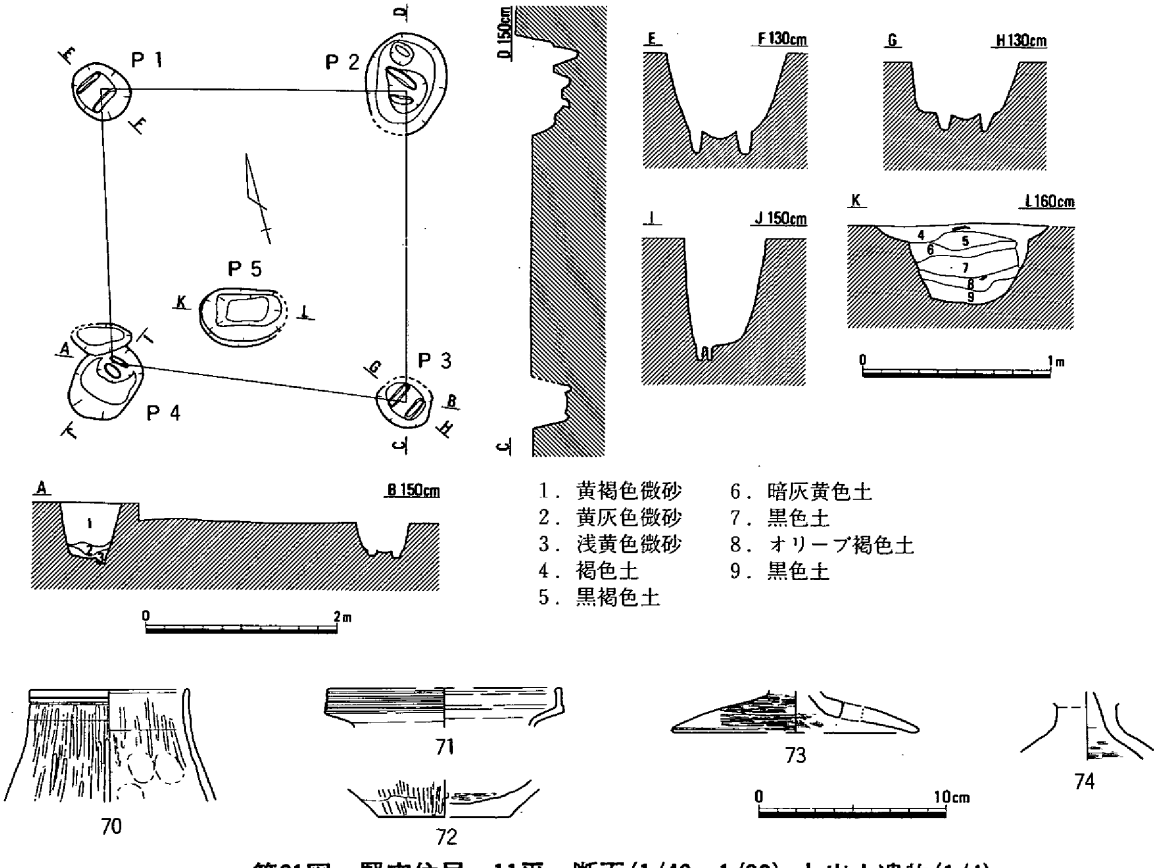


第20図　竪穴住居－10出土遺物(1/4)

古・前Ⅰ期と考えられる。竪穴住居－10は南西隅のみ検出したが壁の周囲には壁体溝が巡る。土層断面の観察から南側がベッド状に高くなっていたと推察される。柱穴は２基確認した。出土遺物は甕**67・68**と高杯**69**がある。住居の時期は出土遺物から伊・古・前Ⅰ期と判断される。　(杉山)

竪穴住居－11（第21図）

24Ｐ・Ｑ区に位置する。調査時は柱穴P1～P4とP5を別々に検出したが、整理の結果壁体は残っていないが住居と判断した。柱穴は平面楕円形を呈し、規模は最大のP2で110×74㎝、最小のP3で57×51㎝である。検出面からの深さは31～60㎝とまちまちだが、いずれの底面にも２本の横木を礎板として敷き、その間に柱材を立てた板痕跡が見られる。また、P2にはその他に柱痕跡があり、添え柱が存在していた可能性がある。中央穴と判断したP5は柱穴P1～P4に囲まれた空間の中央よりやや南に位置している。平面径は長方形に近い隅丸方形で、規模は90×62㎝で検出面からの深さは43㎝を測る。出土遺物はP5から出土した壺**70**と、柱穴から出土した甕**71・72**、高杯**73・74**がある。甕**71**の口縁外面には櫛描沈線が見られる。住居の時期は、伊・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ期と考えられる。　(杉山)



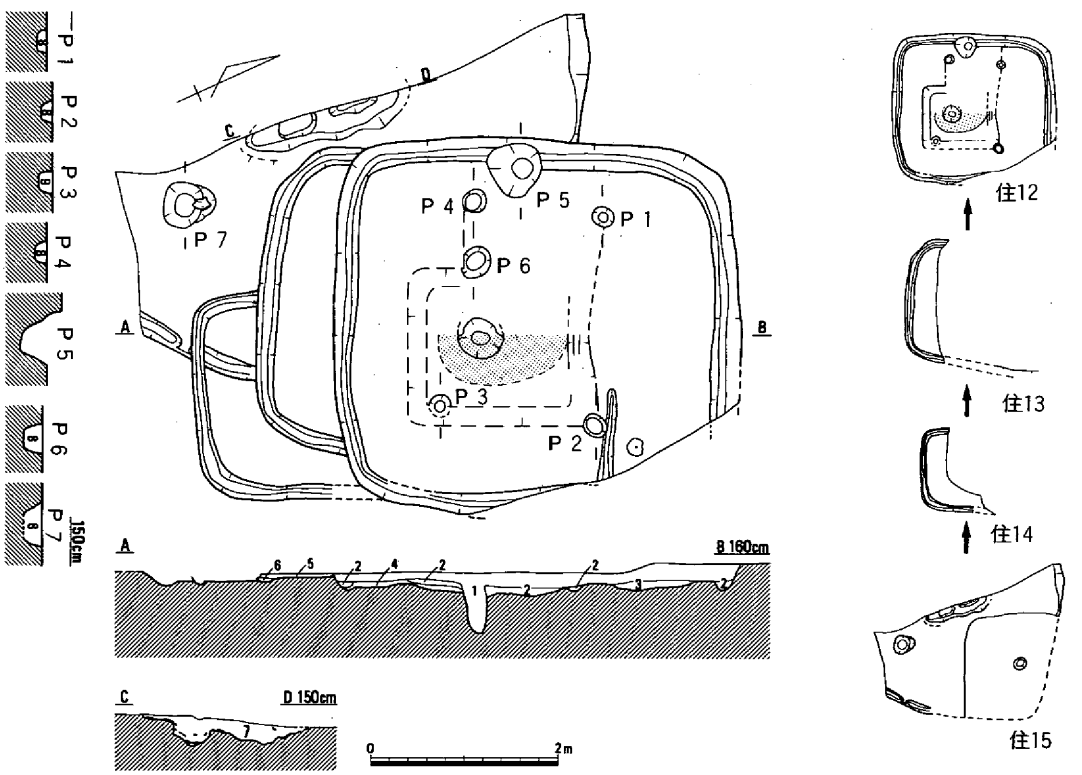
第21図　竪穴住居－11平・断面(1/40・1/80) と出土遺物(1/4)

竪穴住居－12～15（第22～25図，図版19・20）

23Ｐ区の東部に位置する。４軒の住居が複雑に切り合い平面的な検出は困難な状況であった。しかし、土層断面の観察と切り合い関係を検討した結果、竪穴住居－15を最古に、以後14～12へと新しくなる。住居に伴う柱穴は全体を掘下げた後に精査したが、図示した以上に該当するものは確認できなかった。

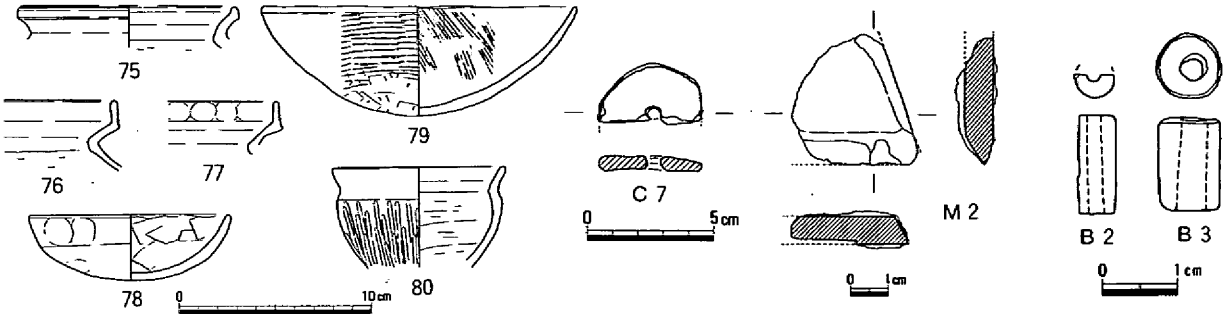
竪穴住居－12は一辺428×397cmの方形を呈し、壁の周囲には壁体溝が巡る。住居中央には周辺に炭の散布する中央穴、西壁際に方形土壙がある。また、西側の方形土壙へ開くようにベッド状の高い段があり、段裾の位置に柱穴P1～P4がある。断面観察から１回の建て替えがあると思われる。出土遺物は甕**75**～**77**、鉢**78**～**80**、土製紡錘車**Ｃ７**、鉄製品**Ｍ２**、碧玉製管玉**Ｂ２**・**Ｂ３**がある。鉄製品**Ｍ２**は錆の状況から鋳造品と思われる。竪穴住居－13は南辺のみの検出だが、南辺322cmを測る方形を呈する柱穴を持たない住居である。壁の周囲には壁体溝が巡る。出土遺物は壺**81**・**82**、銅鏃**Ｍ３**、砥石**Ｓ３**がある。このうち壺**81**は大型の破片ではあるが混入品であろう。竪穴住居－14は南側の壁体溝のみ検出したが、南辺213cmの方形を呈する柱穴を持たない住居である。出土遺物はない。竪穴住居－15は最古の住居で、西側を溝－２で大きく削平されている。東辺では壁裾に壁体溝を検出したが北辺では検出できなかった。住居のほぼ中央に炭、焼土を含んだ中央穴を確認し、柱穴はP6・P7の２基を検出した。出土遺物はない。

これらの住居は出土遺物が少ないため時期は明確でないが、伊・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ期の間で営まれていると思われる。

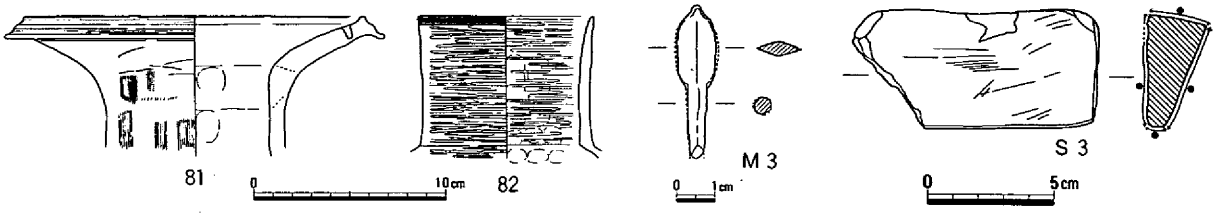


1．黒褐色微砂〈住－12埋土〉
2．黄灰色微砂〈住－12埋土〉
3．黄灰色微砂
4．黄灰色微砂
5．黄褐灰色微砂〈住－13埋土〉
6．黄灰色微砂〈住－13壁体溝埋土〉
7．褐灰色微砂〈住－13中央穴埋土〉

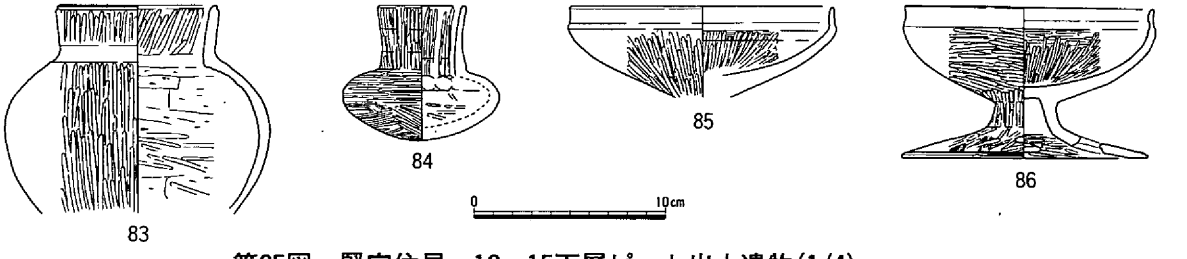
第22図　竪穴住居－12～15平・断面と変遷(1/80・1/200)



第23図　竪穴住居－12出土遺物(1/1・1/2・1/3・1/4)



第24図　竪穴住居－13出土遺物(1/2・1/3・1/4)



第25図　竪穴住居－12～15下層ピット出土遺物(1/4)

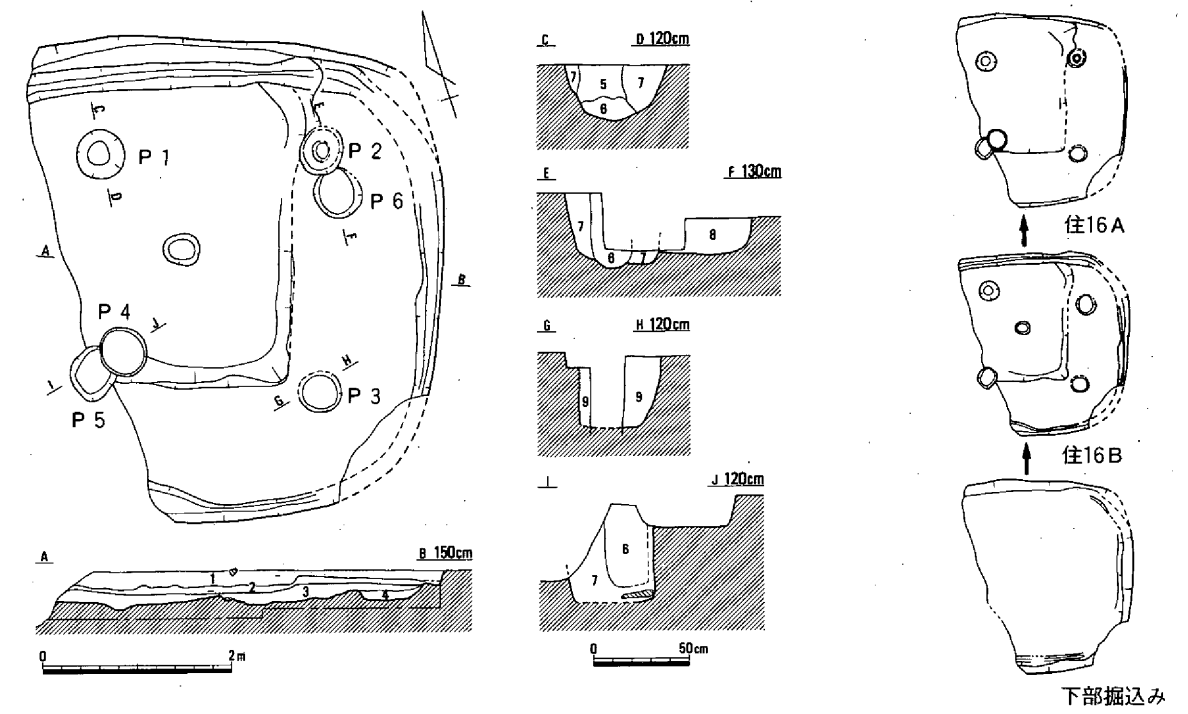
また、これらの住居との直接的な関連は明らかでないが、竪穴住居17～19の下層で検出したP15と同様のピットが、P5の下層に存在していた。このピットの底面には礎板と土器**83**～**86**が見られ、他のピットと組んで建物になるのか特殊な用途を持ったピットであったと推定される。　(杉山)

竪穴住居－16（第26図，図版４）

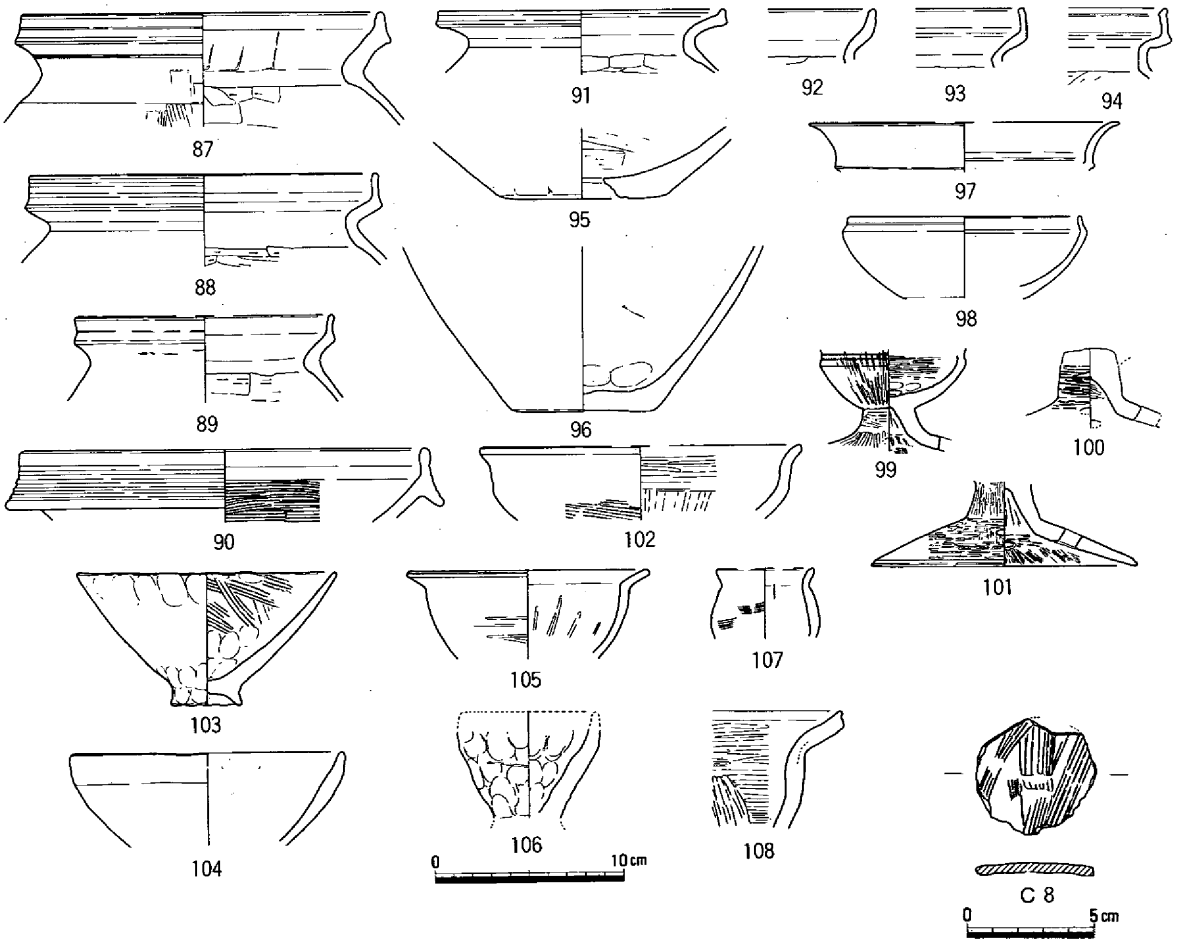
23Ｐ・Ｑ区に位置し、西側を溝－２によって削平された状況で検出した。平面形は方形を呈し、１回の建て替えが見られる。新住居の16Ａは東辺514cmを測り、床の東・南側はＬ字形に中央より８cmほどベッド状に高くなっている。柱穴はP1～P3・P5の４本柱で、P5の底面には礎板が敷かれている。旧住居の16Ｂは東辺432cmで16Ａより一回り小さい。壁の周囲には壁体溝が巡り、東・南側の床はＬ字形に中央より約８cmほどベッド状に高くなっている。柱穴はP1・P3・P5・P6の４本柱で中央に約４cmの深さの浅い中央穴を持つ。これらの住居の下部に旧住居16Ｂの床面から３～17cmの厚さで第３・４層が堆積している。これは底面が水平でなく、この埋土から出土した遺物と住居出土の遺物に時期差が見られないことから、住居の下部構造と判断される。住居の床を築く前に一旦掘り込みをして床を造っていることから、単に整地を目的とするだけでなく除湿などに機能していたと推測される。

出土遺物は新旧の住居で分離することはできなかった。**87**～**89**・**91**～**96**は甕、**90**は壺か器台、**97**～**101**は高杯、**102**～**108**は鉢である。**95**の底部は焼成後に穿孔している。**Ｃ８**は土器を転用した円板である。

住居の時期は、出土遺物から伊・弥・後Ⅳ期と考えられる。　(杉山)



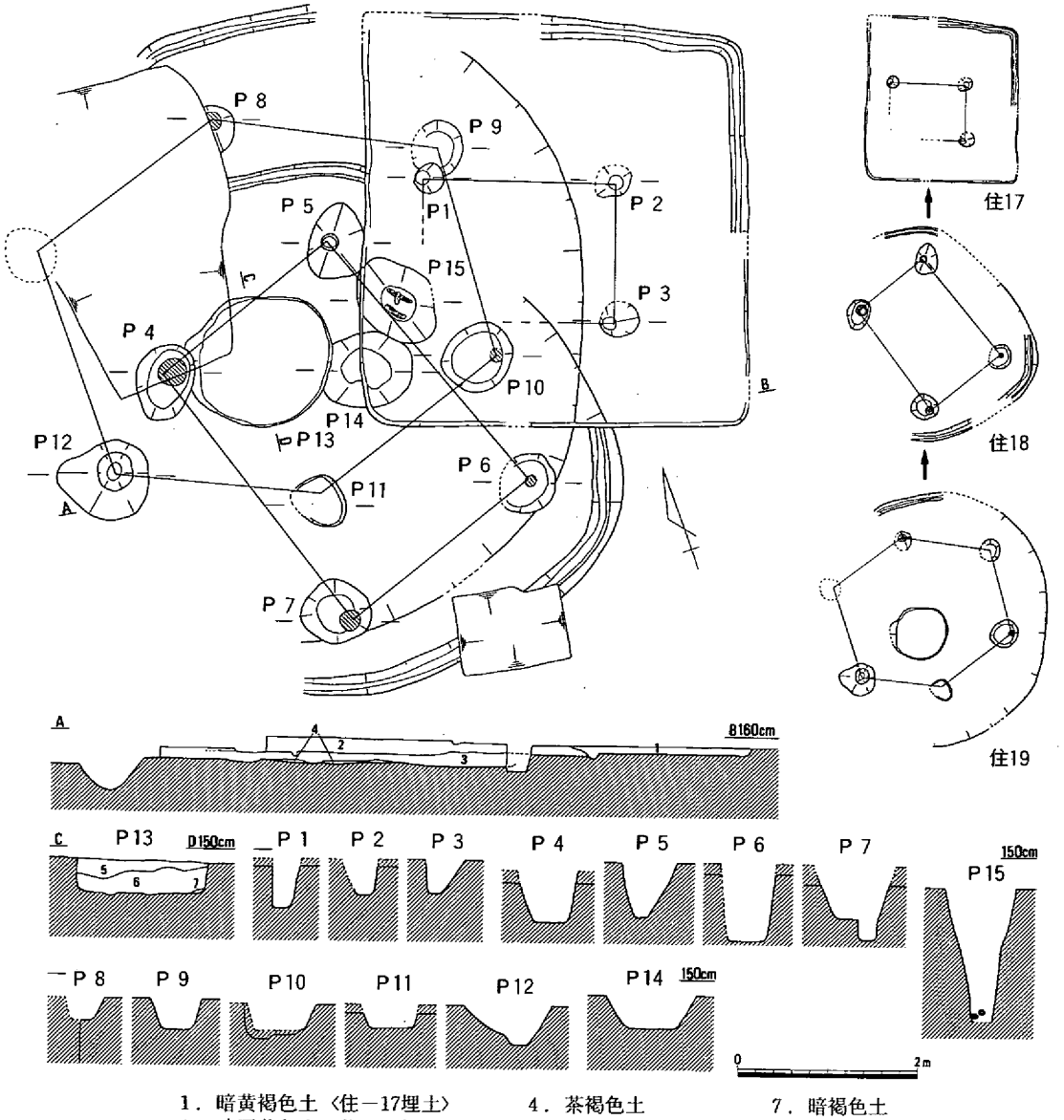
1．にぶい黄褐色土〈住－16Ａ埋土〉
2．灰褐色土－焼土含〈住－16Ｂ埋土〉
3．黄褐色土〈造成土〉
4．灰黄褐色微砂質土〈造成土〉
5．黒褐色微砂質土
6．黒褐色微砂質土
7．黄褐色微砂質土
8．黒褐色土
9．茶褐色微砂質土



第26図　竪穴住居－16平・断面と変遷(1/40・1/80・1/200)及び出土遺物(1/3・1/4)

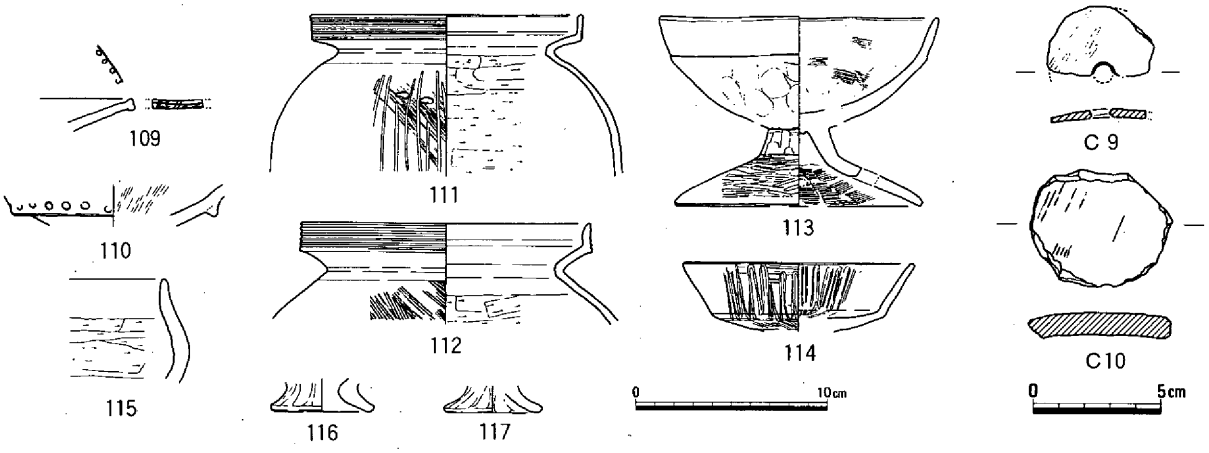
竪穴住居－17～19（第27～32図，図版４・10・19）

検出された遺構は24Ｐ区に所在する。24Ｐ区は調査区の東側に位置し、安定した微高地上に立地する遺構である。検出された竪穴住居－17～19は多数の柱穴や住居跡の切り合いによって複雑な様相を呈しており、調査は困難を極めた。以下、順次遺構の概要を述べる。竪穴住居－17は最上面で検出された平面が方形を呈する住居跡である。規模は長辺が4.58ｍ、短辺が4.20ｍを測り、ほぼ正方形に近い平面形態である。深さは検出面から５～10㎝残存していた。床面はほぼ平坦で、中央部付近には厚さ１～２㎝の炭層が確認された。壁体溝は図示したように北東部で検出されたが、他では明瞭に検出できなかった。柱穴は３本(P1～P3)確認できた。４本目の柱の位置は近代の土壙があり、不明であった。なお、床面の海抜高は1.40ｍである。出土遺物や住居の平面形態からみて、時期は伊・古・前Ⅰ期に比定される。竪穴住居－18は平面形態が楕円形を呈すると考えられる住居跡である。残存状況からみて、規模は５×６ｍの大きさと推定され、深さは検出面から10～20㎝残存していた。床面は

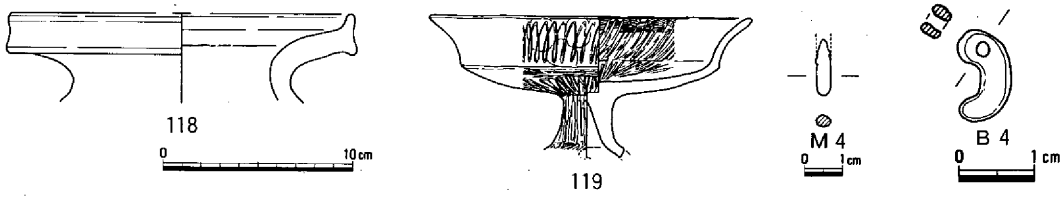


１．暗黄褐色土〈住－17埋土〉　４．茶褐色土　７．暗褐色土
２．暗灰黄色土〈住－18埋土〉　５．灰青色土－炭含
３．暗褐色土〈住－19埋土〉　６．黄茶褐色土

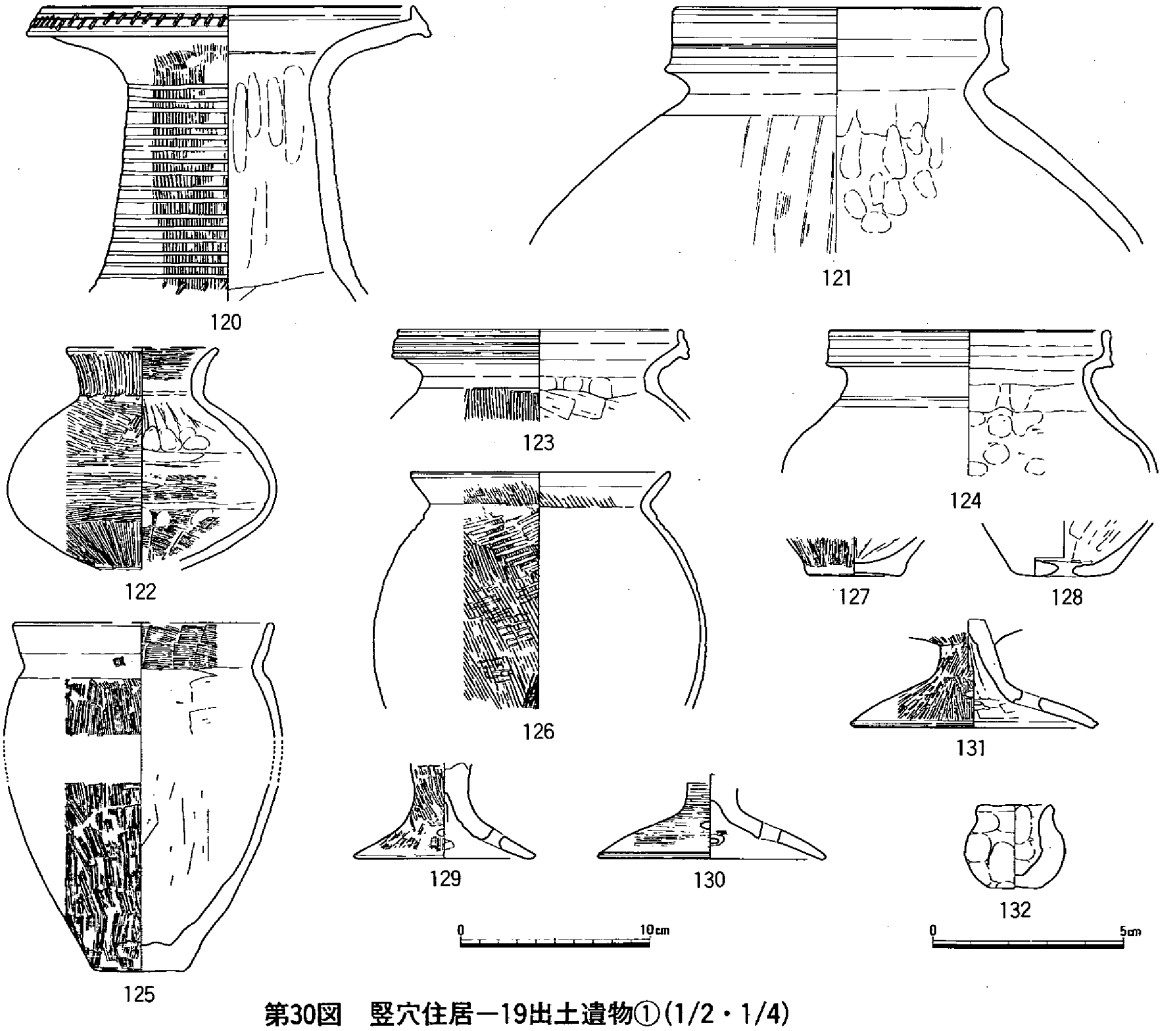
第27図　竪穴住居－17～19平・断面と変遷(1/80・1/200)



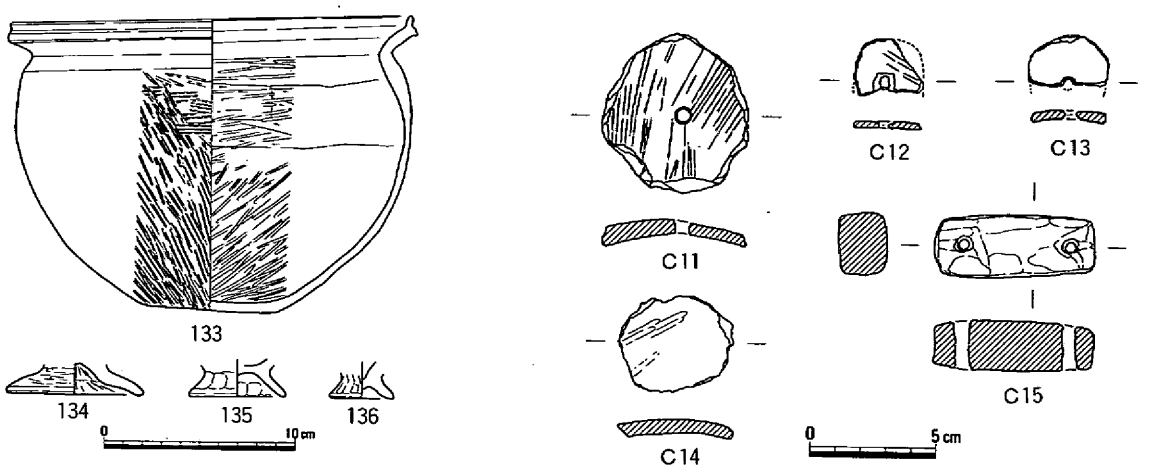
第28図　竪穴住居ー17出土遺物(1/3・1/4)



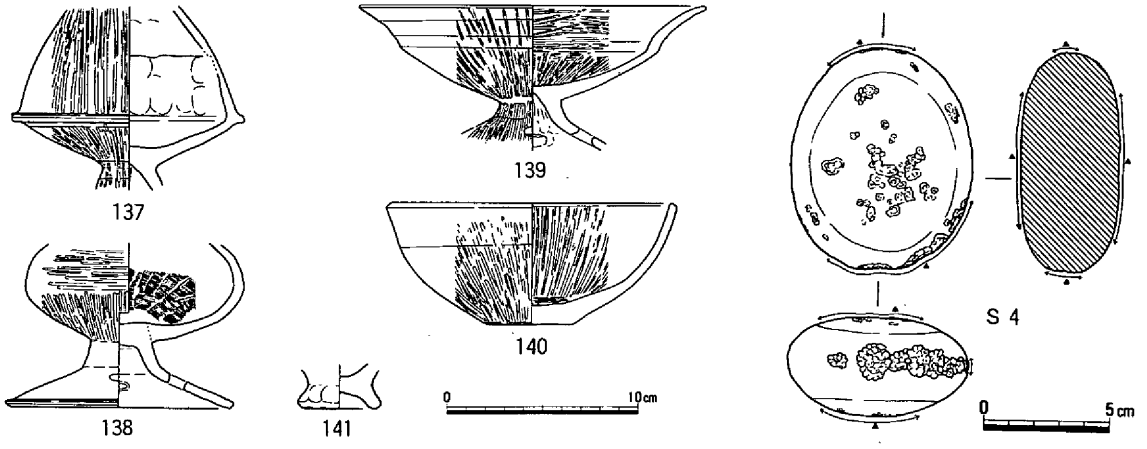
第29図　竪穴住居ー18出土遺物(1/1・1/2・1/4)



第30図　竪穴住居ー19出土遺物①(1/2・1/4)



第31図　竪穴住居－19出土遺物②(1/3・1/4)



第32図　竪穴住居－17～19内P15出土遺物(1/3・1/4)

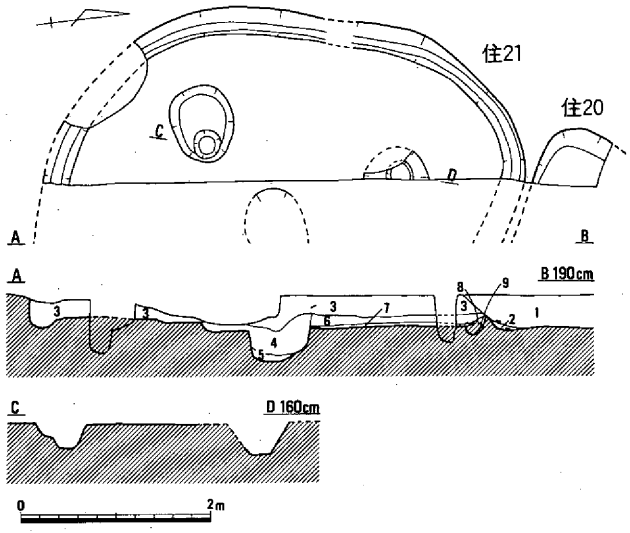
ほぼ平坦である。壁体溝は南側と北東コーナーで検出され、幅15～30cm、深さ３～８cmを測る。主柱穴は４本(P4～P7)と考えられる。遺物は少量であるが、床面から土器**118・119**、埋土中から銅鏃**M４**、勾玉**B４**などが出土している。**B４**は壁体溝の埋土から出土した。石材はメノウである。時期を決める遺物はないが、本住居跡が竪穴住居－17の下層から検出されているため、伊・弥・後Ⅳ期頃に比定されると思われる。竪穴住居－19は住居18の下層で検出された。切り合い関係が著しいため、残存状態が良くなく、平面形態や主柱穴等の検出に困難を極めた遺構である。平面形態は壁体溝や貼り床面の検出によって、ほぼ円形を呈することを確認した。規模は径約７ｍを測る。壁体溝は北側で検出され、幅19～22cm、深さ12.8～16.5cmを測る。主柱穴は６本(P8～P12)と考えられる。床面中央では円形の土壙を検出した。規模は158×140cm、深さは検出面から31～40cmを測り、床面はほぼ平坦である。埋土中には炭、土器が含まれていた。遺物は埋土、床面、柱穴などから出土した。土製品では紡錘車**C11**～**C13**、円板**C14**、土錘**C15**がある。時期は伊・弥・後Ⅲ期に比定される。なお、本遺構に直接関連しないが、径100cm、深さが検出面から150cm、柱痕跡約28cmを測る大型の掘方をもつ柱穴(P15)を検出したことである。掘立柱建物としてまとめることはできなかったが、今後さらに検討すべき遺構であることは付け加えておきたい。　(松本)

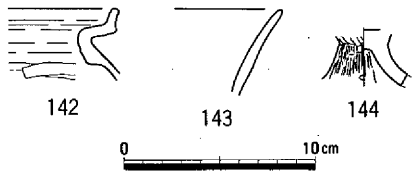
竪穴住居－20・21（第33図）

25Ｒ区北西隅で調査区南東境に位置する。竪穴住居－20は南西隅の一部を検出したのみで全形は不

明だが、おそらく方形に復元されると思われる。竪穴住居－21は隅丸方形に復元されるほぼ西半分を検出した。壁の裾には幅約30cmの壁体溝が巡る。北側の床面は地山上に貼り床層の第７層が約２cmの厚さで見られ、その上に更に第６層で整地して床面を形成している。これら第６・７層は壁体溝の上を覆っている。柱穴は２基確認され、本来的には４本柱になると思われる。また、住居のほぼ中央に中央穴がある。出土遺物には甕**142**、高杯**143**・**144**がある。

これらの遺物から両住居の時期は伊・古・前Ⅰ頃と思われる。　（杉山）





1．暗灰褐色土〈住－20埋土〉
2．褐灰色土〈住－20埋土〉
3．黒褐色砂質土〈住－21埋土〉
4．黒褐色土－炭微含〈住－21中央穴埋土〉
5．灰白色粘質土〈住－21中央穴埋土〉
6．褐灰色砂質土〈住－21整地土〉
7．灰白色粘質土〈住－21貼床土〉
8．黄灰褐色土〈住－21壁体溝埋土〉
9．黒色粘質土

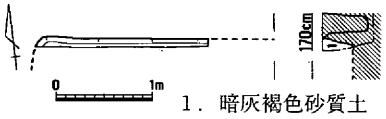
第33図　竪穴住居－20・21平・断面（１/80）と出土遺物(1/4)

竪穴住居－22（第34図）

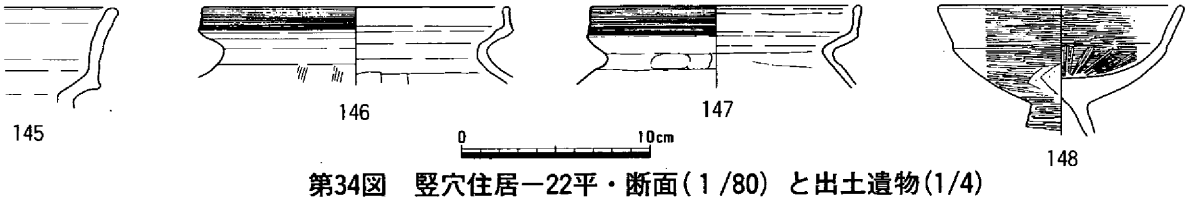
25Ｒ区西隅で調査区南東隅で、住居の北東隅の一部のみを検出した。

検出面からの深さは約32cmで床面の高さは海抜128cmで、壁の裾に壁帯溝はない。出土遺物は壺**145**と、口縁外面に櫛描沈線がみられる甕**146**・**147**、高杯**148**がある。甕は**146**は口径16cm、**147**は13.8cmを測る。高杯**148**は口径12.7cmを測る。

時期は出土遺物から伊・古・前Ⅰ期と判断される。　（杉山）



1．暗灰褐色砂質土



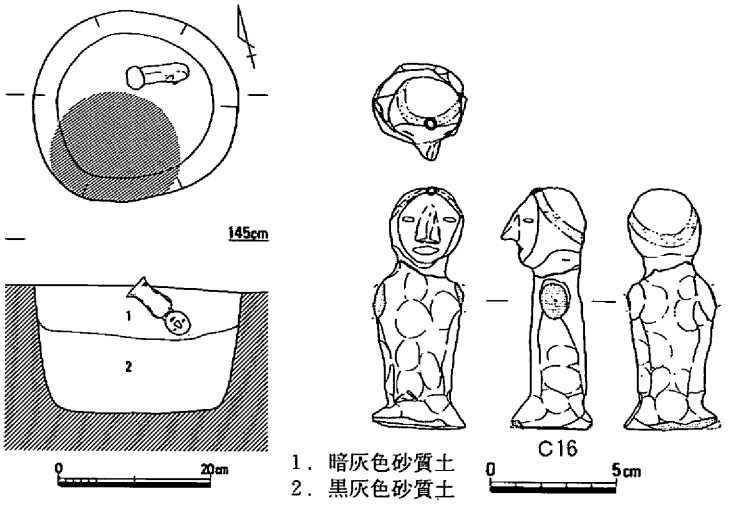
第34図　竪穴住居－22平・断面（１/80）と出土遺物(1/4)

（３）柱　穴（第35・36図，図版５・10・19）

柱穴－１は、24Ｏ区で竪穴住居－６の東、竪穴住居－８のすぐ南西に位置する。柱痕跡を掘り方より先に調査してしまったが、掘り方は径27cmの円形で柱痕跡は径約17cmを測る。埋土は２層に分層され、人形土製品**Ｃ16**は第２層を埋めた後、その上面にやや西に倒れ気味に倒立した状態で埋められていた。土製品の頭部と第２層上面の間には少量だが炭化物が見られた。柱痕跡との関係は明確でないが、土層の状況から柱を埋める際に同時に埋められたと判断している。土製品は両腕が残っておらず、

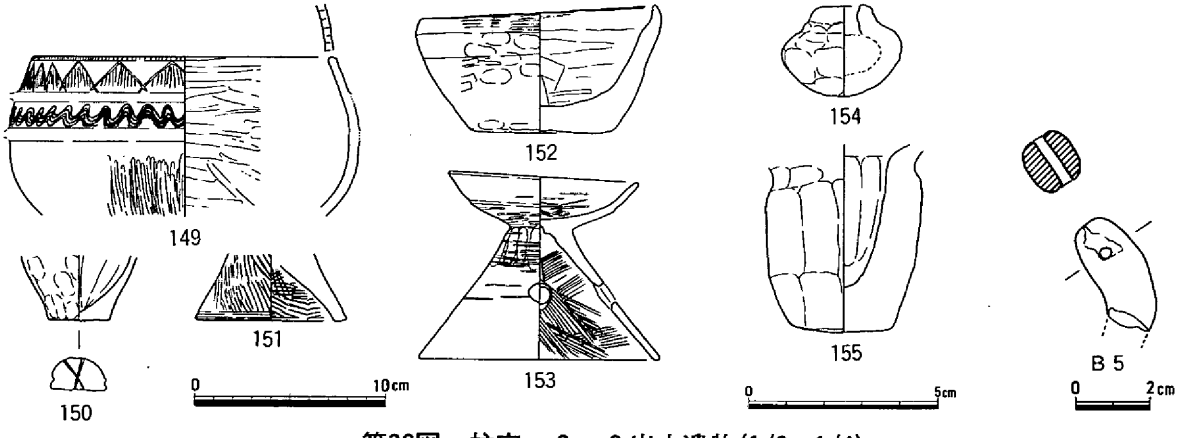
また、頭部に焼成時の橙色の変色が帯状に見られることから、もとは頭部に付属品があったものと推察されるが、これも残っていない。これらのことから地鎮行為か何らかの祭祀を意図して、破損したものを埋めたと考えられる。共伴土器がないため時期は不明確だが、周辺の状況から弥生時代後期後半頃と考えられる。

柱穴－２から出土した**149**は精製粘土を用いた鉢で、鋸歯文と波状文の間には２条の貼付け突帯がある。



第35図　柱穴－１平・断面(1/10) と出土遺物(1/3)

柱穴－３から出土した甕**150**は底部外面に「×」が刻まれている。柱穴－４から出土した**151**は、東海産の「く」字状口縁の台付き甕の台である。**152**は柱穴－５から出土したほぼ完形の鉢である。**153**は柱穴－６から出土した完形の小形器台で、柱穴中に倒立して埋められていた。**154・155**は柱穴－７・８から出土したミニチュア土器の壺と甕である。**Ｂ５**は柱穴－９から出土した土製勾玉である。　　(杉山)



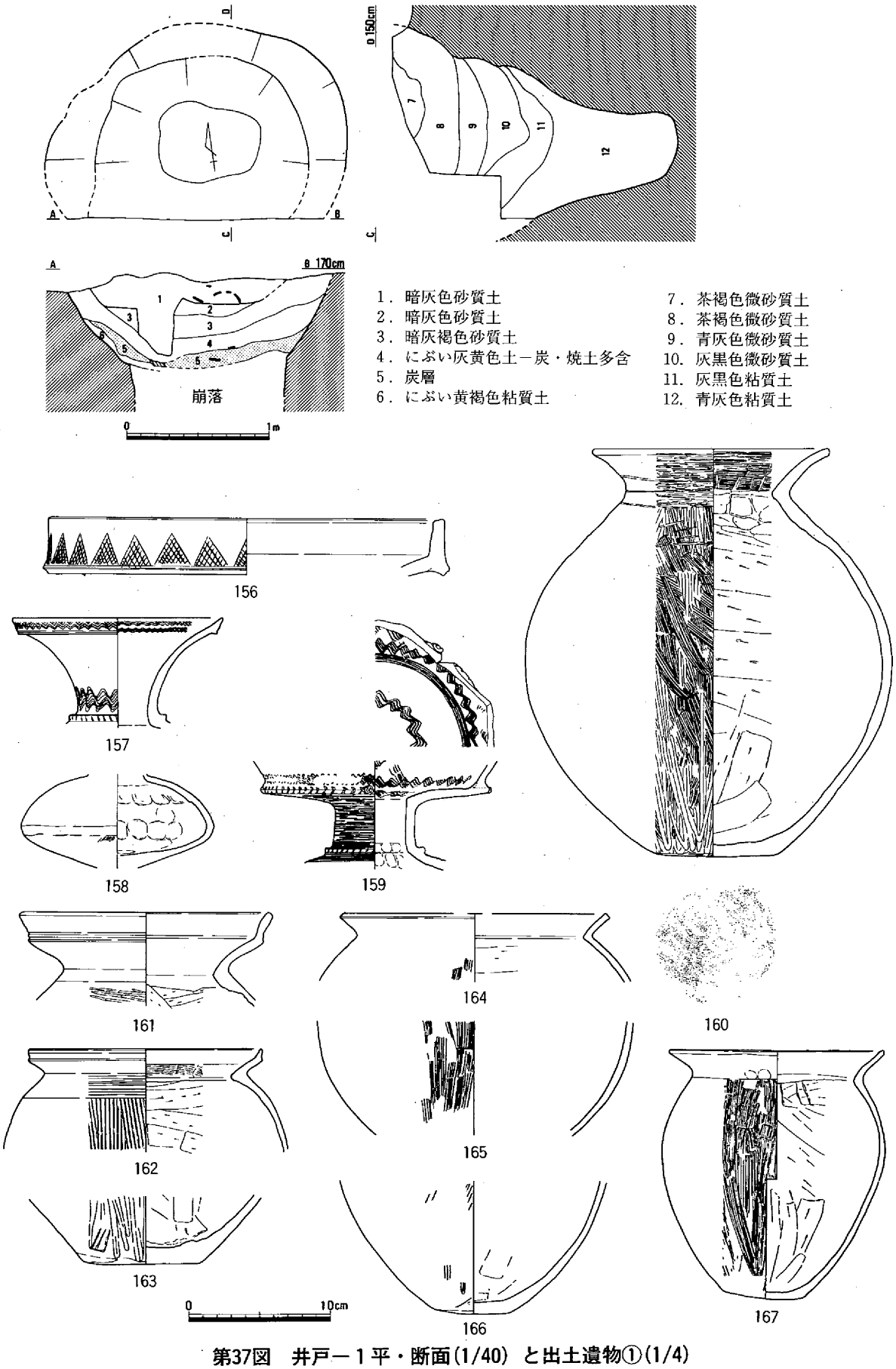
第36図　柱穴－２～９出土遺物(1/2・1/4)

（４）井　戸

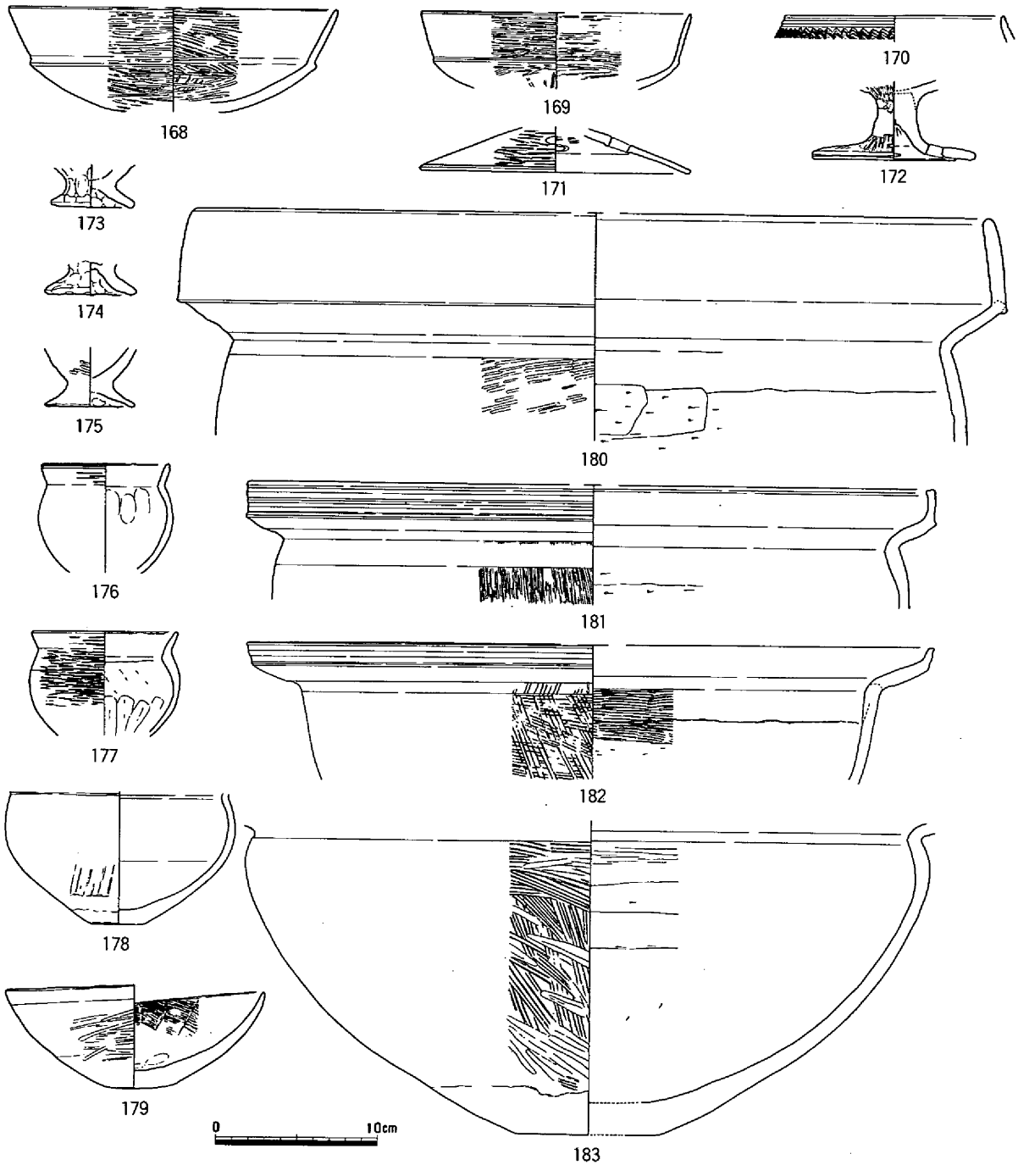
井戸－１（第37・38図，図版10）

23Ｑ区の調査区南端に位置し、土壙－31と竪穴住居－16を壊して築かれている。南半は調査区外だが、平面形は直径約210cm前後の楕円形を呈す。断面は上面から約50cmほどは緩やかに下がっていき、そこからほぼ垂直な壁をもって深さ228cmまで下がって底に至る。埋土は12層に分層されるが、第１層は後世のピットの埋土である。壁の傾斜の変わる高さで第５層の炭層が堆積し、この上層の第４層で土器が多くみられたことから第５層上面で何らかの行為が行われたと考えられる。第５層以下の堆積土のうち第11・12層は非常に粘性の強い粘質土であることから自然堆積層と判断される。

出土遺物は壺**156～161**、甕**162～167**、高杯**168～172**、鉢**173～183**がある。大半は第４層で出土したが完形に復元できるものは少ない。**159**は畿内系の二重口縁壺で口縁部の内外に波状文が施され、一



第37図　井戸－１平・断面(1/40) と出土遺物①(1/4)



第38図　井戸ー1出土遺物②(1/4)

次口縁の端部に刻みと円形浮文が付く。完形の壺**160**は底面から約20cmほど浮いた状態で出土した。全体に黄褐色を呈し、底部外面に細かいハケメが残る。**164**と**165**は同一個体の球胴の甕である。**173**～**175**は製塩土器の脚部である。大形鉢の**180**は淡黄色を呈し、口縁部をやや内傾気味に大きく拡張しており、体部外面にはタタキの痕跡が観察される。胎土に5㎜前後の石英粒を多く含む。備前地域ではあまり見られない器形であることから搬入品の可能性が高い。

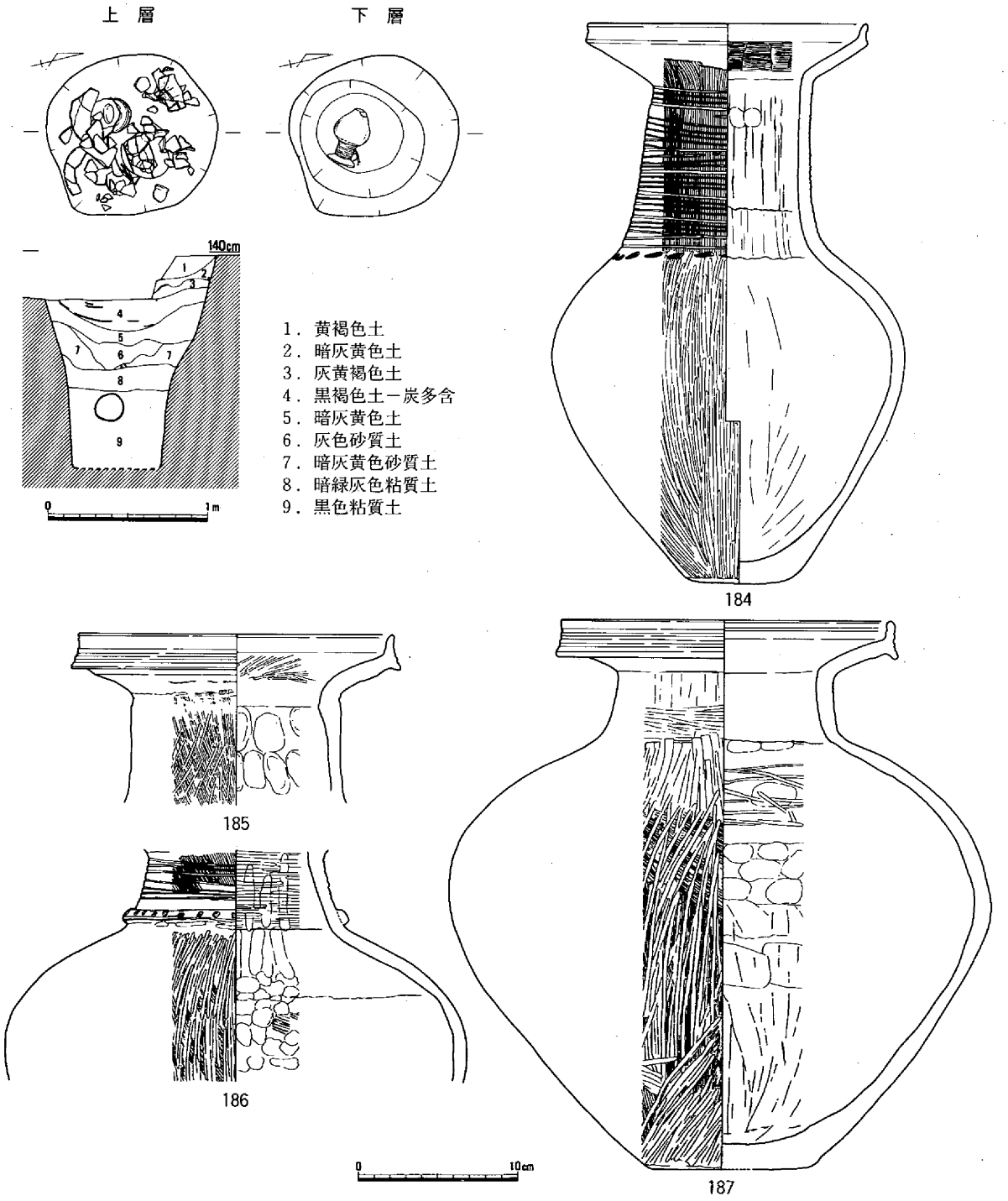
土器以外の遺物としては、底面付近の埋土に二枚貝が多く見られた。サンプルの採取はできなかったが、アナダラ属の貝が含まれていた。

井戸の使用時期は、出土遺物と遺構の切り合い関係から伊・古・前Ⅰ期と判断される。　(杉山)

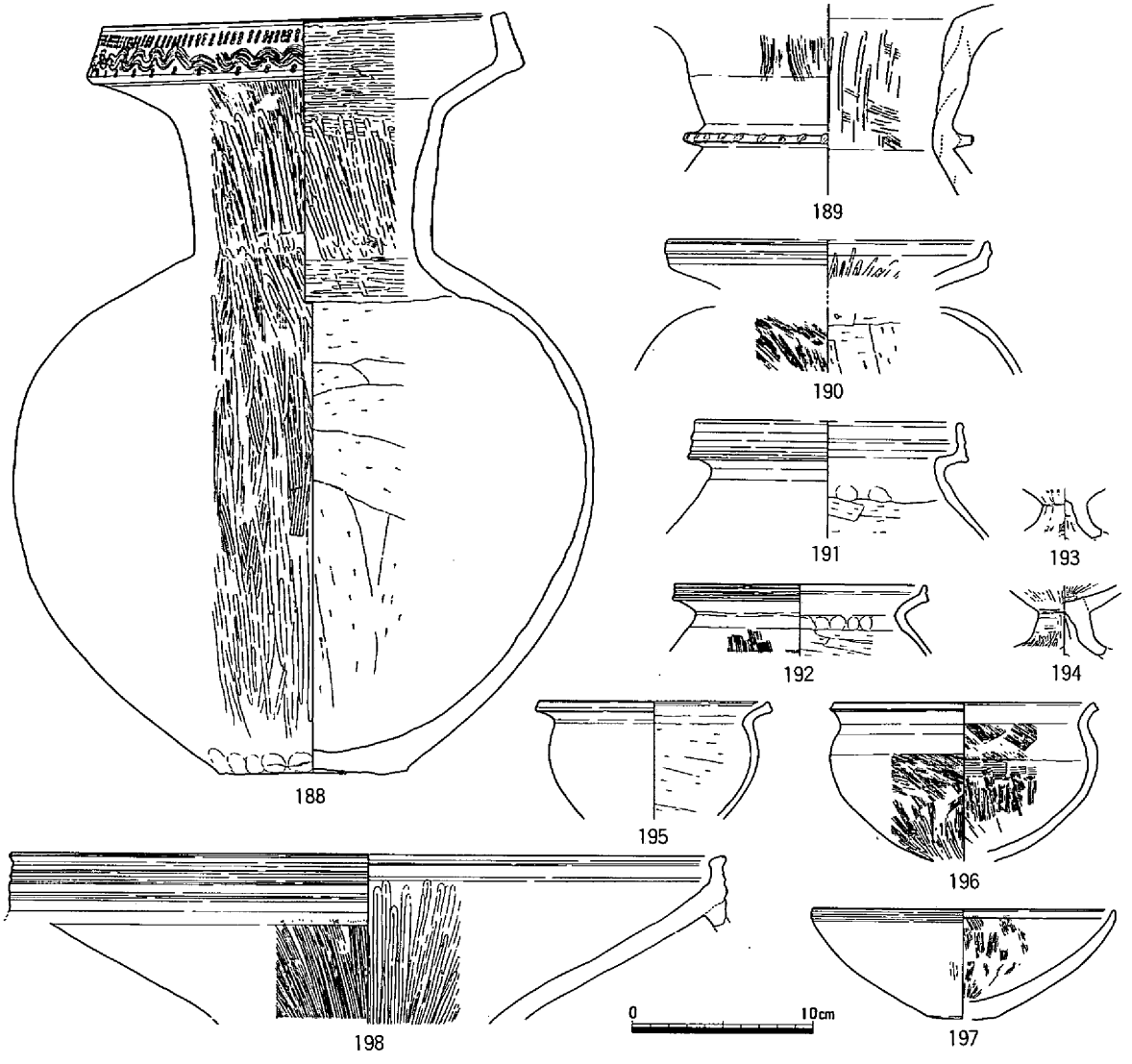
井戸－２（第39・40図，図版５・11）

24Ｐ区の南部中央で、竪穴住居－18の南東に近接している。上部は試掘トレンチで削平されているが、平面形は直径107×110cmの円形を呈す。断面は緩やかに傾斜した壁が中程で垂直に変わり平らな底に至る。底面は第９層の中程に壺**184**が横転していたが、その下位にさらに同質同色の軟弱な粘質土が堆積しており、検出面から深さ約133cmで第９層と比べて堅くしまった面がみられたことから、これを底面と判断した。埋土は９層に分層され、第４層中には炭と焼土が多く見られた。

出土遺物は壺**184**～**189**、甕**190**～**192**、高杯**193**・**194**、鉢**195**～**197**、器台**198**があり、壺**184**以外は第



第39図　井戸－２平・断面(1/40) と出土遺物①(1/4)



第40図　井戸－２出土遺物②(1/4)

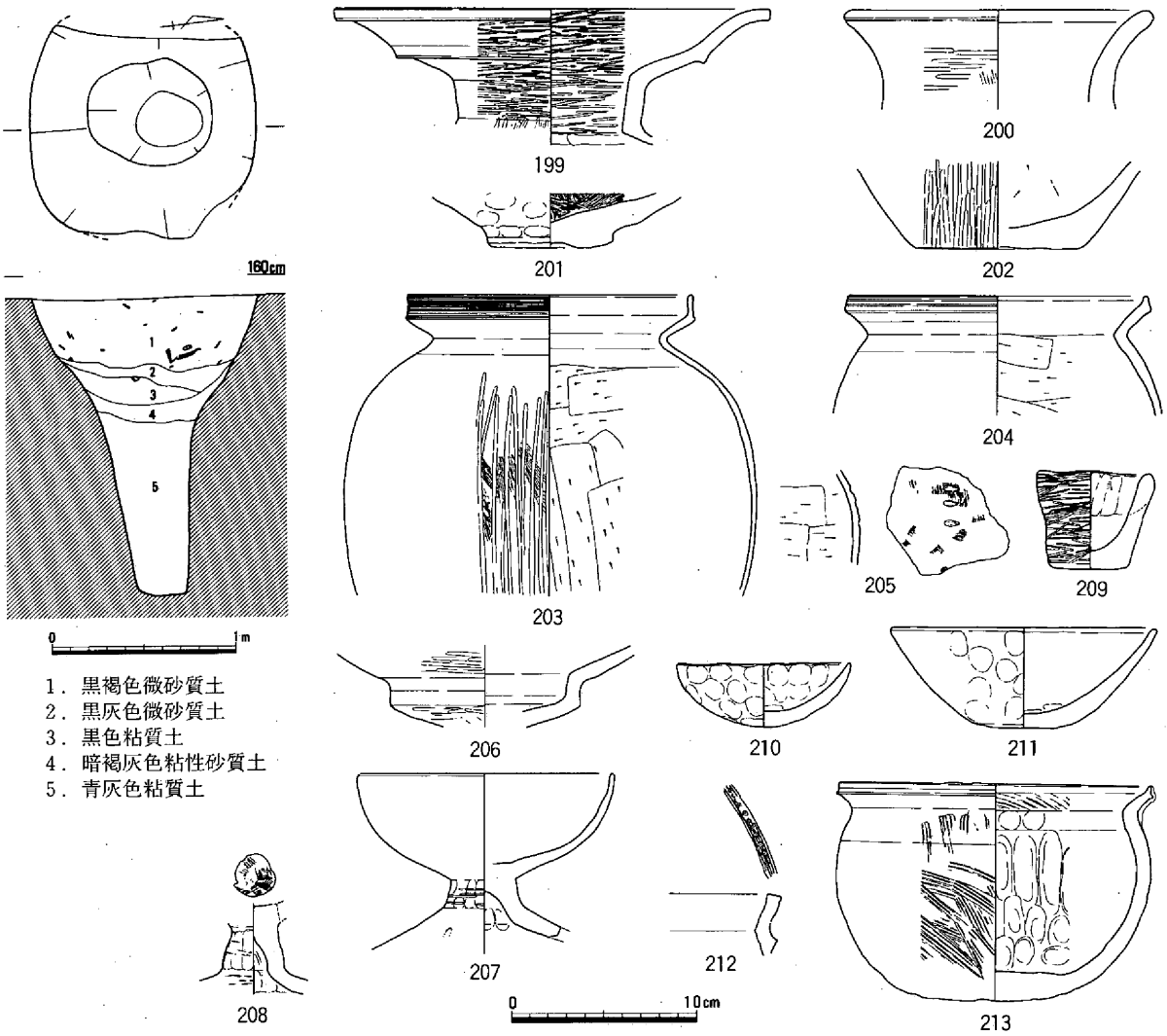
１～４層中で出土した。壺**184**は完形で底面から約30cm浮いた状況で出土した。この壺を取り上げた際にその体部部分には縄が籠状に編んだ状況で検出され、この籠にくるんで釣瓶として使用していたと推察される。第４層下面で検出された土器のうち、壺**187**・**188**は完形に復元され、据えられていたものが倒れてつぶれたような状況で出土した。**188**の口縁部には粗い波状文の上下に竹管文を施している。器台**198**は口縁部がほぼ完形に復元されるが、筒部以下の破片はまったく出土していない。この器台の脚部と思われる破片は土壙－29、性格不明遺構(**479**)と土器溜り－４から出土している。高杯**193**・**194**は短脚の小片で混入品の可能性がある。

井戸の使用時期は、出土遺物から伊・弥・後Ⅲ期と判断される。　(杉山)

井戸－３（第41図，図版11）

24Ｑ区東部に位置し、土壙－32～34と切り合い関係をもって検出された。

平面形は直径123cmの円形を呈す。断面は深さ50cmほどまで緩やかに傾斜して下がり、そこから深さ163cmまで垂直に下がって平らな底に至る。埋土は５層に分層され、壁の傾斜の変わる高さ以下は厚く第５層が堆積している。



第41図　井戸－３平・断面(1/40) と出土遺物(1/4)

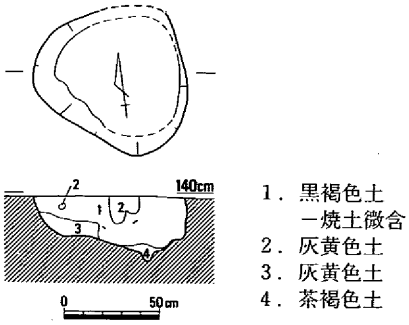
出土遺物の大半は第１・５層から出土したが、図示した遺物のうち**200**・**202**・**208**・**209**～**211**は第５層出土で、その他は第１層出土である。**199**～**202**は壺で、**199**の二重口縁は倒立して出土した。**203**～**205**は甕で、**205**は吉備甕の肩部片で縦に３個の粒状刺突がある。**206**～**208**は高杯、**209**～**212**は鉢、**213**は手焙りである。**212**は小片だが口唇部に刺突が施されている。

井戸の使用時期は、出土土器から伊・古・前Ⅰ期と判断される。　（杉山）

（５）土　壙

土壙－１（第42図）

22Ｏ区北西部で調査区北端に位置し、土壙－２を壊して築かれている。平面形は82×73cmの歪な楕円形を呈し、検出面からの深さは34cmである。埋土は炭と土器を含んだ第１層中に第２・３層がブロックで見られる。また、底面は凹凸が顕著で中央部分に４cm程の深さでピット状の落ち込みが見られる。出土遺物は第１層中に見られたが、大形の



第42図　土壙－１平・断面(1/40)

破片は土壙－２の出土遺物と接合関係があり、本来はこれに帰属すると思われる。

時期は伊・弥・後Ⅱ期と判断される。　(杉山)

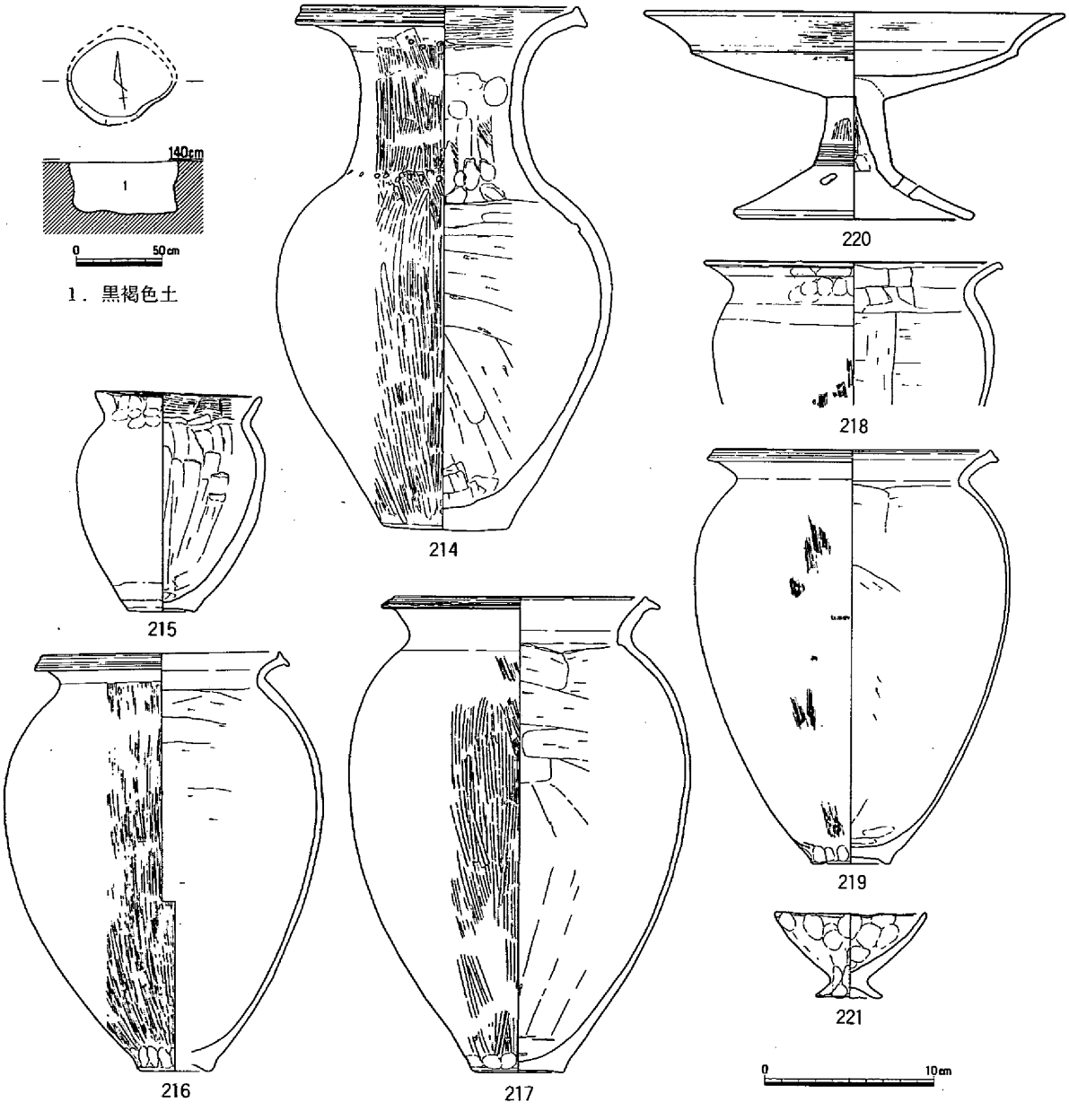
土壙－２（第43図，図版12）

22Ｏ区北西部で調査区北端に位置し、土壙－１によって北側を壊されている。平面形は63×60cm前後の楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmである。断面形はやや袋状を呈し、埋土は黒褐色土の単層で土器が折り重なるように詰まっていた。出土遺物は壺**214**、甕**215**～**219**、高杯**220**、鉢**221**がある。高杯**220**は口径24.5cm，器高12.4cm，脚径13.7cmを測り、３個の透かし穴があく。

時期は出土遺物から伊・弥・後Ⅱ期と判断される。　(杉山)

土壙－３・４（第44図，図版12）

22Ｏ区の北西部で調査区北端に位置し、土壙－３が土壙－４を壊して築かれている。土壙－３の平



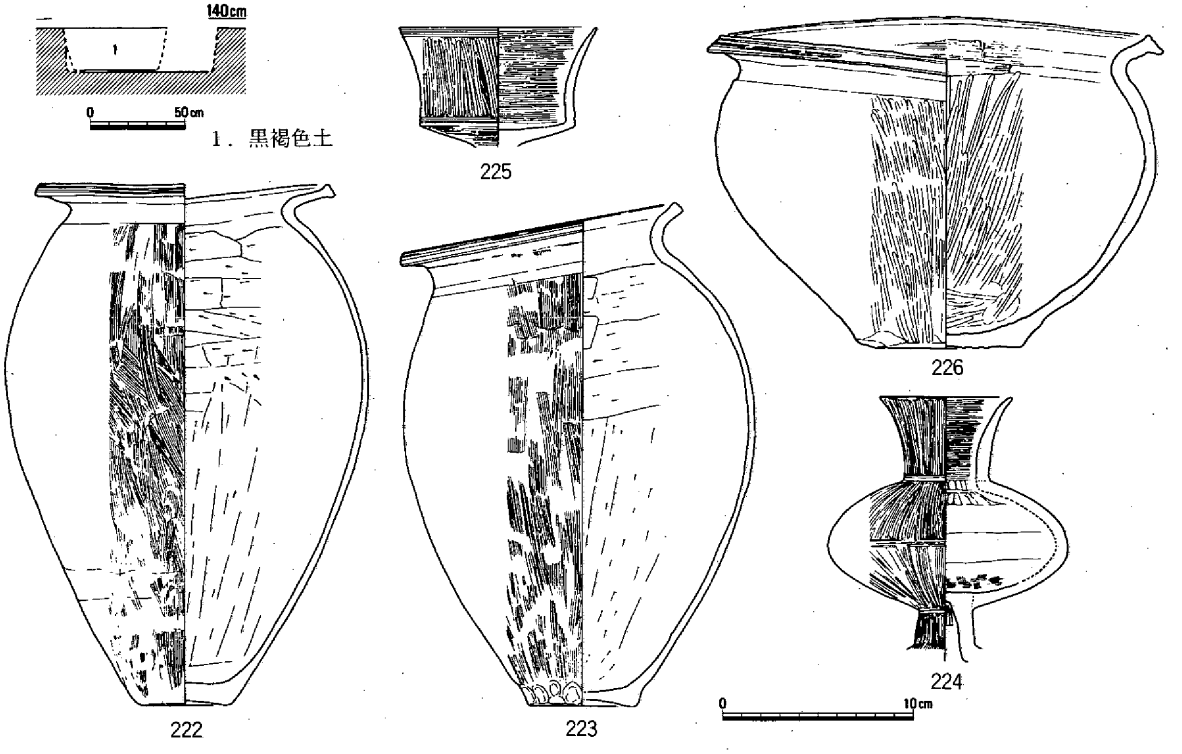
第43図　土壙－２平・断面(1/40) と出土遺物(1/4)

面形が50×54cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは22cmである。土壙－４の平面形は80×54cmの方形を呈し、検出面からの深さは27cmである。出土遺物は、甕**222**・**223**、台付壺**224**、高杯**225**、鉢**226**がある。**225**以外は土壙－４から出土した。**222**・**223**・**226**は非常に歪である。

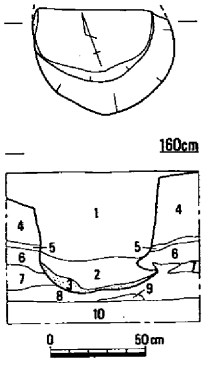
時期は両者とも伊・弥・後Ⅱ期と判断される。　（杉山）

土壙－５（第45図，図版１）

22Ｏ区のほぼ中央部で、北側を試掘トレンチＴ２によって掘削されている。平面形は径76cmほどの円形と推察され、検出面からの深さは63cmを測る。埋

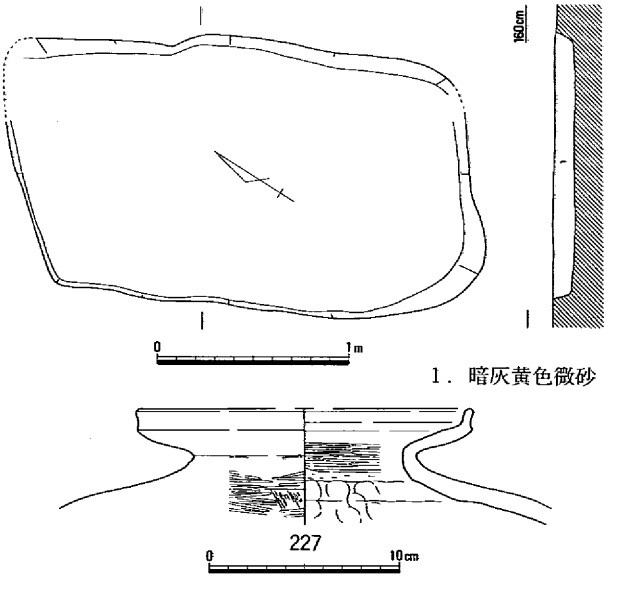


第44図　土壙－３・４平・断面(1/40) と出土遺物(1/4)



1．褐灰色粘性砂質土
2．褐灰色土
3．炭層
4．黄褐色粘性砂質土
5．明赤褐色砂質土
6．黄褐色粘性砂質土
7．灰色砂
8．灰色粘質土
9．灰色粘質土
10．灰色粘質土

第45図　土壙－５平・断面(1/40)



第46図　土壙－６平・断面(1/40) と出土遺物(1/4)

土は３層からなり、第３層は炭層である。周辺にまとまるような柱穴は検出されなかったが、竪穴住居の中央穴になる可能性が高い。出土遺物がないため時期は明らかでないが、土壙－６との関係から伊・弥・後Ⅳ期頃と考えられる。　(杉山)

土壙－６（第46図）

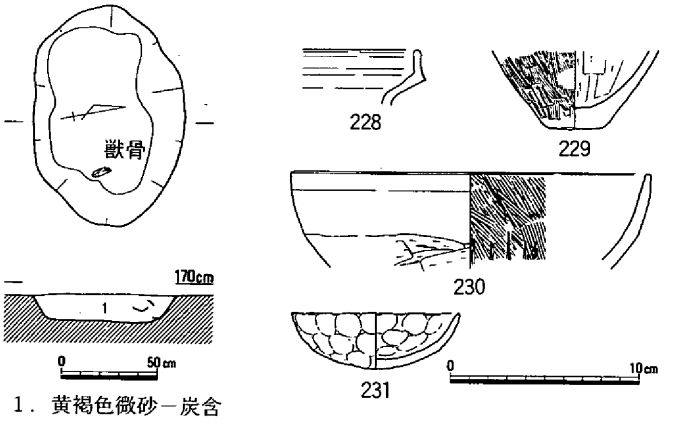
22Ｏ区のほぼ中央部で、土壙－５の上面に位置する。平面形は240×148cmほどの東西に長い不整方形を呈し、検出面からの深さは８cmと浅い。出土遺物は壺**227**がある。肩が大きく張っているが歪みの可能性もある。時期は伊・弥・後Ⅳ期頃と判断される。　(杉山)

土壙－７（第47図）

22Ｏ区の南東部に位置する。平面形は117×79cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。炭を含んだ埋土を除去した後に底面の東側で哺乳類の四肢骨片があった。出土遺物は甕**228**・**229**、鉢**230**・**231**がある。**228**は口縁外面に10条の櫛描沈線が見られる。時期は出土遺物から伊・古・前Ⅰ期と判断される。　(杉山)

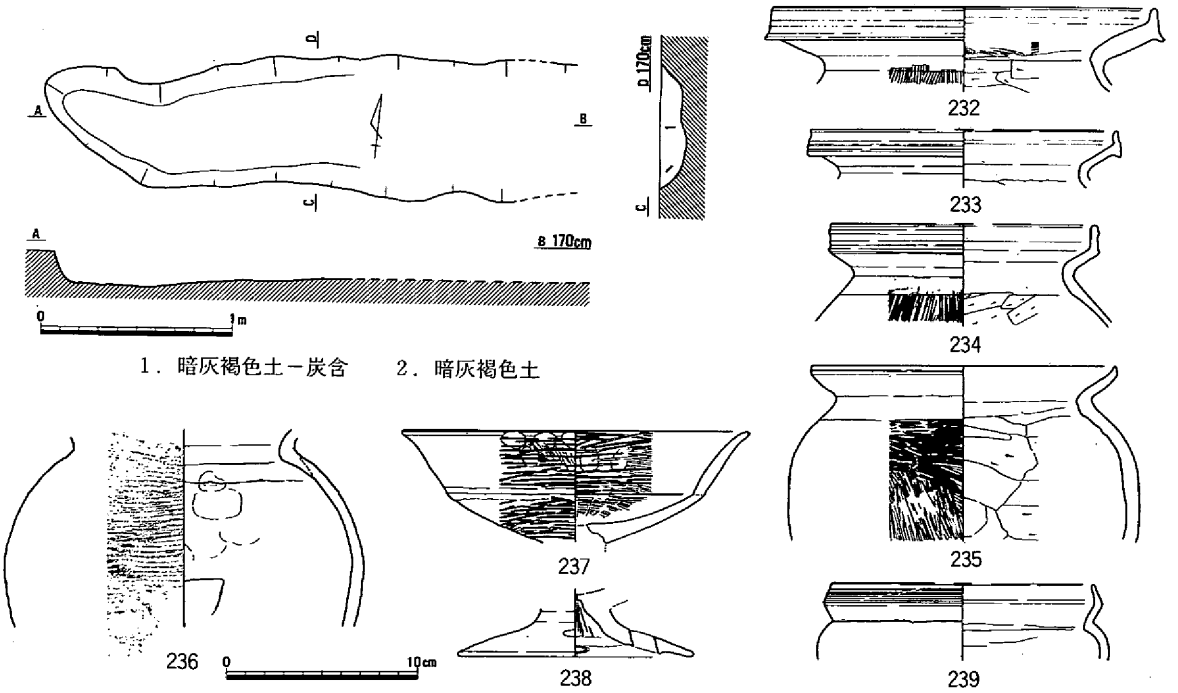
土壙－８（第48図）

22Ｐ区の北東に位置する。東側は検出できなかったが、280×66cmの東西に長い溝状を呈し、検出面からの深さは17cmである。出土遺物は壺**232**・**233**、甕**234**～**236**、高杯**237**・**238**、鉢**239**がある。甕**236**は表面が灰白色で外面には細かいタタキが見られることから搬入品と思われる。時期は出土遺物から伊・弥・後Ⅳ期と判断される。(杉山)



1．黄褐色微砂－炭含

第47図　土壙－７平・断面(1/40) と出土遺物(1/4)



1．暗灰褐色土－炭含　　2．暗灰褐色土

第48図　土壙－８平・断面(1/40) と出土遺物(1/4)

土壙－９（第49～51図，図版13）

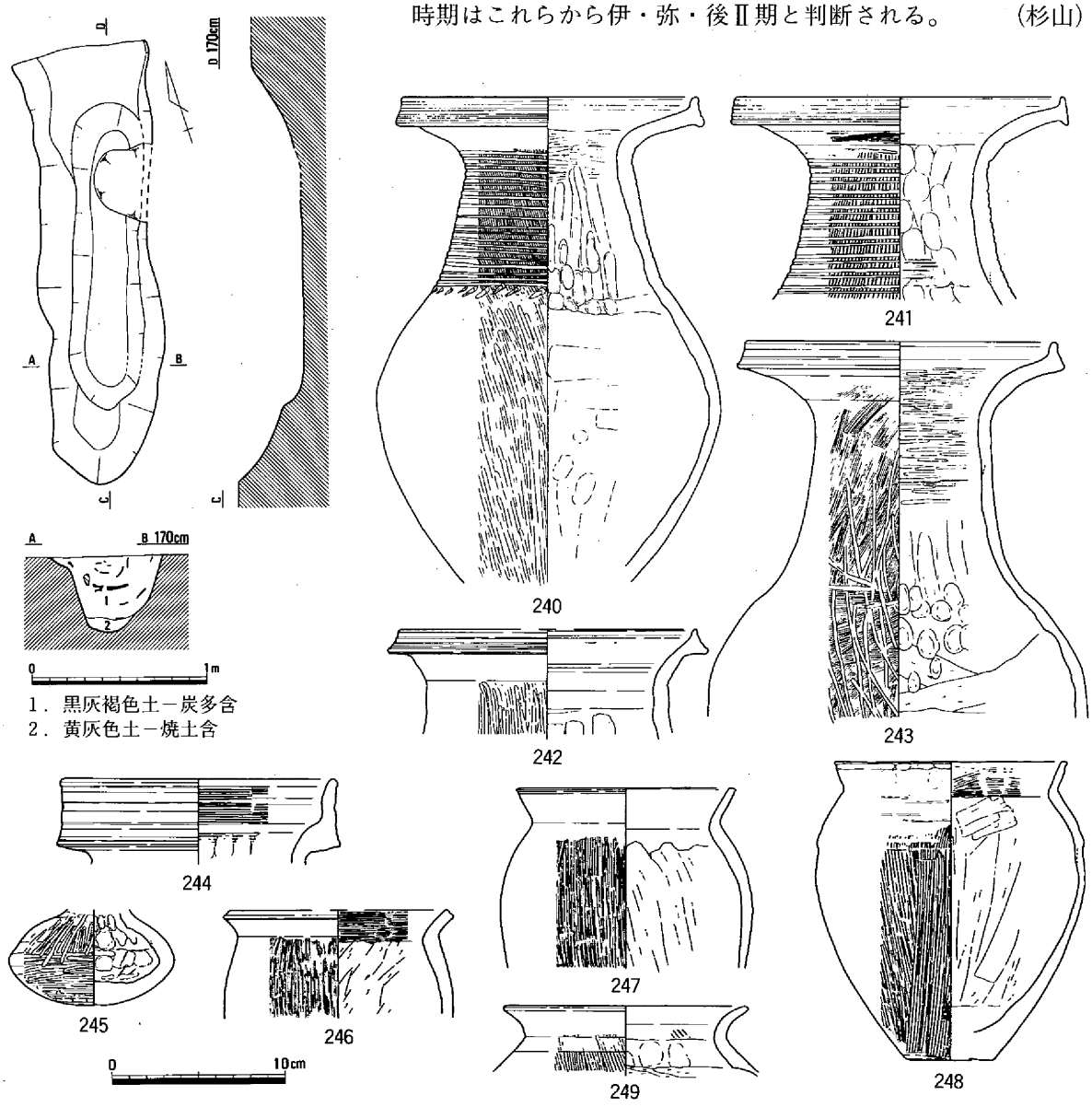
22Ｐ区の中央部に位置し、北側を試掘トレンチＴ１によって掘削されている。平面形は251×61cmで南北に長い溝状を呈し、検出面からの深さは中央部が一段深くなっていて44cmを測る。埋土はこの段部分を境にして深い部分に第２層が堆積し、その上に多量の土器と焼土・焼石・炭と獣骨片を含んだ第１層が堆積している。出土遺物は第１層を中心に多量の土器が出土している。**240**～**245**は壺、**246**～**271**は甕である。**263**は口径16.6cm，器高17.1cm，底径7.0cmを測り形状としては鉢に近いが、外面に被熱痕と煤が見られることから甕と判断した。**272**～**279**は鉢、**280**～**288**は高杯である。**289**は透かし孔が５個あき、柱部が円柱状で中空であることから器台と判断される。

時期は土器に新旧が見られるものの伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）

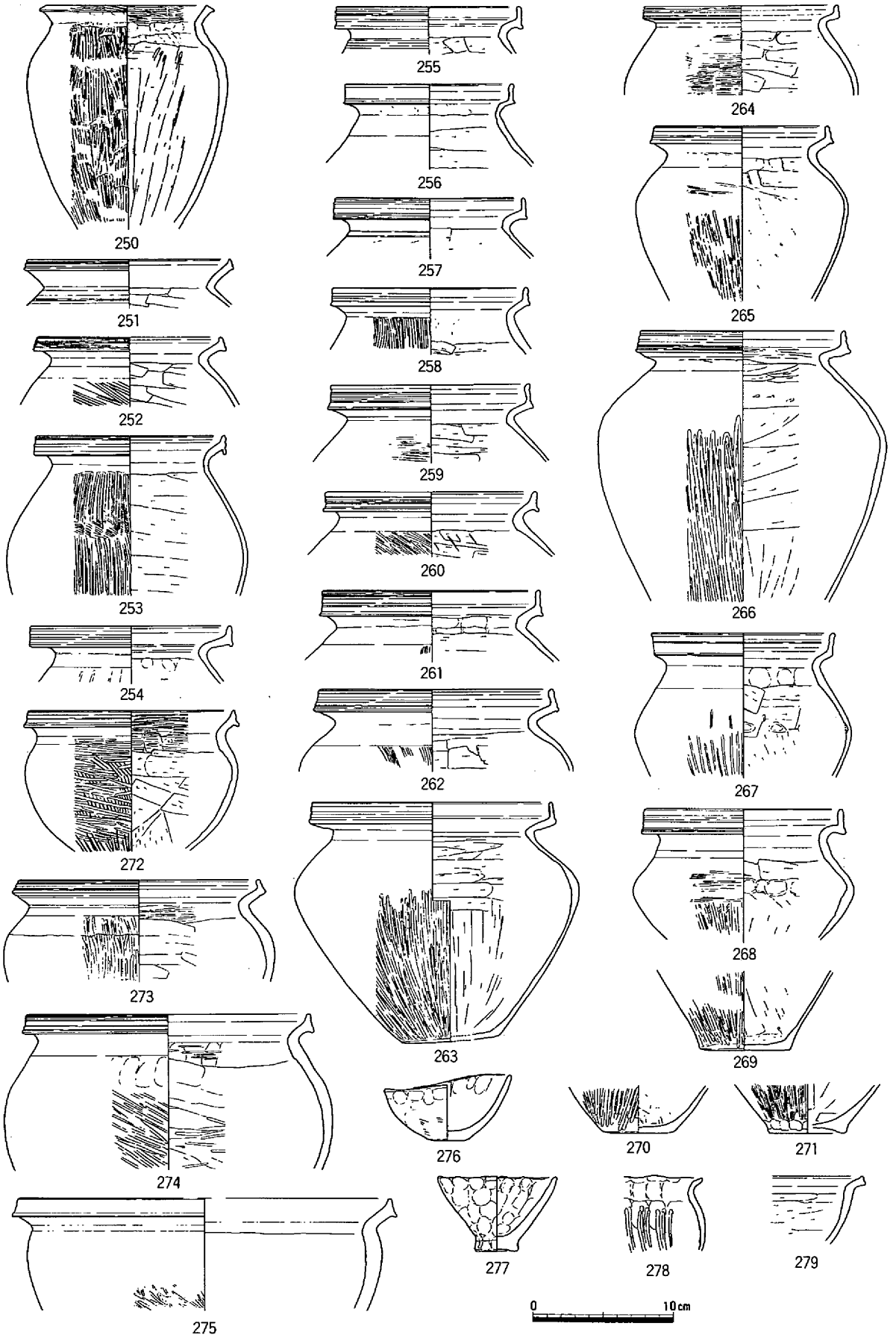
土壙－10（第52図）

22Ｐ区中央部に位置する。平面形は187×110cmの楕円形を呈し、底面は東西にテラス状に高く中央部が一段低くなっており、検出面からの深さは23cmを測る。出土遺物は鉢**290**と甕の底部片**291**がある。

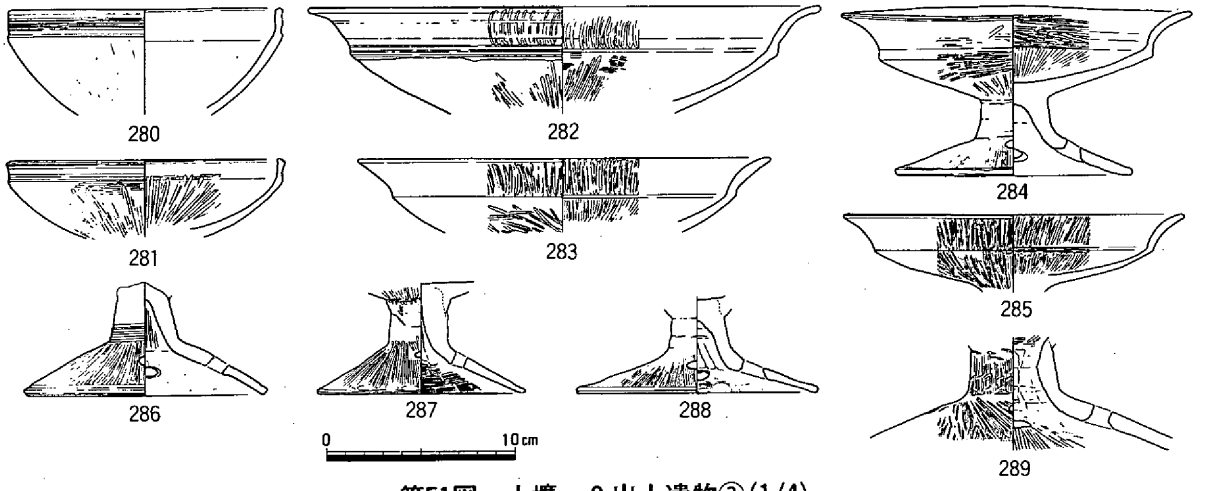
時期はこれらから伊・弥・後Ⅱ期と判断される。（杉山）



第49図　土壙－９平・断面(1/40) と出土遺物①(1/4)



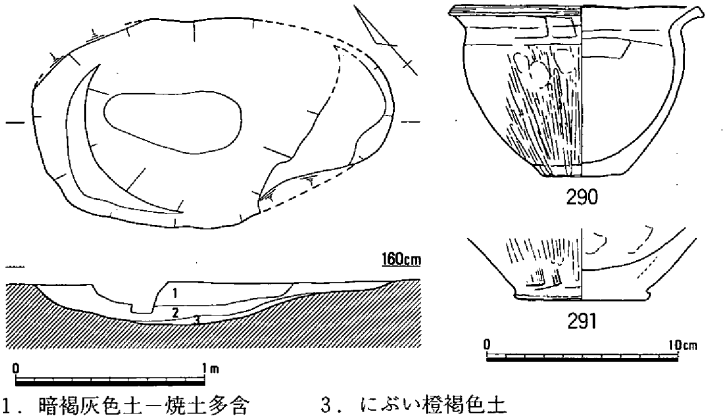
第50図　土壙－９出土遺物②(1/４)



第51図　土壙－９出土遺物③(1/4)

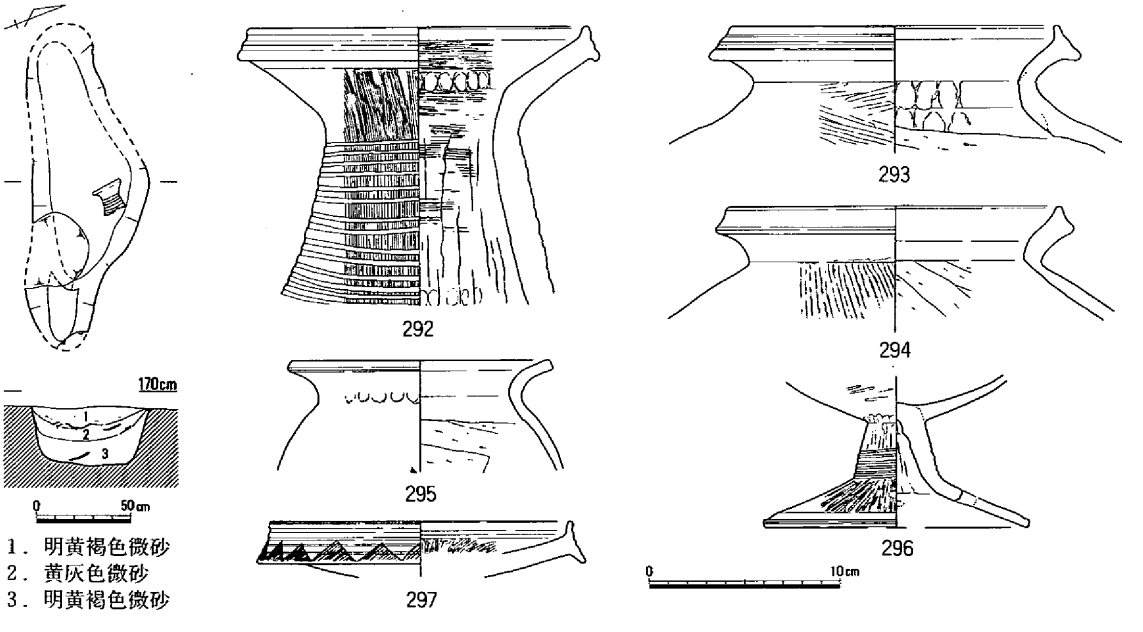
土壙－11（第53図）

22Ｐ区の中央部に位置し、後世のピットによって攪乱されている。平面形は推定で172×62cmの東西に長い溝状を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。出土遺物は各層から出土しているが、**292**の壺の口縁部は底面に横転しその中に拳大の礫が入った状態で出土した。**297**は器台である。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。　（杉山）



1．暗褐灰色土－焼土多含　　3．にぶい橙褐色土
2．にぶい黄褐色土－炭少含

第52図　土壙－10平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

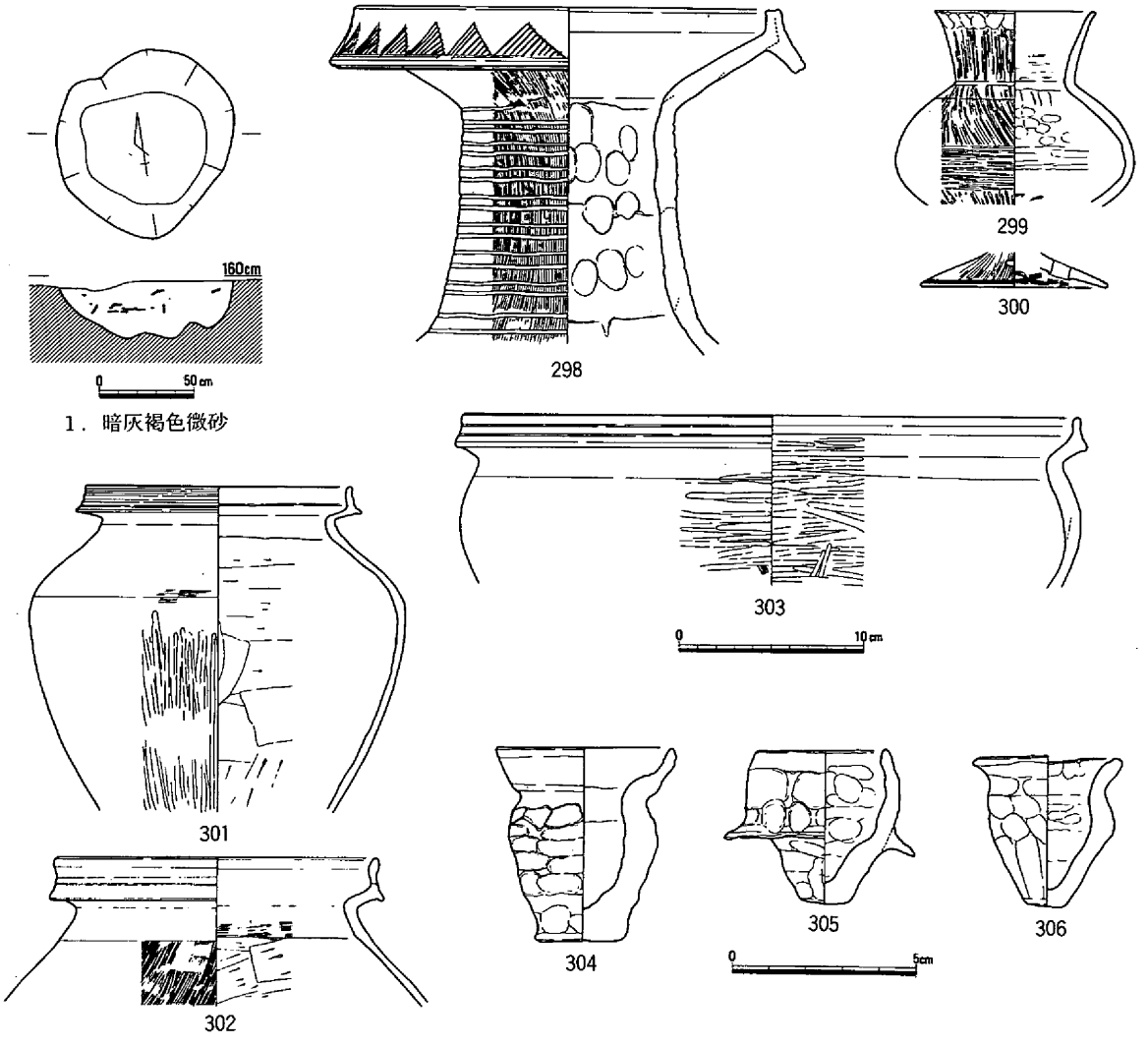


1．明黄褐色微砂
2．黄灰色微砂
3．明黄褐色微砂

第53図　土壙－11平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

土壙ー12（第54図，図版14・19）

22Ｐ区の南西部に位置する。平面形は102×93cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。埋土は暗灰褐色微砂土の単層だが、検出面から18cmほどの高さで炭が薄く堆積し、土器もこの面より上で見られることから炭層を境にして上下に分層できると思われる。**298**～**300**は壺で**299**と**300**は同一個体の台付壺になる。**301**・**302**は甕、**303**は口径33.0cmに復元される大形の鉢である。**304**～**306**はほぼ完形のミニチュア土器である。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）



第54図　土壙ー12平・断面(1/40)と出土遺物(1/2・1/4)

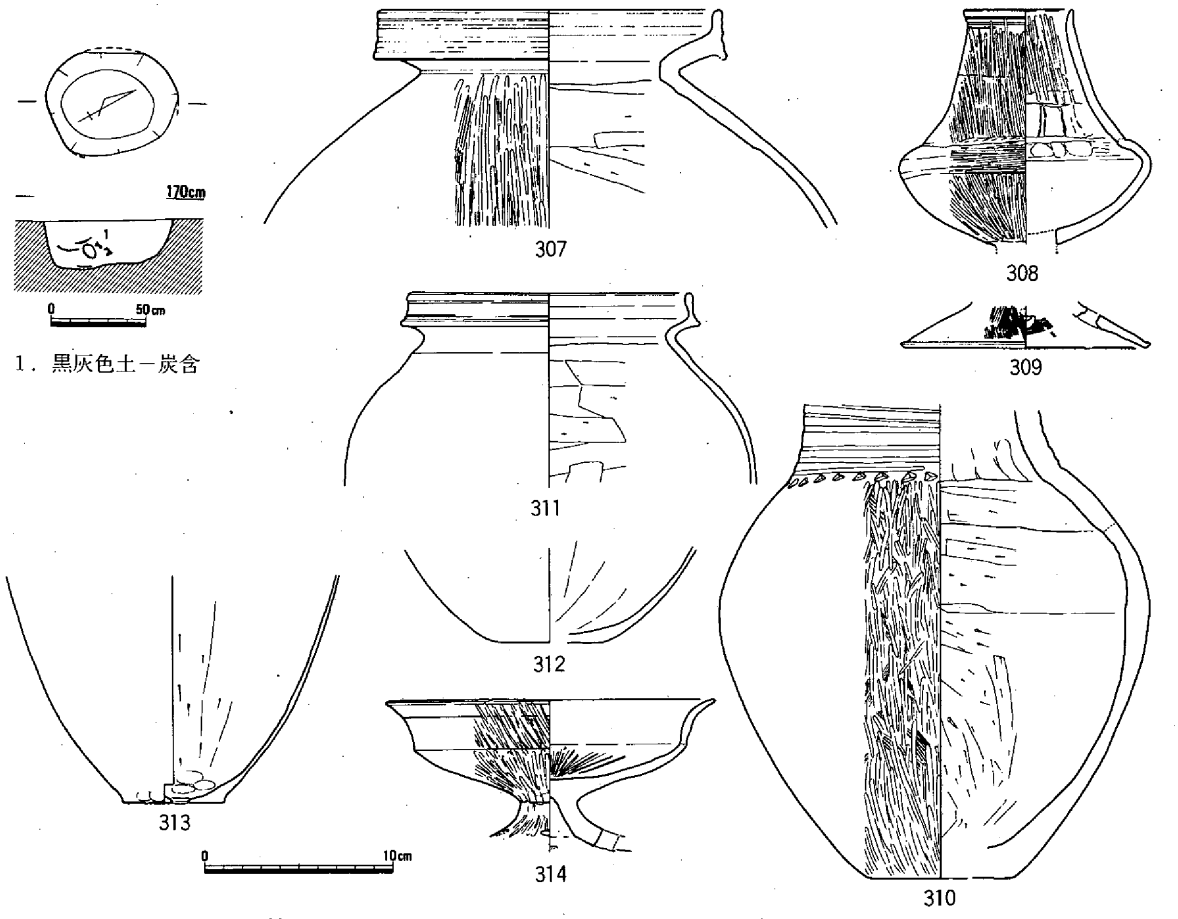
土壙ー13（第55図，図版14）

22Ｐ区の南西部に位置し、東西を近代の掘削で削平されている。平面形は70×57cmのやや歪な円形を呈し、検出面からの深さは27cmを測る。出土遺物は土壙の南側でまとまって出土した。**307**～**310**は壺で、**308**と**309**は同一個体である。**311**～**313**は甕で**313**の底部には貫通孔がある。**314**は高杯である。

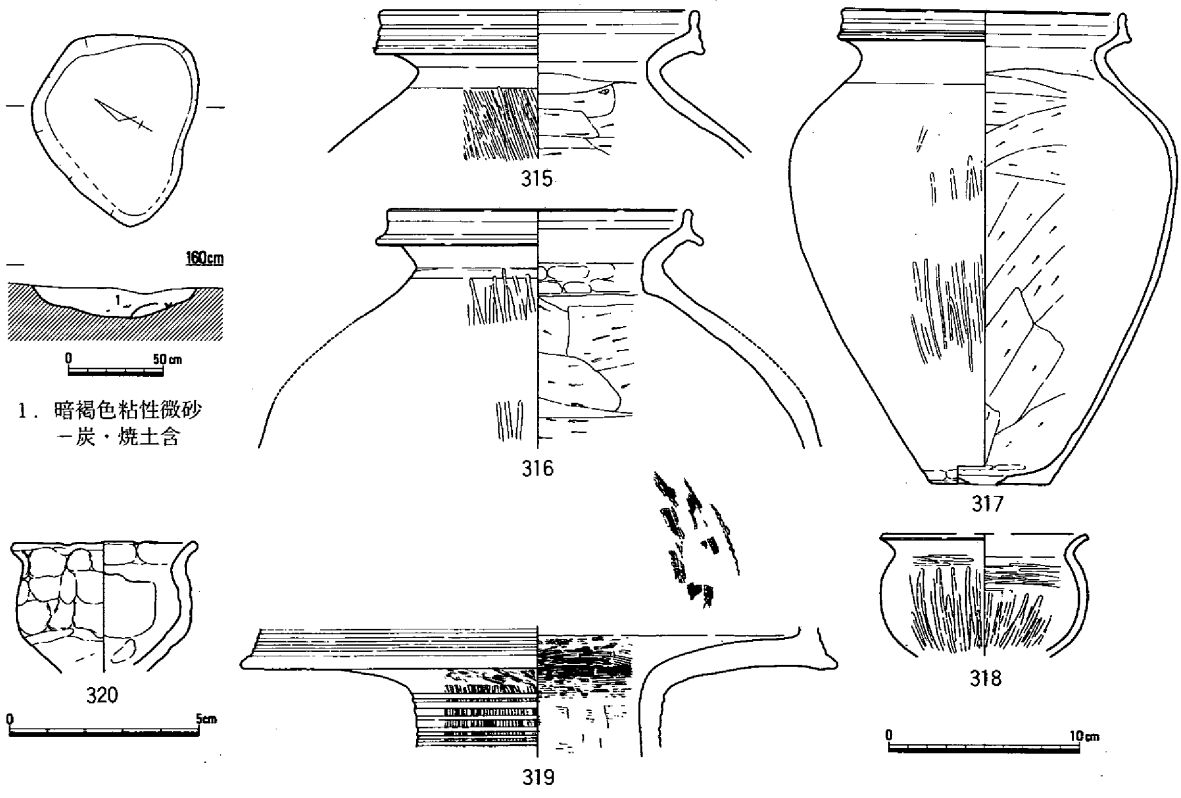
時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）

土壙ー14（第56図，図版６・19）

22Ｑ区の北側に位置する。平面形は100×87cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは16cmと浅い。出土遺物は東側でまとまって出土した。**315**～**316**は壺、**317**は底部に貫通孔の見られる甕、**318**は鉢、



第55図　土壙－13平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)



第56図　土壙－14平・断面(1/40)と出土遺物(1/2・1/4)

319は器台、**320**はミニチュアの鉢である。**319**の器台は口縁部内面に櫛状工具による波状文を施し、赤色顔料と思われる赤い部分が見られる。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。　(杉山)

土壙－15（第57図，図版14）

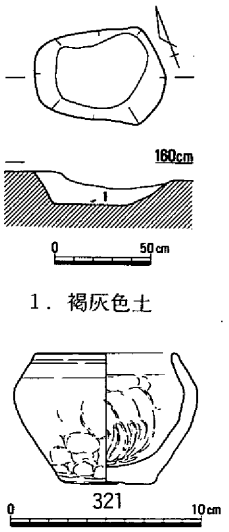
22Ｑ区の北部に位置する。平面形は68×47cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。出土遺物は**321**の完形の壺のみである。時期は伊・弥・後Ⅱ期と判断される。　(杉山)

土壙－16（第58図）

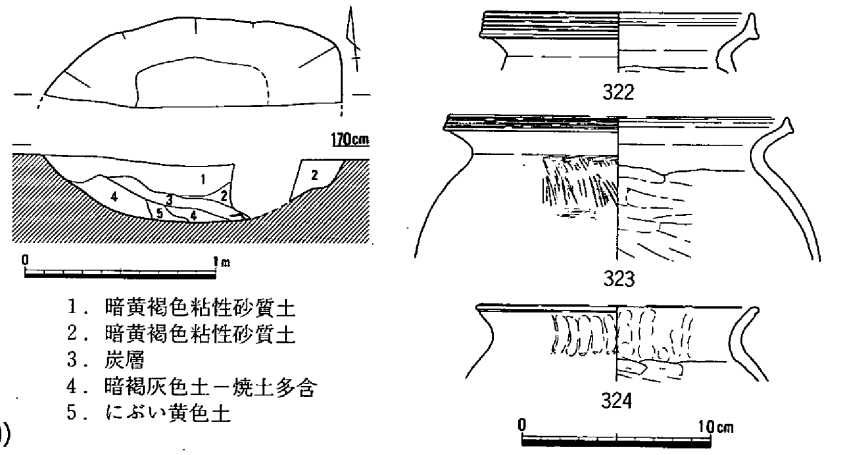
23Ｐ区の南部に位置し、溝－１の肩を切って検出された。南半分を試掘トレンチＴ６によって掘削されているが、東西156cmを測る楕円形を呈すると思われる。検出面からの深さは36cmである。出土遺物には**322**～**324**の甕がある。時期は溝との切り合いがあるが伊・弥・後Ⅱ～Ⅲ期と判断される。　(杉山)

土壙－17（第59図）

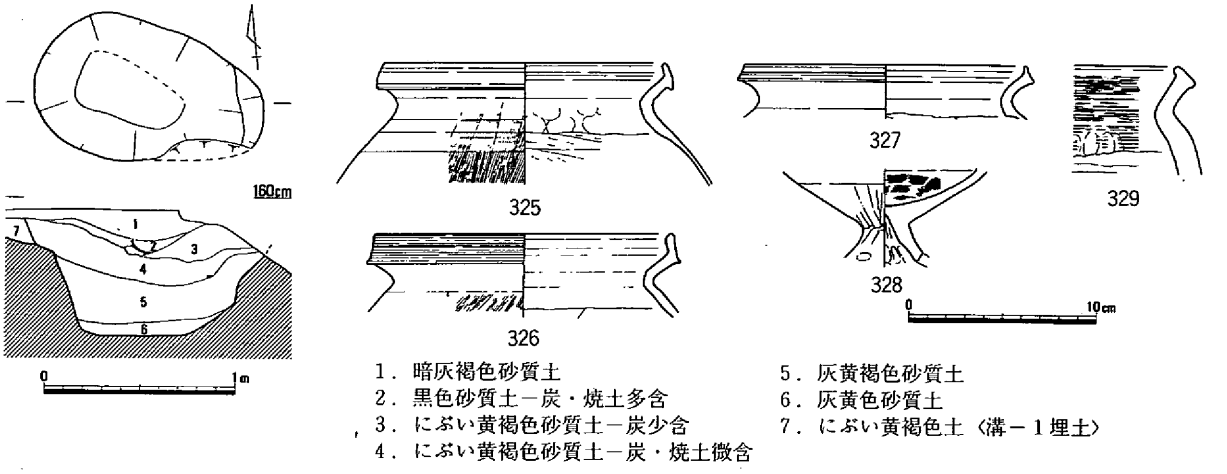
23Ｐ区の南部に位置し、溝－１を切って検出された。平面形は120×73cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは62cmを測る。断面形は南側の底部がやや袋状を呈している。出土遺物は第２～４層で出土した。**325**～**327**は甕、**328**は高杯、**329**は鉢である。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）



第57図　土壙－15平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)



第58図　土壙－16平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)



第59図　土壙－17平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

土壙－18（第60図）

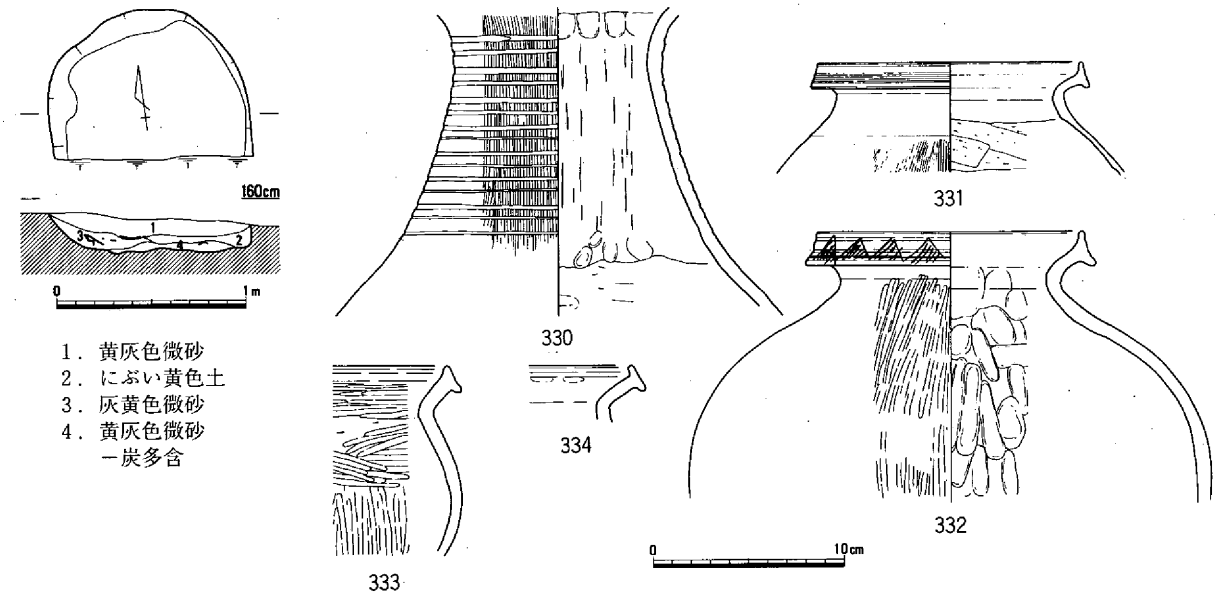
23Ｑ区の北西部で調査区南端に位置する。南側は調査区外へ伸びるが、平面形は東西106cmを測る楕円形を呈すると推定され、検出面からの深さは21cmである。出土遺物には壺**330**・**332**、甕**331**、鉢**333**・**334**がある。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）

土壙－19（第61図，図版20）

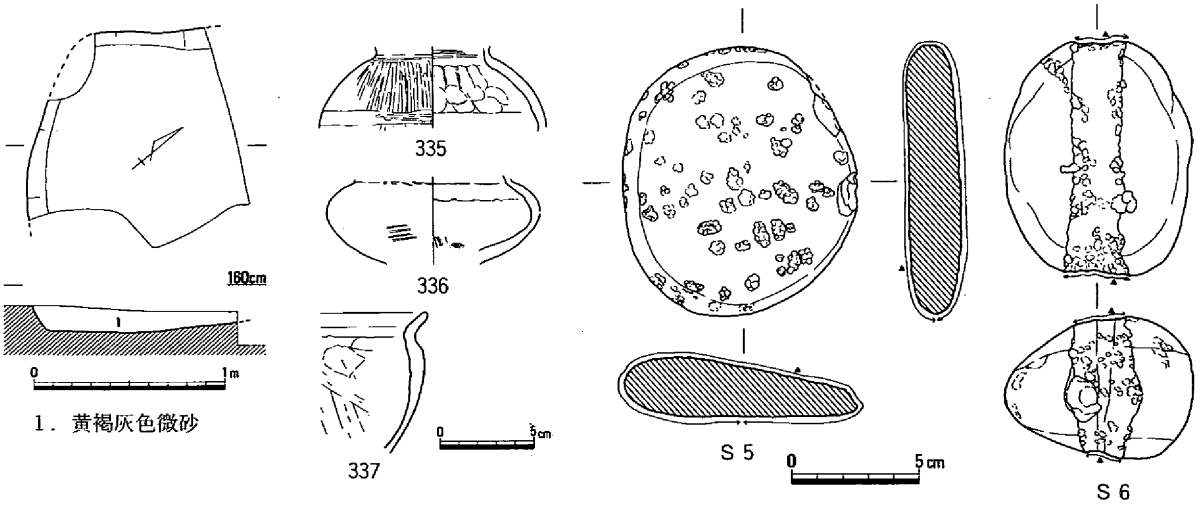
23Ｐ区の北東部に位置する。北西隅のみの検出であるため規模は不明だが平面形は方形を呈すると思われる。検出面からの深さは17cmを測る。出土遺物には直口壺**335**、鉢**336**・**337**、叩石Ｓ５、有溝石錘Ｓ６がある。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）

土壙－20（第62図）

24Ｏ区北東部で竪穴住居－８の下層に位置する。平面形は124×135cmの円形を呈し、検出面からの深さは86cmを測る。出土遺物はほとんどない。**338**～**340**は甕、**341**は高杯、**342**は鉢である。**Ｃ17**・**Ｃ18**は土器片を転用した円板、**Ｓ７**は打ち欠き石錘である。時期は住居との切り合いなどから伊・弥・



第60図　土壙－18平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)



第61図　土壙－19平・断面(1/40)と出土遺物(1/3・1/4)

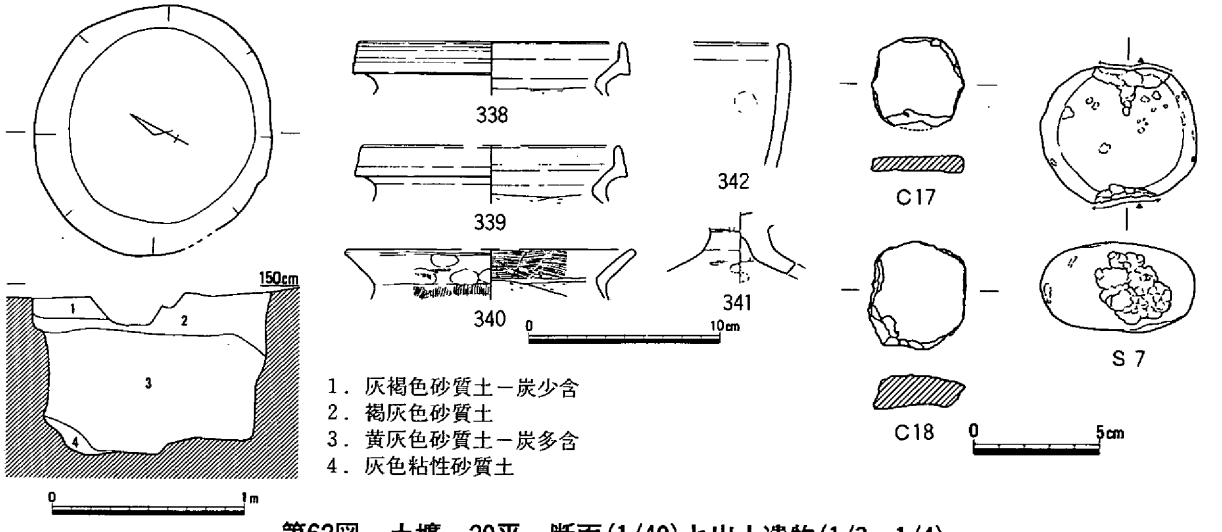
後Ⅳ期と判断される。　　（杉山）

土壙－21（第63図）

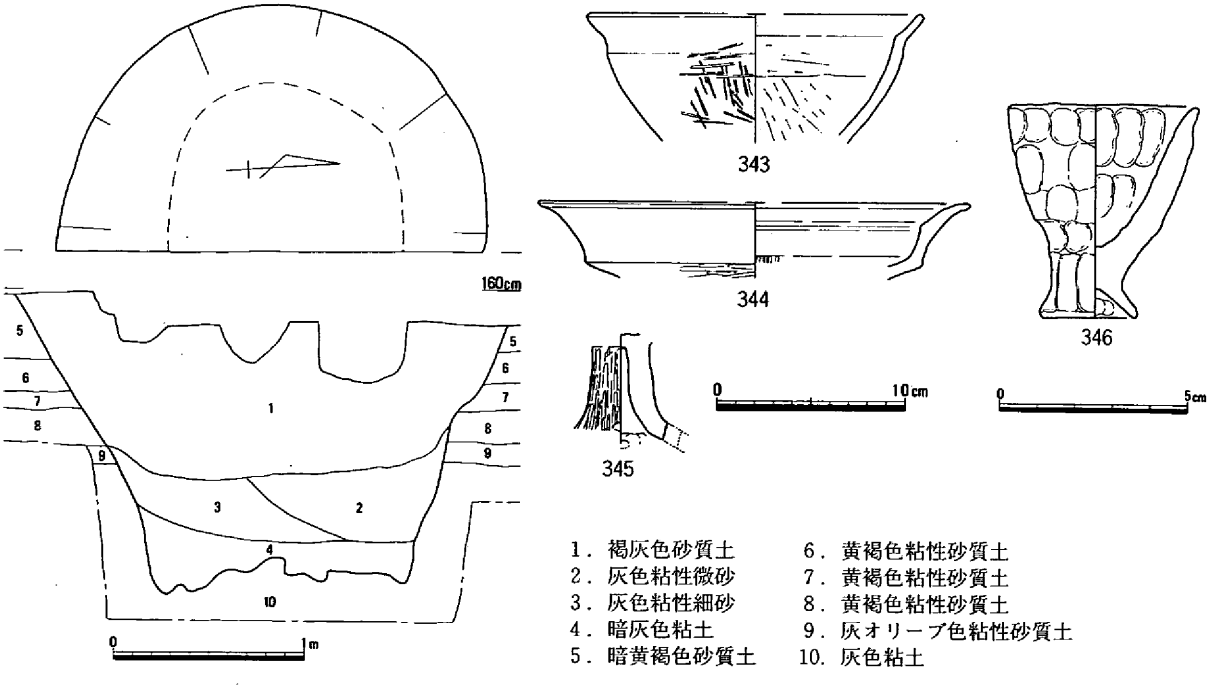
25Ｏ区南西部の調査区東端で、竪穴住居－10の下層に位置する。平面形は直径256cmほどの円形を呈すると思われ、検出面からの深さは157cmを測り、海抜高０ｍである。底面の凹凸は著しく、埋土は意図的に埋めたと考えられる堆積状況である。このことから井戸を築く途中で第10層の粘土層のため湧水がなく廃棄したものと判断される。出土遺物は鉢**343**、高杯**344**・**345**、ミニチュア土器**346**がある。時期は伊・弥・後Ⅱ期と考えられる。　　（杉山）

土壙－22（第64・65図，図版６・14）

24Ｏ・Ｐ区の境界に位置する。平面形は163×125cmの方形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は２層に分層され、遺物は北半の第２層上面付近でまとまって出土した。完形に復元できるもの



第62図　土壙－20平・断面(1/40)と出土遺物(1/3・1/4)

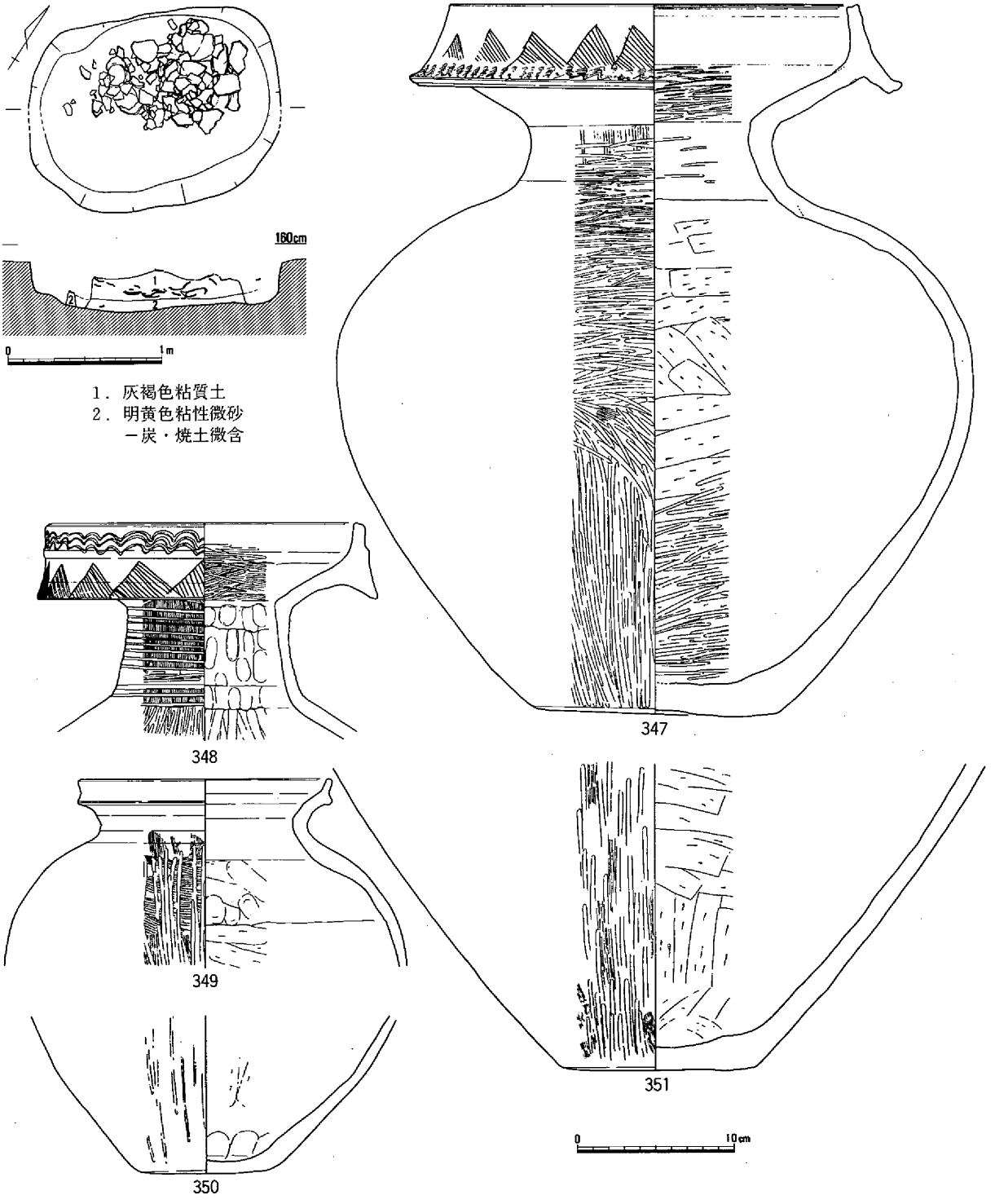


第63図　土壙－21平・断面(1/40)と出土遺物(1/2・1/4)

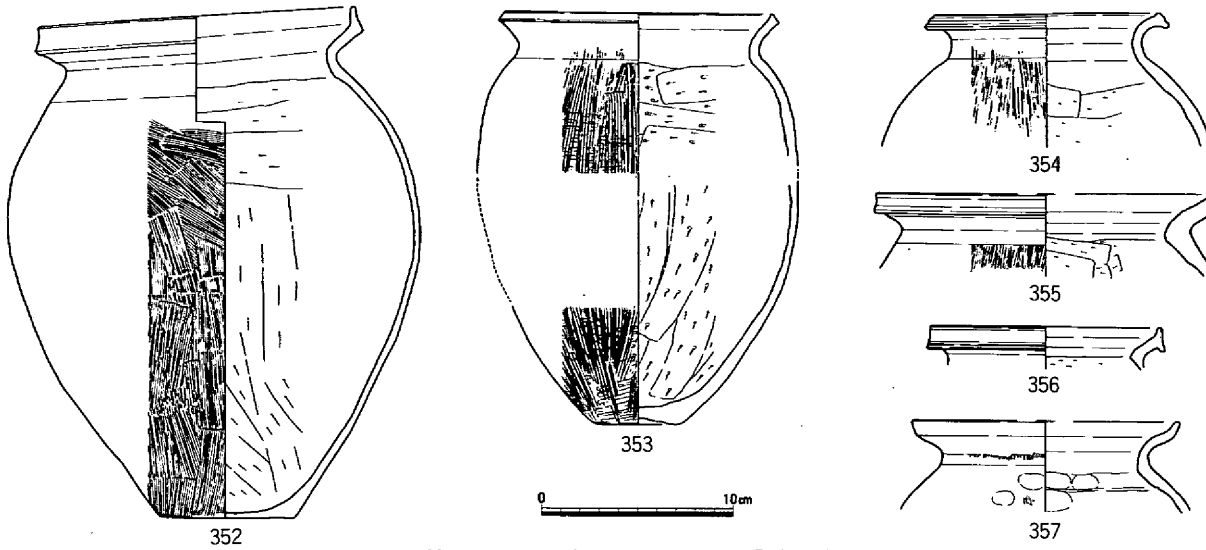
もあるが、完形品が埋置された状態ではなく破片になったものを重ねて埋めた状況である。出土遺物は壺**347**～**351**、甕**352**～**357**がある。**347**は完形に復元された大形の壺で、口径25.9cm，器高45.8cmを測る。**347**は口縁拡張部外面に鋸歯文と波状文を施している。体部下半の破片は出土していない。**354**の甕は前代の混入品であろう。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。　（杉山）

土壙－23（第66図）

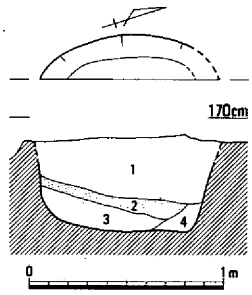
25Ｐ区の北西部で調査区東端に位置する。一部のみの検出で以降の大半は調査区東へ広がっている。



第64図　土壙－22平・断面(1/40)と出土遺物①(1/4)

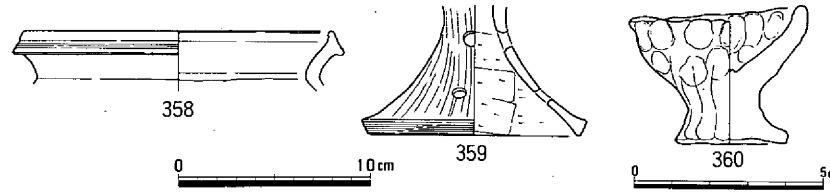


第65図　土壙ー22出土遺物②(1/4)

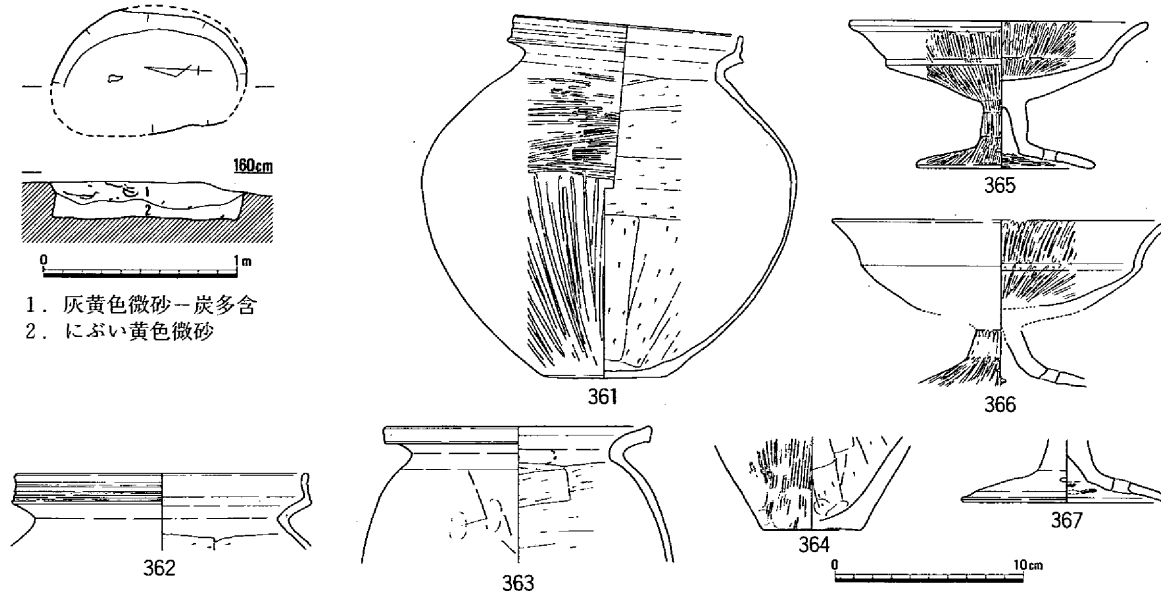


1．褐灰色砂質土
2．炭層
3．暗褐灰色砂質土
4．灰黄色砂

検出面からの深さは51cmを測る。埋土は４層に分層され、第２層が炭層であることから住居の中央穴の可能性があるが、周辺でまとまるような柱穴は明らかにできなかった。出土遺物は甕**358**、高杯**359**、ミニチュア土器**360**がある。時期は伊・弥・後Ⅰ期と判断される。　（杉山）



第66図　土壙ー23平・断面(1/40)と出土遺物(1/2・1/4)

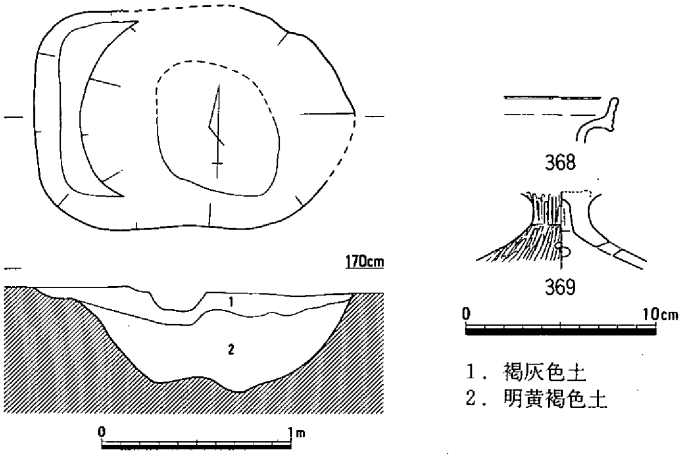


1．灰黄色微砂ー炭多含
2．にぶい黄色微砂

第67図　土壙ー24平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

土壙－24（第67図，図版14）

25Ｐ区の西端中央に位置し、南側を土壙－25によって削平されている。平面形は100×67cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。出土遺物は第１層中から出土している。**361～364**は甕、**365～367**は高杯である。時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。（杉山）



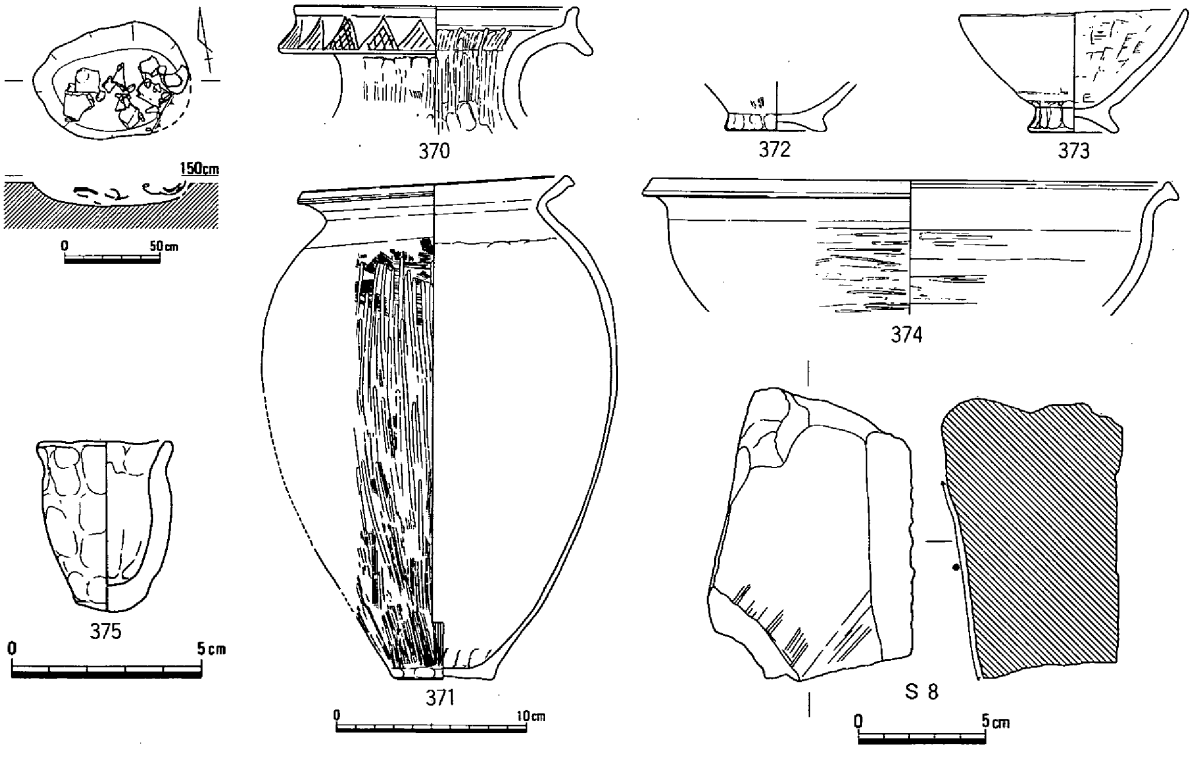
第68図　土壙－25平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

土壙－25（第68図）

25Ｐ区の西端中央に位置する。平面形は168×117cmの楕円形を呈する。底面は西側がテラス状に高く、最深部で検出面から55cmを測る。時期は出土遺物から伊・弥・後Ⅳ期と判断される。（杉山）

土壙－26（第69図，図版20）

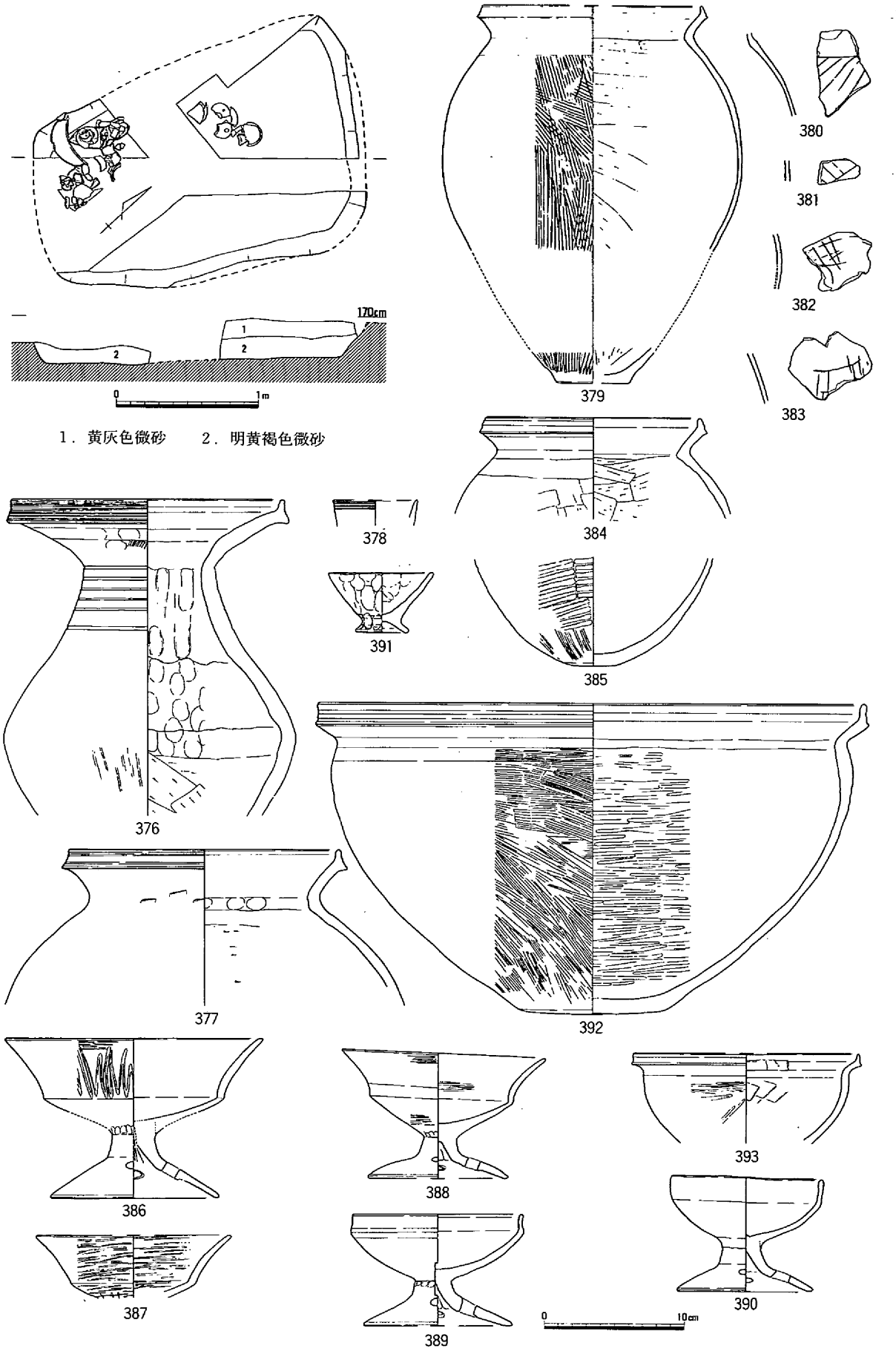
25Ｐ区の南西端に位置する。平面形は83×61cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。遺物は底面からやや浮いた状態で出土した。時期は伊・弥・後Ⅱ期と判断される。（杉山）



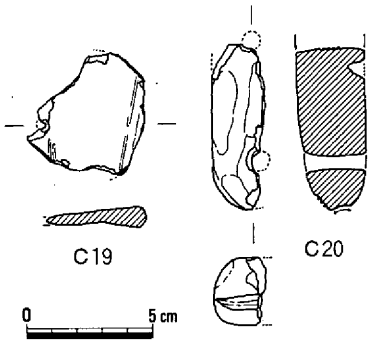
第69図　土壙－26平・断面(1/40)と出土遺物(1/2・1/3・1/4)

土壙－27（第70・71図，図版14）

24Ｐ区の西端中央に位置し、調査時は西隅のみが１区で検出されていたため整理時に図上で合成した。平面形は235×132cmのやや歪な方形を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。出土遺物は、**376～378**は壺、**379～385**は甕である。甕**379～383**は同一個体で肩部にヘラ描きの絵画が見られる。しか



第70図　土壙―27平・断面(1/40)と出土遺物①(1/4)



第71図　土壙－27出土遺物②(1/3)

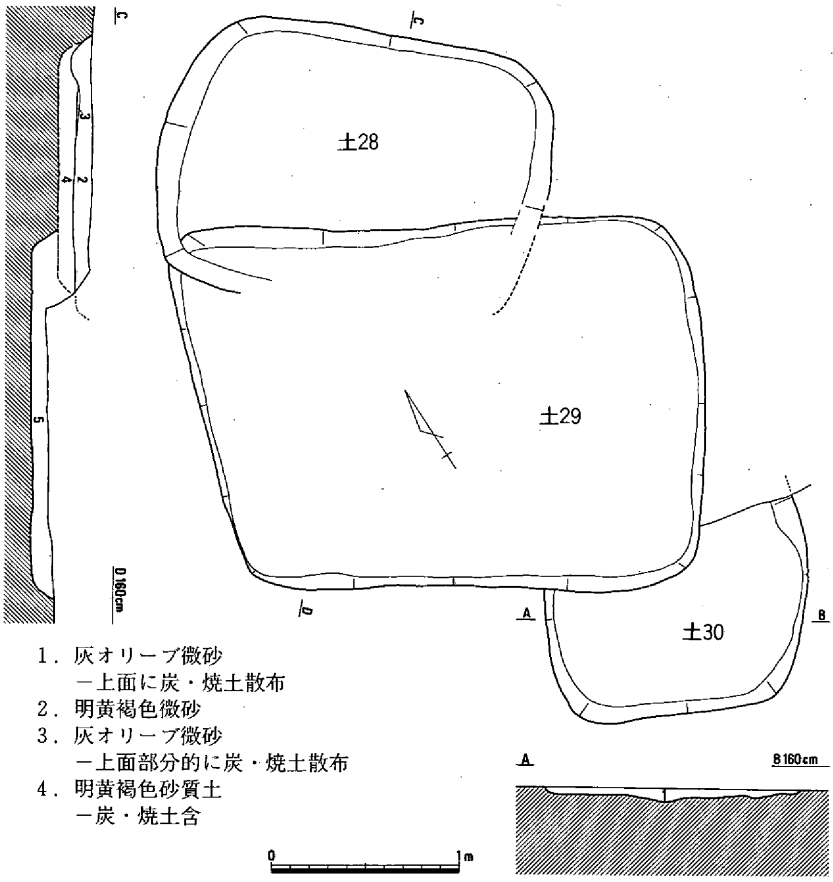
し、接合関係が不明で内容については明らかでないが、直線を多用していることから建物を描いていると推察される。**384**・**385**は同一個体の可能性があるが、**385**の体部にはタタキが見られる。**386**～**390**は高杯、**391**・**392**は鉢、**C19**は土器片転用の円板、**C20**は土錘である。時期は伊・弥・後Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。　(杉山)

土壙－28～30（第72～74図）

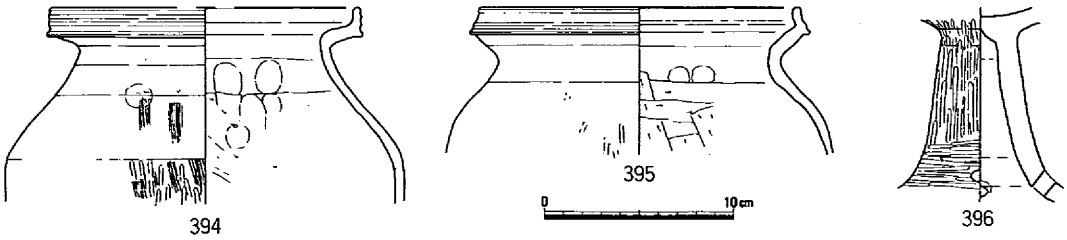
24Ｐ・Ｑ区の東部境界付近に位置する。土壙－28は３基の中で最新のもので、平面形は206×150cmの隅丸方形を呈する。底面は水平で海抜138cmの第４層上面で炭層が見られるが、その下の海抜130cmまで掘り込みが見られることから第４層下面を底面とした。土壙－29は土壙－28の下層で検出し、その平面形は265×190cmの隅丸方形を呈する。土壙－30は最古のもので、北側は試掘トレンチＴ５によって削平されているが一辺140cm前後の隅丸方形を呈する。

出土遺物はほとんどないが、第73図に図示したものは土壙－30の検出中に出土した。時期は、いずれも伊・弥・後Ⅲ期と判断される。

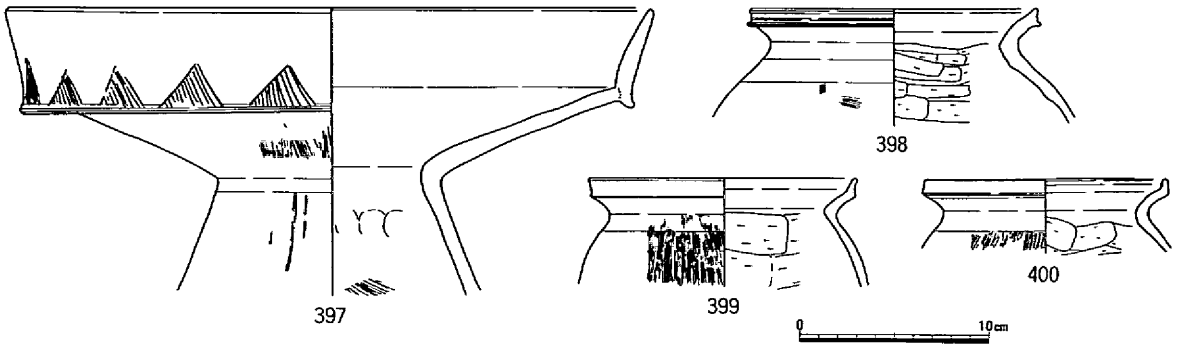
これらはいずれも底面が水平でやや歪ではあるが隅丸方形を呈していることから、無柱の住居の可能性もある。(杉山)



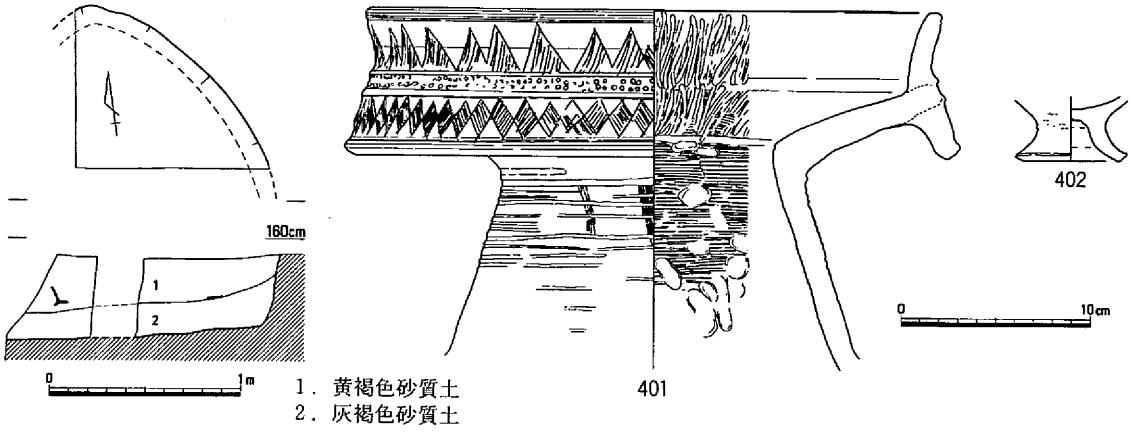
第72図　土壙－28～30平・断面(1/40)



第73図　土壙－29出土遺物(1/4)



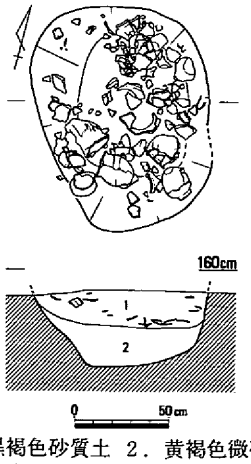
第74図　土壙－30出土遺物(1/4)



第75図　土壙－31平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

土壙－31（第75図，図版15）

24Ｑ区の北西で調査区の南端に位置する。西側を井戸－１によって削平され、南側は調査区外に伸びる状況で検出したため、全形は不明である。検出面からの深さは43cmを測るが出土遺物はほとんどない。**401**の大形の壺は破片の一部が井戸－１と接合したもので口縁部を大きく上下に拡張して施文している。**402**は製塩土器の脚である。時期は伊・弥・後Ⅲ期と考えられる。（杉山）

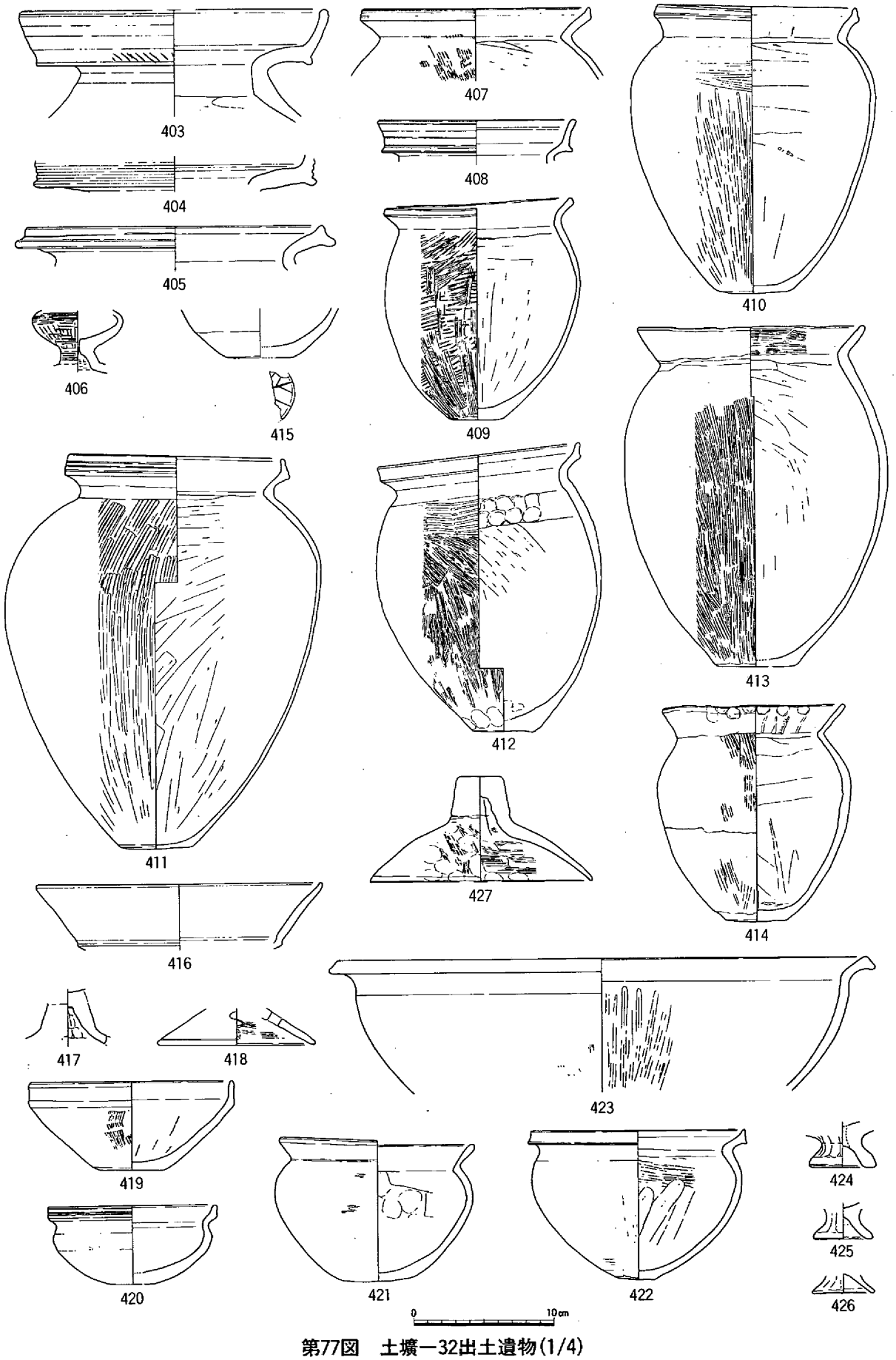


1．黒褐色砂質土　2．黄褐色微砂質土－炭少含

第76図　土壙－32平・断面(1/40)

土壙－32（第76・77図，図版６・15）

24Ｑ区南東部に位置する。この区域には井戸－３、土壙－33・34があり、検出には困難を極めた。平面形は120×89cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは41cmを測る。埋土は２層に分層され、第１層の底面には炭の散布が見られ土器はここで多く出土した。また、第２層はほとんど遺物を含んでいない層で土壙を第２層下面まで掘った後に第２層を埋めたのか、自然に埋まったのかは判断できない。しかし、土壙の使用時には第１層下面で使用を行っている。出土遺物は南側では完形品が、北側では破片が多く見られた。**403**～**406**は壺、**407**～**414**は甕である。**409**・**412**の体部外面にはタタキ後にハケ調整を施す。**415**の底面には木葉痕が見られる。**416**～**418**は高杯、**419**～**426**は鉢、**427**は蓋である。**424**～**426**は製塩土器の脚である。時期は、伊・弥・後Ⅳ期頃と判断される。（杉山）



第77図　土壙ー32出土遺物(1/4)

土壙－33（第78図，図版20）

24Ｑ区の南東に位置し、東側を土壙－32によって切られた状況で検出した。平面形は85×82cmのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは35cmを測る。埋め土は第２層がブロック状に見られるのみで、基本的には土器と炭を含んだ単層である。出土遺物はほとんどないが、**428**～**431**の高杯がある。**Ｓ９**はサヌカイト製の楔で、上下にツブレの痕跡が見られる。

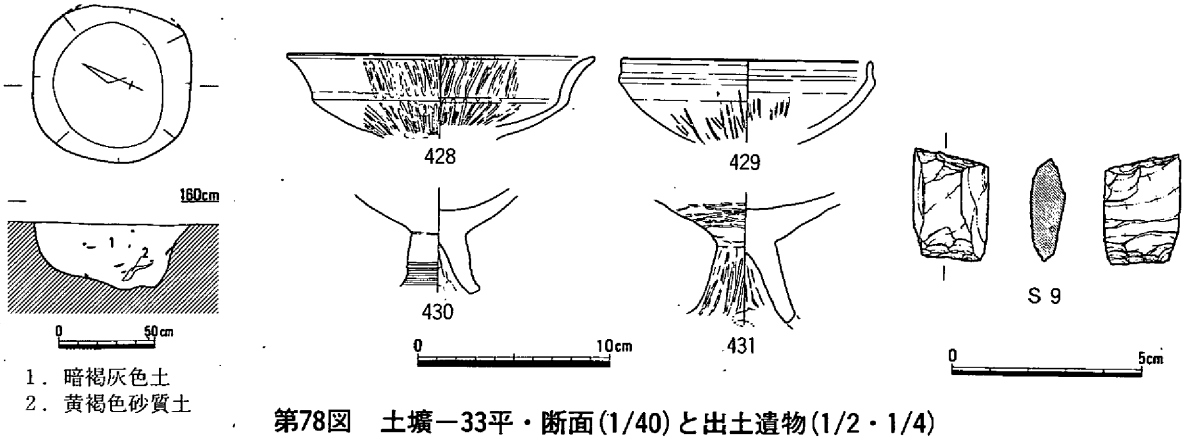
時期は、土器は古相を示すが、遺構の切り合いから伊・弥・後Ⅳ期頃と判断される。　（杉山）

土壙－34（第79図，図版15）

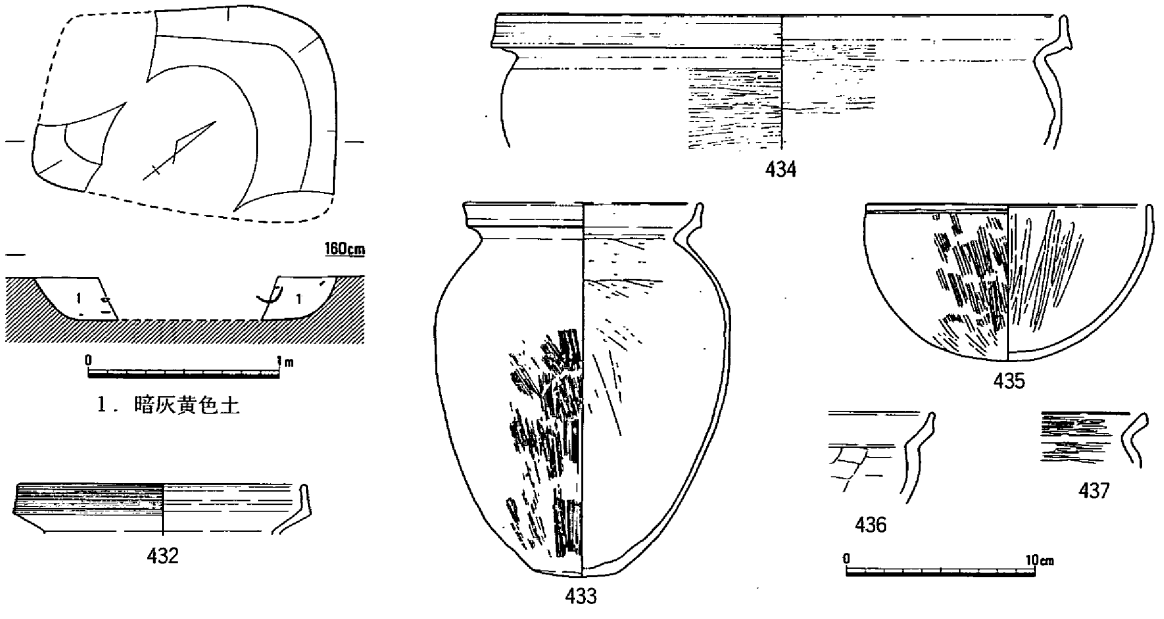
24Ｑ区の南東に位置し、中央を土壙－32に、西隅を土壙－33によって切られた状況で検出した。平面形は158×105cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは22cmを測り、底面は比較的水平である。出土遺物は甕**432**・**433**、鉢**434**～**437**がある。甕**432**は口縁部に櫛描沈線が見られる。時期は伊・弥・後Ⅳ期と判断される。　（杉山）

土壙－35・36（第80図）

24Ｑ区の南東に位置し、土壙－35を土壙－36が壊して築かれている。土壙－35の平面形は110×

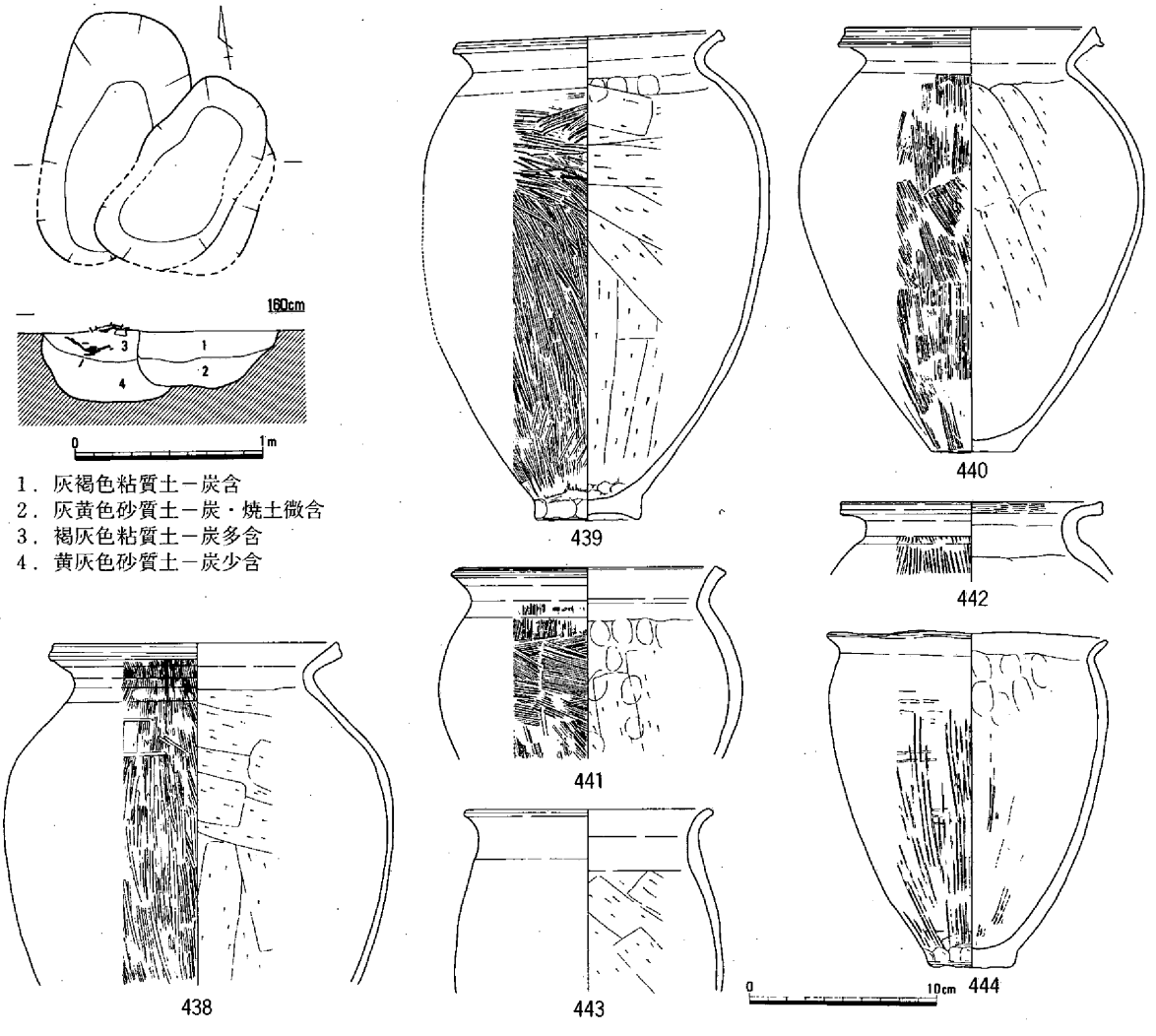


第78図　土壙－33平・断面(1/40)と出土遺物(1/2・1/4)



第79図　土壙－34平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

58cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。土壙－36の平面形は136×68cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは37cmを測る。両者とも埋土は２層に分層され、それぞれ底面から16cm，21cmの高さで第１層と第３層が堆積し、遺物はこれらの層で大半が出土している。出土遺物は両土壙で接合関係が見られ、土壙－35に純粋に帰属する遺物はほとんどない。出土した土器はすべて甕である。時期は構造が類似していることから伊・弥・後Ⅱ期と判断される。　（杉山）

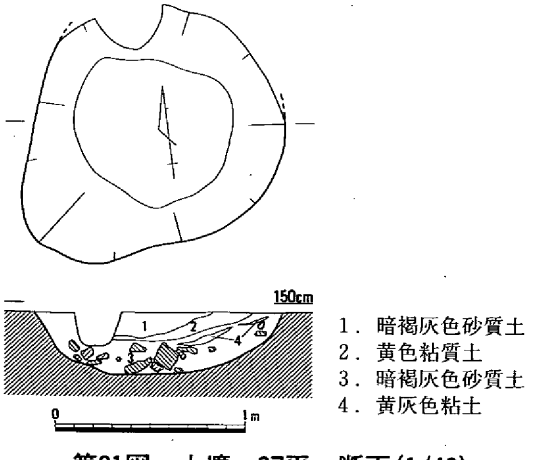


第80図　土壙－35・36平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

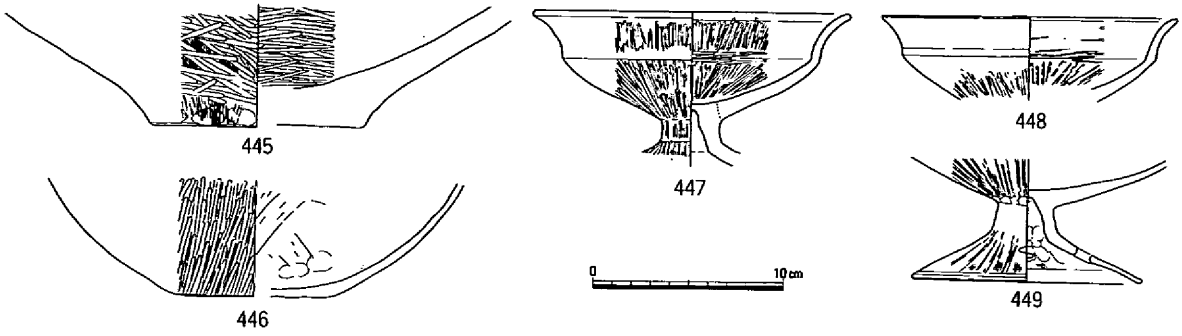
土壙－37（第81～82図）

24Ｑ区の東端中央で、井戸－３のすぐ東側に位置する。平面形は150×132cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは33cmを測る。埋土は４層に分層されるが第３層中には人頭大前後の岩や礫が多く投棄されている。これらの石には明瞭な被熱痕は認められないが、第１層中には炭や焼土が比較的多く見られる。出土遺物は第１層中に多く、**445・446**は壺、**447～449**は高杯である。

時期は伊・弥・後Ⅲ期と判断される。　（杉山）



第81図　土壙－37平・断面(1/40)



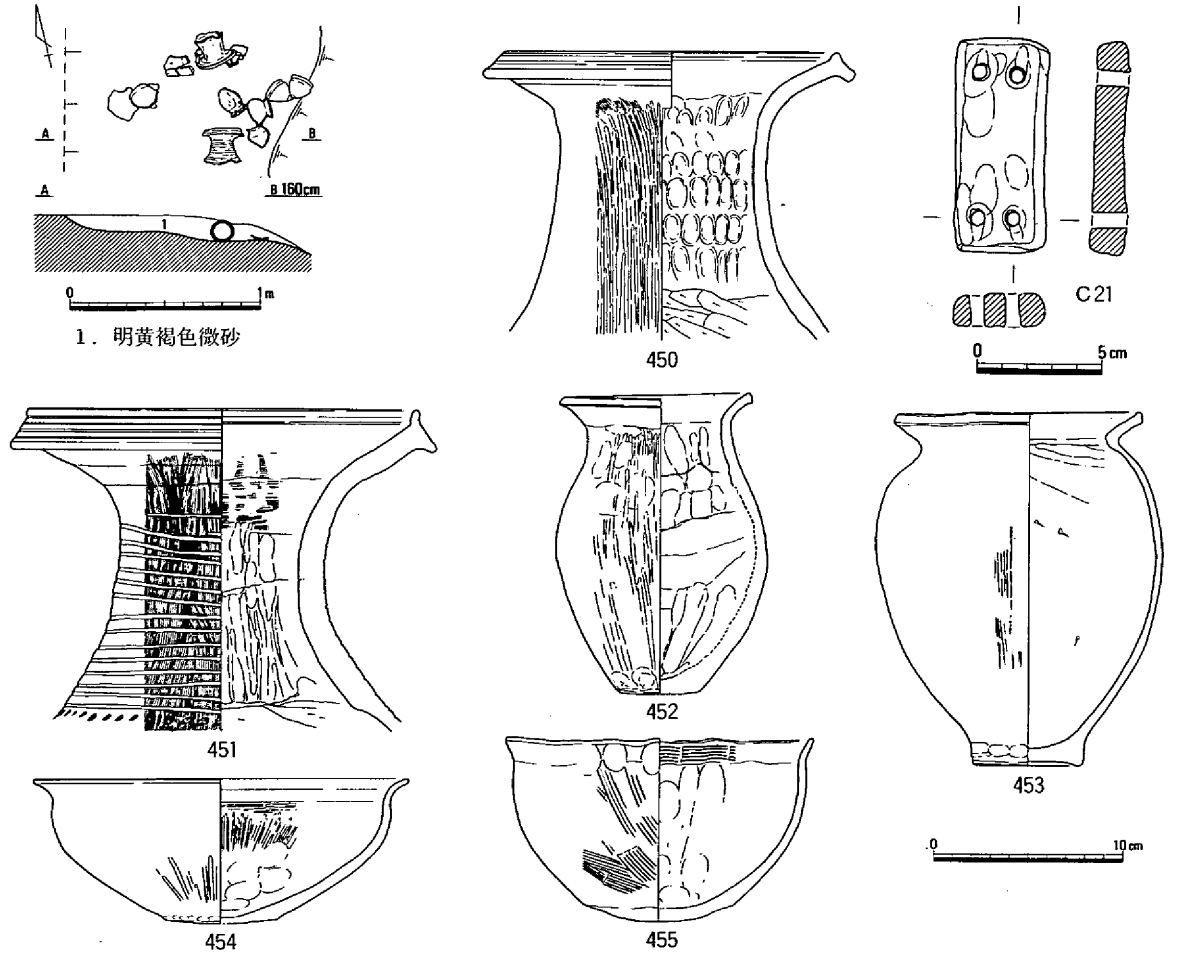
第82図　土壙ー37出土遺物(1/4)

（６）溝

溝ー１（第83図，図版７・16）

23Ｐ・Ｑ区で南北に伸びて東へ下がる落ち肩を検出したが、この肩に対応する東側の肩は中世の溝ー２によって掘削されており確認できなかった。図示した出土遺物は肩部に一括投棄されていたもので、長頸壺**450・451**の体部以下はなく、頸部以上は完形である。土錘**C21**は２個一対の孔があり紐ズレ痕が残っている。溝の時期は、出土遺物から伊・弥・後Ⅲには機能していたと判断されるが、その期間については明確でない。

（杉山）



第83図　溝ー１断面と土器出土状況(1/40)及び出土遺物(1/3・1/4)

（７）性格不明遺構（第84・85図，図版７）

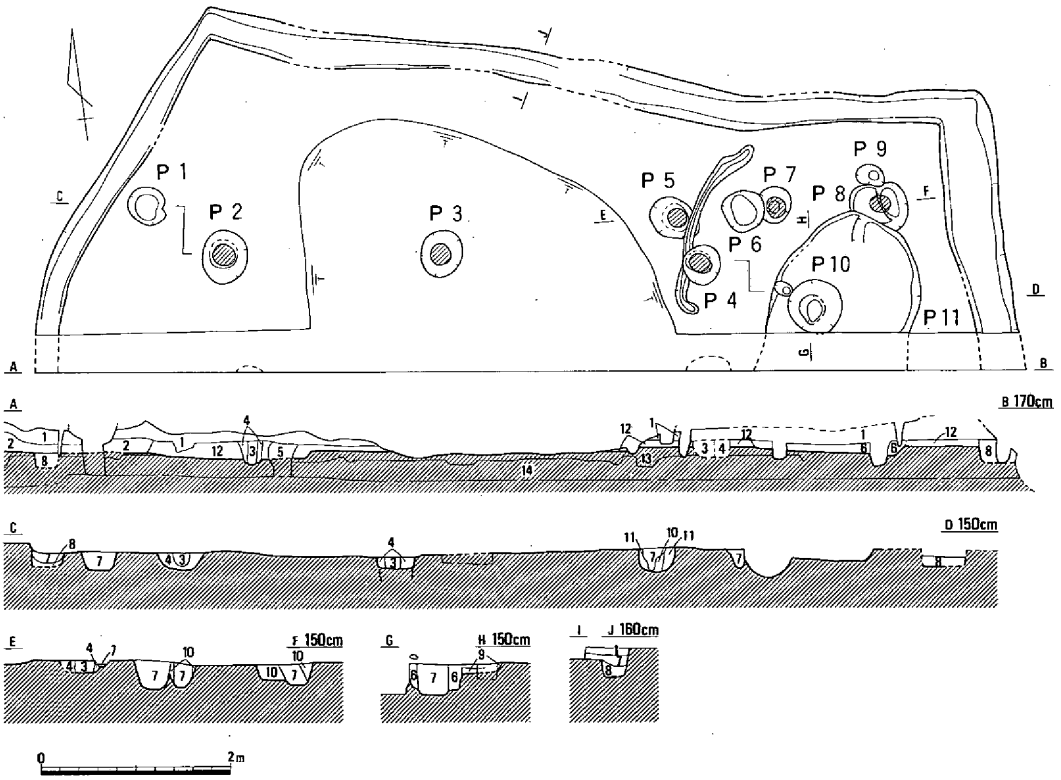
23Ｑ区で調査区の南端で、土器溜り－４の下層に位置している。

調査当初、南側溝でP11の炭と焼土層を確認しており、土器溜り－４の下層に何らかの遺構の存在が予測された。土器溜りを調査後に精査したところ北辺8.16ｍ，西辺4.3ｍ，東辺３ｍで区画された範囲を検出した。

区画された内側は検出面から約15cmほど第１・７層の堆積層があり、海抜約140cmの高さで整地面と周囲を巡る溝を確認した。この整地面はしまりのよい第12層土を６～16cmと厚めに整地して築かれているが、中央部分を土器溜りで大きく攪乱され、そのほかに土壙やピットで攪乱が著しく、整地層は部分的に検出できたに過ぎない。周囲を巡る溝は、整地面からの深さ20cm前後、幅は西側で30cm、東側で60cmを測り、断面は「Ｕ」字形を呈している。この溝の内側ではP1～P11の柱穴・ピットと深さ８cmと浅い溝１条を検出した。これらの遺構と周囲を巡る溝との関連は明確でないが、更に古い時期のものが混在している可能性がある。現時点ではP2～P4の柱穴とそれらの南側のＡ－Ｂ断面に見られる柱穴が組みになると考えている。また、P10・P11も第12層から掘り込まれており、そのすぐそばで土器が第12層上面で出土していることからやはり関連するものと考えられる。

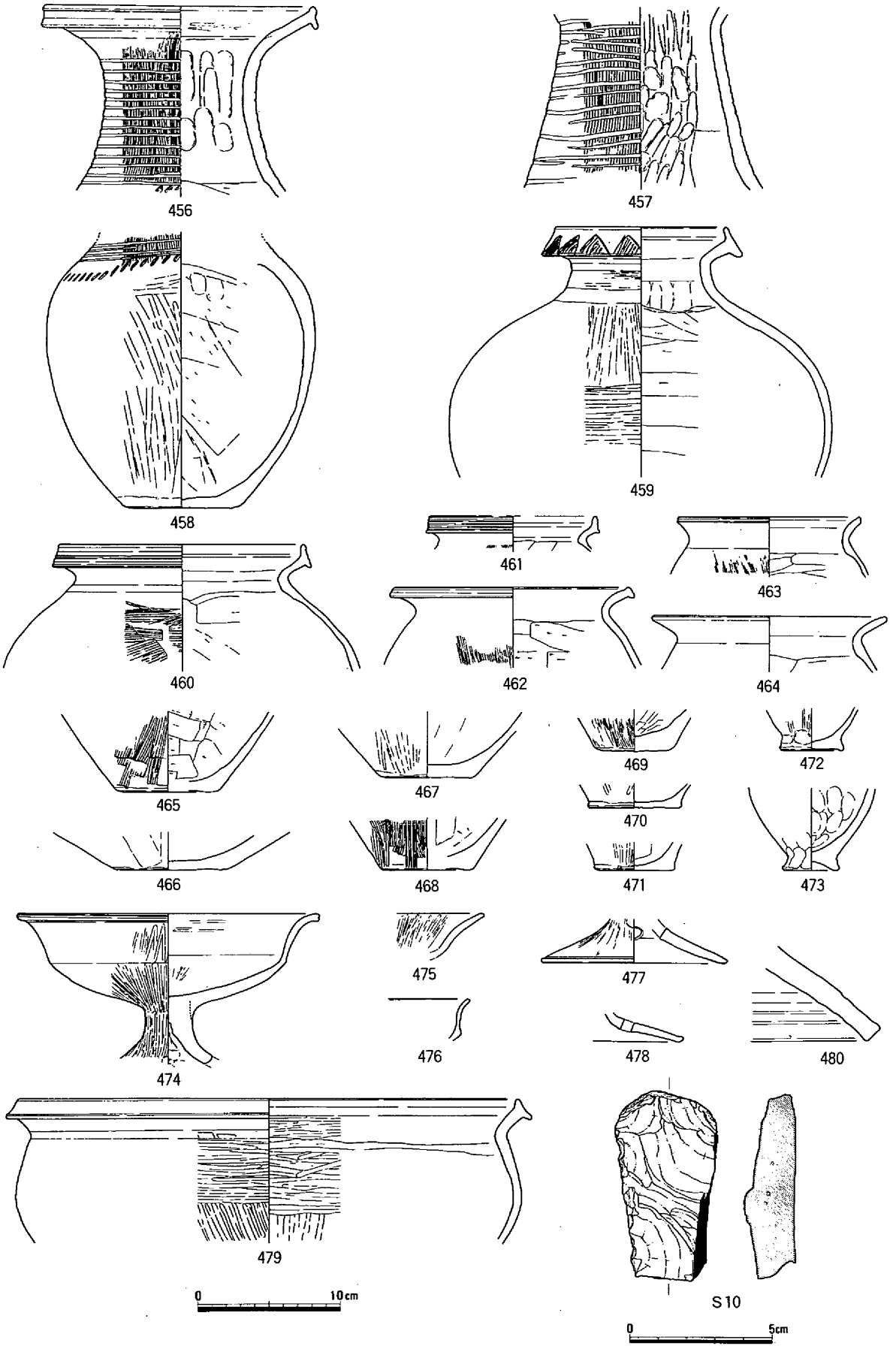
出土遺物は、土器の小片が多く出土している。**446～460・466**は壺、**461～465・467～473**は甕、**474～478**は高杯、**480**は器台の脚部、**479**は大形鉢である。**Ｓ10**はサヌカイト製のフレイクである。

時期は、出土遺物から伊・弥・後Ⅲ期と考えられる。　（杉山）



1．灰褐色砂質土
2．暗黄褐色砂質土
3．灰黄褐色砂質土
4．灰黄褐色粘性砂質土
5．にぶい黄褐色粘性砂質土
6．褐灰色砂質土
7．褐灰色砂質土
8．灰黄褐色砂質土
9．褐色砂質土
10．黄灰色砂質土
11．黄灰色砂質土
12．にぶい灰黄色砂質土
13．黄灰色砂質土
14．黄灰色粘質土

第84図　性格不明遺構平・断面(1/80)



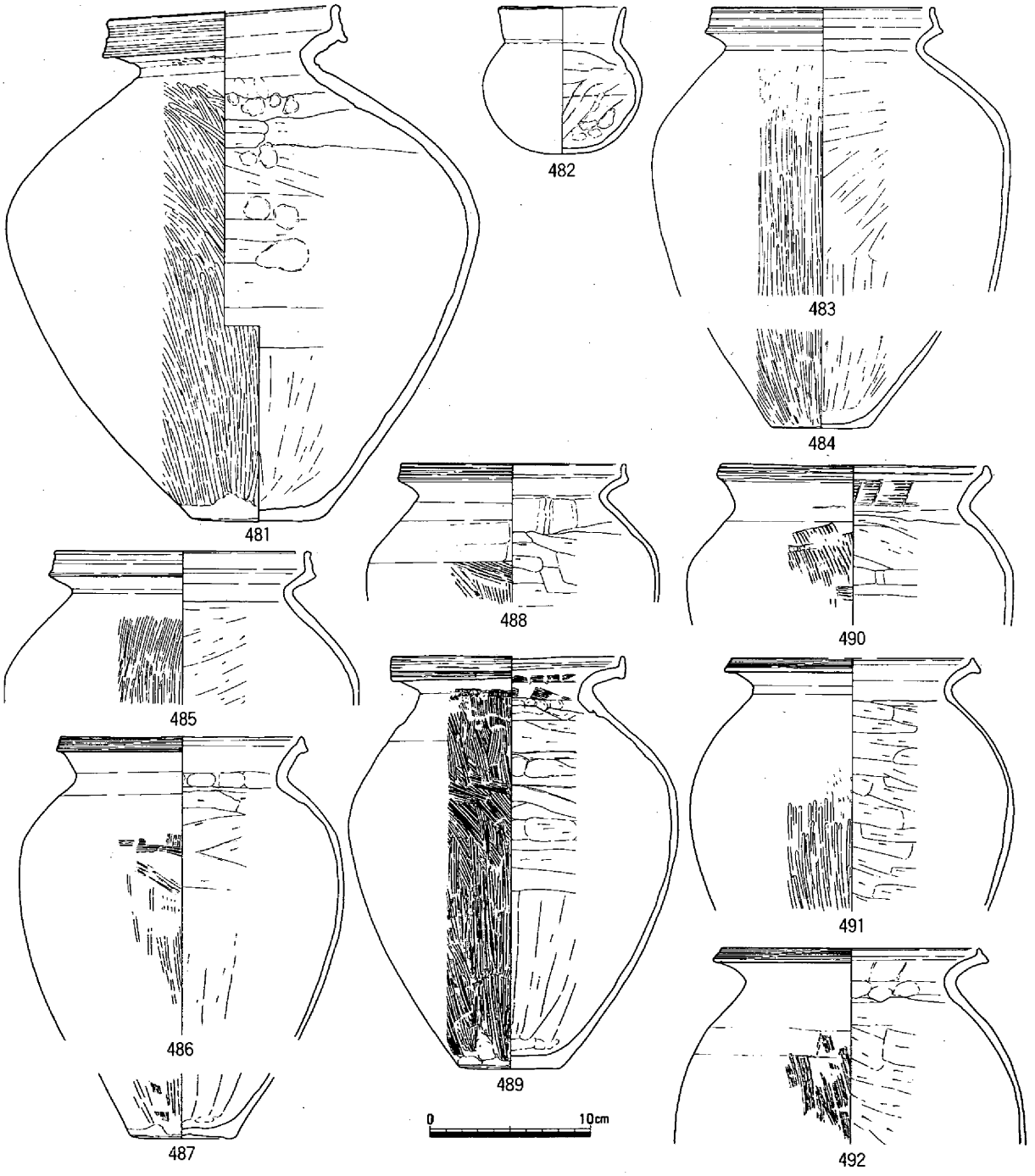
第85図　性格不明遺構出土遺物(1/2・1/4)

（８）土器溜り

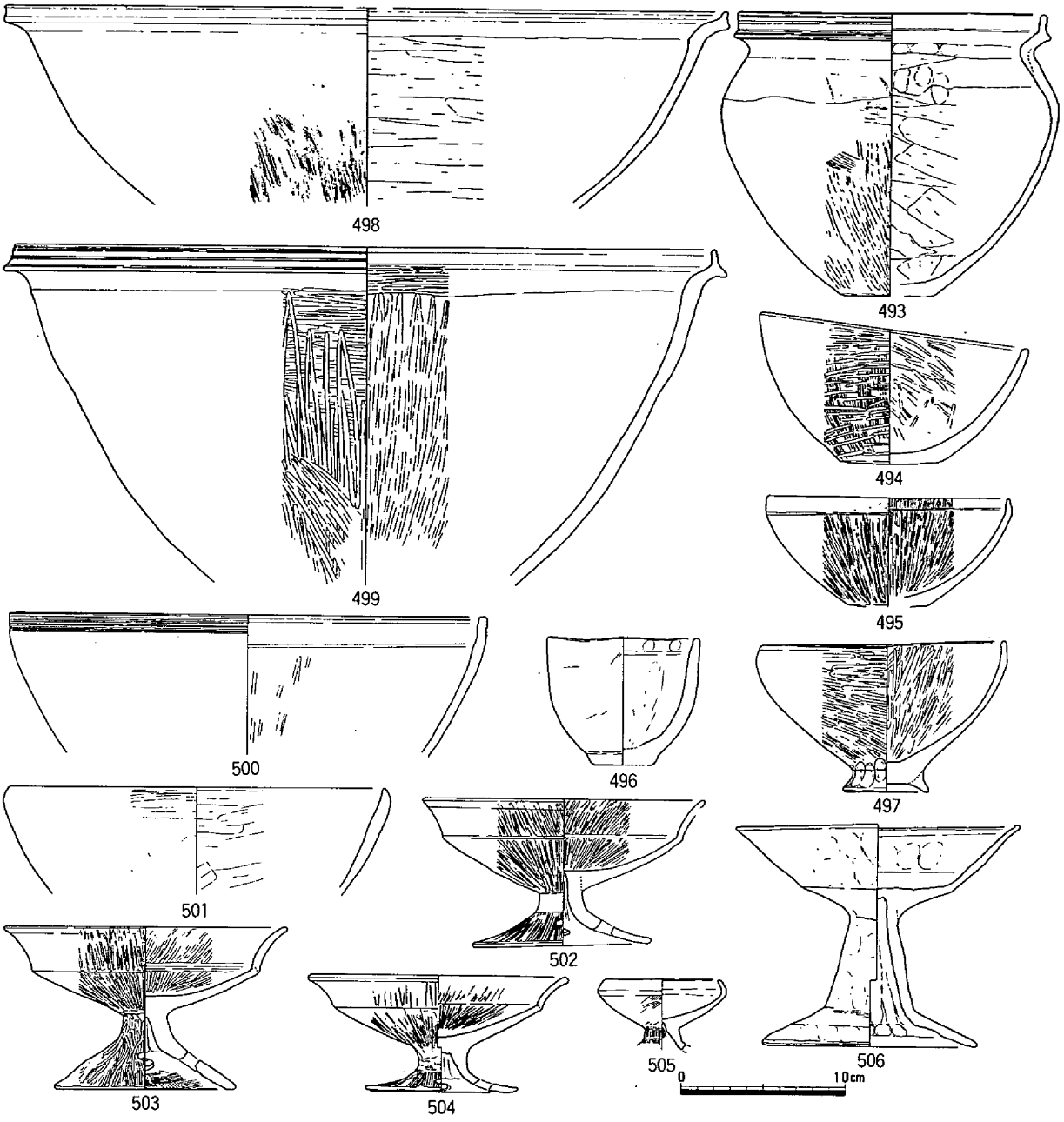
土器溜り－１（第86・87図，図版16）

22Ｐ区北東の調査区北端に位置する。北側溝の掘り下げと試掘トレンチ１の清掃中に、その間１ｍ前後の範囲に土器がまとまって出土した。このことから何らかの遺構があると考え精査したが、掘り込み等土器の所属する遺構は検出されなかった。

出土した土器はコンテナ４箱ほどで完形もしくは完形に復元できるものが多い。**481・482**は壺である。**481**は口径14.0cm，器高31.3～32.2cm，底径8.0cmで、口縁の拡張部には擬凹線がみられる。**483**



第86図　土器溜り－１出土遺物①(1/4)



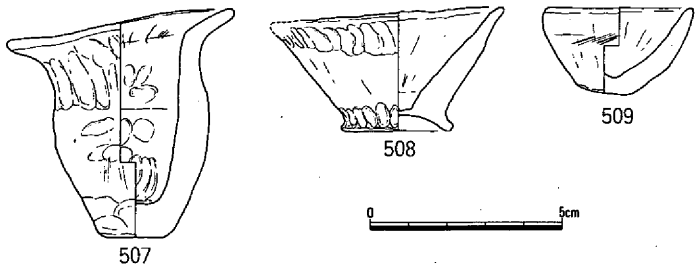
第87図　土器溜り－１出土遺物②(1/4)

～**493**は甕で、**483**・**484**と**486**・**487**はそれぞれ同一個体と思われる。甕の口縁部形状には、大きく上方に拡張するもの**483**・**485**・**488**・**490**・**493**とわずかに上方に拡張するもの**490**、上下に拡張し端面をもつもの**486**・**491**・**492**がある。いずれも端面に擬凹線が見られる。**488**の肩部にはハケメを消すように横方向の板状工具によるナデを施している。**493**は口径18.4cm，器高17.2cm，底径5.6cmとほかの甕と比較して器高が低く、外面全体に煤が付着し被熱痕が見られる。**494**～**497**は小形鉢、**498**・**499**は口径40cm以上の大形鉢、**500**・**501**は中形鉢である。**500**の口縁部外面には細かい擬凹線状条線が見られる。**502**～**506**は高杯である。**506**は土師器で長脚だが、弥生土器で図示していないものも含めて長脚のものはまったくない。また、杯部の形状では**505**以外は全て口縁部が外反するものである。

これらの時期は**482**・**506**は古墳時代中期の土師器で混入品と考えられ、そのほかの土器についての一括性については慎重を記す必要があるが、伊・弥・後Ⅲ期に属すると判断される。　　(杉山)

土器溜り－２（第88図，図版19）

23Ｐ区の南東位置する。平面形は不整形で、10cm前後の浅い皿状の断面形を呈し、この中に炭の混じった黒色土が堆積していた。



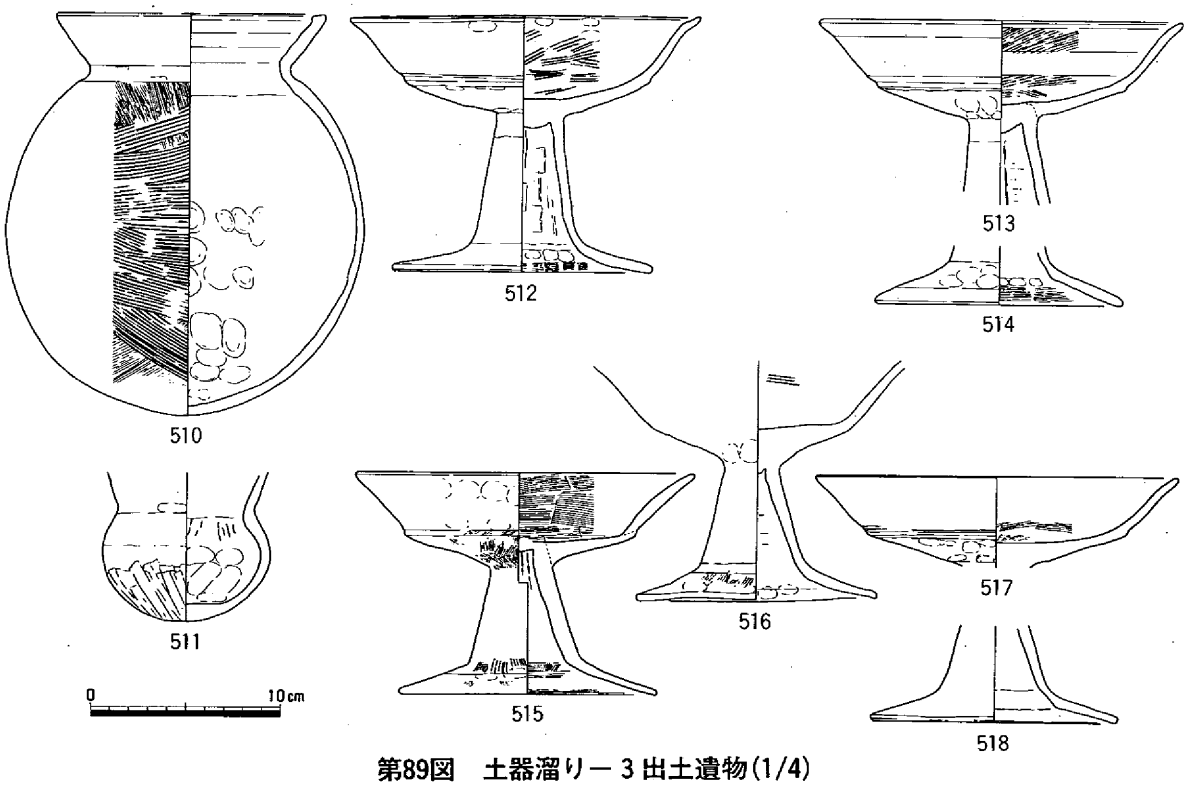
第88図　土器溜り－２出土遺物(1/2)

507～**509**は手捏ねのミニチュア土器で、一部欠損しているもののほぼ完形品である。**507**は口径5.8cm，器高6.0cm，底径1.6cmの甕形、**508**は口径6.1cm，器高3.2cm，底径2.6cmの台付鉢形、**509**は口径3.7cm，器高2.3cm，底径1.4cmの鉢形である。これらの時期は、埋土中から短脚の高杯の脚部が出土していることから、伊・弥・後Ⅳ期頃と考えられる。（杉山）

土器溜り－３（第89図，図版16）

22Ｐ区南西部、竪穴住居－３のすぐ北側に位置する。遺構検出のための掘り下げ中に約50cm程の範囲に折り重なるように集中して土器が出土した。このため、周辺を精査したが土器の帰属する遺構は検出できなかった。

510は口径14.0cm，器高21.1cmの甕で、体部外面には粗いハケメ、内面には押圧痕が見られる。口縁端部は内傾する面をもち内側にわずかに突出している。**511**は小形壺で口縁端部は欠損している。底部はケズリ痕を明瞭に残す。**512**～**518**は高杯で、**513**・**514**と**517**・**518**はそれぞれ同一固体と思われる。杯部の形状は口縁端部が外反するもの**512**・**513**と立ち上がり部が外反するもの**515**～**517**の二者が見られる。完形のもので**512**は口径18.4cm，器高13.6cm，脚径13.4cm、**515**は口径17.9cm，器高11.7cm，脚径13.4cmである。これらの時期は古墳時代中期と考えられる。（杉山）



第89図　土器溜り－３出土遺物(1/4)

土器溜り－４（第90～96図，図版７・17・20）

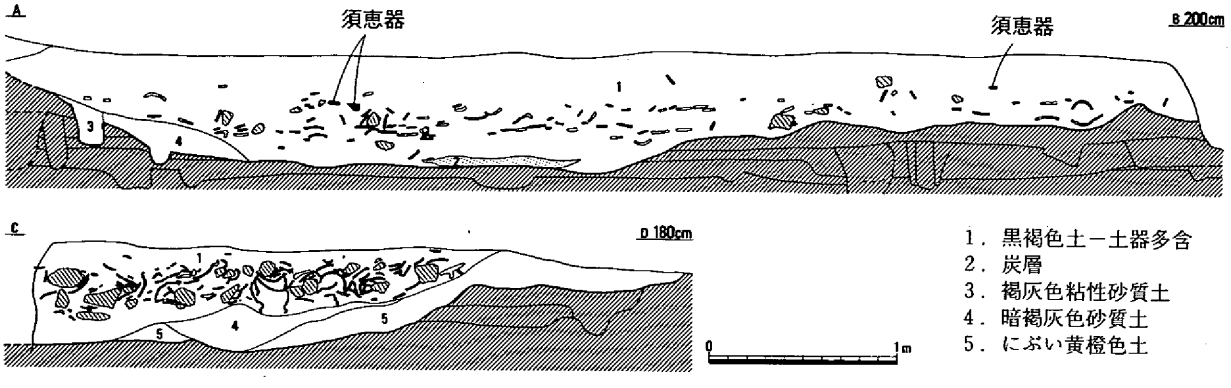
22Ｑ区北西部で性格不明遺構の上層に形成され、さらに南側の調査区外に広がっている。

埋土は５層に分層される。Ａ－Ｂ断面の海抜150㎝前後の高さでは奈良時代の須恵器が出土し、土器溜りに埋積した土器がこの高さ付近では砕片になっているものが多い。このことから奈良時代頃に大幅に削平されていると推定される。また、Ｃ－Ｄ断面で性格不明遺構の底面をえぐるように第５層が堆積していることから何らかの理由で性格不明遺構が廃絶し、その窪地に遺物が投棄されたと推察される。遺物のほとんどは第１層中に炭・焼土と人頭大の被熱して赤化した岩に混じって出土した。

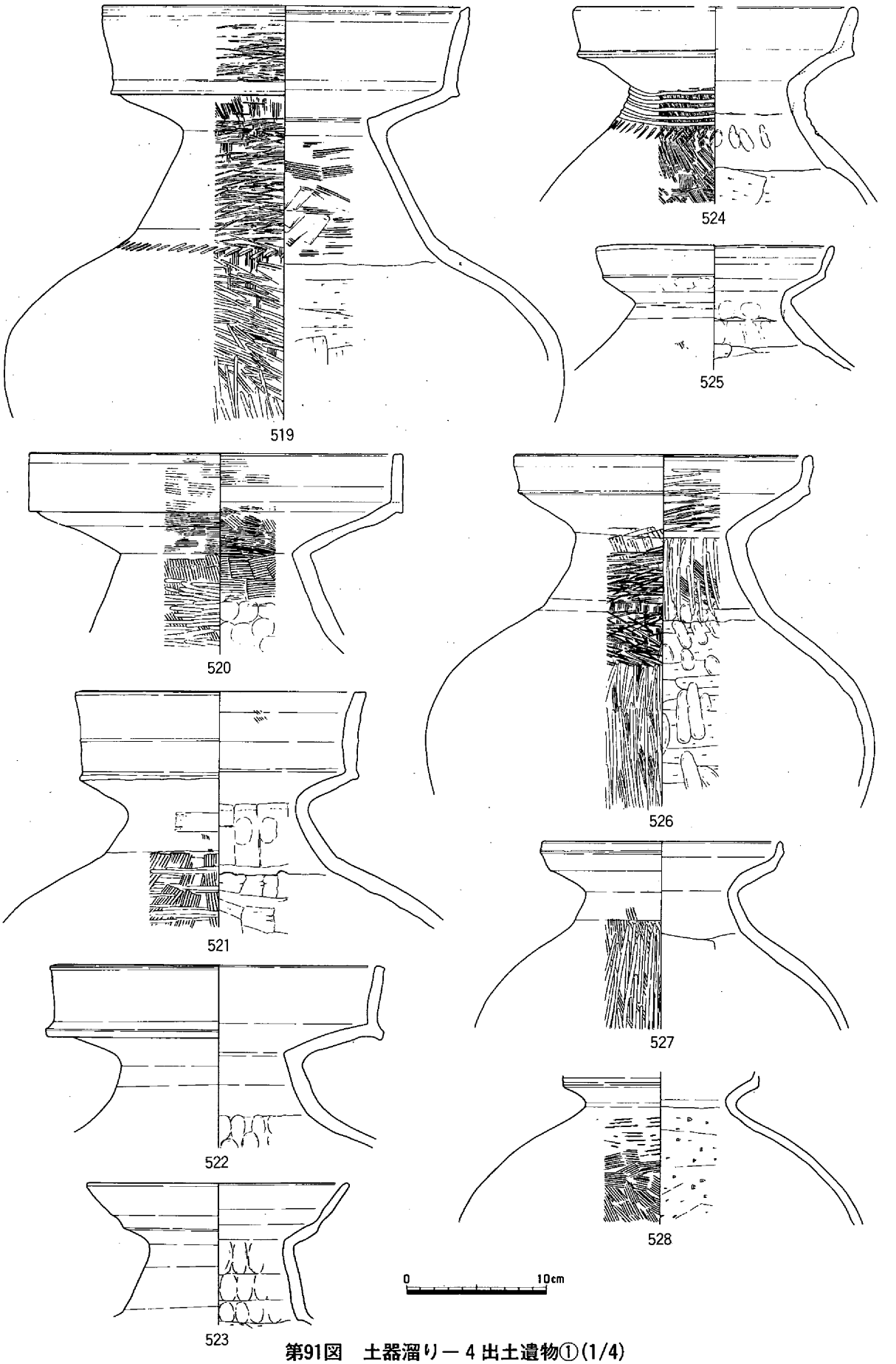
519～**551**は壺で、**534**は白色で胎土に５㎜前後の石英粒を多く含む。口縁部外面には二枚貝と竹管による施文が見られ、形状的特徴から西部瀬戸内系と判断される。**536**は表面の摩滅が著しいが、外面に綾杉文を中心に左右に櫛描波状文を施している。**537**は褐色で外面に粗いハケ調整を施した後に櫛描波状文とその上下に竹管文とヘラによる刻みを施している。施文の特徴から備後南部系と判断される。**542**と**549**は白色で焼きが甘い。**542**の肩部には櫛描波状文、**549**の肩部には刻み文が見られ、両者とも山陰系と判断される。**543**・**544**は同一個体の可能性が高く、これらと**546**は畿内系である。**551**は褐色で胎土に角閃石を多く含む讃岐産の壺である。**552**～**566**は甕で、**553**は最下面で完形で出土した。肩部に横に２個の粒状刺突文がある。**554**は肩部に縦に３個の粒状刺突文がある。**556**・**561**・**562**の外面にはタタキが見られる。**557**は橙色で焼きが、良く内傾気味の口縁部を持つ備後南部系である。**565**は受け口状の口縁部で小片のため器形は不明だが、他地域からの搬入品である。**566**は橙色の台付甕の台で、胎土が吉備・東海とは異なることから畿内周辺部の可能性もあるが、産地は明確でない。**567**～**588**は高杯で**580**は精製の胎土で外面に竹管文と波状文が見られる。**589**～**630**は鉢で、**618**～**622**は製塩土器の脚である。**623**の口縁部外面には波状文の痕跡がわずかに見られる。**631**～**633**は器台、**634**は支脚、**635**は蓋のつまみである。

Ｃ22は直径約2.5㎝の土製紡錘車である。**Ｃ23**は不明土製品である。円柱状の棒で平らな先端部の片側に３条の刻みが見られる。類似品に静岡県坂上遺跡から出土している祭祀系遺物がある。**Ｃ24**・**Ｃ25**は円板形土製品である。**Ｓ11**は有溝石錘である。**Ｍ５**は袋状の鉄器で器種は不明である。土器溜りの埋土中から出土したためここで報告したが、該期にこの鉄器に該当するものが見られず、土器溜りの上面にピットが存在したことから、古代以降の混入品の可能性もある。

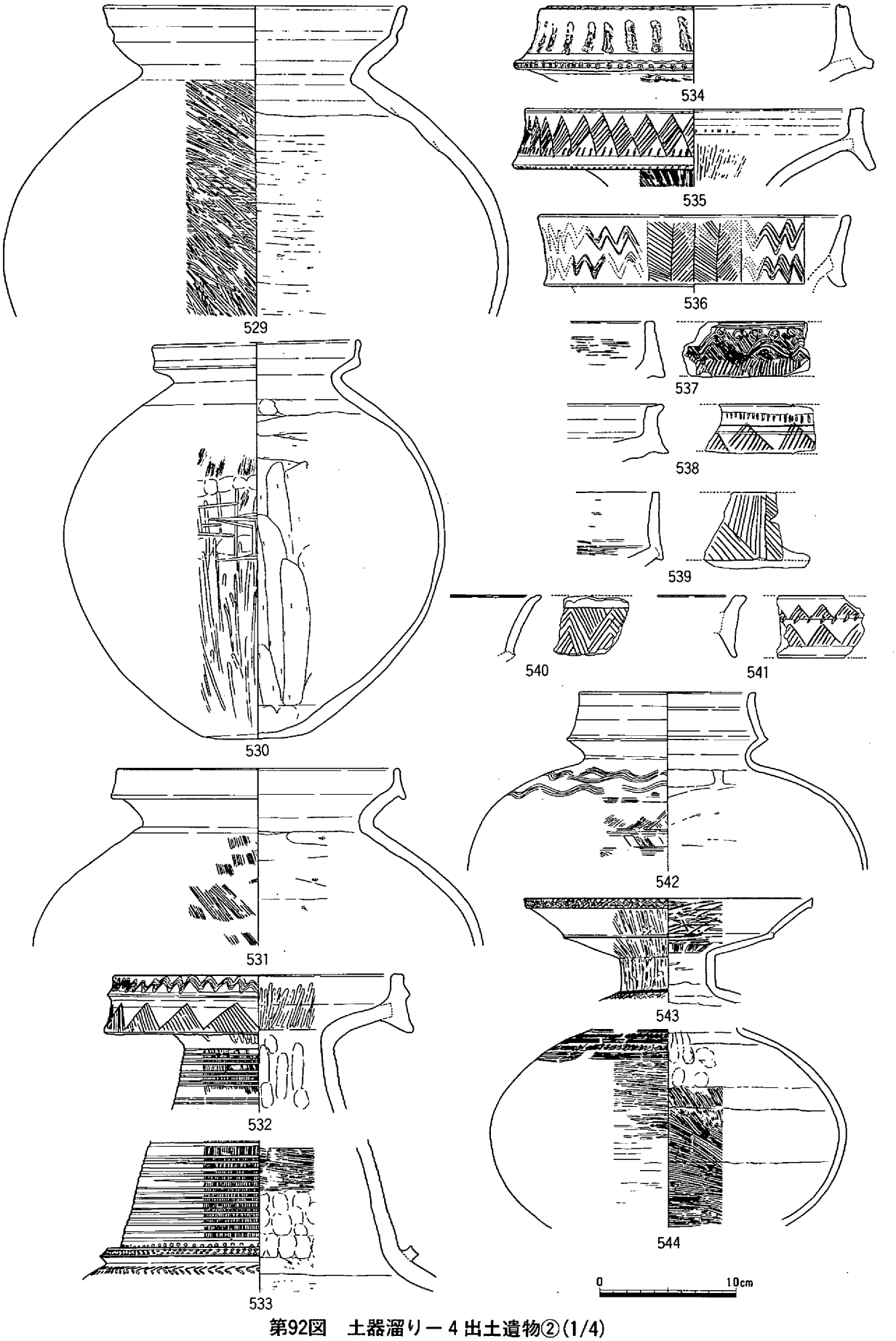
土器溜りの形成時期は、出土した土器にかなりの時期幅が見られるが、伊・弥・後Ⅳ期から伊・古・前Ⅰ期頃を中心に土器等が遺棄されたと考えられる。（杉山）



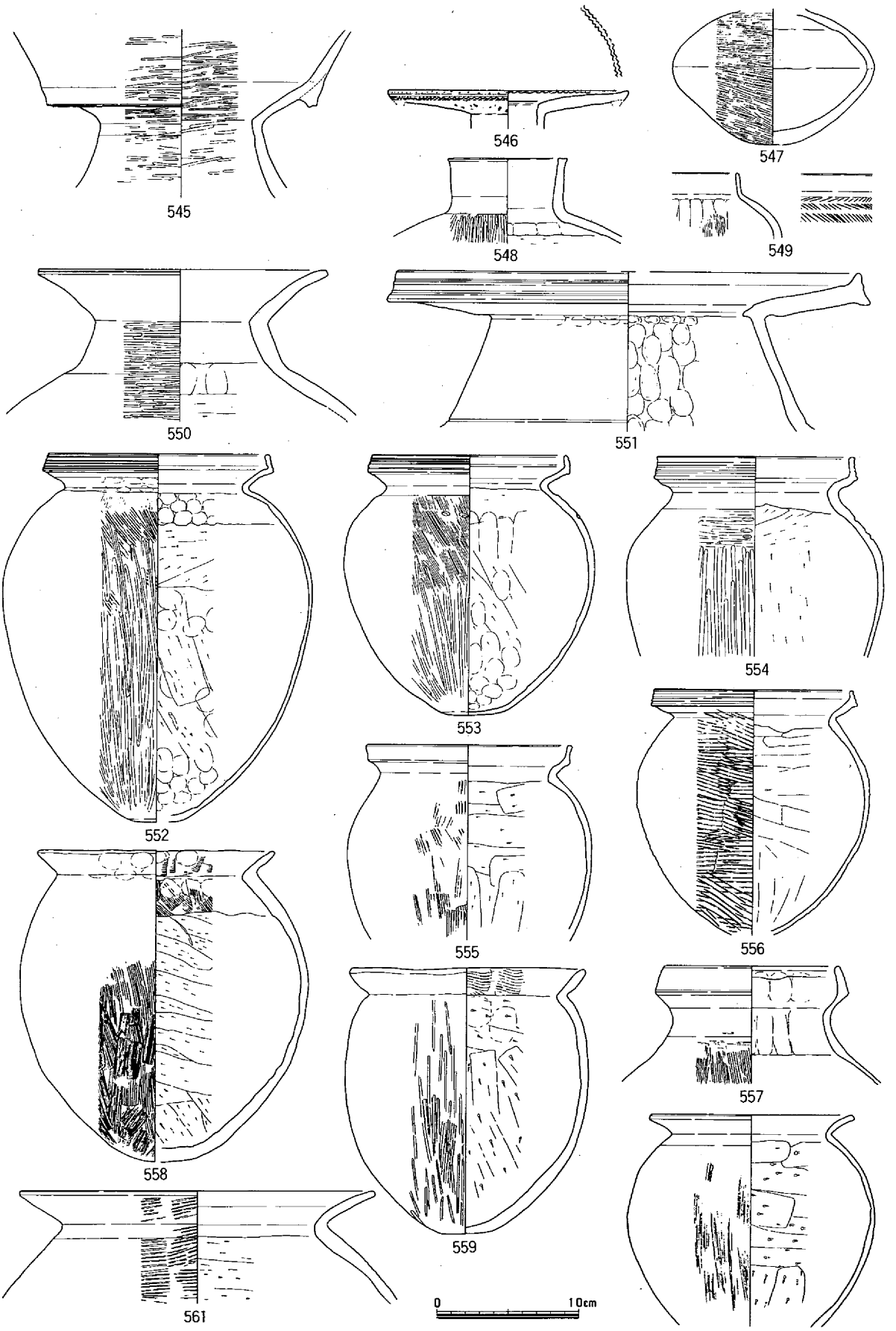
第90図　土器溜り－４断面(1/40)



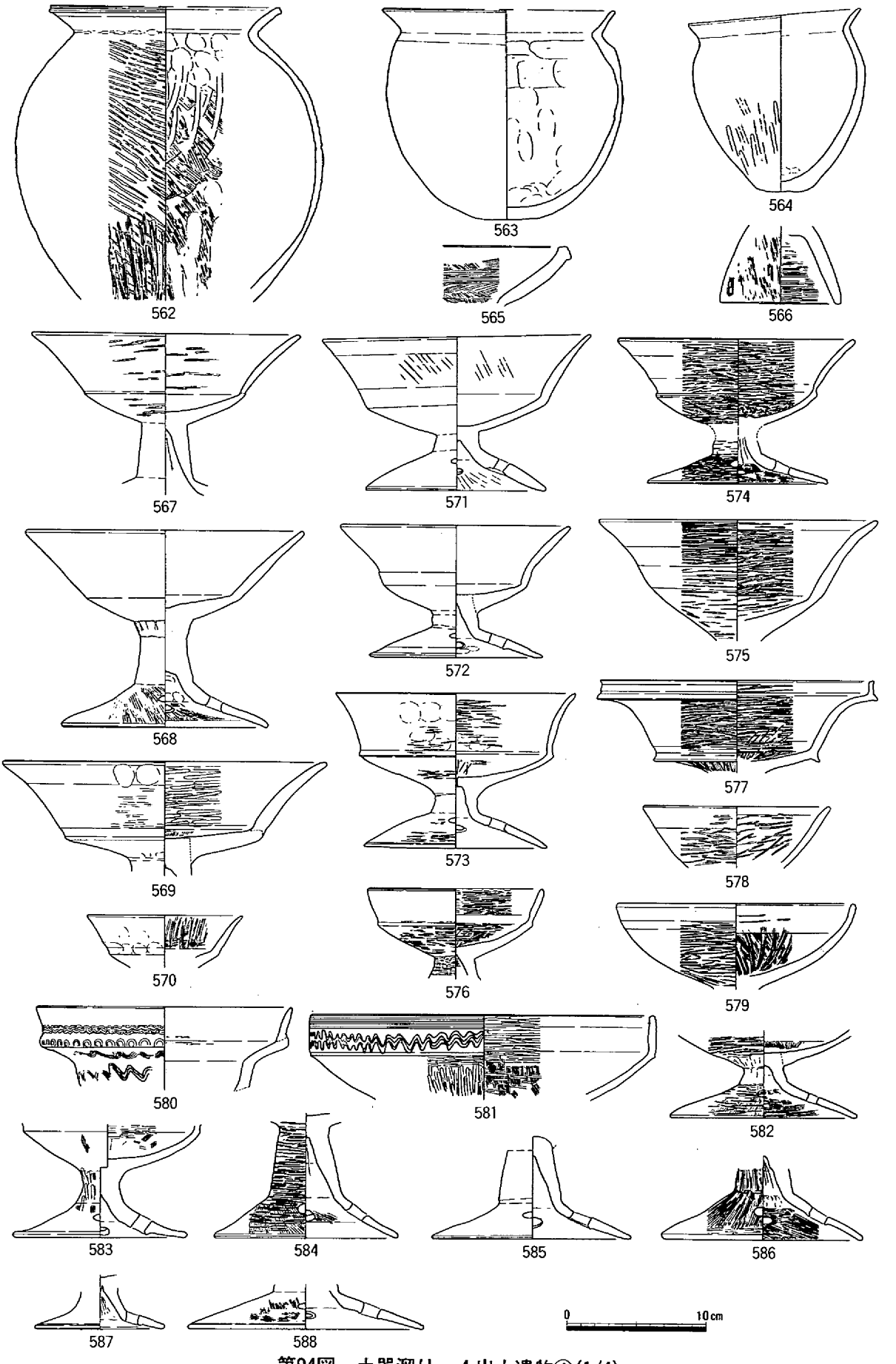
第91図　土器溜り－４出土遺物①(1/4)



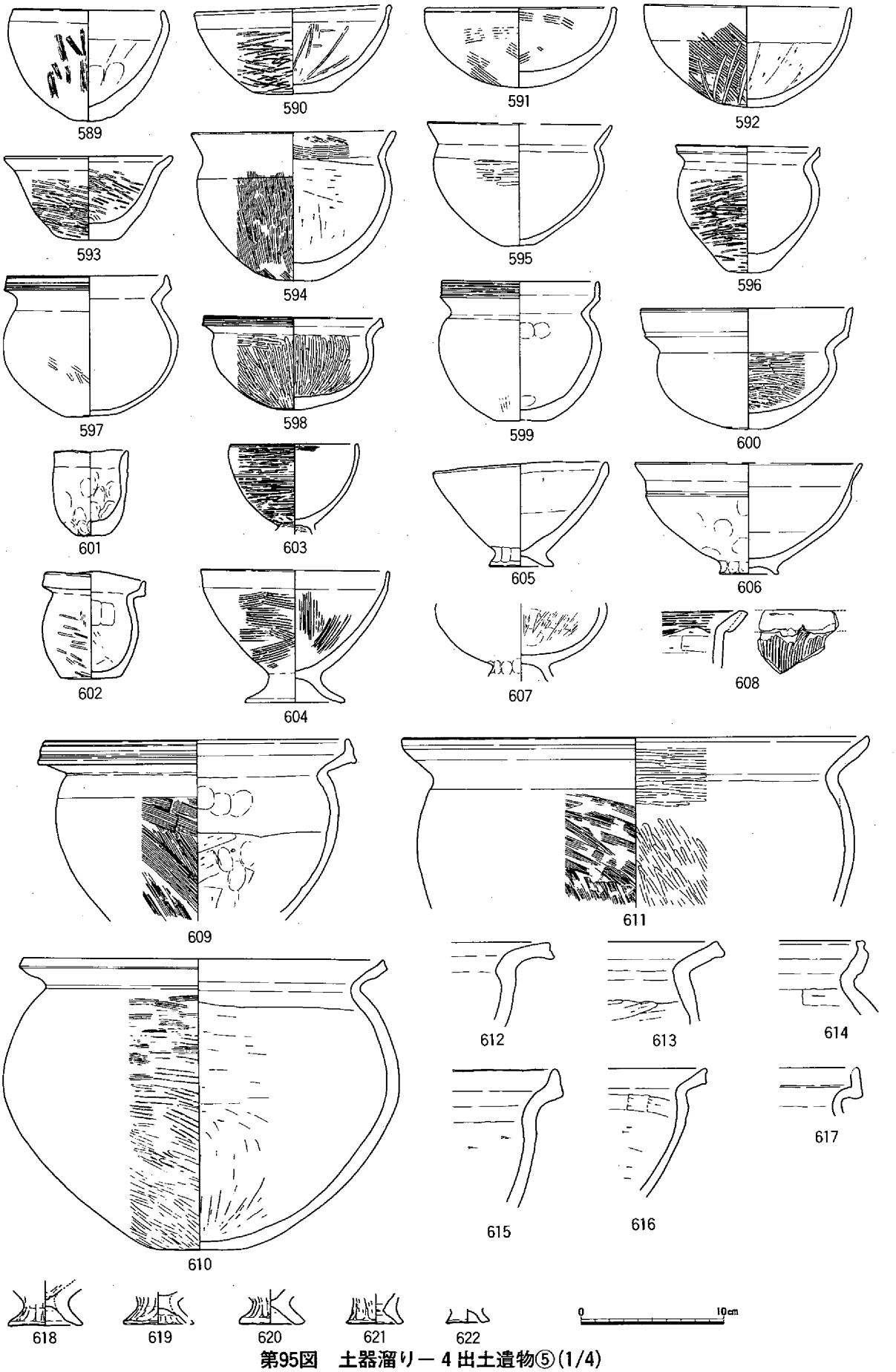
第92図　土器溜り－４出土遺物②(1/4)



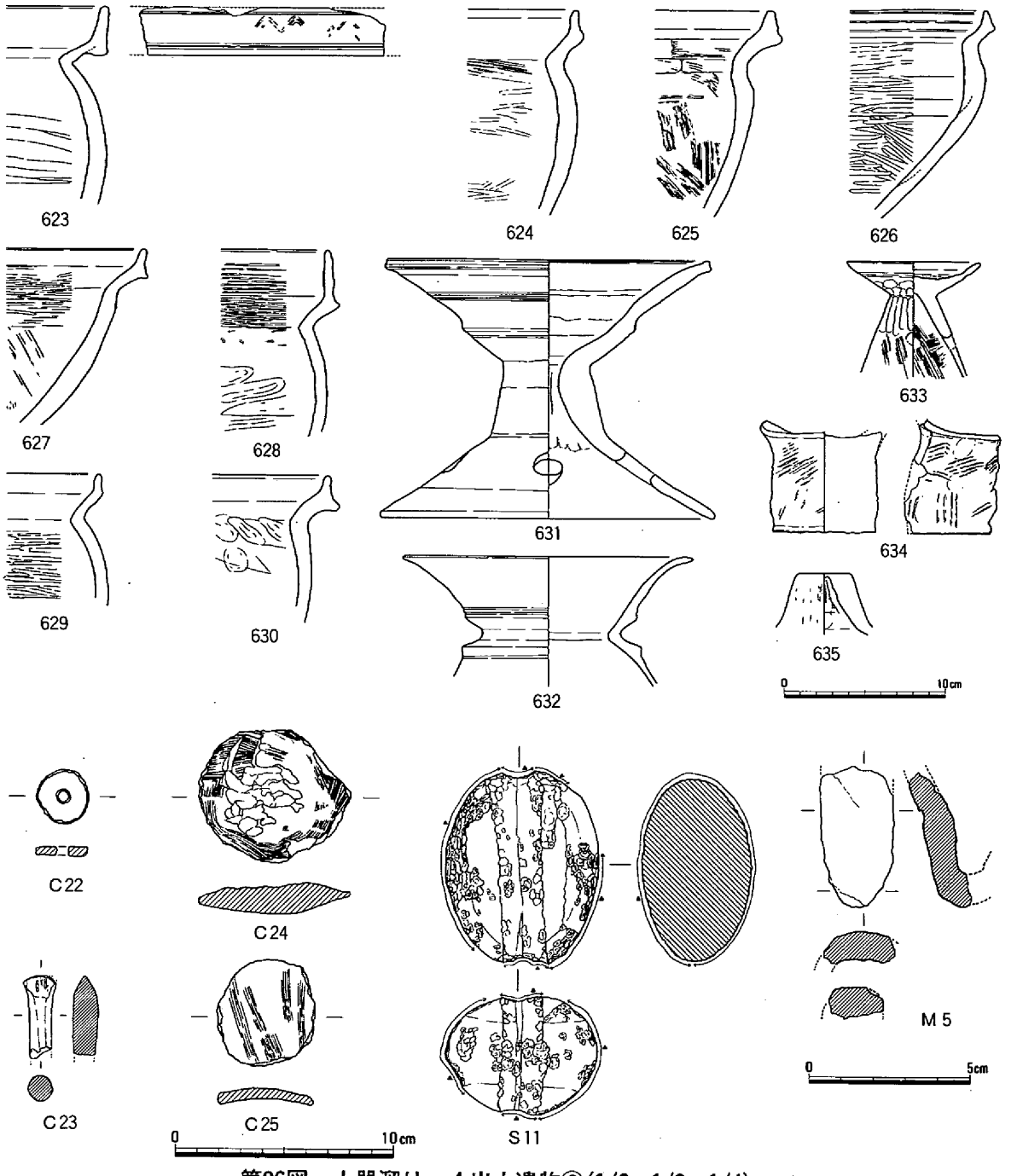
第93図　土器溜り－４出土遺物③(1/4)



第94図　土器溜り－４出土遺物④(1/4)



第95図　土器溜り－４出土遺物⑤(1/4)

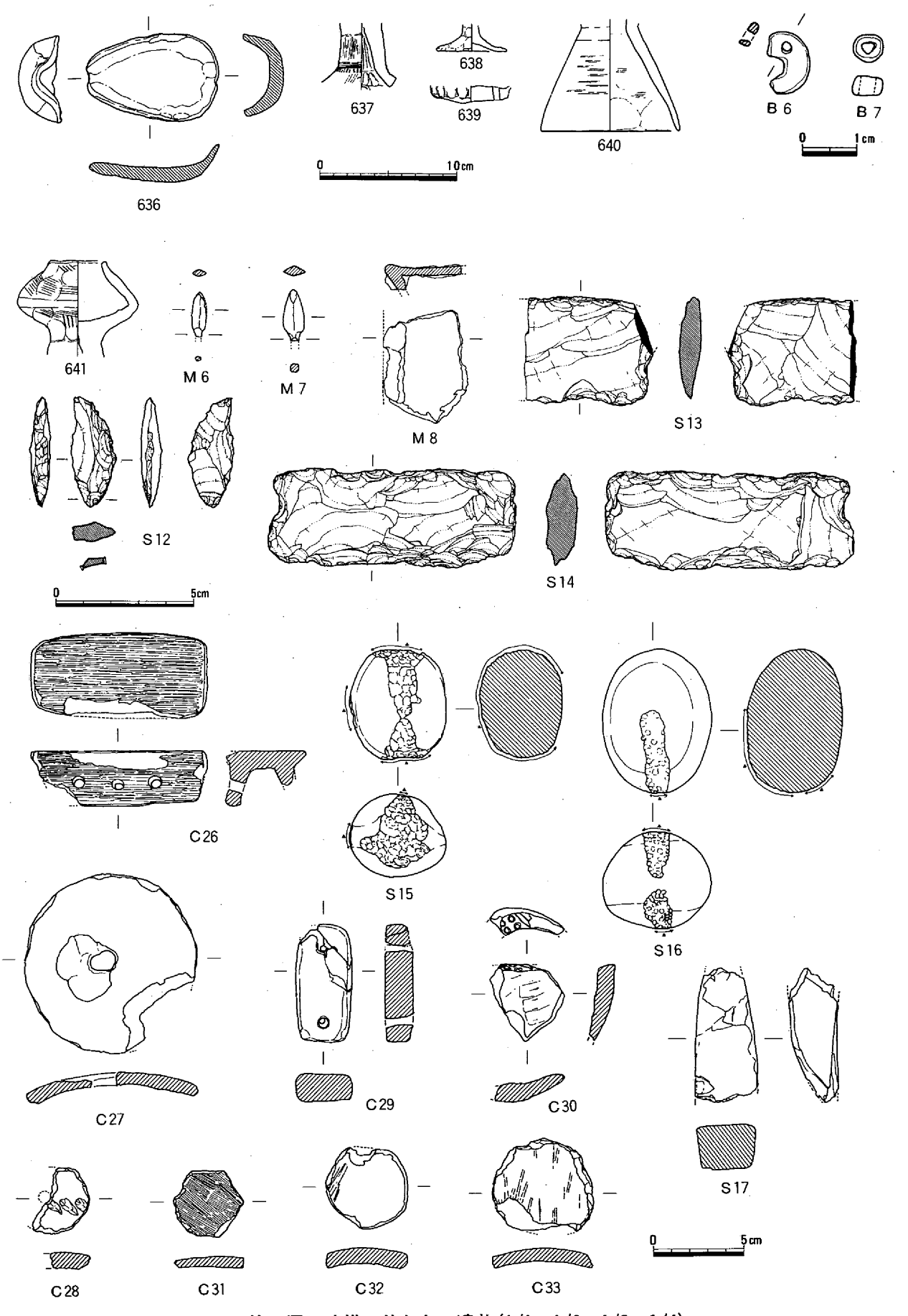


第96図　土器溜り－４出土遺物⑥(1/2・1/3・1/4)

（９）遺構に伴わない遺物（第97図，図版17・19・20）

636は22Ｐ区南部で出土した片口鉢である。被熱痕は全くないが、大きさに比して厚くしっかりした作りである。時期は明確でないが、胎土と色調から古墳時代前半頃であろうか。この近くからガラス質滓が出土しており、何らかの関連があるかもしれない。**637**は弥生土器の高杯、**638**・**639**は弥生土器の蓋、**640**は土師器の器台である。**641**はミニチュアの台付壺である。**Ｍ８**は鋳造鉄器の小片で全形は不明だが袋状鉄斧の袋部隅と思われる。**Ｃ26**は土器溜り－４のすぐ北東から出土した腰掛け形土製品である。平らな板部の長辺に外方に踏ん張るように脚がつく。**Ｃ30**は不明土製品で、端部の平面に竹管文と沈線が見られる。

（杉山）



第97図　遺構に伴わない遺物(1/1・1/2・1/3・1/4)

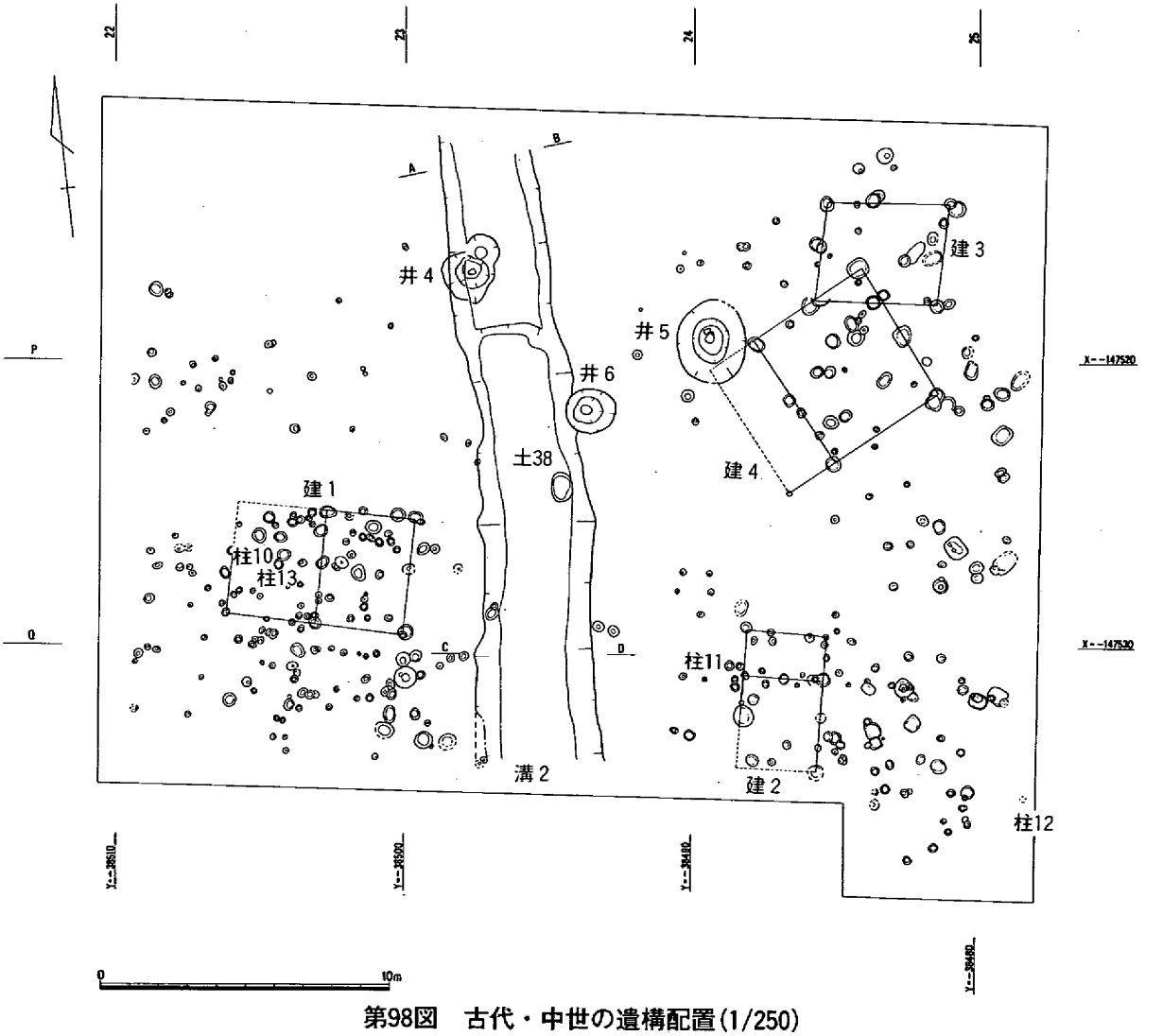
第３節　古代・中世の遺構と遺物

（１）概　要

ここでは、古代から中世の遺構と判断された掘立柱建物４棟、井戸３基、土壙１基、溝１条と柱穴４基を報告する。

遺構は、前代のものと混在する状況で検出されたため、出土遺物、遺構埋土の状況等から該期と判断したが、古代と中世を厳密に分別することはできなかった。掘立柱建物は、調査中に確認した掘立柱建物－２・３以外は整理作業中に図上で復元を行ったが、22Ｐ・Ｑ区、24Ｏ区、24Ｑ区の３地区に柱穴が集中する傾向があり、報告した以上に掘立柱建物が存在する可能性が高い。

遺物は、遺構検出中に14世紀代を中心として８～13世紀のものも調査区全体で散見されるが、主には22Ｐ・Ｑ区でまとまって出土する傾向が見られた。また、15世紀以後の遺物がほとんど皆無であることから、遺跡の営まれた時期は14世紀代までであると考えられる。　（杉山）



第98図　古代・中世の遺構配置(1/250)

（２）掘立柱建物

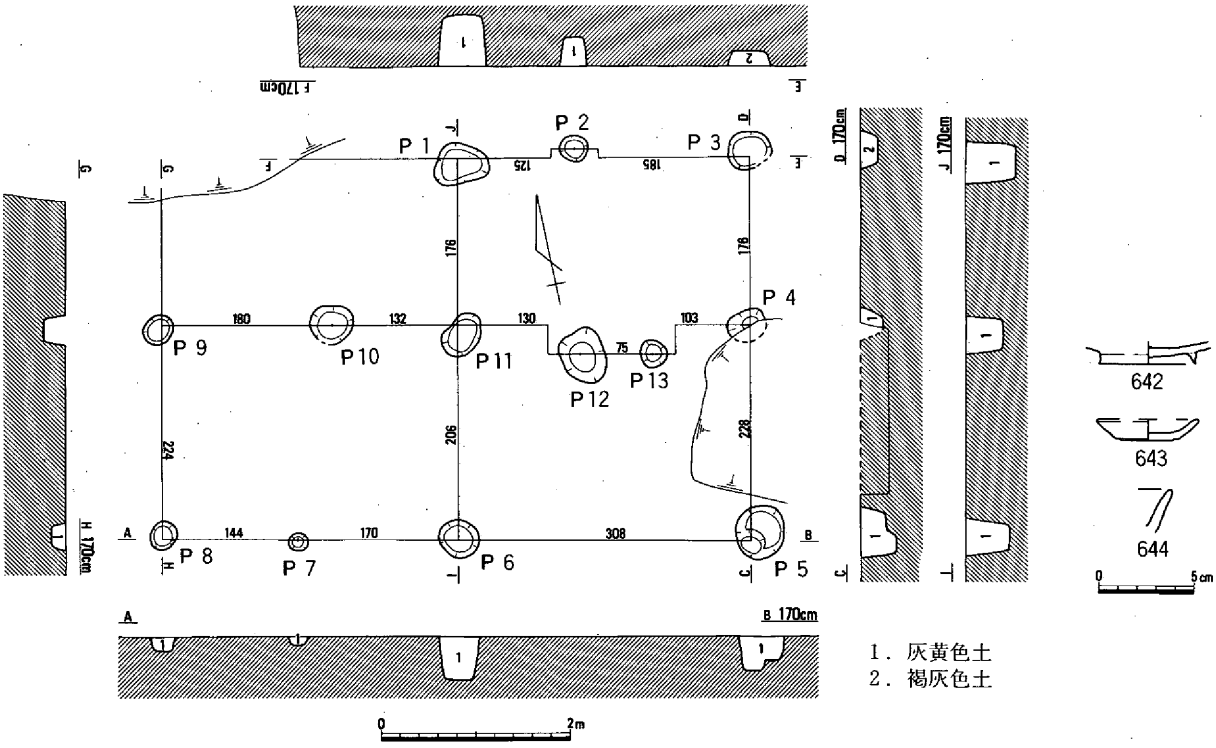
掘立柱建物－１（第99図）

22Ｐ区に所在する東西棟の総柱建物である。部分的に柱穴が検出されていないが、４×２間と推察され、棟方向はＮ－84°－Ｗである。

柱間距離は、桁行622cmで桁間125～308cm、梁行404cmで梁間176～228cmを測るが、このうち桁間の308cmを測るＰ5とＰ6の間には本来的には柱穴が存在していたと考えられる。柱穴は円形もしくは不整形を呈し、直径22～45cm、深さ５～46cmとまちまちである。

この建物の南側には棟方向に近似する方位を示す柱穴列が見られ、直接的な関連性は明確にしえなかったが、縁、柵といった施設になる可能性もある。

出土遺物は柱穴中から土師器の高台付椀**642**、土師器小皿**643**、瓦器**644**がある。これらの遺物から建物の時期は14世紀初頭頃と判断されるが、包含層中の出土遺物や周辺の遺構状況から14世紀後半と考えたい。（杉山）

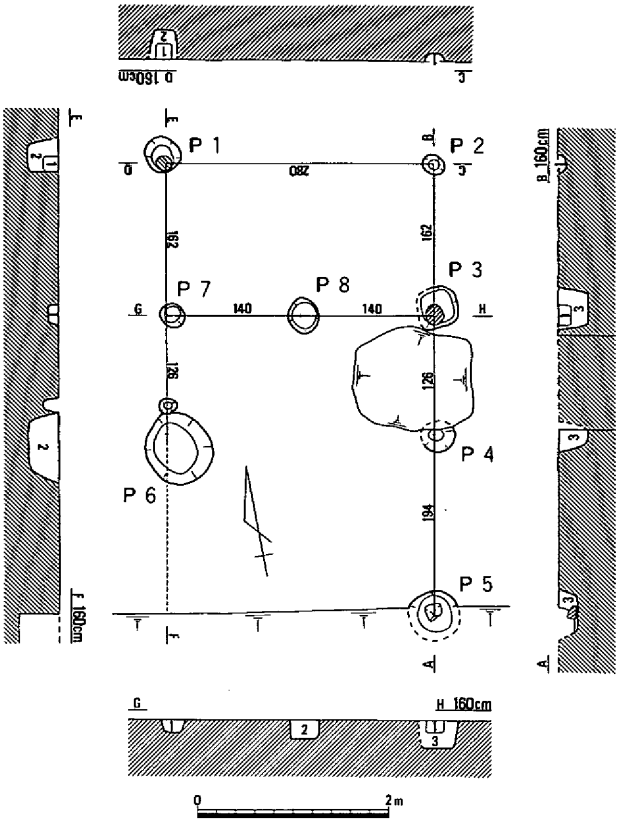


第99図　掘立柱建物－１平・断面(1/80)と出土遺物(1/4)

掘立柱建物－２（第100図）

24Ｑ区に所在する南北棟の側柱建物である。南西隅の柱穴は検出できなかったが、３×２間で棟方向はＮ－４°－Ｅである。

柱間距離は、桁行580cmで桁間126～194cm、梁行280cmで梁間140cmを測る。柱穴は円形と方形がみられ、径110cmを測るＰ6以外は直径36～66cmと比較的まとまっている。深さは15～46cmとまちまちであるが、柱痕跡を確認しているＰ1とＰ3の土層をみると掘り方の深さが約46cm、柱痕跡の深さ約20cmである。このことからＰ2、Ｐ7、Ｐ8は柱痕跡のみの検出であり、本来的にはひとまわり大きい掘り



1．黄灰色微砂　　3．黒褐色微砂
2．暗灰黄色微砂

第100図　掘立柱建物－２平・断面(1/80)

方が存在していたと考えられる。Ｐ5の底面には根石と思われる角礫がみられる。

柱穴からの出土遺物はみられないが、柱穴埋土の色調と棟方向から掘立柱建物－１と同時期と判断される。　　(杉山)

掘立柱建物－３（第101図）

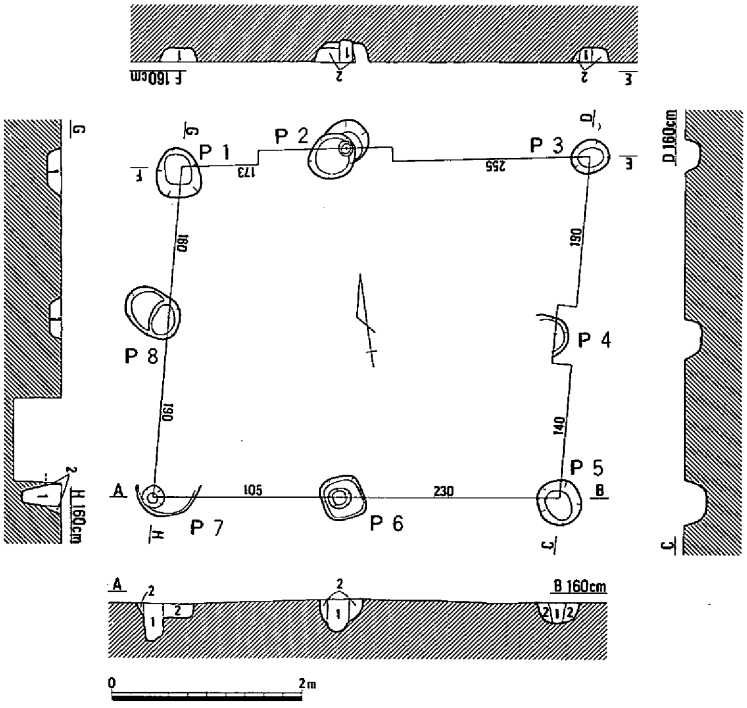
24Ｏ区に所在する東西棟の２×２間の側柱建物で、棟方向はＮ－88°－Ｗである。

柱間距離は桁行335～428cmで桁間105～255cm、梁行330～350cmで梁間140～190cmで、やや歪な平面形を呈している。柱穴は円形と方形がみられ直径は30～64cm、深さは20cm前後である。柱痕跡はＰ2、Ｐ3、Ｐ5～Ｐ7で確認され、その直は最大で22cmである。出土遺物は柱穴から土師器椀の口縁部小片**645**と鉄製鉈**Ｍ９**が出土している。

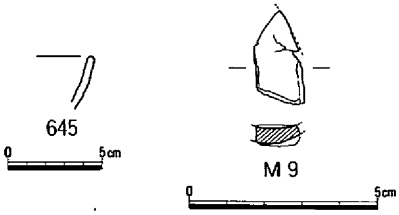
建物の時期は出土土器から中世と判断され、棟方向が掘立柱建物－１・２と近似することから同時期と考えられる。　　(杉山)

掘立柱建物－４（第102図）

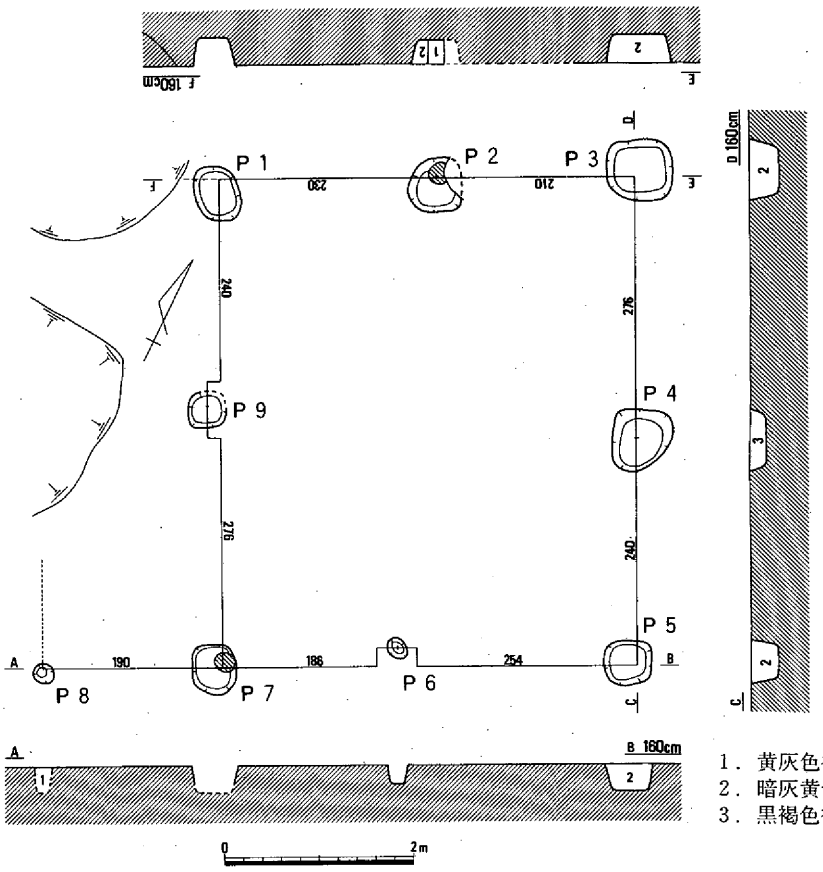
24Ｏ区と24Ｐ区にまたがって所在する東西棟の側柱建物で、棟方向はＮ－34°－Ｗである。２×２間の身舎の西側には、北西部分の柱穴が井戸－６などによって掘削され検出されていないものの、１間分の庇が付いていたと考えられる。庇を含めた柱間距離は、桁行630cmで桁間186～254cm、梁行516cmで梁間240～276cmを測る。柱穴はＰ6とＰ8以外は方形かそれに近い形状をしており、その規模



1．黒褐色土　　2．褐灰色土



第101図　掘立柱建物－３平・断面(1/80)と出土遺物(1/2・1/4)



第102図　掘立柱建物－４平・断面(1/80)

は直径40～68cmで深さ16～30cmである。柱痕跡を確認しているＰ2の状況から柱の直径は約24cmと判断され、Ｐ6とＰ8は柱痕跡のみで掘り方が未検出の可能性が高い。

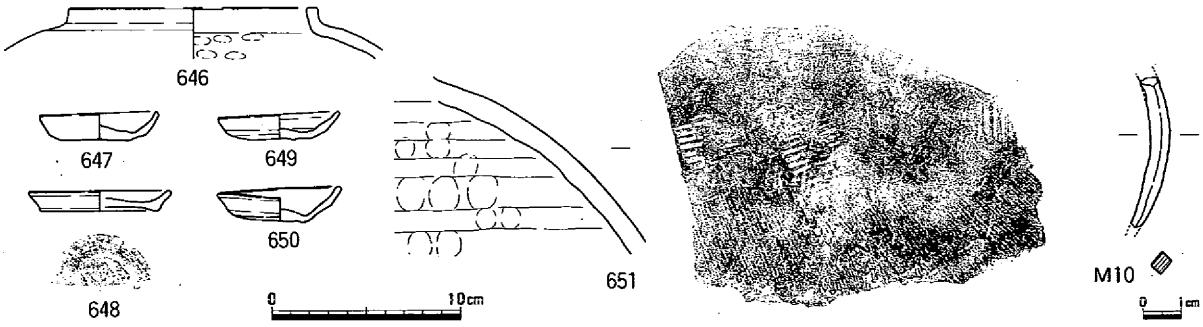
出土遺物はなく建物の時期は明らかではないが、棟方向が中世の建物と異なっていること、柱穴の掘り方が方形を意識していること、包含層から古代の遺物が出土していることなどから建物の時期は古代と推察される。　（杉山）

（３）柱　穴（第103図）

ここでは、建物にまとめることはできなかった柱穴の埋土中から出土した遺物を紹介する。

646は柱穴－10から出土した須恵器の短頸壺である。**647**～**650**は柱穴－11からまとまって出土した土師器の小皿で一部欠損はみられるもののすべてほぼ完形である。この柱穴－11は掘立柱建物－２のすぐ西に位置していることから、この建物と何らかの関係があるものと推察される。**651**は柱穴－12から柱を抜き取った後に埋められた状態で出土した東播系須恵器の甕の体部片である。外面には平行の叩き板の痕跡が見られ、その上にハケメが残っている。胎土には砂粒を多く含み、焼成もやや不良である。**M10**は鉄製の釘で柱穴－13から出土している。

これらの遺物は、**M10**の鉄釘は時期が明確でないが、**646**は奈良時代、**647**～**651**は室町時代と判断される。　（杉山）



第103図　柱穴10～13出土遺物(1/2・1/4)

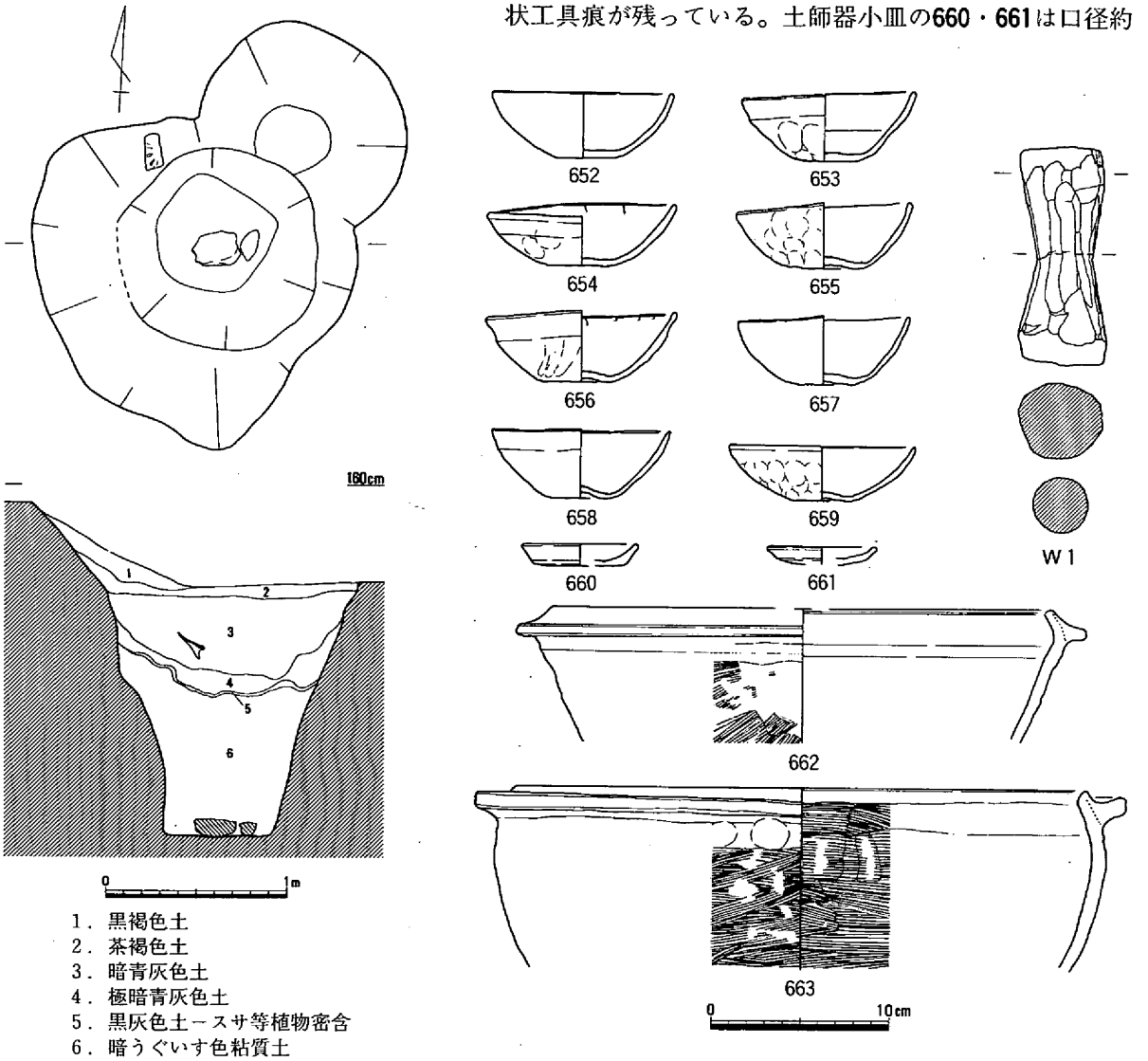
（４）井　　戸

井戸－４（第104図，図版８・20）

23Ｏ区で溝－２の西岸に位置する。溝－２を調査中に検出したため切り合い関係は明確ではないが、調査時の状況から溝－２の掘削に伴って廃棄されたと判断している。

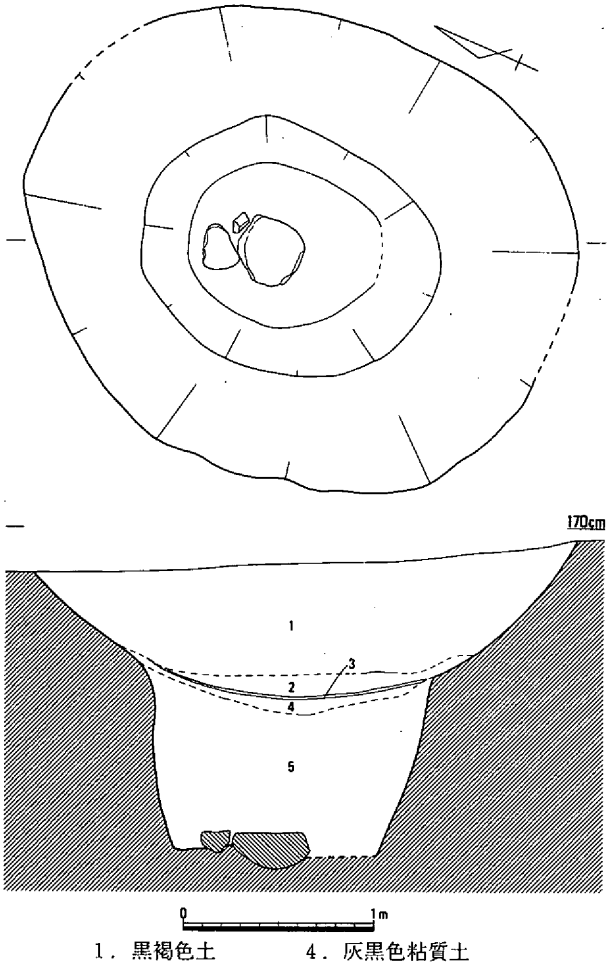
平面形は、長軸240cm、最大幅186cmの瓢箪型を呈しているが、北東部の張り出しは井戸の掘削時の掘り方と考えられ、使用時には埋められて径182×186cmの円形を呈していたと考えられる。深さは186cmを測り、掘り方の底面はこれより25cm浅い。井戸の底面中央には約25cm大の岩が据えられている。埋土は６層に分層され、第５層が植物繊維層であることから第６層については断定できないが、第５層以上は人為的に埋めていることがわかる。

遺物は、第３・４層を中心に出土している。**652**～**659**は土師器無高台の椀、**660**・**661**はヘラ切りの土師器小皿、**662**・**663**は瓦質鍋、**Ｗ１**は木錘である。土師器椀はほぼ完形品で、平底とやや凹み底の二者に大別されるが、いずれも口径9.5～10.5cm、器高は**653**が5.0cmと高いものの3.5～4.0cmとまとまった法量を示している。また、**654**・**656**は口縁部に板状工具痕が残っている。土師器小皿の**660**・**661**は口径約



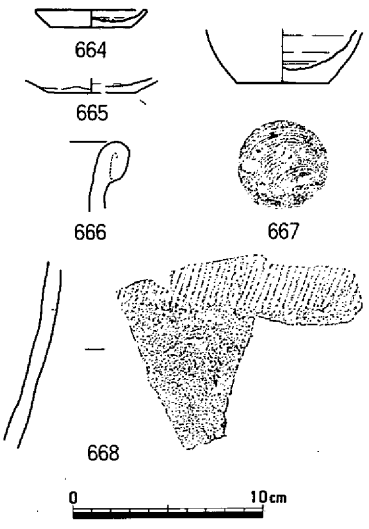
１．黒褐色土
２．茶褐色土
３．暗青灰色土
４．極暗青灰色土
５．黒灰色土－スサ等植物密含
６．暗うぐいす色粘質土

第104図　井戸－４平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)



1．黒褐色土　　4．灰黒色粘質土
2．灰黒色粘質土　　5上．青灰色粘質土
3．微砂層　　5下．黒色粘質土

第105図　井戸－５平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)



6.0cm、器高約1.1cmである。瓦質鍋は本来的には脚が付くと思われるが、その痕跡は残っていない。

これらの出土遺物から井戸の廃絶時期は14世紀中頃～後半と判断される。（杉山）

井戸－５（第105図，図版８）

23Ｐ区南東隅に位置する。平面形は243×290cmの楕円形を呈し、深さ153cmを測る。断面形は中ほどまでゆるやかな皿状の傾斜で落ちそこから垂直に下がる壁をもつ。底面中央には30cm以上の大きさの岩が据えられており、井戸－４と似た構造をもつ。

埋土は５層に分層され、第５層はさらに上下２層に分層される。壁面の傾斜変換部分には微砂層の第３層が薄く堆積している。

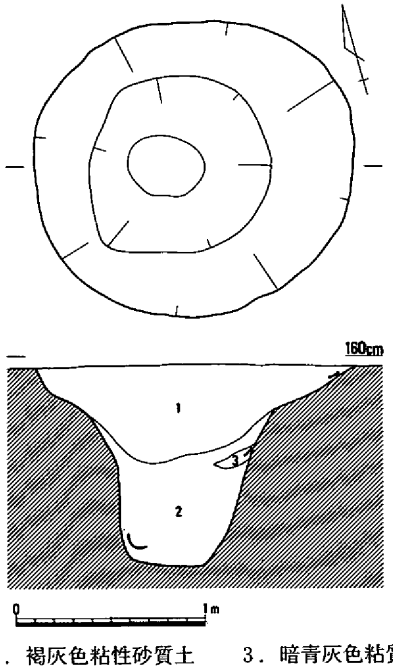
出土遺物はほとんどない。**664・665**は土師器の小皿、**666・667**は備前焼の壺、**668**は常滑焼の甕の体部である。土師器の小皿は両者ともヘラ切りで**664**の法量は口径5.6cm、器高1.0cmである。

井戸の使用時期は出土遺物から14世紀後半と判断される。（杉山）

井戸－６（第106・107図，図版９・20）

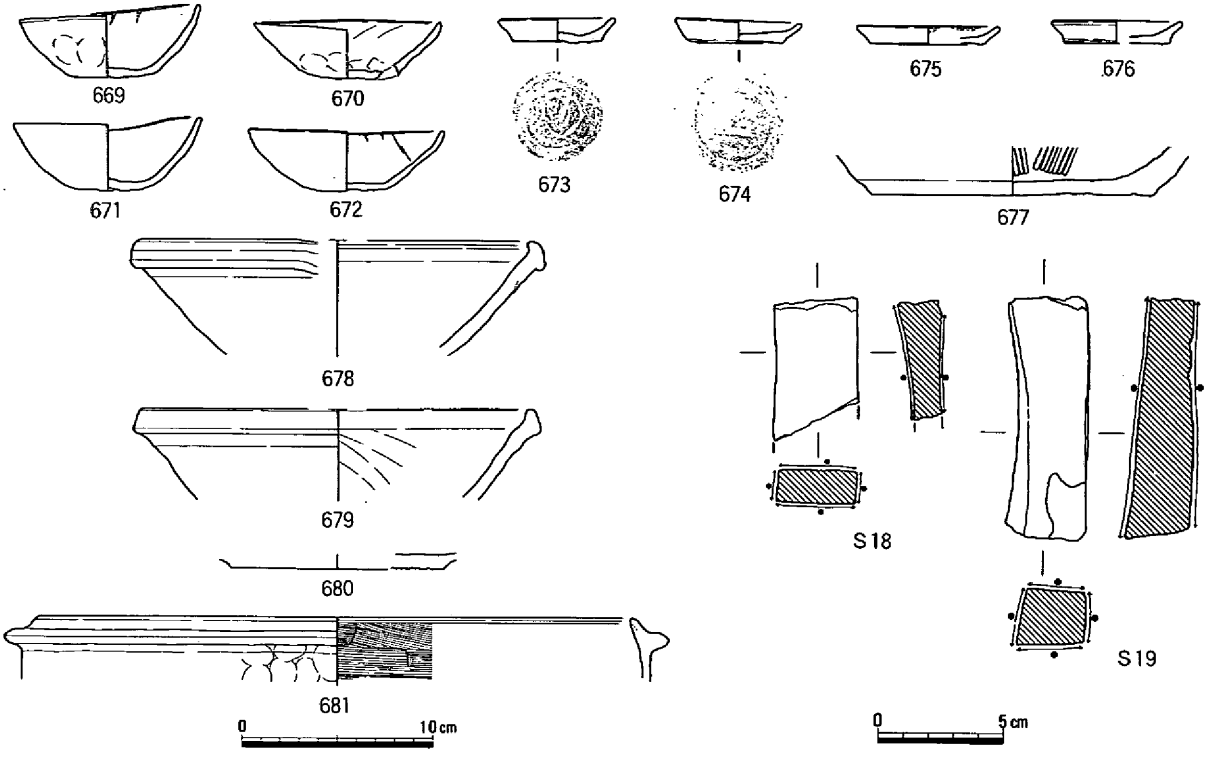
23Ｐ区で溝－２の東岸に位置している。溝－２の肩を一部切って造られていることから、溝の掘削後に井戸が作られたとも思われる。

平面形は154×168cmの円形を呈し、深さ106cm



1．褐灰色粘性砂質土　　3．暗青灰色粘質土
2．淡灰色粘質土

第106図　井戸－６平・断面(1/40)



第107図　井戸－６出土遺物(1/3・1/4)

を測る。断面形は検出面から浅い皿状に緩やかに傾斜し、中ほどよりやや上位からほぼ垂直に落ちていく。埋土は３層に分層されるが大きくは２層に分かれる。第１層の底面には炭が多量に散布しており、その上面で完形の土器が多く出土した。

出土遺物は、土師器の無高台の椀**672**以外はすべて第１層中から出土した。**669**～**671**は土師器の無高台の椀、**673**～**676**は土師器の小皿、**677**は備前焼の擂鉢、**678**～**680**は東播系須恵器の鉢、**681**は瓦質鍋、**Ｓ18**・**Ｓ19**は砥石である。土師器椀の法量は、第１層から出土した**669**～**671**は平均口径9.8cm、平均器高3.8cmで、第２層から出土した**672**は口径10.1cm、器高3.3cmを測り、やや下層出土のものが大振りである。**670**には焼成時に胎土中の石が弾けてあいた穴が見られる。小皿はいずれもヘラ切りで、**673**が口径6.0cm、器高1.4cmで、**674**～**676**は平均口径6.9cm、平均器高1.4cmで口径に大小の二者が見られる。東播系須恵器の**679**の体部内面には斜方向のナデ痕が見られる。

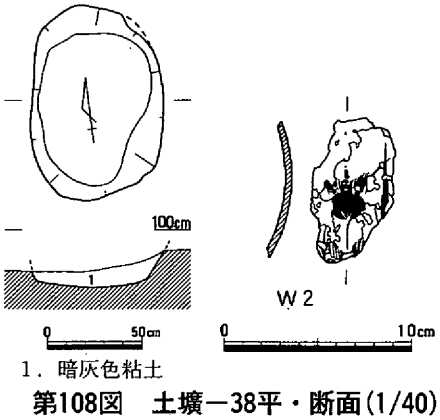
井戸の使用時期は、出土遺物と溝との切り合い関係から14世紀中頃から後半と判断される。　(杉山)

（４）土壙

土壙－38（第108図，図版20）

23Ｐ区に位置し、溝－２の埋土を除去した後に東岸裾で検出した。平面形は69×102cmの楕円形を呈し、深さは19cmと浅いが本来的には80cm以上の深さがあったと推察される。出土遺物は漆椀**Ｗ２**のみであるが、埋土中にはスズメウリ、キハダ、カナムグラの種子とヒョウタンの先端片、イチイガシ幼果(？)片が含まれていた。

土壙の時期は、中世と判断される。　(杉山)



第108図　土壙－38平・断面(1/40)と出土遺物(1/4)

（５）溝

溝－２（第109～112図，図版９・18・20）

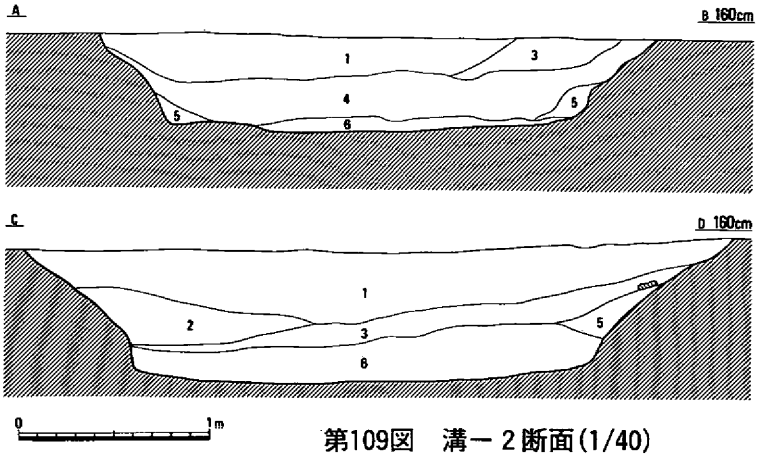
23Ｏ～Ｑ区に位置し、南北に流路をとっている。溝の主軸はＮ－４°－Ｗで、規模は幅292～376cm、深さ50～70cmを測り、断面形は逆台形を呈す。底面は平らで北側が一段高くなっている。埋土は６層に分層され、第６層の暗灰色粘土は南側が深くなっているために北側で薄く南側で厚く堆積している。第６層の堆積状況から常に水が流れていたと言うよりはむしろ、水が滞留していたと考えられ、溝が意図的に掘削され断面形状も箱堀に似ていることから掘立柱建物と関連して居住域を区画する堀として機能していたと推察される。

出土遺物はコンテナで約４箱が出土した。これらは第１層と第６層で多く出土し、調査においては第１～５層を上層、第６層を下層として遺物を取り上げた。

第110図と第111図の上段は上層出土遺物である。**682**～**697**は土師器の椀で、**682**～**686**は高台付、**687**～**691**は無高台で丸底、**692**～**697**は無高台でやや凹み底である。**697**は焼成後に底部に穿孔している。**698**は土師器高台付の皿で製作時から底部には穴があいている。**699**～**701**はヘラ切りの土師器小皿である。**702**～**705**は土師器の鍋である。**706**は土師器の竈の庇部分である。**707**は土師器の鉢で、内面には実用に耐えうるか疑問ではあるが、擂目を意識したと思われる条線が見られることから擂鉢と考えられる。**708**～**711**は瓦質鍋である。**712**は東播系須恵器の鉢で、片口部は残っていない。**713**はほぼ完形に復元できた備前焼擂鉢で、底部外面には轆轤台の下駄痕が見られる。**714**・**715**は備前焼の壺である。**716**は口剝げの白磁皿、**717**は龍泉窯系青磁碗の底部である。**718**は東南アジア産と推定される陶器の壺の肩部片で、外面には濃緑色の釉が見られる。**719**は土師器の焼き塩壺である。**Ｃ34**は土錘で紐穴２つと両小口に溝が見られる。

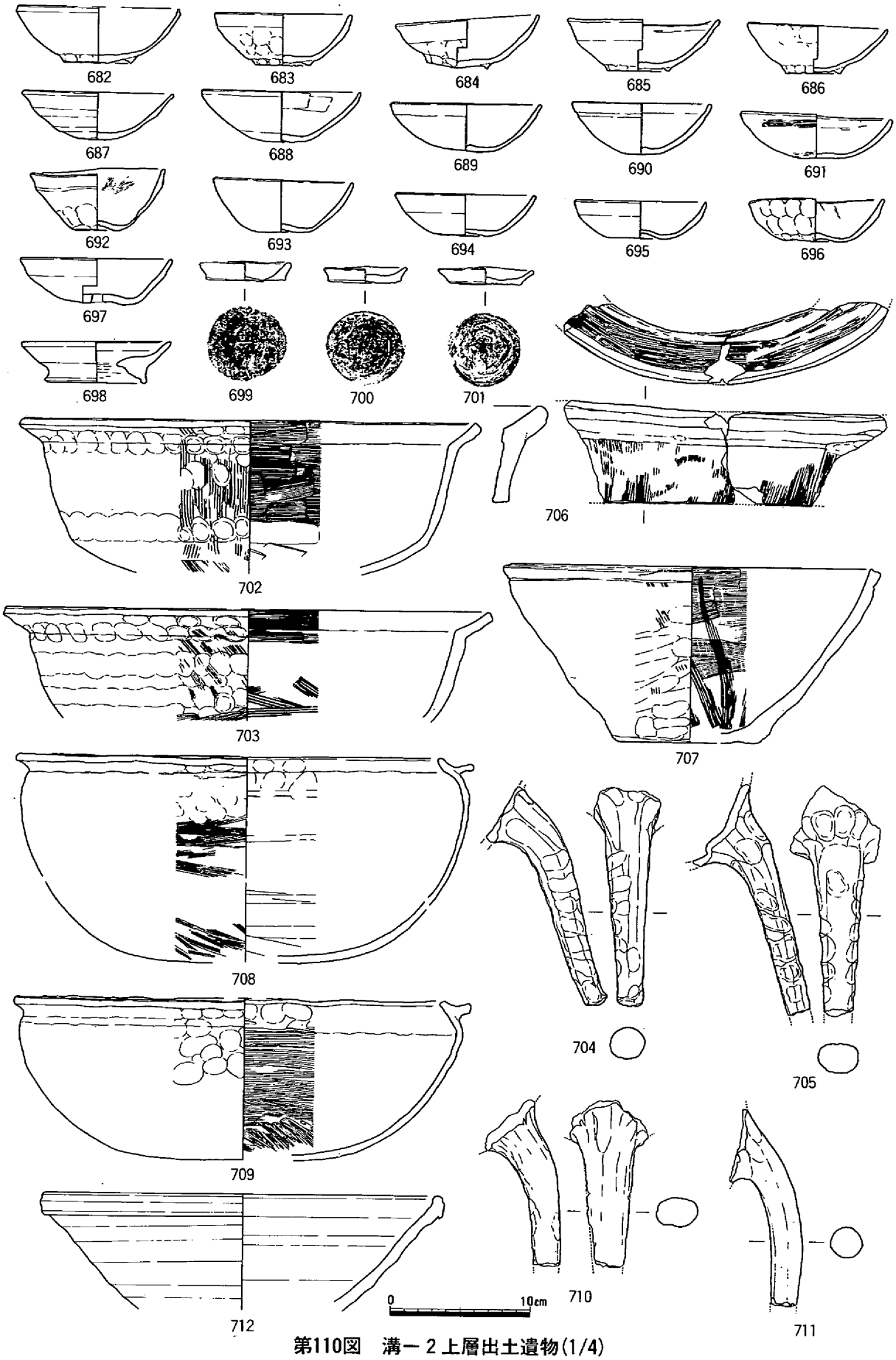
第111図下段と第112図は下層出土遺物である。**720**～**732**は土師器椀で、**720**～**724**は高台付、**725**～**728**は無高台で平底気味、**729**～**732**は凹み底である。**733**は小杯で製作段階で底部には穴が空いている。**734**・**735**はヘラ切りの土師器小皿で、**736**・**737**は土師器鍋、**738**は瓦質鍋である。**739**は瓦質の亀山焼の壺、**740**は備前焼の壺、**741**・**742**は東播系須恵器の鉢である。**Ｗ３**は木製の蓋で、２個４対の穴があいている。また、表裏には墨書で文様が見られる。

溝の使用時期は、出土遺物などから14世紀中頃から後半と判断される。（杉山）

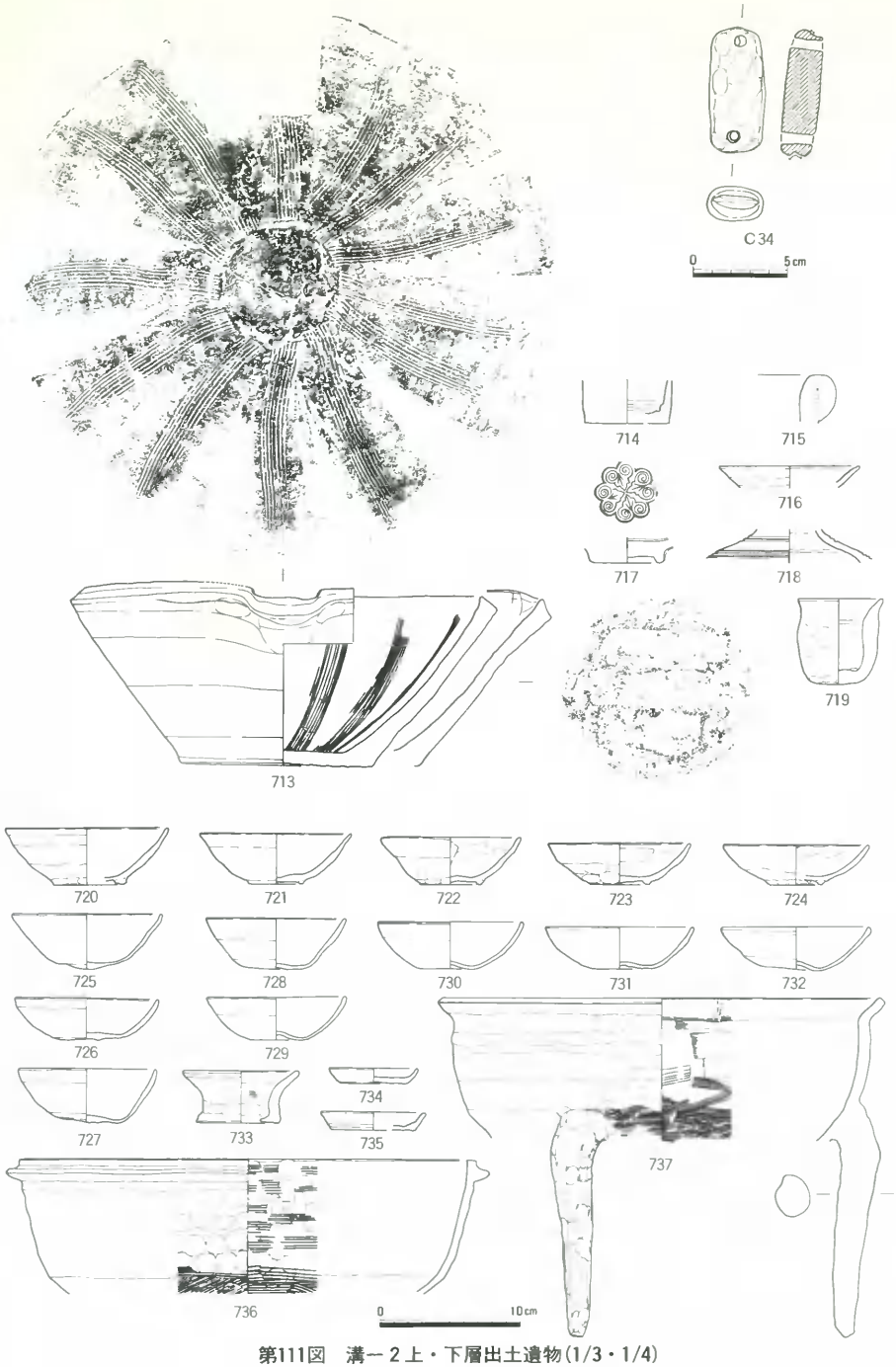


1．灰褐色砂質土
　－土器多含
2．灰褐色粘性砂質土
3．灰褐色粘性砂質土
4．暗褐灰色粘性砂質土
5．灰褐色粘性砂質土
6．暗灰色粘土

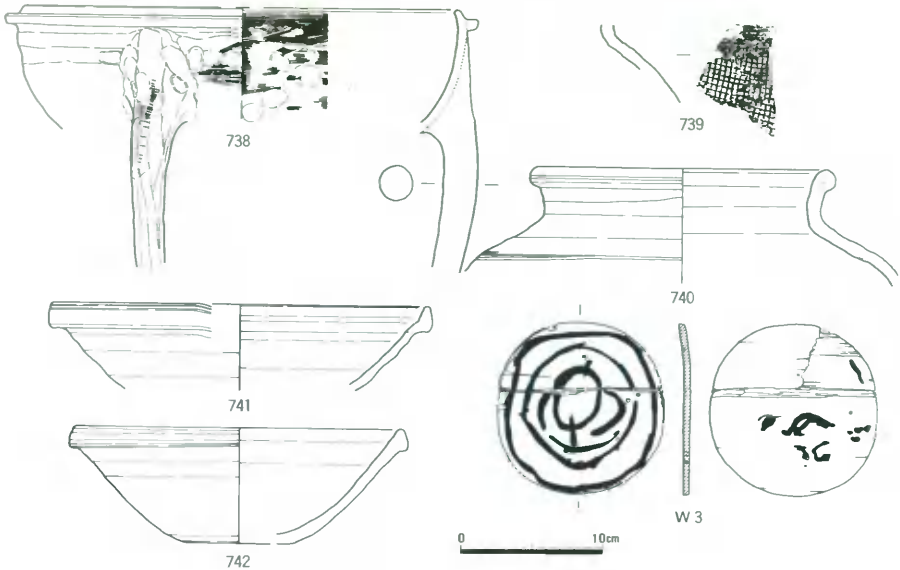
第109図　溝－２断面(1/40)



第110図　溝－２上層出土遺物(1/4)



第111図　溝一２上・下層出土遺物(1/3・1/4)



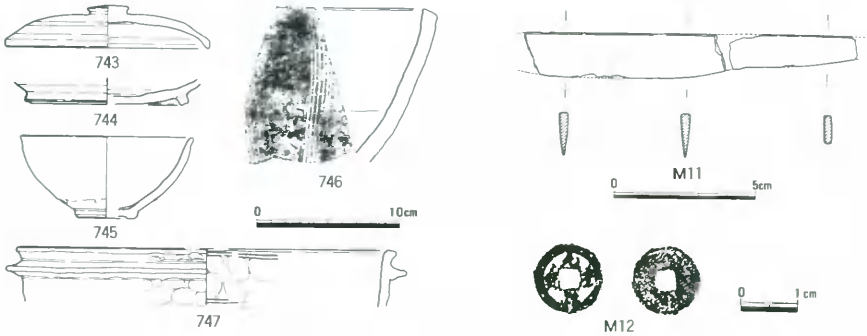
第112図　溝－２下層出土遺物(1/4)

（６）遺構に伴わない遺物（第113図，図版18・20）

遺構の掘り下げ中に該期に属する遺物が多量に出土した。そのうちの大半は室町時代前半に所属し古代・鎌倉時代のものはごくわずかである。

743・744は須恵器の杯蓋と杯身で、**743**は土器溜り－４の上面で出土した。いずれも奈良時代に属する。**745**は古瀬戸の天目椀で、内外面の体部に黒色の銹釉がかかり、底部近くは露胎である。形態的特徴から14世紀中葉に属する。**746**は備前焼擂鉢で内湾する体部と口縁端部の形態から鎌倉時代に属する。**747**は土師器の羽釜で、時期は明確ではないが中世に属するだろう。**M11**は鉄製の刀子である。刃部と柄部の接点はないが残存部分の長さは11.7cmを測る。**M12**は宋銭で「元豊通宝」の銘がある。

（杉山）



第113図　遺構に伴わない遺物(1/1・1/2・1/4)

第4章　結　語

第1節　まとめ

（1）遺構の変遷について

今回の発掘調査では、800㎡という狭い面積の調査区の中で弥生時代後期から中世にわたる竪穴住居，掘立柱建物，柱穴，土壙，溝，性格不明遺構，土器溜りなど数多くの遺構を検出した。これらは近代以後の攪乱のため、層位的に良好な状況で検出されてはいない。そのため、ここでは出土遺物や周辺の状況から遺構の時期的変遷についてまとめる。

伊福・弥・後Ⅰ期　25Ｐ区に土壙－23が１基あるのみである。しかし、これは埋土の状況から住居の中央穴の可能性が高く、出土土器が小片であり、このほかに該期の遺構がないことから次時期以降の可能性もある。

伊福・弥・後Ⅱ期　遺構は調査区全体にまばらに分布し、土壙－１～４・10・15・21・26・35・36がある。これらは調査区縁辺に位置する傾向にあり、集落本体は調査区外に展開していると考えられる。

伊福・弥・後Ⅲ期　本調査区内で検出した遺構の中心となる時期である。24Ｐ区の円形の竪穴住居－19とそのすぐ南西に築かれた井戸－２を中心として、土壙－９・11～14・17～19・22・24・28～31・33がある。溝－１もこの頃に掘削され、集落内を東西に区分している。

溝に区画されて内側に柱穴列をもつ性格不明遺構は、県内では現在までにこれに類似した遺構の検出例を聞かない。調査区外に遺構が広がっているため全体の状況が不明だが、他県の例では佐賀県吉野ケ里遺跡Ⅴ区のＳＢ1142掘立柱建物に類似性が見られる[(1)]。この建物も弥生時代後期に属し、溝に区画されて一段低くなった内側を整地し、その後に柱穴を掘り込み建物を建てている。この区画した溝は環濠へ取り付き、建物も物見櫓的なものが想定されている。本遺跡で検出したものとの直接的な比較は慎重を要するが、遺構の性格を考えていく上で非常に興味深い。

伊福・弥・後Ⅳ期　遺構は、調査区東側に集中する傾向が見られる。竪穴住居は平面隅丸方形を基本として、前代の住居よりやや小型化し、竪穴住居－５・６・８～10・15・16・18・20・21と件数が増加する。土壙は土壙－６・８・20・25・27・37があり、22Ｏ区に土器溜り－１がみられる。また、性格不明遺構の埋没後の窪地を生かして土器溜り－４の形成が盛んになるのもこの時期である。

伊福・古・前Ⅰ期　前代から引き続いて遺構が踏襲される。竪穴住居は平面方形を基本としてさらに小型化し、竪穴住居－１～４・７・11・12～14・17・22がある。井戸は井戸－１・３が住居からやや離れた位置に築かれるが、土壙はない。土器溜り－４への遺物の投棄は引き続いて盛んである。

古墳時代中期～後期　中期には土器溜り－１や３で比較的まとまった土器が見られるものの、遺構としてはこれら以外確認できていない。この傾向は後期には更に顕著で、該期の遺物もほとんどみられない。

古代　奈良時代の土器が少量だが出土していることから、この時期に再び生活区域として使用された

と考えられ、土器溜り－4の上面の土砂の堆積状況から遺構を築く前に調査区内を整地し、その後に遺構を築いたと判断される。土器を伴った遺構は確認できていないが、方形の掘り方の柱穴をもつ掘立柱建物－4が該期に属すると推察される。平安時代の遺物は皆無に等しく、奈良時代の短期間のみ居住地として利用されたと判断される。

中世　調査区中央に溝－2が築かれ、この東西に掘立柱建物－1～3，井戸－4～6，土壙－38がある。これらの時期は、14世紀初頭前後の遺物も散見されるが、出土遺物のうちで圧倒的多数を占めるのは14世紀中葉から後半のものであることから、室町時代前半の時期が当てられる。

以上、検出した遺構を時期別に見てきた。その結果、今回の調査区においては弥生時代後Ⅱ期から集落形成が本格化し、以後古墳時代初頭まで集落が拡大・発展していく。しかし、古墳時代中期には調査区外へ集落が移動したか、もしくは全く別地点に移動し、奈良時代まで生活区域としてはほとんど使用されない。奈良時代に入ると、大規模に整地し建物を築いて短期間ではあるが生活区域として使用されるものの、平安時代には過疎となってしまう。その後、室町時代前半の14世紀中葉から後半に再び築かれて使用された遺構も、15世紀以降には廃絶し次第に水田化されていったと推察される。

註

（1）遺構の詳細については吉本健一氏よりご教示いただいた。
　七田忠明ほか　「吉野ケ里」『佐賀県文化財調査報告書』第113集　佐賀県教育委員会　1992

（2）出土遺物について

調査の結果、コンテナで約200箱が出土した。これらは遺構から出土したものと調査中に出土したものがほぼ半々であり、弥生時代後期以降の土器と土製品，石器・石製品，金属器・金属製品，木製品，角製品，玉類などがある。なお、土器については後節において詳説する。

土製品　図示していないものを含めると紡錘車12点，錘7点，円板40点，人形1点，腰掛け形1点，不明1点と壁土がある。このうち人形土製品は県内でも数例が報告され[(1)]、近くは百間川兼基遺跡で出土している。いずれも弥生時代に属するものであるが、本遺跡出土のものは時期が明確ではない。今回出土したものは柱穴の埋め方中に倒立して埋納され、埋める際に意図的と推察されるが、腕と頭部の被り物を壊しており、人形を用いた祭祀の一形態を示している。形状的には大きな鼻、頭部の被り物といった点が他遺跡での出土品とは異なっている。口の表現があるものの大きな鼻が嘴を表現したものにも見え、痕跡だけだが被り物をしていたことを考慮すると御津郡御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器[(2)]にみられるような鳥装をした人物を表しているのかもしれない。また、腰掛け形土製品は他県を含めて管見にふれるかぎり類例を聞かない。本例と同型の木製の腰掛けは大阪府久宝寺南遺跡，同鬼虎川遺跡などで出土し[(3)]、弥生時代以降には出土例が増える。腰掛けに座る人物は主には地域・集団の有力者であると考えられることから、土製品ではあるが本遺跡から腰掛けが出土した意義は大きく、本遺跡が旭川西岸地域の中心的集落の一端であったことがうかがえる。

石器・石製品　図示した以外の物を含めて、農・工具の石包丁2点，楔2点，錐1点，斧1点，砥石8点、漁労具の錘5点、調理具の磨石11点，叩き石7点のほかサヌカイト製と水晶製の石屑がある。組成として、調理具が半数以上を占めるが、生産用具としての狩猟具がまったくなく、漁労具が比率

として多いことから近隣河川での漁労が盛んであったと推察される。

金属器・金属製品　鉄製と青銅製がある。鉄製のものには釘2点，鉈3点，刀子1点，斧2点，袋状1点，不明2点、青銅製のものには鏃4点，銭1点がある。このうち確実に弥生時代に属するものには、錆化が顕著で小片のため図化できなかったが、竪穴住居－19の柱穴から出土した鉈1点がある。鉄製の斧としたもの[4]は錆びの状況から鋳造品と判断され、竪穴住居－12(**M2**)と包含層(**M8**)から出土している。両者は同一個体の可能性があり、住居の時期から古墳時代初頭と推定される。鋳造鉄斧は県内では牛窓町粟利郷所在の古墳[5]，岡山市金蔵山古墳[6]，同甫崎天神山5号墳[7]，総社市殿山8号墳[8]、河辺上原3号墳[9]の5遺跡9点が古墳から出土しており、本例が6遺跡目で、集落からの出土としては初例である。大陸からの輸入品である鋳造鉄斧は、国内では九州を中心に西日本で分布することから、九州の有力首長との交易等によって入手したとの推定もなされている[10]が、その希少性から権力の象徴を示すものの一つであったと考えられており[11]、本遺跡の性格を考える上でも重要である。

木器・木製品　樹種については能城修一先生より玉稿をいただき収載しているので、附編をご覧いただきたい。弥生時代から古墳時代初頭にかけての竪穴住居の柱の礎板9点と室町時代の漆椀，錘，蓋，板材が各1点づつ出土している。礎板は長さ約16～25cmほどに切断しており、樹皮を剝いだものの中には幅1.5cmの工具痕の見られるものもあるが、ほとんどのものは加工せず樹皮を残している。

玉類・角製品　玉類には碧玉製管玉2点と角製管玉，ガラス小玉，メノウ製勾玉，蛇紋岩製勾玉，土製勾玉が各1点づつ、鹿角製品には刻骨1点がある。鹿角製の刻骨は県内では牛窓町長浜・用本遺跡[12]，岡山市津島江道遺跡[13]，同東山遺跡[14]の3遺跡4例があり、本例が5例目であり、同様の例は韓国でも出土しているが国内の出土例を見てみると、金子浩昌氏[15]や木村幾太郎氏[16]の集成以後、管見にふれるだけで静岡県川合遺跡[17]，奈良県唐古・鍵遺跡[18]，愛媛県宮前川遺跡[19]で報告されており、県内の5例を含めると合計18例が出土している。時期は奈良時代のものもあるが、主には弥生時代後期から古墳時代前期で、用途については楽器や祭祀具が考えられている[20]が、結論は出ていない。住居内で出土した津島江道遺跡の2例は、刻骨のみと卜骨と共伴して出土している。本遺跡では、中央炉の脇で焼けて破損した状況で出土し、角製の管玉と共伴しており、また、出土した住居のみが平面多角形で他と異なっている。これらの状況から、刻線部分に擦痕は認められないため用途については明確にできないが、日常生活とは区分された空間で呪術性の強い用途が推察される。また、県内出土の5例の内3例が旭川西岸下流の本遺跡周辺で出土していることは、この地域の集落の性格や他地域との交流を考えるうえで興味深い。

(杉山)

註

(1) 河本　清　「絵画土器、人形・鳥形スタンプ文土器」　『吉備の考古学的研究（上)』　山陽新聞社　1992

(2) 長谷川一英　「御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器」　『古代吉備』第14集　古代吉備研究会　1992

(3) 奈良国立文化財研究所編　『木器集成図録　近畿原始篇』　奈良国立文化財研究所　1993

(4) 川越哲志，古瀬清秀，村上恭通，安間拓巳の各氏に鑑定をお願いし、有益なご教示をいただいた。しかし、本資料が小片のため器種の断定するには非常に厳しい状況であった。このため、県内や近県の出土例から現在のところは斧と考えている。

(5) 西川　宏　『吉備の古代』　学生社　1975

(6) 西谷真治・鎌木義昌　『金蔵山古墳』　1959

(7) 宇垣匡雅　「甫崎天神山遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　岡山県教育委員会　1994

(8) 平井　勝　「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47　岡山県教育委員会　1982
(9) 小郷利幸　「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第54集　津山市教育委員会　1994
(10) 註8文献に同じ
(11) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』　雄山閣　1993
(12) 亀山行雄　「長浜・用本遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24　岡山県教育委員会　1994
(13) 高畑知功　「津島江道遺跡」『所報　吉備』第3号　岡山県古代吉備文化財センター　1987
(14) 岡山市教育委員会草原孝典氏のご厚意により、資料の実見の機会を得た。
(15) 金子浩昌　「豊田本郷遺跡出土のウマ橈骨について」　『豊田本郷』　豊田本郷遺跡発掘調査団　1985
(16) 木村幾太郎　「刻骨」『弥生文化の研究』8　雄山閣　1987
(17) 山田成洋　『川合遺跡』　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1986
(18) 佐藤正好　『特別展　音の考古学』　茨城県立歴史館　1995
(19) 松井　章　「宮前川北斎院遺跡出土の動物遺存体」『宮前川遺跡』　(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター　1986
(20) 註15文献と同じ

第2節　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器

今回の調査で出土した遺物のほとんどが弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器で、中でも土壙・井戸を中心として一括性の高い遺物群をとらえることができた。周辺には旭川西岸の津島遺跡・鹿田遺跡、東岸の百間川遺跡群など弥生時代から古墳時代にかけての大規模集落が存在する。これらと比較対象を行うため、編年案を作成した。

当初第3章の事実記載において、土器の編年は百間川遺跡群の編年[1]に準拠した形で行った。

本稿では新たに編年案を作成した。方法としては、まず遺物が短期間に廃棄された可能性の高い井戸・土壙から出土した遺物を分類の基準とし、土器変化の画期を考え時期設定を行い、方向性を考慮して順に並べた。

以下、本稿ではこの編年案に従って論を進めるため、各遺構の事実記載の時期と差異が生じる場合がある。

伊福・弥・後Ⅰ期　土壙－23が該当する。百間川遺跡群の百・後・Ⅰ期にあたる。

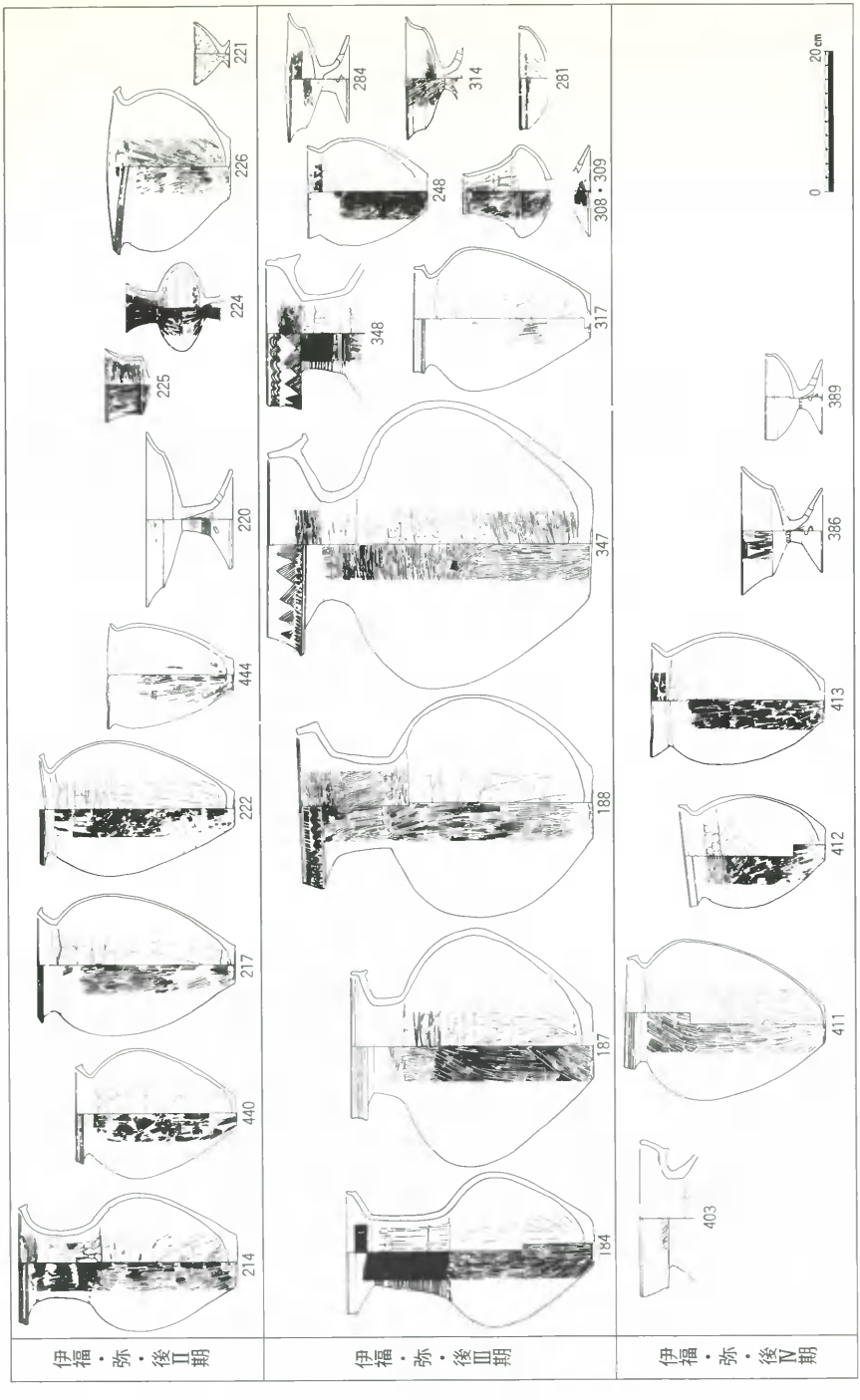
伊福・弥・後Ⅱ期　土壙－2～4の遺物が標識となる。

長頸壺の頸部は短く、しかも内湾する(**214**)。甕の口縁端は著しい拡張はみせない。胴の張りが少なく、長細い感じを受けるもの(**217・222**)が多い。高杯は短脚化が進むが、口径は広く、脚柱・脚端間に沈線を施す(**220**)。口縁が垂直近く立ち上がり、口径が狭い**225**も存在する。口縁が逆「ハ」の字に広がる台付直口壺(**224**)は次の時期まではみられる。

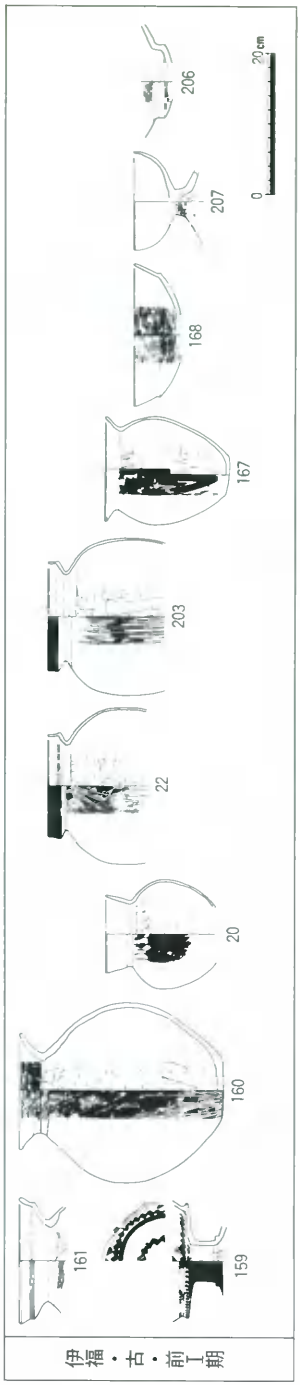
この時期は長頸壺と胴長の甕、定型化した高杯といった後期的色彩をもつ器種が定着するといえる。全体として百・後・Ⅱ期の中でも新相[2]に併行する位置づけができる。鹿田遺跡の鹿田・後・2b期[3]に近い資料であろう。

伊福・弥・後Ⅲ期　井戸－2、土壙－9・12～14を標識とする。

壺・甕・鉢で口縁端が上部へ拡張する傾向をもつ。長頸壺は肩の張りが強く、頸部は直線的で下部が裾広がりである(**184**)。短頸壺は胴の張る**187**がある。**347**は口縁端を著しく上下に拡張したうえで外面を装飾し、**348**ではさらに頸部に沈線を施す。また外来系として、西部瀬戸内系の**188**がある。甕では、二重口縁で肩部が張り、底部がすぼまる**317**が主流で、素縁の**248**などは少数である。高杯は短



第114図　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年案(1)



第115図　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年案(2)

脚化と口縁の縮小が進み、脚柱と脚裾の境が明瞭な**284**、不明瞭な**314**、脚裾が低く平たい**365**がみられる。口縁が「ハ」字状の台付直口壺(**308・309**)は次の時期まで存在する。鉢は大形(**303**)、中形(**263・274**)、小形(**276・277**)がある。

この時期は前述したとおり、特に壺と甕において口縁端の拡張が著しい。壺の種類は変化に富んでいる。他地域系も含めて、装飾する壺が増加していることも注目すべきであろう。甕・高杯で定型化が認められ、甕は上方へ拡張する二重口縁と肩の張る器形、高杯は短脚化・口径の縮小へと進む。

併行関係では百・後・Ⅲ期に相当するものと考えられる。

伊福・弥・後Ⅳ期　土壙－27・32を標識とする。

長頸壺が消失し、**403**といった壺が存在する。甕は二重口縁が主体である。肩から胴の張りが緩やかで、底部がやや不安定な**411**、口縁の拡張が少ない**412**や素縁の**413**も存在する。高杯は口縁が拡張・直立し、脚柱と脚裾の境がはっきりして器高がやや高くなる(**386**)。杯部椀形の**389**も存在する。鉢は大形(**392**)、中形(**393・419**)、小形(**391**)がみられる。

これらは百・後・Ⅳ期や鹿田・後・4期とはやや異なる土器群であると考えている。ただ、土器溜り－4からは壺**519**、甕**552**、高杯**574**のように上記の時期と合致する資料がみられる。このことは、土壙－27・33と土器溜り－4の時期差あるいは集団差になる可能性がある。狭い調査区の傾向からは断言できないが、集団差の方が強いものと思われる。

伊福・古・前Ⅰ期　井戸－1・3、竪穴住居－3などが該当する。

壺では畿内系二重口縁壺**159**、直口壺**20**の存がこの時期の特徴である。素縁で大形の**160**、前時期より続く**7・161**がみられる。甕では、口縁外面に櫛描沈線を施す**203**が主流となり、素縁の**167**も存在する。高杯では口縁が直立する**168**、杯部が椀形の**207**のほか杯部が2段になる**206**もみられる。

この時期は畿内系の土器と櫛描沈線口縁の吉備甕の登場と位置づけられる。百・古・Ⅰ期や鹿田・古・1期に併行すると考えられるが、土器溜り－4の高杯**568**が井戸・土壙ではみられないことなど、前時期からの継続性が薄い。

この考察では編年案の提示のみに止まった。すでに備前南部では百間川遺跡群・鹿田遺跡で詳細な編年案が述べられ、定着した感もある。今回は伊福・弥・後Ⅳ期で従来編年との差異が生じる可能性を指摘した。遺構からの遺物出土量では伊福・弥・後Ⅲ期の資料は豊富だったが、伊福・弥・後Ⅳ期から古・前Ⅰ期はそれほどでもなく、これからの研究の進展によっては編年案を改める必要もあるだろう。

最後になりましたが、本稿を成すにあたり、正岡睦夫、柳瀬昭彦、高畑知功、亀山行雄の各氏からご助言やご教示をいただきました。記して御礼を申し上げます。　（氏平）

註

(1) 江見正己「時期区分について」『百間川原尾島遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39　岡山県教育委員会　1980

(2) 下澤公明「弥生時代後期の土器」『百間川沢田・長谷遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59　岡山県教育委員会　1985

(3) 山本悦代「鹿田遺跡の弥生～古墳初頭の土器」『鹿田遺跡１』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988

第３節　中世の土器・陶磁器

今回の調査で包含層と中世の遺構から土師質土器、瓦質土器（亀山焼ほか）、須恵質土器（魚住焼）、国産陶器（備前焼・常滑焼・古瀬戸）、輸入陶磁器（中国産・東南アジア産）といった各種の土器・陶磁器が出土した。これらの遺物が帰属する14世紀代については、従来備中・備後地域で報告例があるものの、備前地域では例が少なく、出土しても時期を推測できる共伴遺物が希少なことが多かった。しかし、本遺跡ではまとまった出土量と共伴遺物にも恵まれていることから、ここでは今後の該期の遺構・遺物の検討のために若干まとめたい。

１．器種組成について　溝－２出土遺物で見てみると、計量可能な個体数は177点である[1]。この内訳は、土師質椀90個（51％），土師質小皿25個（14％），瓦質鍋17個（10％），土師質鍋16個（９％），備前焼の擂鉢・壺・甕10個（5.5％），魚住焼の鉢・甕５個（2.5％），亀山焼の甕７個（４％）とその他７個（４％）である。機能別では供膳具119個（67％），煮沸具33個（19％），貯蔵具15個（８％），調理具10個（６％）で、供膳具が圧倒的に多いものの一般生活に必要な器種組成を示しているといえる。注目すべき点として、調理具の擂鉢・鉢で備前焼と魚住焼がほぼ１：１の比率で出土している点と、煮沸具の鍋で瓦質と土師質のものがほぼ同率で出土する点が上げられる。

２．時期について　吉備地方南部では、従来から中世遺跡で普遍的に見られる土師質椀によって詳細な編年が組み立てられてきた[2]。そこで、ここでは特に土師質椀についての特徴をまとめ時期について考えたい。

椀は大別して、高台の付かない椀Ａと高台の付く椀Ｂがある。椀Ａは丸底気味のもの、平底気味のものや若干凹み底気味のものが見られるが、個々の区別はあいまいである。計測値は口径9.0～11.2cmで平均9.96cm，器高2.7～5.0cmで平均3.60cmである。椀Ｂは従来から「早島式土器」、「吉備系土師器椀」などと言われているものである。底部に貼り付けた高台にはナデを施さないものが圧倒的主体で、中には高台を完全に円に巡らせていない簡略化されたものも見られる。計測値は口径9.6～

11.5cmで平均10.28cm，器高2.9～4.1cmで平均3.50cmである。椀Aと椀Bの出土比率は、井戸－4で9：0，井戸－6で21：5だが、井戸－6の椀Bは小片であり、椀Aが完形であることを考えると混入の可能性もある。それに対して溝－2では、上層で50：16，下層で13：9と椀Aを主体として椀Bが少量混じる状況が見られる。

これらの特徴と出土状況を広島県草戸千軒町遺跡と比較すると、溝－2の下層がやや古い様相を示すものの、概ねⅡ期後半新段階の様相に近く、14世紀中葉から後半の時期が当てられる。[3] 供伴遺物については、魚住焼の鉢が14世紀前半、[4] 備前焼の擂鉢が14世紀中葉の時期が当てられる。[5] また、溝－2の埋土中から胎土と器形からタイ産と考えられる壺の肩部小片が出土している。[6] 現在国内で出土しているタイ産の陶器は大阪府堺環濠遺跡や福岡県博多遺跡群などで15世紀以後の資料が主体であり、[7] 14世紀後半まで遡る可能性のあるものとしては沖縄県今帰仁城跡主郭第2層下部出土の蓋のみである。[8] 15世紀以降の壺の胎土は精良で、甕などとは土の使い分けがされるが、本資料の胎土は甕の胎土に近くまだ土の使い分けがされる以前、つまり15世紀以前の生産と推察される。[8] このことから、本資料1点をもって時期を下らせる必要はないと考えられる。[9]

以上のことを総合すると、魚住焼がやや古い様相を示すが、伝世品と考えると本遺跡の遺構から出土した遺物群は14世紀中葉から後半の時期が当てられると判断される。

註

（1）個体数の計量にあたっては、基本的に口縁部と底部の個体数を数え、両者のうち多い方の数値を個体数とした。また、同一個体と思われるものについては1個体として数えている。

（2）鈴木康之　「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡1』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988
山本悦世　「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　日本中世土器研究会　1992

（3）鈴木康之　「第Ⅲ章1　土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ　広島県教育委員会　1996

（4）森田　稔　「須恵器系の中世陶器生産」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集　瀬戸市教育委員会・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター　1996

（5）間壁忠彦　『備前焼』　ニュー・サイエンス社　1991

（6）森本朝子氏、尾崎直人氏に遺物の実見をお願いし、評価をいただいた。特に、尾崎氏には実際にタイの窯跡から採集して来られた資料と比較しながら説明を受けた。

（7）森村健一　『畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器」『貿易陶磁研究』No.11　日本貿易陶磁研究会　1991

（8）有島美江　「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11　日本貿易陶磁研究会　1991

（9）金武正紀　「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11　日本貿易陶磁研究会　1991

(10) 尾崎直人氏のご教示による

伊福定国前遺跡から出土した鹿角製品および動物遺存体

奈良国立文化財研究所
松　井　　章

鹿角製品

鹿角の主幹部の基部の各座の直上を斧様の刃器で削り取り8.5cmのところから刻みを入れる。刻みは3本が残存するが、それぞれ幅約2㎜、深さ約1㎜をはかる。刻みのある部分は一部しか残存しないが、元来は鹿角を一周していたものであろう。下部側面に火を受けて黒変した痕跡が見られる。この資料は、刻みの入った上部を打ち割られ、火に晒されて骨角器としての機能を喪失した状態で基部が廃棄せられ、出土したものであろう。基部は前頭骨から直接切り出したものではなく、落角の自然面を粗く整形したようである。基部から刻みまでは、基部近くに金属器による粗い削痕が見られるが、念入りな調整は見られない。このような刻み入り製品は、鍵谷徳三郎によって愛知県熱田高倉貝塚から出土した弥生時代というウマの中足骨に刻みを入れた例が早くから報告されている[1]が、共伴土器は明確ではないという。近年では、朝鮮半島にも類例が多く見られ、国内での出土例の時代も古墳時代のものが多いことが明かになりつつある[2]。

註1．鍵谷徳三郎、1908、「尾張熱田高倉貝塚実査」『東京人類学会雑誌』第266号、pp.275～283
2．金子浩昌、1985、「豊田本郷遺跡出土のウマ橈骨について」『豊田本郷』、豊田本郷遺跡、pp201-214

伊福定国前遺跡出土の動物遺存体一覧表

番号	出土旧遺構名	綱	種	部　位	左右	備　　考
1	1区土壙－1	哺乳類	不明	四肢骨	不明	
2	1区土壙－29	哺乳類	イノシシ	肩甲骨		
3	1区土壙－29	哺乳類	不明	四肢骨？	不明	遠位
4	1区土壙－29	魚類	フグ類	歯板	不明	大（マフグ・トラフグクラス）
5	1区土壙－29	哺乳類				
6	1区土壙－29	魚類	フグ類	歯板	不明	大（マフグ・トラフグクラス）
7	1区土壙－29	軟骨魚類	エイ／サメ類	椎骨		
8	1区土壙－29	哺乳類	不明	肩甲骨	左	遠位端（シカ・イノシシクラス）

伊福定国前遺跡から出土した木製品の樹種

森林総合研究所
能　城　修　一

(1) はじめに

伊福定国前遺跡は岡山県岡山市の旭川下流の西岸に位置する複合遺跡で、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡や井戸、土壙、および室町時代前半の建物や井戸などが見いだされている。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡の柱穴中には柱根は確認されず、底部に礎板のみが認められた。

ここでは室町時代前半の木製品4点と、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡から見いだされた礎板9点を報告する。合計13点の資料中には7分類群が見いだされた。

樹種同定用のプレパラートは、木製品から直接カミソリを用いて横断面、直接断面、放射断面を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20mℓ、蒸留水50mℓの混合物）で封入して作成した。以下には、各分類群の簡単な記載をして、代表的な標本の顕微鏡写真をしめして同定の根拠を示す。

(2) 結　　果

1．マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　図1：1a-1c（OKF-90）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は幅があって明瞭。樹脂道のエピセリウム細胞は薄壁で大型。分野壁孔は大型の窓状。放射仮道管の水平壁には鋸歯状の突起がある。

2．スギ　Cryptomeria japonica(L.f.)D. Don　スギ科　図1：2a-2c（OKF-83）

垂直・水平樹脂道をいずれも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は数細胞幅であるが明瞭。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。分野壁孔は孔口が水平に大きくひらくスギ型で大きく、1分野に2個。

3．ヒノキ　Chamaecyparis obtusa(Sieb. et Zucc.)Endl. ヒノキ科　図1：3a-3c（OKF-79）

垂直・水平樹脂道をいずれも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は数細胞幅。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。分野壁孔は孔口が垂直にちかく開くトウヒ型でやや小型、1分野に2個。

4．クリ　Castanea crenata Sieb. Zucc.　ブナ科　図2：4a-4c（OKF-78）

直径350μmにおよぶ大型でまるい単独管孔が年輪のはじめに2、3列ならび、晩材ではごく小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。道管と放射組織との壁孔は小型の窓状。

5．コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　図2：5a-5c（OKF-81）

直径300μmにおよぶ大型でまるい単独管孔が年輪のはじめに1、2列ならび、晩材ではごく小型で薄壁の管孔が放射状ー火炎状に配列する環孔材。早材から晩材への移行はやや急。道管の穿孔は単

一。放射組織は小型の単列同性および大型の複合状。道管と放射組織との壁孔は小型の窓状。

6．コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図2：6a-6c（ＯＫＦ-88）

コナラ属コナラ節によく似た環孔材で、晩材の管孔がややおおきく厚壁でまるく、放射方向から斜め方向に配列する点で異なる。

7．コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図3：7a-7c（ＯＫＦ-82）

中型で厚壁のまるい単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。早材から晩材への移行は不明瞭。道管の穿孔は単一。放射組織は小型の単列同性および大型の複合状。道管と放射組織との壁孔は小型の窓状。

（3）まとめ

弥生時代後期後半から古墳時代初頭の礎板にはマツ属が4点、コナラ節とクヌギ節がそれぞれ2点、アカガシ亜属が1点用いられていた（表1）。いずれも比較的腐りにくい樹種ではあるが、水湿に強いクリがまったく見られないのは、入手が簡単ではなかったことを示していると思われる。当遺跡のすぐ北側にある岡山大学津島地区（能城、1992）および鹿田地区（能城、1993）における樹種同定結果によると、これらの樹種は縄文時代後・晩期以降、自然木、杭、井戸枠として普通に見いだされており、ごく周辺で調達されたものと考えられる。室町時代前半の漆器はクリ、蓋はヒノキ、木錘はマツ属、板目材はスギであって、ごく普通の使用例である。

引用文献

能城修一．1992．岡山大学津島地区から出土した木材化石の樹種．「津島岡大遺跡3－第3次調査－」，169-187．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター．

能城修一．1993．岡山大学鹿田地区から出土した木製品の樹種．「鹿田遺跡3」．119-146．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター．

表1　伊福定国前遺跡から出土した木製品の樹種

OKF-No	樹種名	製品名	製品備考	掲載番号	出土遺構	時代
OKF-78	クリ	漆器　椀		W2	土壙－38	室町時代前半
OKF-79	ヒノキ	蓋	板目	W3	溝－2下層	室町時代前半
OKF-80	マツ属	木錘	芯持削出し	W1	井戸－4	室町時代前半
OKF-81	コナマ属コナラ節	礎板			竪穴住居－12～15	弥生時代末～古墳時代初頭
OKF-82	コナラ属アカガシ亜属	礎板				
OKF-83	スギ	板目板	曲物側板？		溝－2下層	室町時代前半
OKF-84	マツ属	礎板			竪穴住居－12～15	弥生時代末～古墳時代初頭
OKF-85	マツ属	礎板				
OKF-86	マツ属	礎板				
OKF-87	コナラ属コナラ節	礎板			竪穴住居－8　P2	弥生時代後期後半
OKF-88	コナラ属クヌギ節	礎板			竪穴住居－14下層ピット	弥生時代末～古墳時代初頭
OKF-89	コナラ属クヌギ節	礎板				
OKF-90	マツ属複維管束亜属	礎板	丸木			

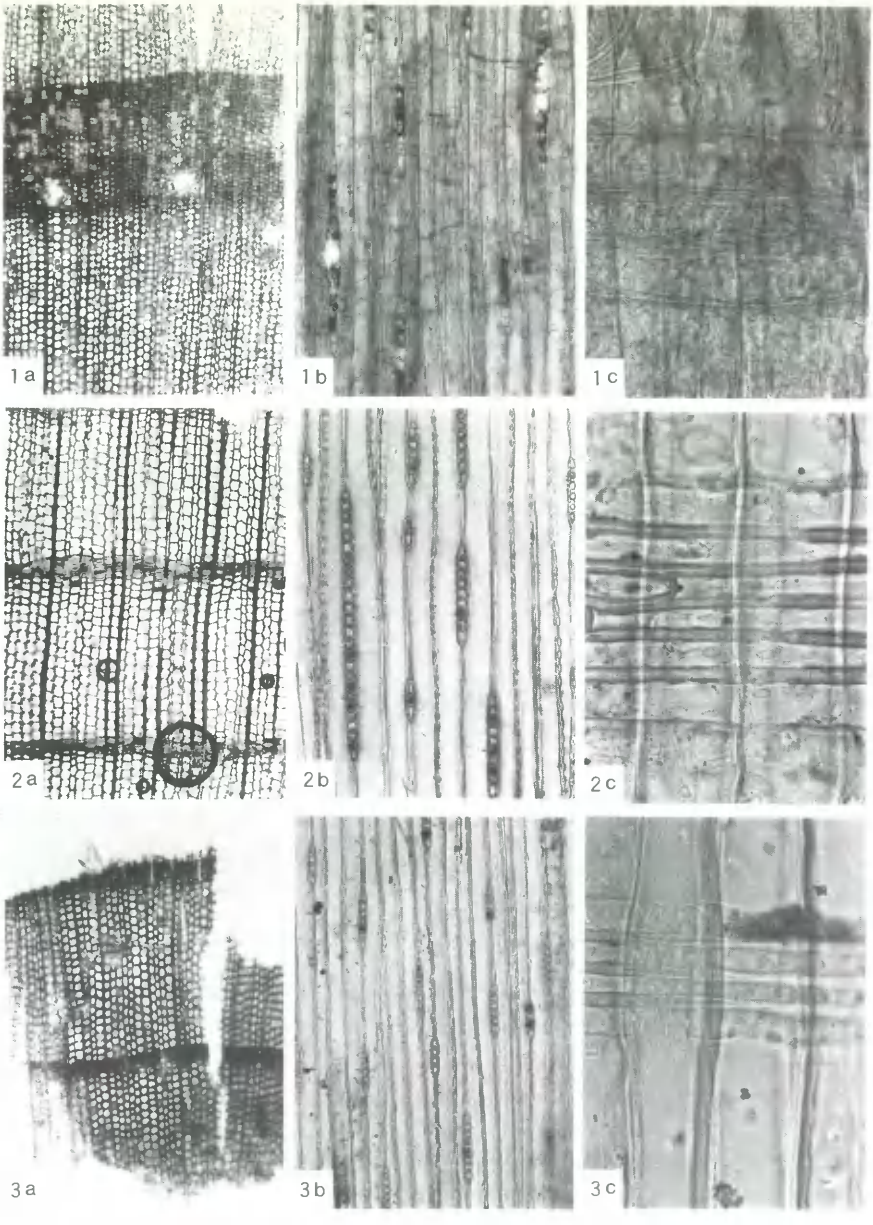


図1．伊福定国前遺跡から出土した木製品の顕微鏡写真（1）

1a-1c：マツ属複維管束亜属（OKF-90），2a-2c：スギ（OKF-83），3a-3c：ヒノキ（OKF-79）　a：横断面x40，b：長軸断面x100，c：放射断面x400

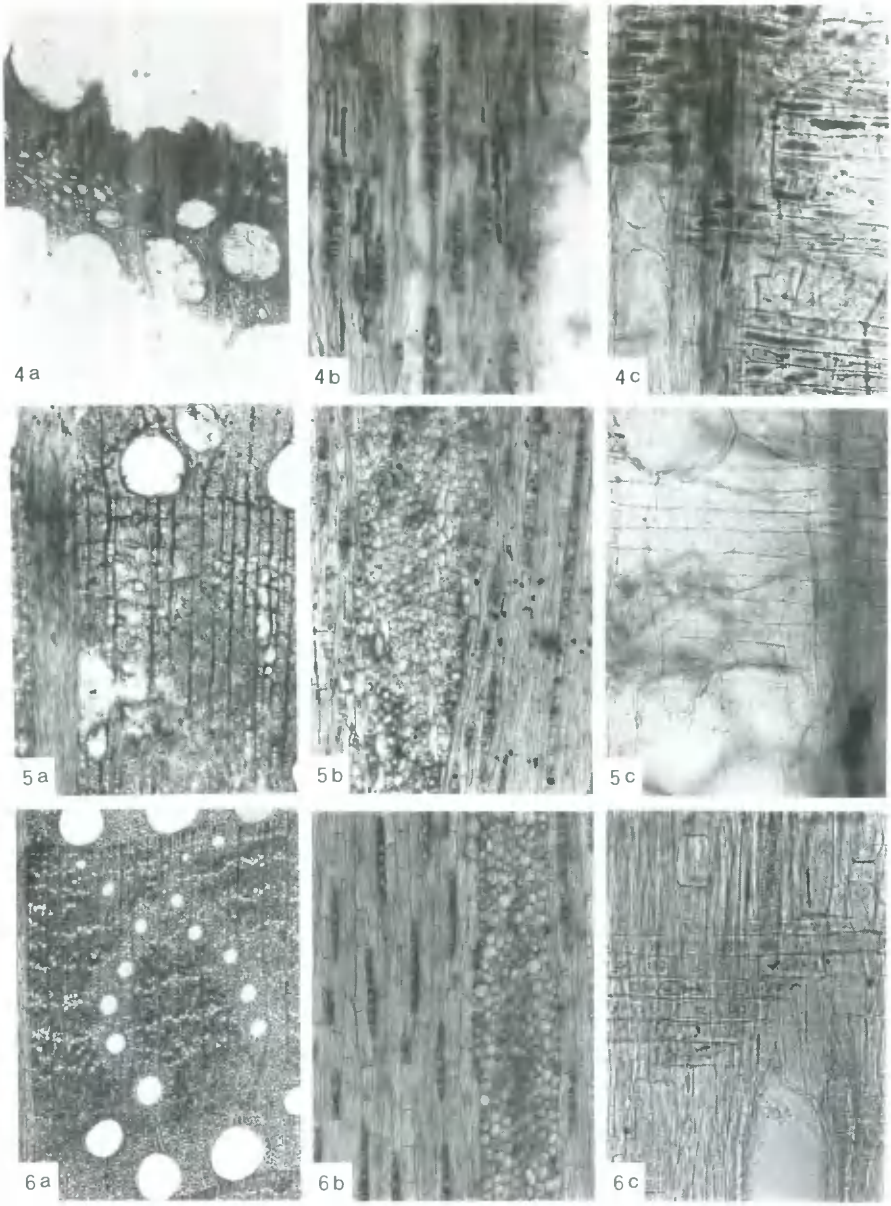


図２．伊福定国前遺跡から出土した木製品の顕微鏡写真（２）

4a-4c：クリ（OKF-78），5a-5c：コナラ属コナラ節（OKF-81），6a-6c：コナラ属クヌギ節（OKF-88）．a：横断面x40，b：接線断面x100，c：放射断面x200．

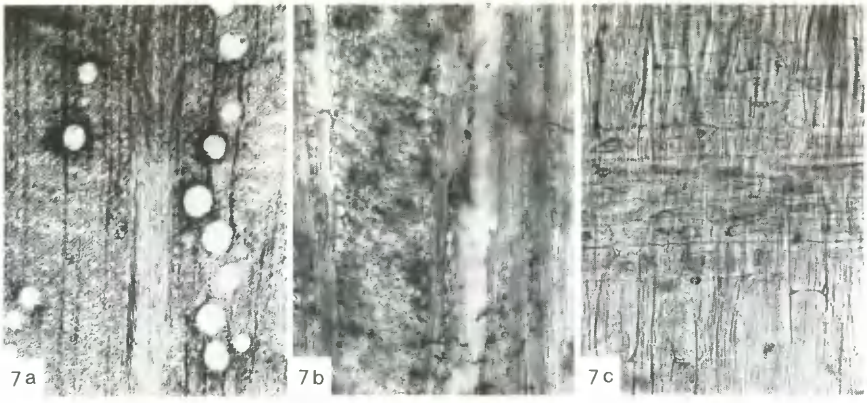


図3．伊福定国前遺跡から出土した木製品の顕微鏡写真（3）

7a-7c：コナラ属アカガシ亜属（OKF-82）．a：横断面x40，b：接線断面x100，c：放射断面x200．

遺構一覧表・遺物観察表凡例

1．表中の数値の表記は以下のように統一している。
　数値不明：空欄　　数値なし：－
2．第１表中の数値の表記方法は以下のとおりである。
　・床面積：現存値＝（　）
　・床面海抜高：ベッドのあるものについては数値を別に記載
　・柱穴：残存柱穴数＝分子，総柱穴数＝分母
　・壁体溝：あり＝○，不明瞭＝△，なし＝－，不明＝空欄
3．第５～10表の遺物観察表の数値は、現存値で表記している。
4．第８表の木製品の重量は、水漬け状態で計測した数値である。

第１表　竪穴住居一覧表

遺構名	形状	規模 (cm)	床面積 (m²)	床面海抜高 (cm)	柱穴	中央穴 (cm) 形状	規模	深	壁体溝	備考	旧遺構名
竪穴住居－1	円	460	(5.32)	132	1/				○		住居２
竪穴住居－2	円	358	(3.28)	115	1/				○		住居４
竪穴住居－3	円	510	(9.41)	144	2/				○		住居８
竪穴住居－4	多角	478	(12.83)	125	4/4	楕円	88×73	25	－		住居７
竪穴住居－5				134					○		住居10
竪穴住居－6	隅丸方	316	(3.40)	134	3/				△		住居６
竪穴住居－7	方	356	(6.73)	156・150	－	楕円	72	54	○		住居14
竪穴住居－8 A	隅丸方		(14.93)		2/				○		住居20新
竪穴住居－8 B	隅丸方	54	(13.46)	140	2/				○		住居20古
竪穴住居－9 A	方	352×	(8.82)	148					○		住居18
竪穴住居－9 B		330×		140					○		
竪穴住居－10	方	536×	(3.81)	142・130	2/				○		住居19
竪穴住居－11				(152)	4/4	楕円	90×60	42			建物２，２区土壙９・17
竪穴住居－12A	方	428×397	(13.48)	124・130	4/4	円	50	51	○	西壁に方形ピット	住居３・５
竪穴住居－12B				124・118							
竪穴住居－13	方	322	(2.12)	130	－	－	－	－	○	南壁に方形ピット	住居16
竪穴住居－14	方	213	(1.76)	130	－	－	－	－	○		住居23
竪穴住居－15	方		(7.09)	128	2/	楕円	182×	32	○		住居15
竪穴住居－16A	方	514×	(17.04)	136・132	4/4	－	－	－	－		住居９
竪穴住居－16B	方	432	(15.96)	123・127	4/4	楕円	33×28	5	○		
竪穴住居－17	方	458×420	18.17	140	3/4	－	－	－	○		住居13
竪穴住居－18	楕円		(8.10)	136	4/4	－	－	－			住居21
竪穴住居－19	円	700×	(15.78)	128	5/6	円	158×140		○		住居22 ２区土壙14
竪穴住居－20	方か			140					－		住居17
竪穴住居－21	隅丸方	485×	(9.78)	152	2/	楕円	116×	50	○		住居12
竪穴住居－22	方			128					－		住居25

第２表　掘立柱建物一覧表

遺構名	規模 (間)	柱間距離 (cm) 桁	梁	桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (m²)	棟方向	柱穴掘方	時期	旧遺構名
掘立柱建物－1	4×2	125～308	176～228	622	404	25.02	N－84°－W	円	中世	
掘立柱建物－2	3×2	126～194	140	580	280	13.47	N－4°－E	円・方	中世	
掘立柱建物－3	2×2	105～255	140～190	335～428	330～350	15.07	N－88°－W	円・方	中世	２区建物１
掘立柱建物－4	3×2	186～254	240～276	630	516	32.41	N－34°－W	方	古代か	

第3表　井戸一覧表

遺構名	規模（cm）			底面海抜	平面形	時期	備考	旧遺構名
	上部径	底径	深さ	高（cm）				
井戸－1	210	72×56	228	－61	楕円	伊・古・前Ⅰ		1区土壙28
井戸－2	107×110	53×48	133	3	円	伊・弥・後・Ⅲ		2区土壙19
井戸－3	123	36×30	163	－13	円	伊・古・前Ⅰ		2区土壙21
井戸－4	182×186	61×60	186	－36	不整	室町時代	底面に岩、北側に掘り方	1区土壙12
井戸－5	243×290	103×83	153	－2	楕円	室町時代	底面に岩	1区土壙15
井戸－6	154×168	41×32	106	49	円	室町時代		1区土壙8

第4表　土壙一覧表

遺構名	規模（cm）		底面海抜	平面形	時期	備考	旧遺構名
	上部径	深さ	高（cm）				
土壙－1	82× 73	34	104	楕円	伊・弥・後Ⅱ		1区土壙23
土壙－2	63×	30	107	楕円	伊・弥・後Ⅱ		1区土壙24
土壙－3	50× 54	22	113	楕円	伊・弥・後Ⅱ		1区P125
土壙－4	80× 54	27	111	方	伊・弥・後Ⅱ		1区P172
土壙－5	76×	63	87	円	伊・弥・後Ⅳか	住居中央穴の可能性あり	1区土壙32
土壙－6	148×240	8	134	不整方	伊・弥・後Ⅳ		1区土壙18
土壙－7	117× 79	15	149	楕円	伊・古・前Ⅰ		1区土壙1
土壙－8	280× 66	17	147	溝状	伊・弥・後Ⅳ		1区土壙2
土壙－9	251× 61	44	120	溝状	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙3
土壙－10	187×110	23	130	楕円	伊・弥・後Ⅱ		1区土壙34
土壙－11	172× 62	30	131	溝状	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙26
土壙－12	102× 93	31	126	円	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙4
土壙－13	70× 57	27	132	楕円	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙7
土壙－14	100× 87	16	133	楕円	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙13
土壙－15	68× 47	16	138	楕円	伊・弥・後Ⅱ		1区土壙6
土壙－16	156×	36	129	楕円	伊・弥・後Ⅱ～Ⅲ		1区土壙17
土壙－17	120× 73	62	87	楕円	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙36
土壙－18	106×115	21	131	楕円	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙31
土壙－19		17	132	隅丸方か	伊・弥・後Ⅲ		1区土壙35 1区P150
土壙－20	124×135	86	60	円	伊・弥・後Ⅳ		2区土壙16
土壙－21	256×	157	0	円	伊・弥・後Ⅱ		2区土壙30
土壙－22	163×125	34	116	隅丸方	伊・弥・後Ⅲ		2区土壙11
土壙－23		51	110	円か	伊・弥・後Ⅰ		2区土壙31
土壙－24	100× 67	20	135	楕円	伊・弥・後Ⅲ		2区土壙18
土壙－25	168×117	55	105	隅丸方	伊・弥・後Ⅳ		2区土壙8
土壙－26	83× 61	12	134	楕円	伊・弥・後Ⅱ		2区土壙12
土壙－27	235×132	33	135	隅丸方	伊・弥・後Ⅳ		1区土壙27 2区土壙13
土壙－28	206×150		130	隅丸方	伊・弥・後Ⅲか		2区土壙7
土壙－29	190×265		116	隅丸方	伊・弥・後Ⅲ		2区土壙20
土壙－30	140×		143	隅丸方	伊・弥・後Ⅲ		2区土壙6
土壙－31		43	107	隅丸方	伊・弥・後Ⅲ		2区土壙27
土壙－32	120× 89	41	109	楕円	伊・弥・後Ⅳ		2区土壙10
土壙－33	82× 85	35	114	円	伊・弥・後Ⅳ		2区土壙22
土壙－34	158×105	22	126	隅丸方	伊・弥・後Ⅳ		2区土壙23
土壙－35	110× 58	30	120	楕円	伊・弥・後Ⅱ		2区土壙25
土壙－36	136× 68	37	113	楕円	伊・弥・後Ⅱ		2区土壙26
土壙－37	150×132	33	112	楕円	伊・弥・後Ⅳ		2区土壙4
土壙－38	69×102	19	70	楕円	中世		1区土壙16

第5表　土製品観察表

掲載番号	種別	出土遺構名	計測値（mm・g）				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
C	紡錘車	竪穴住居－1～5	58.2	53.8	11.4	39.5	土器片転用、孔径4.4mm
C 2	円板	竪穴住居－3	44.0	－	－	17.9	土器片転用
C 3	円板	竪穴住居－3	46.0	－	－	5.2	土器片転用
C 4	紡錘車	竪穴住居－4	82.0	－	－	12.4	土器片転用、孔径11.0mm
C 5	円板	竪穴住居－4	41.0	－	－	10.8	土器片転用
C 6	錘	竪穴住居－8（中央穴）	73.5	39.4	23.8	75.0	孔4こ、孔径6.5～7.5mm、緊縛痕あり
C 7	紡錘車	竪穴住居－12	41.5	23.5	6.1	6.4	土器片転用、孔径6.2mm
C 8	円板	竪穴住居－16	47.8	46.0	4.2	10.7	土器片転用
C 9	紡錘車	竪穴住居－18	41.0	28.0	3.5	4.9	土器片転用、孔径8.0mm
C 10	円板	竪穴住居－18	55.5	46.3	9.3	28.6	土器片転用
C 11	紡錘車	竪穴住居－19（ピット）	63.5	57.2	7.2	27.6	土器片転用、孔径6.5mm
C 12	紡錘車	竪穴住居－19（ピット）	21.0	26.5	2.6	1.9	土器片転用、孔径3.5～5.5mm
C 13	紡錘車	竪穴住居－19	31.2	19.0	4.3	3.2	土器片転用、孔径4.0mm
C 14	円板	竪穴住居－19（P12）	46.0	39.0	5.5	11.4	土器片転用
C 15	錘	竪穴住居－19	63.0	25.5	20.0	45.8	孔2こ、孔径5.0～7.0mm
C 16	人形	柱穴－1	96.0	36.0	22.0	－	当部に付属品装着痕あり
C 17	円板	土壙－20	36.5	35.0	6.5	9.5	土器片転用
C 18	円板	土壙－20	42.0	38.0	13.0	24.0	土器片転用
C 19	紡錘車	土壙－27	49.0	44.5	7.5	13.1	土器片転用、孔径2.0mm
C 20	錘	土壙－27	66.0	18.0	27.5	35.3	小口面に溝、孔2こ、孔径6.5mm
C 21	錘	溝－1	85.5	37.4	14.0	56.6	孔4こ、孔径5.5mm、緊縛痕あり
C 22	紡錘車	土器溜り－4	25.1	24.0	4.5	3.2	土器片転用、孔径5.0mm
C 23	不明	土器溜り－4	39.0	14.8	12.0	6.0	先端部に条線3本
C 24	円板	土器溜り－4	69.5	62.0	12.5	50.9	土器片転用か
C 25	円板	土器溜り－4	53.0	－	－	16.5	土器片転用
C 26	腰掛形	包含層（Q23区）	97.5	47.0	30.5	－	
C 27	紡錘車	包含層	98.0	－	－	86.6	土器転用、孔径11.0mm
C 28	紡錘車	包含層	36.8	31.8	8.9	10.6	土器転用、推定孔径6.0mm
C 29	錘	包含層（P23区）	65.4	31.0	16.0	38.2	孔2こ、孔径3.0mm
C 30	不明	包含層	42.7	40.8	10.0	16.9	端部に竹管文
C 31	円板	包含層	35.5	38.4	6.0	9.7	土器片転用
C 32	円板	包含層	45.1	45.9	9.1	19.3	土器片転用
C 33	円板	包含層（Q22区）	55.5	51.0	7.0	26.1	土器片転用
C 34	錘	溝－2（上層）	68.0	29.8	18.5	41.1	孔2こ、孔径5.5～6.5mm、小口面に溝

第6表　石器・石製品観察表

掲載番号	器種	出土遺構・土層	石材	計量値（mm・g）				残存	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
S 1	磨石・敲石	竪穴住居－2	花崗岩	80.0	63.0	40.5	280.9	完	
S 2	磨石	竪穴住居－6（床面）	砂岩	300.0	188.5	112.0	8800.0	一部欠	
S 3	砥石	竪穴住居－13	頁岩	97.0	47.5	26.0	150.7	完	全面被熱
S 4	敲石	竪穴住居－17～19 内P14	石英安山岩	88.5	72.5	39.5	337.7	完	
S 5	敲石	土壙－19	安山岩	106.0	92.0	24.5	355.1	完	
S 6	有溝石錘	土壙－19	優白質花崗岩	92.5	74.0	56.5	546.3	完	
S 7	錘	土壙－20	花崗岩	54.5	61.5	35.5	175.1	完	
S 8	砥石	土壙－26	流紋岩質熔岩	115.5	80.5	72.0	1033.1	完	
S 9	楔	土壙－33	サヌカイト	29.5	20.0	9.0	7.9	完	
S 10	R．F．	性格不明遺構	サヌカイト	66.5	36.5	20.5	53.9	完	
S 11	有溝石錘	土器溜り－4	優白質花崗岩	89.0	70.0	55.0	454.3	完	

S12	錐	包含層（23O区）	サヌカイト	40.0	16.5	7.5	4.6	完	先端部に使用痕
S13	石包丁	包含層（24P区）	サヌカイト	46.5	40.0	8.2	20.3	1/2	
S14	石包丁	包含層（24P区）	サヌカイト	90.5	36.0	12.5	50.2	完	
S15	有溝石錘	包含層（23P区）	流紋岩質熔岩	79.5	60.0	53.5	361.5	完	
S16	有溝石錘	包含層（22P・Q区）	優白質花崗岩	61.0	54.0	45.5	201.0	完	
S17	斧	包含層（23O区）	頁岩	74.0	34.5	26.5	100.0	一部欠	
S18	砥石	井戸－6	流紋岩質熔岩	57.0	33.5	18.0	42.3	欠損	
S19	砥石	井戸－6（上層）	流紋岩質熔岩	97.5	32.5	28.5	115.1	欠損	

第7表　金属器・金属製品観察表

掲載番号	器種	出土遺構・土層	材質	計量値（mm・g）				残存	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
M1	鉈	竪穴住居－8（下層）	鉄	27.5	17.8	3.7	2.90	基部	
M2	斧か	竪穴住居－12	鉄	34.0	33.0	7.0	15.20	隅部	鋳造品
M3	鏃	竪穴住居－13	青銅	40.9	10.3	4.0	5.33	ほぼ完形	
M4	鏃	竪穴住居－18	青銅	15.0	3.8	3.3	0.53	茎部のみ	
M5	石突か	土器溜り－4	鉄	44.0	22.0	6.0	14.20	基部小片	鋳造品、復元外径32mm、復元内径20mm
M6	鏃	包含層（22O区）	青銅	16.5	5.8	2.5	0.93	身部のみ	
M7	鏃	包含層（22O区）	青銅	18.5	8.0	3.2	1.44	身部のみ	
M8	斧か	包含層（23Q区）	鉄	41.0	31.2	3.1	10.50	袋部隅小片	鋳造品
M9	鉈	掘立柱建物－3（P7）	鉄	24.8	13.5	4.5	2.40	刃部小片	
M10	釘	柱穴－13	鉄	40.5	6.0	5.0	3.30	頭部欠損	
M11	刀子	包含層	鉄	116.8	17.0	3.5	16.16		刃部と茎部の接点なし
M12	北宋銭	包含層（23P区）	青銅	24.0	23.5	1.4	3.10	完形	元豊通宝（1078年初鋳）、行書

第8表　木製品観察表

掲載番号	器種	出土遺構	材質	計量値（mm・g）				備考
				長さ	幅	厚さ	重量	
W1	錘	井戸－4	マツ属	122.8	49.0	44.0	162.2	樹皮残存、芯持削出し
W2	椀	土壙－38	クリ	－	－	4.0	10.9	（内）朱漆（外）黒漆地に朱漆で草花文
W3	蓋	溝－2	ヒノキ	123.0	118.1	5.2	51.6	表裏面に墨書、板目

第9表　玉類観察表

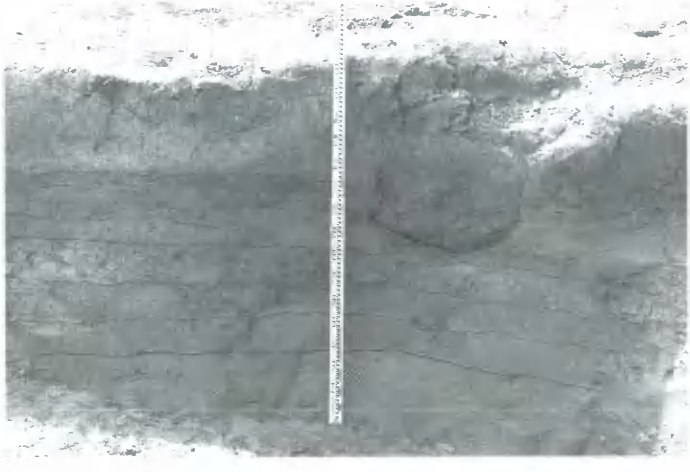
掲載番号	器種	出土遺構	材質	計量値（mm・g）					残存	備考
				長さ	幅	厚さ	重量	孔径		
B1	管玉	竪穴住居－4（床面）	角	29.5	18.5	15.5	4.34	7.0	一部欠損	
B2	管玉	竪穴住居－12	碧玉	12.5	8.5	8.6	1.10	2.0	1/2残存	
B3	管玉	竪穴住居－12	碧玉	13.3	5.0	3.0	0.30	3.5	完形	
B4	勾玉	竪穴住居－18	メノウ	12.0	7.0	2.5	0.27	1.5	完形	
B5	勾玉	柱穴－9	粘土		14.9	14.5	8.45	3.0	1/2 残存	
B6	勾玉	包含層（22Q区）	蛇紋岩	11.3	7.7	1.5	0.26	1.5	完形	
B7	小玉	包含層（24O区）	ガラス	5.5	5.1	3.5	0.13	2.0	完形	

第10表　角製品観察表

掲載番号	器種	出土遺構	材質	計量値（mm・g）				残存	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
H1	刻骨	竪穴住居－4（床面）	鹿角	93.5	39.5	31.5	49.37	基部のみ	煤付着、溝3条残存

1．調査地区航空写真
（北西から）

2．２区発掘調査状況
（北から）



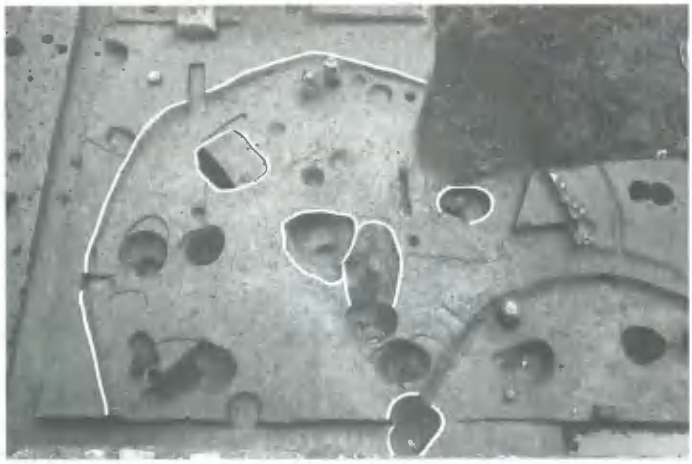
3．試掘トレンチ２
土層断面
〈土 壙 ― 5 部分〉
（北から）

図版２

１．２区遺構面下層
トレンチ土層断面
（南西から）

２．竪穴住居―１
（西から）

３．竪穴住居―１
中央穴周辺土器
出土状況
（東から）



1．竪穴住居―4
（西から）

2．竪穴住居―4
刻骨出土状況
（北から）

3．竪穴住居―7・8
（北から）

1．竪穴住居―16
（西から）

2．竪穴住居―17～19
（西から）

3．竪穴住居―17～19
下層P15底面礎板
検出状況
（南東から）

1．柱穴―1 人形土製品出土状況（南から）

2．井戸―2 上層土器出土状況（東から）

3．井戸―2 下層土器出土状況（東から）

図版 6

1．土壙―14
土器出土状況
（南西から）

2．土壙―22
土器出土状況
（北西から）

3．土壙―32
土器出土状況
（西から）

1．溝－1西肩部
土器出土状況
（西から）

2．性格不明遺構
（西から）

3．土器溜り－4
土器堆積状況
（東から）

図版 8

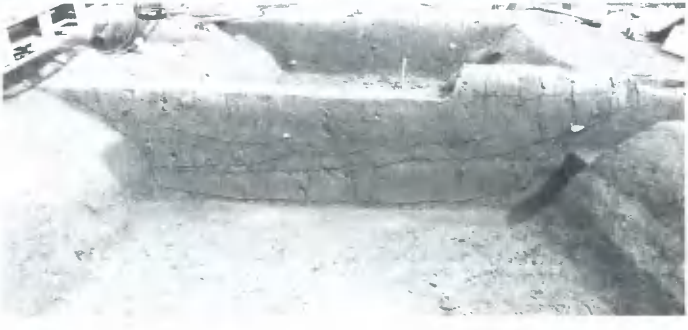
1．井戸―4
（南東から）

2．井戸―5
（北から）

3．井戸―5底面
岩据え付け状況
（西から）

1．井戸―6
（東から）

2．溝―2
（北から）



3．溝―2土層断面
（南から）

7

137

133

20

151

153

160

159

198

竪穴住居―１・３・17～19内P15、柱穴―４・６、井戸―１出土土器（1/4）

184

187

188

199

207

211

209

210

井戸―2・3出土土器（209・210　1/3、その他　1/4）

214

217

224

216

225

222

220

226

土壙―2～4出土土器（1/4）

240

250

243

266

263

245

289

276

284

土壙―9出土土器（245・276 1/3、その他 1/4）

299・300

308

347

361

348

321

392

389

土壙—12・13・15・22・24・27出土土器（321 1/3、347 1/5、その他 1/4）

401

413

411

410

414

421

412

409

422

427

435

土壙—31・32・34出土土器（1/4）

450

452

455

454

481

493

497

503

502

510

515

511

溝―1、土器溜り―1・3出土土器（1/4）

542

543

534

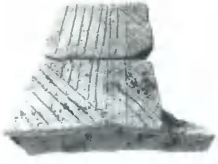
551

535

553

556

537



539

557

632

631

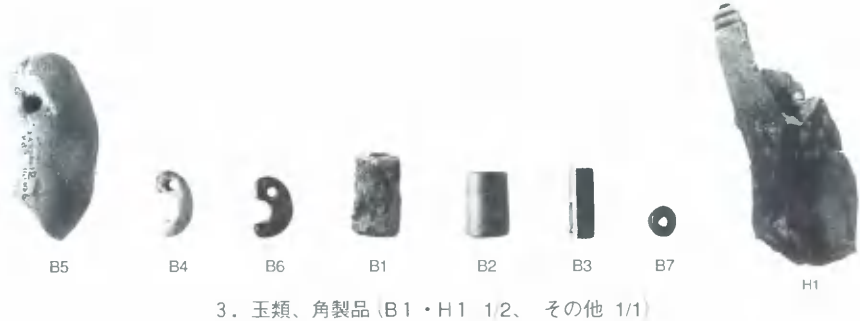
636

土器溜り―4、包含層出土土器（537・539 1/2、534・535・636 1/3、その他 1/4）

溝－2、包含層出土土器・陶磁器（717 1/2、740 1/4、702・707・708・712・713 1/5、その他 1/3）

1．ミニチュア土器（1/2）

2．土製品（C16・C26 1/2、その他 2/3）



3．玉類、角製品（B1・H1 1/2、その他 1/1）

1．石器（S9・S12～S14　2/3、S17　1/2、S2　1/6、その他　1/3）

2．金属製品（M3・M6・M7　1/1
M8・M12　2/3）

3．木器・木製品（W1・W2　1/3、W3　1/2）

報告書抄録

ふりがな	いふくさだくにまえいせき
書名	伊福定国前遺跡
副書名	県立岡山工業高等学校産業教育施設（実習棟）改築に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	125
編著者名	杉山一雄・河本清・高畑知功・松本和男・氏平昭則
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL．086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL．086-224-2111
発行年月日	西歴　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
いふくさだくにまえいせき 伊福定国前遺跡	おかやまけんおかやましいふくちょう 岡山県岡山市伊福町4丁目3－92	33201		34°40′11″	135°54′45″	1995.09.05～1995.11.09	800	県立岡山工業高等学校産業教育施設(実習棟)改築に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊福定国前遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	竪穴住居・井戸・土壙・溝・性格不明遺構・土器溜り柱穴群	弥生土器・土師器・須恵器・石器（石錘・石包丁・磨石等）金属器（鉄斧・鉄製刀子・鉄製鉈・銅鏃）・土製品（人形・腰掛形・紡錘車・円板）・骨角製品（刻骨・管玉）・玉類（ガラス小玉・管玉・勾玉）	弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が大量に出土。在地産のほか他地域からの搬入品も多い。
		古代	掘立柱建物	須恵器・土師器	
		室町時代	掘立柱建物・井戸・土壙・溝	国産陶磁器（備前焼・亀山焼・常滑焼・魚住焼・古瀬戸）・輸入陶磁器（青磁・白磁・東南アジア産陶器）・土師器・石製品（砥石）・金属器（釘・鉈・銅銭）・木製品（錘・漆椀・蓋）	大量の土師器と国の内外から搬入された陶磁器が出土。特に東南アジア産陶器は古い時期に属す。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125

伊福定国前遺跡

県立岡山工業高等学校産業教育施設
（実習棟）改築に伴う発掘調査

1998年３月13日　印刷
1998年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会

印　刷　サンコー印刷株式会社